

我が魂は真紅の眼と漆  
黒の龍と魔導少女

0・The Fool

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

現実の世界から遊戯王の世界にトリップした少年。彼のその眼は何を見る？  
このお話はすぴばる小説部にもありません。

# 目次

プロローグ	1
デュエル2 表と裏のデュエル	7
デュエル3 誤解	16
デュエル4 真夜中のアンティードュエル	20
デュエル5 女子寮でのデュエル	31
デュエル6 月1試験帝王との争い	57
デュエル7 廃寮探検VSデーモンデツキ	67
デュエル8 闇のゲーム!! VS タイタン	67
デュエル9 制裁デュエルの準備	80
デュエル10 退学? 隼人の想い	90
デュエル11 恐怖の虫デツキ	101
デュエル12 ダッグデュエル十代十翔	109
V S 迷宮兄弟	124
デュエル13 タッグデュエル! サイ	140
バー流VS士+隼人	140
デュエル14 勉強会水族デツキ	155
デュエル15 真紅の眼と漆黒の龍	155

						170
デュエル16	SALデュエル					181
デュエル17	月一試験2					195
デュエル18	予想外? 青眼VS青眼					
204						
デュエル19	アンチリスペクト					
214						
デュエル20	帝王の迷い					219
デュエル21	再戦! VSサイバー流					
232						
デュエル22	新たな日常。VSミラー					
マッチ						
デュエル23	青春 デュエルテニス					243
デュエル24	バレンタイン					259
デュエル25	ドロ―勝負VS雪乃					
275						
デュエル25, 5	VSサイバー流					
285						
デュエル26	史上最弱の死者					298
デュエル27	デッキ泥棒vsクロノス					
デュエル28	恋する乙女VS十代					307
320						
デュエル29	デッキの魂					334
デュエル30	恋する乙女のデュエット					

デュエル37	選抜デュエル	代表決定	454	デュエル44	女性の部族	三沢vs	
明				551			
デュエル36	選抜デュエル	強者の証	428	デュエル43	救出VSカミューラ		538
流の呪い				デュエル42	第2の刺客		516
デュエル35	選抜デュエル	サイバー	410	デュエル41	友好デュエル	タッグ	
使				デュエル40	友好デュエル2回戦目		508
デュエル34	選抜デュエル	最弱の天	402	デュエル39			
デュエル33	選抜デュエル		380	デュエル38			
眼				デュエル37			
デュエル32	制裁デュエル	VS真紅	363	デュエル36			
戦争				デュエル35			
デュエル31	恋する乙女と魔導少女の		347	デュエル34			
				デュエル33			
				デュエル32			
				デュエル31			
				デュエル30			
				デュエル29			
				デュエル28			
				デュエル27			
				デュエル26			
				デュエル25			
				デュエル24			
				デュエル23			
				デュエル22			
				デュエル21			
				デュエル20			
				デュエル19			
				デュエル18			
				デュエル17			
				デュエル16			
				デュエル15			
				デュエル14			
				デュエル13			
				デュエル12			
				デュエル11			
				デュエル10			
				デュエル9			
				デュエル8			
				デュエル7			
				デュエル6			
				デュエル5			
				デュエル4			
				デュエル3			
				デュエル2			
				デュエル1			
				十代VS翔			472

タニヤ

デュエル45

買収騒動

デュエル46

接待VS翔

561

572

592

# プロローグ

――目が覚めたら異世界でした。

「なんて、そんなこと……ありましたよ。こんちくしょう。」

目の前に広がるデュエルモンスターのカード達。その立体映像を見て現実だと思わざるを得なかった。自分の持ち物を調べ、中学校の学生証を発見した。記載されている発行日からすると中学2年生らしい。

だが、この程度では、何もわからない。住所を頼りに自宅に戻ると、幸いな事にネットが使える環境だったので、デュエルアカデミアにクラッキング（犯罪です。皆さんはやらないように。）したら、どうやらアニメの方でデュエルモンスターズGXの時代の1年前らしい。

デュエルアカデミアに入学の為に色々手続きして迎える実技試験の日。

「……………困った。まさか、電車が事故るとは。」

試験会場に余裕を持って到着出来るはずがこの事故のせいで間に合うかどうかと  
いった感じだ。遅延証明書を発行してあるし、会場にも報告してあるから問題ないけど。

「スカイクレーパーシユート!!」

「マンマミーア!我がアンティーク・ギア・ゴーレムが!」

試験会場に辿りついた時、そんな声が聞こえた。どうやら、十代とクロノスのデュエルが終わった所らしいな。

「すいません。受験番号50番の沖田士おきたつかさです。事前に交通機関の遅延で遅れることは報告してあります。」

俺の言葉に、クロノスは他の教師達に視線を向けると一人が頷いた。

「では、私が試験官を勤めるノーネ!」

ああ。十代に負けた腹いせか、名誉挽回でも狙ってるのか?

『決闘!!』  
デュエル

「先攻は譲るノーネ。」

「では、遠慮なく。俺のターン! ドロー! ……手札から未来融合—フューチャー! フュージョンを発動! デッキから、50枚のモンスターを墓地に送り2ターン後にキメラテックオーバードラゴンを特殊召喚! カードを1枚セットしてモンスターサイバー・ラーバアを攻撃表示で召喚してターンエンド!」

士ライフ4000手札3枚伏せカード1枚未来融合—フューチャー・フュージョン伏



セモンスター0枚 サイバー・ラーバアATK400

クロノスライフ4000手札5枚

「私のターン！ドロー！強欲な壺を発動！トロイホースを召喚！さらに二重召喚を発動！トロイホースを生け贄にアンティークギア・ゴーレムを召喚！バトルフェイズ！アンティークギア・ゴーレムで伏せモンスターに攻撃！ アルティメットパウンド！」

アンティークギア・ゴーレムの攻撃が伏せモンスターを破壊したが俺には何のダメージもなかった。

「？ 何でなノーネ？」

「サイバーラーバアの効果。表側表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、このターン戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。さらに破壊された時、デッキから同名モンスターを特殊召喚する。」

「しつこい雑魚なノーネ！ 3枚セットしてターンエンド！」（伏せカードはミラーフォース、奈落の落とし穴、デストラクションジャマー。キメラテックオーバードラゴンを召喚しテーム奈落の落とし穴で除外。攻撃してもミラーフォースで返り討ち。アンティークギア・ゴーレムを効果破壊しようとしテーム、デストラクションジャマーで妨害するノーネ！ 勝ったノーネ！）

士ライフ4000手札3枚

伏せカード1枚未来融合ーフューチャー・フュージョン

伏せモンスター0枚 サイバーラーバアATK400

アンテイクギア・ゴーレムATK3000

伏せ3枚

クロノスライフ4000手札1枚

「俺のターン！ ドロー！ 手札から魔法カード、強欲な壺を発動！ 2枚ドロロー！

墓地にある光属性、機械族モンスターを全て除外して、サイバー・エルタニンを特殊召

喚！」

「奈落の落とし穴を発動！ 攻撃力1500以上のモンスターが召喚された時、「リバー

スカードオープン！ 神の宣告！ 奈落の落とし穴を無効にする！」

な、何なノーネ！」

「さらにサイバー・エルタニンの効果！ このカード以外の表表示カードを墓地に送る

！ コンステレクション・シージュ！」

「甘いノーネ！ リバースカード発動！ デストラクションジャマー！ その効果は無

効なノーネ！」

しかしながら、デストラクションジャマー発動されなかった。

「な、何でなノーネ？」

「エルタニンは墓地に送る効果で破壊ではない。」

そして、サイバー・エルタニンは除外したモンスター枚数分×500の攻撃力になります。除外したモンスターは51枚。よって攻撃力は

$$51 \times 500 = 25500$$

「こ、攻撃力が2、25500でスート？」

「サイクロンでその伏せカードを破壊！」

突風がクロノスのミラーフォースを破壊した。フム。もう対抗手段がないらしい。

「リミッター解除3枚を発動！攻撃力を8倍にする！」

「こ、攻撃力204000デスート？」

「バトルフェイズ！サイバー・エルタニンでダイレクトアタック！ドラコニス・アセンション！！」

サイバー・エルタニンの攻撃がクロノスのライフを削りきった。(クロノスライフ4000—204000〓—200000)

「ペ〜ペロンチイ〜ノお〜!!!」

「ありがとうございました。」

しかし、何故。パスタなんだろう？ そんなことを考えながらデュエルフィールドを降りた。

## デュエル2 表と裏のデュエル

「…………健全な精神をもったデュエリストを目指してがんばって下さい。」

鮫島校長の長い挨拶も無事に終わり、さて解散といったところで、

「ええっと、沖田土君。校長室まで来て下さい。」

やっぱり来たか。そう思いながら配られたPDAを頼りに校長室までたどり着くと、鮫島校長はこちらを見ていた。

「沖田君。お呼びしてすみません。」

「いえ、そんなことより俺の制服が何故コレなんですか？」

「パンツ！ と校長の前のデスクに叩きつけたのは白を基調とした青いラインの入ったデュエルアカデミアの制服だ。」

デュエルアカデミアは配属される寮によって色が違う。青い色はオペリスク・ブルーなのだが、ここで問題が。高校からはオペリスク・ブルーになれない。中学で好成績を残したらオペリスク・ブルーに配属できるのだが、それに、その下のこれは、まさかな……………。

「女の子が女子の制服を着るのは当然だと思えますよ？」

やっぱりか。女子は人数的な理由からか成績に関わらず、オベリスク・ブルーに配属される。

つまり、俺は女性だと思われていたわけだ。

「鮫島校長。俺は男だ。」

「フム。何故そのような嘘を？」

「真正銘本当だ。」

「今から2000年前に若い男が」

「そんな泉に溺れた事実がない。」

「沖田君の冗談はさておき、こちらからも聞かせて下さい。何故、サイバー・エルタニンにキメラテックオーバードラゴンを所持しているのですか？」

予想通りの質問だな。

「決して冗談では無いのですが。」

サイバー流のカードとはいえカードはカードですから。買ったパックの中に入れてみました。」

「すぐに使用を禁止して下さい。あのカードは相手と全力でぶつかり合うサイバー流のリスペクトに反するという理由で使用を禁じられたカードです。」

「お断りです。リスペクトに反するとかで、禁止カードでないカードを使用をしてはい

けないという決まり事は無いです。」

鮫島校長の言葉を横に振り拒否した。

「しかし、リスペクトに」

「カードを大切にして、そのカードの使い道を探究するのもリスペクトです。サイバー流のリスペクトが大事などと言われたくありません。」

「……わかりました。それならば、デュエルで勝負しましょう。」

「断ります。」

「デュエリストが申し込まれたデュエルから逃げるのですか？」

俺の拒否に鮫島校長は驚いたように俺を見た。

「アホですか？ 賭けはメリットデメリットがあつて初めて成立する。所が俺が勝つても得られるものがありません。」

「リスペクトに反するカードの」

「元々あつて当然の権利で、勝つたから得られるメリットじゃない。」

俺の指摘にしばし沈黙して口を開いた。

「では、沖田君。君が勝つたら単位をあげるのはどうですか？」

その問いに同意する。

○ ○ ○

『決闘!!』  
デュエル

「俺のターン! ドロー! カードガンナーを召喚! 効果でカード3枚を墓地に送りカードを2枚セットしてターンエンド!」

士ライフ4000手札3枚

伏せカード2枚

カードガンナー ATK400

鯨島ライフ4000手札5枚

「フム。私のターン。ドロー。手札から強欲な壺を発動。2枚ドロウします。続いてパワーボンドを発動。サイバー・オーガ2体を融合してサイバー・オーガ・2を召喚してカードガンナーに攻撃します!」

コイツの攻撃力は、2600だけど、パワーボンドのおかげで攻撃力が倍加して5200になる。

「リバースカードオープン! ガードブロック! ダメージを無効にしてドロウ!」

カードガンナーは破壊されるが破壊された時、ドロウされ、計2枚ドロウ。

「では、融合解除でサイバー・オーガ・2を融合デッキに戻し、サイバー・オーガを特殊召喚します。2体でダイレクトアタックします。」



「手札から速攻のかかしを捨ててバトルフェイズを終了！」

「では、サイバー・ジラフを召喚して生け贄に捧げ効果ダメージを無効にしてカード1枚セツトしてターンエンドします。」

士ライフ4000手札4枚

伏せカード1枚

サイバー・オーガATK1900×2体

伏せカード1枚

鮫島ライフ4000手札1枚

「俺のターン！ドロー！手札から天使の施しを発動！3枚ドローして手札を2枚墓地にすてる！」

3枚補充して、手札2枚を墓地すてる。

「手札からオーバーロードフュージョンを発動！墓地にある5体のサイバー・ドラゴンを除外して、キメラテックオーバードラゴンを融合召喚！」

「それは通しません。リバースカードオープン。奈落の落とし穴。キメラテックオーバードラゴンを除外して下さい。」

俺の想定通りにキメラテックオーバードラゴンは異次元の彼方に消滅する。

「やっぱりそう来たか。」

「?…どういう意味ですか?」

「キメラテックは素材にしたモンスター枚数×800アップする。素材枚数は5。つまり、キメラテックの攻撃力は、4000。たいして、サイバー・オーガは同名カードの補助があっても攻撃力が3900しかない。自分なら破壊手段を予め用意するぐらいしかないからな。」

「……………まさか、わざとキメラテックオーバードラゴンを捨て駒に?」

「言い方は悪いけどな。」

ライフコスト2000支払い手札から次元融合を発動!除外されたサイバー・ドラゴン3体にサイバー・ドラゴン・ツヴァイ2体を特殊召喚!サイバー・ドラゴン・ツヴァイを手札のパワーボンドを見せてサイバー・ドラゴンにして2枚のパワーボンドでサイバー・エンド・ドラゴンとサイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚!伏せカード無謀な欲張りで2枚ドロ―!

バトルフェイズ!サイバー・エンド・ドラゴンでサイバー・オーガを攻撃!エターナルエヴオリュションバースト!」

サイバー・エンド・ドラゴンが放つ閃光を、

「手札からサイバー・オーガを捨てて攻撃力を無効にして、サイバー・オーガの攻撃力を2000アップします。」

サイバー・オーガが受け止めた。それも無駄なだけどさ。

「速攻魔法ダブルアツプチャンスを発動！攻撃が無効になった時、攻撃力を倍にして再び攻撃！」

さらにリミッター解除を発動！」

サイバー・エンド・ドラゴンの背中から生えた三つ首と制限を外されより強力になった閃光がサイバー・オーガを襲いかかる。さすがに受け止めきれずサイバー・オーガは破壊された。(鮫島ライフ4000—4000×2×2+1900+2000—24100)

「さらにサイバー・ツインドラゴンでサイバー・オーガを攻撃してから鮫島校長にダイレクトアタック！」

サイバー・ツインドラゴンの攻撃がサイバー・オーガを破壊してさらにダメージを与える。

(鮫島ライフ—24100—5600×2+1900—24100—11200+1900—24100—9300—33400)

「俺の勝ちだな？」

「いえ、今のは、リスペクトに反してます。高攻撃力で反撃の隙を与えずに倒し、勝負が終わっても攻撃する。そこにリスペクトは感じられません。」

まだ言うか。このハゲ爺。

「どれも鮫島校長に言われたくない。先にやっというてどの口が批判するんだ？」

「何ですと？」

まだわかって無いのか？

「あの時、サイバー・オーガ・2は自身の効果とパワーボンドの効果で攻撃力5400になる。たいして、カードガンナーは攻撃力たったの400。ガードブロックがなければ、1Kいーされ、速攻のかかしがなければその後の追撃も防げなかった。先にやっというてどの口が批判するんだか？」

「しかし、それは全力でぶつかろうとした結果です。」

「じゃあ、このデッキの全力でぶつかろうとした結果で。それと、このデッキは俺が作ったデッキの中で最弱だ。」

実際はそんなわけではないが、お気に入りかと言われると首を傾げざるをえない。

「何故、そんなデッキで？」

「サイバー流のリスペクトを真似てみたのさ。相手を見下して手加減するデュエルを。」  
「手加減とリスペクトはまったく違います。」

鮫島校長の発言に俺は否定する。

「変わらない。相手に全力を出させ、それ以上の力でぶつ潰す。そのどくに相手を見

「下してないと言える？」

そうやって、校長室を出る。鮫島校長はその背中を悲しそうに見ているようだった。

## デュエル3 誤解

「お前ら万丈目さんを知らないのか？」

校長室を出て、PDAを頼りにデュエルフィールドに辿りつくとなんな声が聞こえた。どうやら、万丈目達とエンカウントした瞬間らしいな。

「この学園の1位はオレだからだ。」

根拠もないのに大した自信だ。だけど、十代がそう言った瞬間オベリスク・ブルーの二人が大笑いしていた。

「オシリス・レッドのドロップアウト風情が大きく出るなよ？」

「諸君。静粛に。そいつ出来るぞ。手抜きとはいえ、まぐれでもクロノスに勝てたんだ。お前達より上かもな。」

「実力さ。」

「1ターンで攻撃力3000で貫通効果持ちのモンスターを出しといて手加減なんて無いんじゃないか？」

十代のセリフにそう言うと言つて皆がコチラに注目した。

「可愛い人ツス。」

俺をジツと見て言うが、男に可愛いは無いと思うぞ？丸藤。

「あ、お前はオレの後にデュエルしてたやつだよな？」

あのデュエルを見てあんたともデュエルをしたいんたぜ？」

十代のセリフに思わず苦笑する。

「そう思われて光栄だな。俺は沖田士だ。君と、君の弟分は？」

「あ、オレは遊城十代。コイツは丸藤翔だ。よろしくな。」

「丸藤翔ツス。よろしくツス。」

「おい！無視するな！」

ちよつと自己紹介しただけで何カリカリしてんだか？

「……………まあいい。ドロップアウト。その実力をいまずぐに見せて欲しいものだ。」

これつてデュエルの申し込みか？止めといた方が良くと思うけど。

「あなた達。何しているの？」

制止をかける声にそちらを見た。そこには美少女が俺達見ていた。

「うわあ。綺麗な人ツス。」

確かに美人でスタイルもすごいし。

「やあ。天上院君。この身の程知らずのドロップアウト達にこの学園の礼儀を教えようとしたところだけどいっしょにどうかかな？」

万丈目。気に入られる気があるのかな？

「そろそろ、歓迎会が始まる時間よ？」

その一言に舌打ち一つして取り巻きを連れてこの場を去る万丈目。

「あなた達もあの人達には気をつけて。ろくでもないんだから。」

そう言つて、万丈目が去つた方を睨む天上院。

「へへ。わざわざ教えてくれるつてことはオレに気があるな？」

十代なりのジョークに天上院は軽く微笑んだ。美人さんが微笑むと可愛いものだ。

「あなた達の方も歓迎会の時間だから、戻つた方が良いわよ？」

そう言いながら、俺の腕を掴む天上院。

「やば。御馳走が無くなつちまう！じゃあな。士にええつと。」

「天上院明日香。」

「じゃあな。十代に翔に天上院。」

天上院の自己紹介にそう言つてその場を去ろうとする。しかし、

「あなたは、こつちよ？」

天上院は俺を案内するために引つ張るが、嫌な予感しかない。



「あの、何故にオベリスク・ブルー寮に連れて行こうとするのでしょうか?」

オシリス・レッド寮は言ったら悪いかも知れないが、オンボロアパート。ラー・イエローはゴジヤレたペンション。オベリスク・ブルーはお城かと言いたくなるぐらい豪華な建物。で俺を連れて行こうとしているのは、明らかにオベリスク・ブルーなのだが、  
「女の子は皆オベリスク・ブルーよ?」

やっぱりそうか。ここはとるべき手段は一つ。

「いやだあぁー!!!」

抵抗あるのみ。

## デュエル4 真夜中のアンティーデュエル

「いやだああー!!!」

「暴れないの! 歓迎会に遅れてもいいの!」

「歓迎会に遅れても良いけど、女子寮に行くのは嫌じゃー!!!」

明日香の言葉に叫ぶ。

「いいから来なさい!」

「いやだああー!!! オシリス・レッドカラー・イエローに行きたいんじやー!!!」

「女の子が男の寮に行ったらおかしいわよ!」

「俺が女子寮に行くのもおかしいんじやあ!!!」

「まったく。さつきからわけのわからないことを。」

俺の叫びに明日香は疲れたように呟く。そこに、

「明日香さん。どうしましたか?」

「どうしたのよ? 騒がしいわね?」

明日香と俺のやり取りを聞き付けたのか、眼鏡をかけた緑色の髪の子と薄紫色のツ

インテールの女子が声をかけてきた。

「麗華！雪乃！手を貸して！この子さつきから男子寮に行くと呼んでるのよ！」

「な！なんですって！原麗華の目の黒いうちは不純異性交遊はさせません！」

「アラアラ？随分大胆ね？」

明日香の言葉に、興奮して叫ぶ原にコチヲを見て微笑む雪乃だった。

「俺が男子寮に行っても不純異性交遊はならないから離せ！」

「女の子が男の寮に行くとしたら不純異性交遊ではなくても色々問題ありますからダメですー！」

「俺は男だ！」

「そんな見え見えの嘘をつかないでください！」

「真正銘本当だ！」

「そんなことより時間も無いですから早く来てください！」

そんなことを言いながら3人は嫌がる俺を引っ張りオベリスク・ブルー女子寮に連れてかれてしまった。

「……………お、俺は無力だ。」

会場の片隅で絶望感を味わっていた。オベリスク・ブルー女子寮に辿りついて寮長の鮎川先生の案内のもと会場に通されてしまった。

それでも、並べられた食事に手を出さないと食材に失礼かなと思ひ、小皿に食事を盛り付け舌鼓をうっている、

「よく食べるわね?」

呆れたような表情で明日香問いかける。そばには二人の女の子を連れている。まあ、既に3回おかわりしてるし。それ見たからビックリしてるのかな?

「や。天上院。俺ってさ、熱変換効率が良いすぎるらしくていくら食べても直ぐに空腹になるんだよね。」

俺の答えに茶色の髪の子が羨ましいと言ったのが聞こえた。

「女の子が体重を気にするのはわかるんだけど、羨ましがられても困るんだよね。いくら食べてもお腹一杯にならないというのは食費がかさむし。」

こういう時しかお腹一杯に食べれる機会がないし。これ以外だとしたら、バイキング形式のレストランか、『巨大餃子、10分までに完食すれば無料』つてのをやってるお店しかないんだよね。バイキング形式のレストランは自宅付近ではやってないし、後者は俺がいくと何故かそれ以降はやらなくなるんだよね。

「それ聞くと、あまり嬉しくないかも。後、あたしは枕田ジュンコよ。ジュンコでいい

わ。よろしくね。」

「わたくしは浜口ももえと申します。ももえと呼んでください。よろしくお願い致します。」

「こちらこそ。俺は沖田士。士でいいよ。」

俺達が明日香が問いかける。

「ところで、士。なんでまだ私服を着てるのかしら?」

「着れるか。あの制服。」

上は問題ない。白をメインにしているけど、それだけなら何の問題もない。隼人の制服も白を使ってるし、亮の制服だって白をメインにしている。問題なのは下。女子の制服はスカート。俺はスカートを履く気はない。

「そうかしら?よく似合うと思うわよ?」

「イヤ、似合ったら困るってば。」

そう言った時、明日香のPDAが鳴る。

「誰かしら?」

出てみると、万丈目が画面に映っていた。

『やあ。天上院君。今夜10時にあのデュエルフィールドでドロップアウトにアンテューデュエルを申し込んだけど、一緒にドロップアウトを潰さないかな?』

何考えてるんだか？

「私が行って止めてくるわ。」

「それじゃ、俺も行く。」

「アラ？それなら、私も行かせてもらおうかしら？」

後ろから、声をかけられ、振り向くと薄紫のツインテールの髪の子がいた。

「えっと、雪乃だっけ？」

「藤原雪乃よ。よろしくね。ところで、明日香。私が行っても大丈夫かしら？」

「大丈夫よ。じゃ、行きましょう。」

「あ、その前に重要な頼み事していい？」

その言葉に、明日香達の間には緊張が走る。

「ジュンコ、ももえ。俺の分二皿程確保して。」

「怖じけずによく来たな！ドロップアウト！」

「デュエルと聞いたなら逃げるわけにはいかないんでね。」

俺達が辿りついた時、そんな声が聞こえた。どうやら、思ってたよりも早く来たらしいな。

「何やってるのよっ？」

「やあ。来てくれたんだね?」

「ふざけないで!!アンティーデュエルは校則で禁止されてるし、時間外に設備を使用しているから、退学は免れないわよ!」

「ドロップアウトごとき直ぐに片付くさ。それにいざとなれば……………」

「言つとくけど、万丈目。天上院にあのメールを送った時点でお前の立場は無いと思うぞ?」

口を挟んだ俺に万丈目は視線を向ける。

「どういう意味だい?沖田君?」

「お?男扱いしてくれるのは嬉しいけどね、下手に優しくしてつけあがらせる気はない。」

「さっきのあのメールの内容なら確実に万丈目が悪人になる。それにこの会話は録音してある。」俺の答えに万丈目が悔しそうに歯噛みしていた。

「なら、沖田君。君とデュエルだ。僕が勝ったら録音していたデータとメールを削除してくれないかな?」

「何言ってるのよ!そんなの応じる訳が、」

「別に構わないよ。」

そう言っつてデュエルディスクを装着する。

「いいの?」

「俺は止めるより、自信満々に挑んできた奴が返り討ちに合うところを見たくて来たんだけど。こっちも面白そうだしね。」

そう言つて万丈目と向き合う。

「万丈目。俺が勝つたらの条件。二度と時間外の設備使用したり、アンティーデュエルをしないこと。いいね?」

俺の問いに同意したのか首を縦に振つた。

『決闘!!』  
デュエル

「先ずは先攻!・ドロー!」

あ。先攻取られた。

「リボンゾンビを準備表示で召喚!さらにカードを3枚セットして、ターンエンド! (伏せカードはヘルポリマー、ミラーフォース、禁じられた聖杯。サイバーモンスターを融合してもヘルポリマーでもらい、サイバー・エルタニンで来ても禁じられた聖杯で効果を無効にして、よしんばそれらを使わなくても、ミラーフォースで返り討ち。つまり、どう足掻いても俺の勝ちです。)」

万丈目ライフ4000手札2枚



伏せカード3枚

リボンゾンビDEF1600

士ライフ4000手札5枚

「俺のターン！ドロー！」

あ。これは、勝ったかも。

「手札から手札抹殺を発動！全てのプレイヤーは手札を捨てて捨てた枚数分ドロー！」  
俺の行動に翔と万丈目の取り巻きがざわめいていた。

「な！」

「士さんが、手札交換？」

「手札事故ですか?？」

その言葉に、思わず嘆息した。

「レベル低いな。手札交換の恐ろしさ教えてあげる。手札交換は、悪い手札を墓地に送り、良いカードを引く事が出来るのがまず1つ。次に相手の良い手札を墓地に送る事が出来る。これがその2。最後にカードの中には墓地にある事が最大のメリットになる、或いは墓地に送る事がトリガーのカードを積極的に送りつつ手札を補充出来るんだ。」

そう言いながら、手札を墓地に送り5枚ドローする。

「墓地から暗黒界の龍神 グラファア、暗黒界の術士 スノウ、2枚の暗黒界の狩人 ブラウ、暗黒界の武神 ゴルドの効果発動！先ずはグラファアで右端の伏せカードを破壊！」  
伏せカードは禁じられた聖杯か。

「な！まさか違うデッキ！」

「スノウの効果でデッキから暗黒界の龍神 グラファアを手札に加える。次にブラウ、計2枚ドロウ。最後にゴルドを特殊召喚！天使の施しを発動！3枚ドロウして2枚捨てる！今墓地に捨てた、グラファアでリボンゾンビを破壊、暗黒界の尖兵 ページの効果で自身を特殊召喚！」

更に墓地にあるグラファアの効果発動！グラファア以外のフィールド上のモンスター、ページを手札に戻し、墓地のグラファアを特殊召喚！」

この2体を並べて平然としているということは伏せカードか手札に攻撃回避の何かがあるのか？

「暗黒界の雷を発動！右側の伏せカードを選択！チェーンは？」

「ない。」

「なら、破壊して、手札のグラファアを捨ててもう1つの伏せカードを破壊！」

ミラーフォースにヘルポリマーか。サイバー・ドラゴンのデッキなら、アウトかもしれない。

「暗黒界の取引を発動！俺と万丈目は1枚ドロしてから1枚捨てる。

捨てたのはページだから特殊召喚！グラファの効果でページを手札に戻し、特殊召喚！もう一回、暗黒界の取引でページを捨てて特殊召喚してからグラファの効果でページを手札に戻し、特殊召喚！

フィールド魔法暗黒界の門を発動！墓地の悪魔族モンスターを除外して手札を捨ててドロ。ブラウは除外して、暗黒界の軍神 シルバを捨てる。シルバは特殊召喚効果を持っているから！最後に一族の結束を発動！」

暗黒界の龍神 グラファ ATK 2700 + 800 + 300

暗黒界の武神 ゴルド ATK 2300 + 800 + 300

暗黒界の軍神 シルバ ATK 2300 + 800 + 300

「こ、攻撃力3000オーバー。」

暗黒界を見て顔を青ざめる万丈目。どうやら打つ手が無いらしいな。

「全軍で総攻撃！」

暗黒界の神達の攻撃で万丈目のライフが0以下になった。

○ ○ ○

「俺の勝ちだ。約束はわかってるな？」

「あ、ああ。引き上げるぞ。」

「し、しかし、万丈目さん。」

「早くしろ。」

万丈目の一括に足早にこの場を去る。

「十代達も、早くこの場を去った方がいいぞ。」

「あ、ああ。スゲエデュエルだったぜ。」

十代はそう言つて何故か呆然としている翔を引つ張つていった。

S I D E 翔

凄い。僕の胸の内にあるのはその言葉だけだった。通常召喚を一切せず、墓地のカードさえも手札の如く使うカード達で万丈目君を反撃さえもさせる暇なく圧勝してしまつた。何故だろうか？土さんの顔を見るとうるさいくらいにドキドキいってるツス。

S I D E 明日香

落ち着きなさい私。いくら男みたいな喋り方だからって、土は女の子なのよ？だから、土相手にドキドキしない。

そう思うのに反して、私の胸が鳴り続けている。

## デュエル5 女子寮でのデュエル

「デュエルモンスターにはモンスター、魔法、罠という種類のカードがあります。モンスターは通常モンスター、効果モンスター、融合モンスター、儀式モンスター、魔法カードは、通常魔法、速攻魔法、装備魔法、永続魔法、罠カードは通常罠、永続罠、カウンター罠、があります。」

明日香が語り終えたとき、

「スプレントイード！素晴らしいノーネ！」

「基本的な事ですから。」

そう言つて着席する明日香。まあ、そうかもしれないが、基本は大事だよ？いぎ、デュエルとなつたところで、魔法はどれ？罠はどれ？とか、セットしたターンに罠カードを発動！なんて事があつたら笑い話にもならないから。

「シニョーラ士！永続魔法は何なノーネ！」

早速あてられたよ。まあ、制服拒否の姿勢を貫いてたら目立つか。

「シニョーラではなくシニョールです。永続魔法とは魔法カードの一種で発動後フィー

ルドにとどまり続け、何かしらの効果を及ぼす魔法カード。

代表的なのはスライム増殖炉と生還の宝札だろうか？

後、フィールドにとどまり続けるカードの注意点としてはあまり使いすぎると、魔法、罠のゾーンが埋まってしまい、セット出来ないという点とあと、これらのカードはサイクロンで効果まで止められてしまう、ということだ。」

「どうして？ 通常魔法とかも止められるんじゃないの？」

オシリス・レッドから飛び出た問いに眉間を揉みほぐすようにしてから答える。

「サイクロンの効果は『フィールド上の魔法または罠カード1枚を破壊する。』というものだ。つまり、通常なら効果の無効には出来ない。だが、フィールドにとどまり続けるカードはカードが有る限り効果がフィールドに残り続ける。そのため、サイクロン等で破壊されたら効果まで消えてしまう。」

成る程と呟きながら、先程質問したオシリス・レッドは俺が言ったことを書き留めていく。

「シニョール丸藤！」

「は、はい！」

急にあてられて緊張するのはわかるけど落ち着きなよ？

「フィールド魔法とは何なのか？ 答えるノーネ！」

「え、えっと、その、」

「さすが、オシリス・レッドのドロップアウトだぜ！　フィールド魔法も答えられ無いか？」

「今時小学生でも知ってるぜ！」

緊張して答えられないでいると、オベリスク・ブルーの生徒が翔をバカにし始めた。それを見てため息を吐いて翔に近づく。

「土さん？」

首を傾げる翔の頭を撫でてから、

「翔。大きく息を吸って、吐いて、また吸って、吐いて。」

俺が言ったことを素直に従う翔。暫し深呼吸させると問いかける。

「大丈夫か？　さて、フィールド魔法とはなにか？」

「う、うん！　フィールド魔法は土さんが言っていたフィールドにとどまり続けるカードの一種類でフィールド魔法専用のスペースがあり、発動したら、新規に発動したフィールド魔法が適用され以前のは破壊されます。」

「そう言うこと♪　やれば出来るじゃん♪」

満面の笑顔で頭を撫でてから席につく。

「女のクセして、オシリス・レッドのドロップアウトの肩を持つのか！」

「あのね、オシリス・レッドだからってバカにするのは間違ってるぞ。もし、それがまかり通るなら、自分達が落ちぶれてオシリス・レッドに来た時、オシリス・レッドだからバカにされるのを許容しなきゃならないから。後、俺は男だ。」

俺の言葉に、オベリスク・ブルーの男は怒って殴りかかる。その拳の先にいる明日香に当たらないように、明日香の肩を押しながらブリッジを避けてから、男の顔面に教科書を叩きつける。立てて。

「**+**　・　？　　、　　、　　、　　、　　全　（　+　'　！！！！　）」

顔を殴打され激痛にのたまうモブA。

「クロノス。授業中に騒がして悪かった。」

クロノスに謝罪する。

「気にすることはないノーネ！悪いのはシニョール藻部なノーネ！」

そう言って、授業は進む。

SIDE 藻部栄太郎

俺は腸煮えくりかえそうな思いで一杯だった。俺に恥をかかせてくれた男みたいな喋り方する小生意気な女、沖田士（俺は男だ!!）。……………今、何か聞こえた気がしたんだが、気のせいだろう。とりあえず、あの女（俺は男だ!!）をギャフンと言わせる方法が何か無いだろうか？……………なんか幻聴が聞こえるのだが、俺の耳は大丈夫だろうか？



……ああ。そうだ。この手があつた。思い付くと早速、2枚の手紙を用意して筆を走らせた。

手紙を書き終えた俺はそれらを封筒に入れ、1つを丸藤翔のロッカーに入れてきた。もう一つを沖田士のロッカーに入れるために開けたのだが、本当に女のロッカーか？まるで一度も使われて無いみたいにつきからかなのだが？まあ、いい。とりあえず、沖田士のロッカーに手紙を入れてドアを閉める。周囲に誰もいないのを確認の上で廊下に出る。後は何食わぬ顔で体育の授業に参加すればバツチリだ。心の中で高笑いしながら体育の授業を受けていた。

○ ○ ○

SIDE 翔

「遅れるー！」

御手洗いに行つたせいで時間も危なくなり、急ぎ足で更衣室に駆け込んだ。そして、僕のロッカーを開けたとき、

「アレ？」

ロッカーに手紙が入っていた。その手紙はハートマークのシールで封がされていて、まるでラブレターみたいな。

「ハハハ。まさかね。」

笑いながら、手紙の宛名を確認する。それは僕宛になっていた。

「嘘ツスよね？」

裏返して差出人を確認すると士さんになっていた。

「ま、まさか!」

震える指先でそれでも、何とか封筒を開いて、便箋を取り出す。

『突然のお手紙すみません。』

初めて会ったときから翔君が気になってました。いきなり、こんなお手紙を渡されてもきつと困惑なされているでしょう。でも、よければ私と付き合ってください。

今夜10時、女子寮裏の湖の付近にて待っています。』

僕はその文面を見て頬つぺたを引つ張ってみた。………痛い。夢じゃない。僕に春が訪れたんだ♪

………後でこれが悪意に満ちた地獄への招待状だとはその時は気づかなかつた。S

I D E 明日香

所用があつて皆とは別行動していた私は急いで更衣室に入つて着替えていた時、隣の士のロッカーから白い小さな物がはみ出しているのに気づいた。なんだろう? 疑問に思いながら引き抜くと、白い封筒だつた。

『沖田士様へ』

宛名には確りと書かれていた。裏返して見るとハートマークのシールで封がされていた。ラブレターよね？誰からのよ？そう思い、差出人を確認したら翔君の名前が書かれていた。……………翔君がこんな手紙を出してもおかしくないかな？あの夜のデュエルから土を見る目が変わっていた。……………土と翔君が付き合うのかな？土と翔君が腕を組んで歩く姿を想像してみたけど、胸が締め付けられるように苦しい。だからだろうか？いけない事だと理解していても、翔君が書いたその手紙をポケットにしまつてしまつた。

(ご免なさい。翔くん。)

心の中で謝罪しながら。

○○○○

S I D E 土

「まったく。何でこんなことに。」

俺は男子手洗いの個室で着替えていた。女子更衣室に俺のロッカーがあるのだが、男が素直に使うわけにはいかず、かといって体育の授業をサボるわけにはいかず、こうして誰もいない時に入って着替えざるをえないのだ。体育の授業を受けるのさえ一苦労だよ。着替え終えそれまで来ていた服はカバンに詰めて体育の授業に参加した。

## SIDE 翔

「ホントにスゴイ建物だ。」

僕は湖の向こう側にそびえ立つお城のような建物を見上げていた。気後れしそうになるけど、この先士さんが待っているんだ！意を決して、裏手に近づく。そこは侵入禁止の金網で閉ざされていたが、入り口の鍵が壊されている。何でだがわからないけどラッキーだよ。時間にはまだ余裕があるけど、あまり待たせたくないし。何故壊されているのか気にせず進むと、

「バカなああッ!!!」

という叫び声と

「キヤアアアッ!!! 覗きよッ!!!」

という悲鳴とバシヤンという水音が聞こえたため慌てて駆けつけようとしたんだけど何かにけつまづいて、転んでしまった。

「つたた。」

鼻を押さえながら立ち上がろうとすると、

「翔。アンタ何やってるのよ?というか男のアンタが女子寮の裏に来てるのよ?」

上から声をかけられ、見上げると制服姿の明日香さんにバスタオルを巻き付けただけのジュンコさんとももえさんがいた。そして、見てしまった。バスタオルの向こう側

を。

その瞬間、僕は鼻血を噴いて倒れた。

○ ○ ○

SIDE 明日香

はあ。浮かない表情で女子寮付近を歩いていた。翔君が書いたラブレターを取り上げた事に未だにスッキリしない感情を抱いているのだ。

ふと、赤い制服姿の男の子が歩いているのに気づいた。恐らくは翔君だと思う。10時に女子寮の裏にある湖の付近に呼び出したみたいだし、髪の色は水色みたい。翔君にどうやって来ないことを伝えようと悩んでいたら、金網で封鎖されているはずの入口を通り抜けて女子寮の裏に侵入した。翔君が歩いたと思われる跡をたどって行くと、

「バカなああッ!!!」

という叫び声と

「キヤアアアッ!!!覗きよッ!!!」

という悲鳴とバシヤンという水音が聞こえた。想像すらしてなかった事態に身構えていると、

「明日香さん!大丈夫ですか!」

バスタオルを巻いただけのジュンコとももえと遭遇した。たぶん、覗きを懲らしめる

為に慌てて飛び出したんだろうけど、女の子としてその格好はどうかと思うわよ？

「ええ。大丈夫よ。」

とそう返した時、すぐ近くで物音がしたので近づいてみると、翔君が倒れていた。翔君には悪いけど、これは都合がいいかもしれない。このまま、拘束してしまえば土に届いていないことを誤魔化せるかもしれない。そう考えていたら、ジュンコが翔君に声をかけていた。

「翔。アンタ何やってるのよ？というか男のアンタが女子寮の裏に来てるのよ？」

その声に反応した翔君がコチラを見上げて、鼻血を噴いて気絶してしまった。

「……………。その話は本当なの？翔君が呼び出したんじゃないやなくて土が呼び出したの？」

翔君を拘束して連れ帰り事情を聞いてみたら、土が翔君をアソコに呼び出したと言っていた。その為、思わず確認のために問いかける。

「間違いないツス。僕のズボンのポケットにその手紙が入ってるツス。」

翔君に確認を取り、ポケットを漁り例の手紙を取り出す。確かに土から翔君宛の手紙になってる。でも、

「これ、土の字じゃないわ。土は丸く書くもの。」

「うわあ汚い字ね。明らかに男が書いた字じゃないですか？」

ジュンコが横から盗み見て感想を言う。その時、ポケットから、士のロッカーに入っていた手紙を取り出した。

「翔君。この手紙に心覚えはない？」

翔君は手紙を眺めて首を横に振った。

「僕から出した事になってるけど、僕は沖田さんに手紙を書いた事がないツス。」

「やっぱり。そう言うことか。士か翔君か、或いは両方を嵌めるために、士と翔君に手紙を出したというわけね。」

「それにしても、アンタよくこんなのに釣られたわね？」

その通りよ。迂闊すぎるわ。

「面目ないツス。初めてラブレターを貰ったもので舞い上がってしまったツス。」

「これからは気を付けてね？」

翔君にそう注意して拘束していた縄をほどく。その時、

「天上院さん。覗きはどうなったの？」

「すみません。犯人はまだ捕まってません。」

「そう。ところで、丸藤君が何故そこにいるのかしら？」

「どうやら、誰かにはめられて、女子寮に来ちゃったみたいで。」

「翔君。次からは気を付けなさいね？」

「ハイ。申し訳ありません。」

鮎川先生に謝罪する翔君を見ながら十代にメールを送る。

「悪いわね。呼び出したりして。」

女子寮入口で待っていたのだが、十代がコチラに近づいて来るのに気づいて声をかけた。

「イヤ。別に構わないけど、困った事ってなんだ？」

「翔君が女子寮の裏側に来ちゃったのよ。」

そう言った時十代は酷く驚いたようだった。

「……………明日香。翔を放してくれないか？俺から後できつく言っとくからさ。」

「お願いするわ。丁度翔君が来たタイミングで覗き騒ぎがあって危うく犯人にされかけたんだから。」

「その犯人って、コイツじゃないのか？その湖から不審人物が浮上したから持ってきたぞ。」

士が闇の向こうから声をかけてきた。けど、持ってきたって？まあ、確かに片足持つて引つ張ってきたからあながち間違いないかもしれないけど。その、オベリスク・ブルーは石や木の根に頭を打ち付けたのか大量に瘤を作っていた。けど、この人って、



「藻部君じゃない。」

○○○○

SIDE 士

「プハア！」

泉の中を泳いでいたが、さすがに息苦しくなり水面に顔を出す。水の中から出てバスタオルを手に取り、身体を拭き始める。

「ルビー。フレア。誰も来なかったか？」

「ガアア。」

「大丈夫。誰も来てないよ。」

俺の言葉に、俺の精霊達が答える。

「そっか。サンキューな。ルビー。フレア。」

「グルル♪」

「どういたしまして♪」

俺の言葉に、ルビーはドラゴンらしく唸り声で答えて、フレアは笑顔で答えた。

身体についた水を拭い髪の毛の水分も吸わせる。しかし、ホントに髪が長いから大変だ。髪の毛の水分を吸わせてからニットの長袖シャツとズボンを掃く。そして、長い髪を一房に纏めようとしたところで、フレアからの報告が入った。

「土。十代君が女子寮の方に向かっているよ?」

十代が?……ああ。翔覗き疑惑事件か?……アレ?ちよつと待てよ?確かアレって、十代がクロノスに実技と知識は別だ発言がきっかけだったよな?こつちでは、その発言がなかったから、覗き騒ぎが起る理由がないハズだが?それとも、これは必ず起きなきゃならないのか?」

「とりあえず、女子寮に行ってみなきゃわからないか。」

髪の毛をツインテールに纏め直して女子寮に向かう。女子寮のそばの湖で怪しい人が浮上した。怪しく思い、陰で観察していると、聞き逃せない事を言っていた。

「オシリス・レッドのドロップアウトが引つかかったのに沖田土は引つかからずに明日香さんが来るなんて、妙なことになったな……。そのせいで思わず叫んでしまったし。」

ハイ。決定。とりあえず、その男を気絶させ、片足引つ張って女子寮に向かう。後ろからゴツという音がするけど気にしない。

女子寮に辿りついた時、ちやうど翔が女子寮に侵入した時の事を話していた。

「その犯人って、コイツじゃないのか?その湖から不審人物が浮上したから持ってきたぞ。」

皆が驚いてコチラを見た。

その後、覗き魔こと、藻部栄太郎は処罰が決まるまで自宅待機ならぬ自室待機となった。

「ねえ。十代。せつかく来たんだし私とデュエルしない？」

最初から十代とデュエルする気満々でしょ？その腕に装着されてるデュエルデイスクは何？

そして、原作通りに進み、

「E・HERO（エレメンタル・ヒーロー） サンダー・ジャイアントのダイレクトアタックー！ ボルテックサンダーー！」

雷を纏った巨人の一撃明日香のライフを削りきった。

「ガッチャ！ 楽しいデュエルだったぜ！」

笑顔で明日香に言うのにたいして、ジュンコが十代を睨む。

「まぐれで明日香さんに勝てたからって、いい気にならないでよね！」

「やめなさい。みつともない真似は止めて。」

「でも、明日香さん。」

「イヤ、ソイツの言う通りかもしれないぜ？」

「少なからず、プレイングミスや、選択のミスがあつたしな。」

「えっと、例えば？」

明日香は真剣な顔して問いかける。

「例えば、ドゥーブル・パッセを使うより、マジックシリンドラーを使った方がいいし、どうしても使いたいなら、スピリットバリアと一緒に使った方がいい。」

それに、サイバー・ブレイダーを融合するとき、わざわざブレード・スケーターを召喚する必要がない。手札からブレード・スケーターを融合素材にすれば、召喚権が残る。サイバー・ブレイダーの攻撃力は2100。スパークマンとの差は500。攻撃力1700以上のモンスターが手札にあれば追撃で勝てたし、少なからず、モンスターを召喚していれば次のターンも攻勢に出れなかった。」

なるほど、と先程のデュエルの内容を思い返していた。

「なあなあ。土。俺とデュエルやろうぜ？」

さっきしたばかりでデュエルか？まあ、いいけどね。

『決闘!!』  
デュエル

「俺のターン！ドロー！モンスターをセット、カードを2枚セットしてターンエンド！」

士ライフ4000手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚

「俺のターン！ドロー！E・HERO《エレメンタル・ヒーロー》バブルマンを召喚！」

場にバブルマン以外のカードがないから、2枚ドロ―！手札から融合を発動！フェザーマンとバーストレディーを融合！来い！フレイムウイングマン！行くぜ！フレイムウイングマンの攻撃！フレイムシュート！」

フレイムウイングマンを炎を纏った体当たりで俺の場のモンスターを破壊するけど、お前風属性だろ？

「さらにフレイムウイングマンの効果発動！ 戦闘で破壊したモンスターの攻撃力、400ポイントのダメージを与える。」

「だけど、見習い魔術師の効果で見習い魔術師をセット！」

俺が場にモンスターをセットしたら、フレイムウイングマンは炎を浴びせるが、お前は風属性だろ？

「さらにバブルマンでそのモンスターに攻撃！」

見習い魔術師の守備力ではバブルマンには勝てず、あっさり破壊される。

「さらに執念深き老魔術師をセット！」

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

士ライフ3600手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚

フレイムウイングマン ATK2100 バブルマン ATK800

伏せカード1枚

十代ライフ4000手札3枚

「俺のターン！ドロー！ 反転召喚！ 執念深き老魔術師！その効果でフレイムウイングマンを破壊！」

反転召喚された老魔術師が呪文を唱えるとフレイムウイングマンはガラスのように砕け散った。

「フレイムウイングマン！」

「さらに執念深き老魔術師を生け贄にして、ブラックマジシャンガールを召喚！」

俺の場にフレアが召喚されると、皆ビックリして少女を見つめていた。

「行くよ！ バトルフェイズ！ ブラックマジシャンガールでバブルマンを攻撃！ブラック・バーニング」

「ハアッ！」

ブラックマジシャンガールの攻撃がバブルマンに迫る。そこを、

「トラップカードオープン！ ヒーローバリア！ E・HERO と名のつくモンスターがいるとき攻撃を1度だけ無効にする！」

十代の場から発生したバリアが攻撃を防いでしまった。

「ちえ。1枚セットしてターンエンド！」

士ライフ3600手札2枚

伏せカード3枚

伏せモンスター0枚ブラックマジシャンガールATK2000

バブルマンATK800

伏せカード0枚

十代ライフ4000手札3枚

「俺のターン！ ドロー！ 融合回収を発動！ 融合とフェザーマンを回収して融合発動！ スパークマンとクレイマンを融合！ サンダージャイアントを召喚！ 効果でブラックマジシャンガールを破壊！」

サンダージャイアントの雷がフレアを破壊してしまった。

「キヤアアアツ!!!」

「ああ。ブラックマジシャンガールが……………」

その様を見て悲しそうになる翔。

「サンダージャイアントで……………」。「ストップ！」

俺が待ったをかけると十代は一瞬脱力した。

「なんだよ？ 士？！」

「悪い。メインフェイズ終了時にリビングデッドの呼び声を発動！ 墓地のブラックマジシャンガールを蘇生！」

「ウフフ♪」

俺の場に召喚されたフレアは翔にウインクをすると、翔が顔を赤く染める。

「悪いな。サンダージャイアントでブラックマジシャンガールを攻撃！ ボルテックサンダー！」

「させないよ！ リバーズカードオープン！ マジカルシルクハット！ チェーンで強制終了！ マジカルシルクハットでデッキから2枚の魔法か罠を選択して場のブラックマジシャンガールとシャッフルしてセット！」

俺の場にいるフレアと2枚の罠がシルクハットで隠されてシャッフルされる。

「そして、強制終了の効果でマジカルシルクハットを墓地に送り、バトルフェイズを終了させる。」

空間が歪み、サンダージャイアントの攻撃が俺のフィールド全体におよび、シルクハットを破壊した。そして、2体のトークンが姿を現した。

「何でシルクハットが？ それに何で邪神トークンが？」

「マジカルシルクハットの効果。バトルフェイズが終了した瞬間、疑似モンスターを破壊する。」



黄金の邪神像はセット状態で破壊されたらトークンを召喚する効果がある。」

「そっか！それで、トークンが召喚されたわけか！バブルマンを守備表示に変更してターンエンド！」

士ライフ3600手札2枚

伏せカード1枚 強制終了

伏せモンスター1枚ブラックマジシャンガール裏守備表示 邪神トークンDEFI  
000×2

バブルマンDEF1200 サンダージャイアントATK2400

伏せカード0枚

十代ライフ4000手札2枚

「俺のターン！ ドロー！ 天使の施しを発動！ 3枚ドローして2枚捨てる！ そして、ブラックマジシャンガールを反転召喚！ 邪神トークン2体を生け贄にブラックマジシャンを召喚！」

『ブラックマジシャンまで！』

皆の言葉がシンクロしてる。

「バトルフェイズ！ ブラックマジシャンでサンダージャイアントを攻撃！ブラックマジック！」

黒衣の魔導師が放つ魔法が雷の巨人を倒し十代にダメージを与える。(十代ライフ4000-2500+2400=3900)

「ブラックマジシャンガールでバブルマンを攻撃!」

今度こそ、フレアの攻撃がバブルマンを破壊した。

「墓地にあるレベルステイラーの効果でブラックマジシャンのレベルを1つ下げて特殊召喚してターンエンド!」

士ライフ3600手札2枚

伏せカード1枚 強制終了

伏せモンスター1枚ブラックマジシャンガール ATK2000 ブラックマジシャ

ン ATK2500レベルステイラー DEF

伏せカード0枚

十代ライフ3900手札2枚

「俺のターン! ドロー! 手札から貪欲な壺を発動! 墓地からバーストレディー、フレイムウイングマン、バブルマン、スパークマン、クレイマンをデッキに戻して2枚ドロー! 強欲な壺を発動! 更に2枚ドローしてから、手札から融合発動! 手札のフェザーマンとバーストレディーを融合! フレイムウイングマンを召喚!」

また融合! 何回融合する気なんだ!

「スパークマンを召喚！」

「どちらも攻撃力足りないぞ？」

「忘れてないか？HEROにはHEROに相応しい戦いの舞台が有るんだぜ？」

手札からフィールド魔法スカイスクレイパーを発動！」

十代のフィールド魔法ゾーンに魔法カードを置くと、周囲が変わり、高層建物が立ち並ぶ場所になった。

「しまった！スカイスクレイパーは！」

「ああ。E・HEROと名のつくモンスターが自身より攻撃力の高いモンスターに攻撃するとき攻撃力が1000ポイントアップする！行くぜ！フレイムウイングマンでブラックマジシャンを攻撃！スカイスクレイパーシールド！」

「コレでアニキの勝ちっす！」

「なんてね♪」

フレイムウイングマンはビルの屋上から、攻撃を仕掛けるが狙いがそれになにもない空間を攻撃をした。

「そちらも忘れてるよ？強制終了は永続罫。コストさえ支払えば何度も使える。レベルステイラーを墓地に送りバトルフェイズ終了させる。」

「倒せなかったか。ターンエンド！」

士ライフ3600 手札2枚

伏せカード1枚 強制終了

伏せモンスター0枚 ブラックマジシャンガール ATK2000  
ブラックマジシャン ATK2500

フィールド魔法 スカイスクレイパー

フレイムウイングマン ATK2100 スパークマン ATK1600

伏せカード0枚

十代 ライフ3900 手札0枚

「俺のターン！ ドロー！ 強欲な壺を発動！ ……十代。今回は俺の勝ちだ！

墓地のレベルステイラー2体の効果発動！ ブラックマジシャンのレベルを2つ下げ、特殊召喚！ さらにデイメンションマジックを発動！ ブラックマジシャンを生け贄水の女王を召喚！」

ブラックマジシャンが棺の中に入ったなら、代わりに氷を司る女王が現れる。

「え？ 何でブラックマジシャンを？ レベルステイラーでいいんじゃないか？」

当然の疑問だな。

「レベルステイラーは生け贄召喚以外の為の生け贄には出来ないんだ。強制終了の場合

合は墓地送りだから出来ただけ。デイメンションマジックの追加効果でフレイムウィングマンを破壊！」

氷の女王が呪文を唱えるとフレイムウィングマンが凍りつき砕け散った。

「さらに場の2体のレベルステイラーを生け贄にブリザードプリンセスを生け贄召喚！死者蘇生でブラックマジシャンを召喚！」

「どうやら、俺の負けだな。」

「ああ。ブラックマジシャンガールでスパークマンを攻撃！」

フレアの攻撃でスパークマンは倒れる。(十代ライフ3900—2000+1600

||3500)

「残りで総攻撃！」

魔法使い達の攻撃が十代のライフを削りきった。

「ガツチャ！負けちゃったけど、楽しいデユエルだったぜ！」

「ああ。俺もだ。」

俺がそう返すと十代は翔を連れ帰る。さてと、俺も行くかと思ったところで、

「待ちなさい。土は今まで、授業が終ると姿を消してたけどどうしてなの？」

「え？ずつと野宿してたよ？」

俺の答えに明日香は何処かから取り出した手錠で俺の手首と明日香の手首に嵌めた。

「え、えっと、明日香さん。これは、いったい何故でせうか？」

「いくら何でも女の子が野宿なんてしちやだめよ？」

「問題になるから止めて欲しいと士は士で必死にお願いしてみたり。」

「ダメよ？」

キツパリと断られてしまった。その後の抵抗も虚しく明日香と一泊してしまった。

## デュエル6 月1試験帝王との争い

「神様お願いです。月1でやるテスト次第でオシリス・レッドからラー・イエローに昇格できる。これで、まさに『死者蘇生』!!」

「したいなら勉強する。というか、テスト1週間前で何やってるんだ?」

「不肖、この丸藤翔をラー・イエローに昇格させて下さい!」

ダメだ。全然聞いてない。

「お願いします!どうか……。ブギヤ!」

俺は、翔のお祈りを止めさせる為に頭に拳骨を落とした。

「ううう。士さん。何するツス?」

「試験1週間前に何をしてる?というか試験はこれまでやった事をどれだけ理解しているか試すことなんだから、祭壇擬きに祈る必要はないぞ。」

「うう。でも、僕はオシリス・レッドだから、こんなことしないと、ラー・イエローにいけないツス。」

まったく。しょうがない。

「翔。十代。隼人。筆記用具と教科書もってオベリスク・ブルー女子寮前に来い。」

「えー！でも、俺は、別に昇格に興味は……。」

「十代。なんか言った？」

「い、いえ。何もありません。サー。」

笑顔での問いに、十代は震えながらも、否定した。

「よし。なら、早く来いよ？」

鮎川先生に許可を貰い、ついでに、明日香と雪乃にも誘って、監視兼教師役というか、教師の鮎川先生のもと、偶然合流したラー・イエロー所属の三沼だっけ？とももえジュンコも含めた、10人の勉強会がテスト前日まで及んだ。

「皆。お疲れ様。今日は早く寝た方が良い。寝不足は明日に響く。」

「うん。士さん。ありがとうございます。」

「楽しかったぜ。またやろうな。」

「他人の勉強を見るのも良い勉強になった。」

フム。翔と十代と三沼には勉強会が良かったようだ。それ以外の皆も不満もなさそうだ。

あの後、こっそり女子寮を抜け出し野宿したのだが、  
「ふ、不覚。」



まさか、港からデュエルアカデミアの通り道近くで野宿するなんて。おかげで立ち往生しているトメさんと一緒にトラックを押すはめになってしまった。一応明日香にはメールで知らせてあるけど、コレは遅刻確定だ。

「おばちゃん！土！手伝う！」

「バカ言え！ここで遅刻したら今日までの頑張りがパーだろうが！」

「それが何だ！人が困っているのを見てほっとけるか！」

「つたく。十代は、バカか？その後は3人で押し、原作より15分ほど早く教室に到着した。その後は皆と一緒にテストを受けてから、皆の様子を確認すると、出来は良かったらしい。後は、実技試験だけだが……………」

「……………何で俺の相手がアンタなんだ？カイザー？」

「そう。自分の目の前に立つ男は翔の兄の丸藤亮だ。この組分けには悪意を感じるぞ。おそらくは鮫島校長の差し金だろう。入学初日に鮫島校長の要求を蹴り、デュエルに勝った事を恨んでいたのだろうか？まあ、組み合わせが決定している以上断る事も出来ないかな？」

『決闘《デュエル》!!』

「俺のターン！ドロー！豊稜のアルテミスを召喚！さらにカードを4枚セットしてター

ンエンドー！」

士ライフ4000手札1枚

伏せ4枚

豊穡のアルテミスATK1600

「俺のターン！ドロー！手札から大嵐を発動！」

「カウンタートラップ！魔宮の賄賂を発動！大嵐を無効にして破壊する代わり、そっちは1枚ドロー！」

「くードロー！」

ドローしたカードを見て笑みを浮かべる亮。でも、

「この瞬間豊穡のアルテミスの効果で1枚ドロー！」

「プロト・サイバー・ドラゴンを召喚！このカードはフィールドにある限り、サイバー・ドラゴンとして扱う！さらに融合を発動！プロトサイバー・ドラゴンと手札のサイバー・ドラゴンを融合してサイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚！バトル！」

サイバー・ツイン・ドラゴンで豊穡のアルテミスを攻撃！」

「カウンタートラップ！攻撃の無力化を発動！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了！豊穡のアルテミスの効果で1枚ドロー！」

アルテミスに向けて放たれた閃光が時空の渦に飲み込まれ消滅した。

「なー！一枚セットしてターンエンド！」

士ライフ4000手札3枚

伏せ2枚

豊穡のアルテミスATK1600

サイバー・ツイン・ドラゴンATK2800

伏せ1枚

亮ライフ4000手札2枚

「俺のターン！ドロー！」

亮の手札を増やす事になるけど、仕方ない。

「カードを2枚セットして天よりの宝札を発動！全てのプレイヤーは手札が6枚になる

ようにドロー！」

よし！これなら、

「手札から洗脳ーブレインコントロールを発動！ライフ800をコストに亮のサイバー・ツイン・ドラゴンのコントローलをこのターンのみ得る！」

俺のライフが引かれるとサイバー・ツイン・ドラゴンがコチラにやってくる。そして、外野が「相手のカードを！」と騒ぎ始めた。

「そして、サイバー・ツイン・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「その瞬間、トラップ発動！攻撃の無力化！」

サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃は時空の渦に飲み込まれ消滅した。

「豊穣のアルテミスの効果でドロー！」

「ちよつと待て！何でドローできるんだ！」

外野は疑問にそう解説した。

「豊穣のアルテミスの効果は指定がない。だから、相手が使おうと自分が使おうと俺がドローできるんだ。さらに、サイバー・ツイン・ドラゴンを生け贄にして天空騎士《エンジンジェルナイト》パーシアスを召喚！1枚セットしてターンエンド！」

士ライフ3200手札4枚

伏せ5枚

豊穣のアルテミスATK1600

伏せ0枚

亮ライフ4000手札6枚

「俺のターン！ドロー！手札から死者転生を発動！手札を1枚を墓地に送り、墓地のモンスターを手札に加える！更に死者蘇生を発動！墓地のプロト・サイバー・ドラゴンを特殊召喚！さらに地獄の暴走召喚を発動！」

？おかしい。何故死者転生を使った？地獄の暴走召喚は同名モンスターを可能な限り、特殊召喚する効果。そして、プロト・サイバー・ドラゴンにはフィールド上に限り、サイバー・ドラゴンとなる。この場合、サイバー・ドラゴンを特殊召喚するため、わざわざ手札に加えたりする必要はない。何故回収した？俺の疑問に答えるかのようにフィールド上に現れる4体のモンスター。って、アレは？

「サイバー・ドラゴン・ツヴァイ？」

そうか。死者転生の効果で墓地に送ったのか。サイバー・ドラゴン・ツヴァイは墓地にある時、サイバー・ドラゴンとなる。死者転生はこの為の布石か。

「地獄の暴走召喚は俺のモンスターにも影響を及ぼす！2体の豊穡のアルテミスを召喚！」

「パワーボンドを相手に見せてサイバー・ドラゴン・ツヴァイをサイバー・ドラゴンとして扱う！パワーボンドを発動！サイバー・ドラゴン3体を融合してサイバー・エンド・ドラゴンを召喚！強欲な壺を発動！2枚ドロロー！融合を発動してプロトサイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴン・ツヴァイを融合してサイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚！早すぎた埋葬でサイバー・ツイン・ドラゴンを召喚！」

周りからは「終わった。」とか、「ざまあみろ。」とか言っているのが聞こえた。どうでもいいかも知れないが、『埋葬』が『早すぎた』ということは生き埋めか？

「サイバー・エンド・ドラゴンで豊穣のアルテミスを攻撃！」

「カウンタートラップ発動！攻撃の無力化！」

時空の渦がサイバー達の攻撃を飲み込んだ。

「カウンタートラップ発動により、3枚ドロウする！」

「サイバー・ジラフを召喚して生け贄にして効果ダメージを無効にしてターンエンド！」

士ライフ3200手札7枚

伏せ4枚

豊穣のアルテミスATK1600×3

サイバー・エンド・ドラゴンATK4000+4000 サイバー・ツイン・ドラゴ

ンATK2800×2

伏せ0枚 早すぎた埋葬

亮ライフ3200手札0枚

「俺のターン！ドロウ！バトルフェイズ！」

豊穣のアルテミスでサイバー・エンド・ドラゴンに攻撃！ダメージステップ時に2体のオネストを捨てて効果発動！エンドフェイズ時まで豊穣のアルテミスの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする！」

その宣言に外野の皆が騒然となった。オネストでアップする攻撃力はサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力、8000の2倍になるからだ。

「こ、攻撃力17600の豊穰のアルテミスだとう!？」

サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃を弾き、豊穣のアルテミスの攻撃がサイバー・エンド・ドラゴンを破壊した。

<< Page >>

「う、嘘だろ？あのカイザーが、負けた？」

「あ、ありえない。」

俺の勝利に周りがざわめき出す。カイザーと言われているほどの実力者が、少し前に来た人間に負けたら驚きもするか。

「待ちなさい。」

そんな中、鮫島校長が待ったをかけた。

「土君はパーミッシヨンというリスペクトの欠片もないデツキを使いました。よって今のデュエルは無効です。」

その言葉に周りが喜んでいた。

「さらに罰則が決まるまで自宅待機してて下さい。」

俺は、肩をすくめながら亮のそばに近寄った。

「亮。俺の伏せカードにはキックバックがあった。アレをサイバー・ジラフに使えば亮を自滅させる事も出来た。」

「……………何故？」

俺の言葉に亮は呻くように問いかける。

「亮の切り札を叩き折るためだ。切り札を叩き折られた気分はどうだ？」

俺はそう問いかけ、さっさと自分の部屋に戻った。

S I D E 亮

……………負けた。全力を出しきったのに、それでも負けた。俺の内に悔しさと、次こそは勝ちたいという想いがあった。

S I D E 翔

お兄さんが負けた。僕はその光景をただ黙って見ていた。士さんは強い。でも、お兄さんに勝てるとは正直思っただけ無かった。でも、その場を去ろうとする士さんは何故か、泣きそうにも見えた。……………あの人の顔を笑顔に変えられないだろうか？



## デュエル7 廃寮探検VSデーモンデツキ

「…………その入り江の水面を覗くと、その人が欲しいカードが映っているっすけど、その水面にフラフラと手を伸ばしたら、ガバーツと捕まえられて水の中に引き込まれてしま  
うッス!!!」

「キヤアアアッ!!!」

「ヒイイツ!!!」

グエエツと微妙な顔をした翔の言葉に隼人と雪乃の悲鳴が響いた。一方、  
「へえ。そこに行つて見てえな。」

「フム。レベル4なら、まあまあかな?」

とまあ、俺と十代はそう評価していた。俺達はオシリス・レッドの食堂で怪談をして  
いた。しかし、なんとというか

「雪乃つて、マジでお化けとかが苦手なんだな?」

「こ、こ、怖くは無いわよーこ、こんなもの!」

声が震えてるぞ。誘つてスマン。

「士さん！次は士さんだから早く！」

「おっと、悪い。じゃ、」

と、俺がカードを引こうとした時、

「こんなところでどうしたのニヤ？」

「「出たあああアツツ！！！！」」

「キヤアアアツツ！！！！」

唐突に声をかけられ、皆悲鳴を上げ、雪乃は俺に抱きついた。

「脅かして申し訳無いニヤ。でも、深夜ですし、沖田さんに藤原さんは門限は過ぎてるのニヤ？」

「そんなときは野宿すればいいんだけどさ。」

「えっと、僕達カードを引いてでたレベルだけ怖い話をする事になってるツスよ。」

「ほう。面白いのニヤ。」

大徳寺先生がそう言っつて引いたカードはデュエルモンスターのなかで最高の攻撃力を持つF《ファイブ》・G《ゴッド》・D《ドラゴン》。そのレベルも12。

「出た！頼んだぜ！大徳寺先生！」

「ふ、フン！楽しみにしてるわね！」

怖くて仕方ないだろうに、それでも、意地を張るのはある意味立派だと思うぞ。

しかし、大徳寺先生は何を狙ってこの話をしたんだろう？十代ならこの話を聞けば、興味をしめすのは分かり切っているだろうに。まさか、大徳寺先生も十代を退学にする気なのか？イヤ、だが、大徳寺先生の狙いは、影丸理事長に大事なものを取り戻してほしいそれが目的のはずだ。そのために、十代に意思を託したはずだ。そのために、十代には残っていてほしいはずだ。それとも、まさか、十代に対するテストか何かか？

「……………というわけだニヤァ。でも、その察はでも、その察は危険だから立ち入り禁止になっているのニヤ。」

大徳寺先生はそう言ってから早く寝るんだニヤ。と行って自室に戻った。

「さて、これで終わりかな？」

「イヤ、土がまだだぜ。」

あ、そういうえぼ。そして、引いたカードは究極竜騎士《マスター・オブ・ドラゴンナイト》そのレベルは12。

「よ。頼んだぜ！」

「ふ、フン！楽しみにしているわね？」

声が震えているぞ？雪乃？

「その日、少年Aは所用があり近所のスーパーに買い物に行った。」

「買い物って何を買ったんだ？」

「玉ねぎ、人参、ジャガイモ、ベーコン、チーズ、粉末状のカレー、カレーパウダーというやつだ。」

購入したそれらの野菜をみじん切り、ベーコンを短冊切りにしてご飯と水と一緒に煮ている最中にふと、思い出してしまった。『そういうえば、以前ドライカレーを作った時に用意したカレーパウダーはどうしたかな?』これこそが悪夢の始まりだとはその時は思わなかった少年Aだった。古いもなはずだから心配になり一口、口に含んでみた。味には問題なさそうだが、妙にモゾモゾするなど、カレーパウダーのビンをみてみたら、

大量の黒光りするGが……。」

「怖いです!怖いです!」

「イヤなんだな!怖いんだな!」

「俺もイヤだぜ!」

もろに、想像してしまったのか、翔が泣きわめき、隼人は恐怖に顔をひきつらせ、十代もいやな顔をする。雪乃に至っては、悲鳴を上げる暇すらなく気絶している。

「少年Aも即座にそのカレーパウダーを処分して新しいので調理しましたとさ。」

阿鼻叫喚の中でそう締めくくった。

## SIDE 雪乃

「…んう？」

うめいて私は目を覚ました。

「何でかしら？ 足が地面についていないような？」

「それは地面に立ってないからな。」

私の眩きに正面の空から聞こえた。 って、正面の空？ 疑問に思いながら、周囲を確認する。

「何をしているのかしら士？」

私を覗き込むように見ていたオベリスク・ブルー女子の沖田士に問いかけた。

「何って、抱っこ？」

私の問いに3文字の簡潔な答えを出した瞬間、私は何とも言えぬドキドキ感で一瞬で真っ赤になる。

「お、下ろしなさい！」

「ヤダよ♪雪乃って抱っこ感触がいいから。」

抱つこの感触って、何よ？そう、思っていると、恐るべき言葉を発した。

「それに、この体勢なら、怖い話を聞かせ放題だもんね。」

ゾクツ!!その言葉に背筋に悪寒がほとばしる。耳を塞ぎたくても両手が固定され、動かせない。

「さ、行くよ？怖い話百連発♪」

「イヤアア!!」

デュエルアカデミアに私の悲鳴が響き渡った。その日は恐怖のあまり寝ることができず、土に添い寝をしてもらった。

<<<page>>>

「おーい！いたいた！雪乃！」

ドローパーンを買いに、購買に向かう途中、十代のボウヤに呼び止められた。そばには弟分の翔のボウヤがいた。

「アラ？何かしら？」

「昨日大徳寺先生が教えてくれた、廃寮に肝試しに行かないか？」

その言葉に昨日の恐怖がよみがえった。

「ふ、フン！くだらないわね!!それに、廃寮は立ち入り禁止よ？入ったら処罰の対象になるわ？」

「ホ、ホラ！藤原さんもそういつてるツス！」

私の言葉に我が意を得たりと翔のボウヤもそう出た。どうやら、翔のボウヤは廃寮に行くのは反対のようね。

「反対票2だし、いくのはやめにした方が良いわよ？」

「でも、士も行くつて。」

うぐつ。これで賛成表も2ね。

「ところで、雪乃つて、怖いのが苦手なんだな？」

「こ、怖くは無いわよ！」

「じゃ、来るんだな？」

は、はめられた。悟りつつも、私のプライドが拒否させなかった。

「お、面白そうじゃない。行かせてもらうわ。」

「えっと、これて、肝試しに来るのは、俺に翔に雪乃に士に隼人の5人か。んじや、10時に廃寮前に集合な？」

SIDE 士

ゴクツ。

緊張からか、誰かが飲み込んだ唾の音がヤケに大きく響いた。

「けっこう良い雰囲気だな。」

お前は緊張感無さすぎだ。

「た、確かにそうね。お、面白そうじゃない。」

そして、雪乃は緊張のしすぎだ。というか意地を張らず、恐いと言えばここに来なくてすんだかもしれないぞ？

「じゃ、行くか。」

十代がそういった瞬間、

バキツという音が響いた。

『出たあああッ!!!』

枝が折れた音にビツクリしていた。……雪乃。驚くのは否定しないが、抱きつくのはよしてくれ。大きく、柔らかくて温かいものが二の腕を挟んでいるのが気持ち良いんだが。

「あなた達！何しているの！」

鋭い声で明日香が問いかける。ただ、何でか知らないけど、俺を睨んでいるような？

「肝試しに来たんだ。」

「やめにした方が良いわよ？ここは闇のゲームをして行方不明になった人がいるって話よ？それに、ここは危険だから立ち入り禁止になっているわよ。」



「迷信だろ？信じないね。」

「それはどうかな？千年アイテムは闇のゲームに関わるものだし、武藤遊戯も闇のゲームを体験したことがあるよ。それより、気がかりなのは、明日香だ。」

「わ、私？」

ちよつと待て。何故頬を紅くする？

「ああ。廃寮になって、誰も寄りつく人がいないはずの寮にいったい何の用だ？」

その問いに、呆れたような溜め息を吐かれた。

「私には兄がいたんだけどね行方不明なの。彼もこの寮の特待生だったわ。」

その言葉に、翔が何かに気づいたかのように小さくもらした。

「思い出したツス。天上院って、聞いて聞き覚えのある名前だと思ったツス。」

「兄と翔くんのお兄さんは親友だからね。コレでわかったでしょ！軽はずみに動いて痛い目にあつても知らないからね！」

明日香はそう言つて俺達に背中を向けて去つていった。

「ちえ。なんだよカリカリしてさ。」

「十代が悪い。お兄さんみたいに行方不明になつてほしくないから忠告したのにあんな態度だから怒つて当然だ。」

俺の言葉に十代はうつむいていたようだが、顔を上げてこの場にいる皆に言った。

廃寮で吹雪さんの写真を回収して奥に進み、千年アイテムの壁面を見つけた時、

「キヤアアアツ!!!」

女の子の悲鳴が聞こえた。

「雪乃!あの声は!」

「ええ!明日香のよ!」

悲鳴が聞こえた方に急ぐとエトワール・サイバーのカードが落ちていた。

「十代!!このカードは!!」

「ああ!明日香のカードだ!」

何かに気付いた隼人が十代に声をかけた。

「十代!こつちにひきずったような痕があるんだな!」

「えかした!隼人!」

そのあとにそつて走ると、一人の男が明日香を棺桶の中の押し込めるところだった。

「チョーイイネ!!キツ○・ストライク!サイコー!」

「グハアツ!!!」

俺の跳び蹴りが、胸板に決まり男は壁にたたきつけられる。

「明日香!!」

明日香を抱きかかえるが、反応がない。

「無駄だあ。この娘の魂は深い深い闇の底だあ。返してほしければ、闇の決闘で私を倒すことだあ。沖田士。」

？ 何で俺？ 十代じゃないのか？

「何で俺の名前を知っているのか知らないが、挑まれた以上断ることもできないな。」

その言葉に、男はデュエルディスクを起動させようとするが、うんともすんとも言わない。というか、胸元の機械からはバチバチと火花を立てている。どうやらキック・トライクで機械が壊れたらしい。

「何い!!」

「はあ。隼人。デュエルディスクを若◎に貸してやってくれ。」

「私の名前はタイタンだ。」

隼人からデュエルディスクを受け取りながら突っ込みを入れる若◎。

「私のターン！ ドロお。手札から、インフェルノクインデーモンを召喚！」

「デーモンデッキ！」

「厄介ね。デーモンデッキは、効果対象になった時サイコロを振って出た目によって効果を無効にできる効果を持っているわ。」

「そ、それじゃ、大変じゃないっすか!!」

「大丈夫だ。デーモンデツキは維持コストが必要だ!」

詳しいな?十代。ちゃんと勉強させたかいがあったな。

「フフフ!コストだとお!そのような物、このカードの前には何の意味もないのだあ!手札からフィールド魔法万魔殿!パンデモニウムを発動!」

その言葉にこの場が恐ろしい悪魔の巣窟に変わった。

「ハ、ハハハッ!」

辺りに怯えながら、雪乃は問いかける。

「さしずめ地獄の一丁目といったところだあ。パンデモニウムの効果で私は、デーモンの維持コストを支払う必要がなくなるう!これでターンエンドだあ!」

タイタンライフ4000手札4

インフェルノクインデーモンDEF1500

フィールド パンデモニウム

デーモンデツキか。楽しみたかったけど、状況が状況だから、さっさと終わらせるか。「俺のターン!ドロー!手札から、ビクトリーバイパーXXX03を召喚さらにパワーカプセルを発動して、オプシオントークンを召喚させる!」

バトルフェイズ!ビクトリーバイパーXXX03でインフェルノクインデーモンに攻

撃!!ダメージステップ時にリミッター解除を発動!それにチェーンで、オネストを3枚捨てて効果発動!!

チェーン処理でビクトリーバイパーX X 0 3の攻撃力は9000×3分アップして、リミッター解除で2倍になる!」(ビクトリーバイパーX X 0 3攻撃力(12000+9000×3)×2=12600)

インフェルノクインデーモンはその攻撃に耐えきれず破壊された。

「相手モンスターを破壊したことによりオプシヨントークンを召喚して、2体でダイレクタアタック!オプシヨントークンはビクトリーバイパーX X 0 3と同じ攻撃力になる!」

その攻撃が、タイタンのライフを削りきった。(タイタンライフ4000—12600×2=1200)

「くう。まさか、私が負けるなんて。」

呆然自失になっているタイタンを無視して、明日香を起こそうとしているところで、床が光黒い球体のようなものが、俺、タイタン、十代、雪乃、明日香を包み込んでしまった。

## デュエル8 闇のゲーム!!VSタイタン

「……は？」

気づいたら真つ暗い闇の中にいた。とつとと、終わらせればこれには巻き込まれず済むと思ったのに当てが外れたな。これから起こる出来事を予想して

「お前!!デュエルに負けたのに、また何かやらかしたのか!」

「ち、違う!!私は何もしていない!!」

十代の言葉にタイタンは焦って否定した。

「そのようだな。」

俺の言葉に黒い不定形の何かが、俺達に襲い掛かる。しかし、ハネクリボーとルビーとフレアの守護により、4人には何の影響はなかった。しかし、タイタンには守護してくれる人がいないからか包まれてしまった。

「……うん。ん、ん……は？」

呻いて明日香は目を覚ました。そして、次の瞬間明日香の顔が朱に染まる。怒ってい

るらしい。

「つ、士!!あ、あ、あんた何してるによ!!」

「囁んだ。」

俺の指摘に明日香の恥ずかしさで赤みが増す。それを可愛く思いながら、十代のそばに立たせる。

「明日香。悪いけど、十代のそばにいてくれ。ハネクリボー。フレア。ルビー。十代と明日香と雪乃を守ってくれ。」

「クリクリ♪」

「任せて♪」

「グルルウ♪」

「つて、ぶ、ブラックマジシャンガール!!それにそのドラゴンは!!ど、どうして!デュエルディスクを使つてないのになんで!」

ソリッドビジョンを通さないで、モンスターが実体化しているのにびっくりしているらしい。

「ここは闇のデュエルに関係のある空間だからだろ。じゃ、行ってくる。」

俺が黒い繭に近づくと、それが崩れ中からタイタンが現れた。しかし、その態度に理性という物を見せない。

「小娘え。もう一度、私と戦え。」

「一つ言う。俺は男だ。」

タイタンの間違いを訂正してからデッキをセットしてデュエルディスクを起動させた。

『<sup>デュエル!</sup>決闘!!!』

「俺のターン!ドロー!デイスペアー・サーチを発動!デッキの一番上のカードを墓地に送り、デッキからレベル4以下のデイスペアーと名のつくモンスターを特殊召喚する!デイスペアーワームを召喚して、ワームを生贄にしてデイスペアー・セラフイムを召喚!カードを一枚セットしてターンエンド!この瞬間、デイペアー・セラフイムの効果発動!このカードは破壊され、デッキ、手札から一枚墓地に送る!俺は手札のカードを墓地に送る!」

士ライフ4000手札3枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0

「1ターンしか生きられぬモンスターを出して何になるう?私のターン!ドロオ!ジェ



ノサイド・キング・デーモンを召喚ん！パンデモニウムを発動！

ジェノサイド・キング・デーモンの攻撃!!さく裂!!五臓六腑!!」

ジェノサイド・キング・デーモン腹から内臓を破裂させ、内臓が俺に向かって飛んでくる。

「ヒウツ!!」

そのおぞましきから、雪乃の口から小さな悲鳴が漏れ始める。

「トラップ発動！和睦の使者！」

修道女が張ったバリアが内臓を吹きとぼした。

「これでターンエンドお！」

士ライフ4000手札3枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0

フィールド パンデモニウム

ジェノサイド・キング・デーモン ATK2000

タイタンライフ4000手札4枚

「俺のターン！ドロー！ディスプレイ・ナイトを召喚！カード一枚セットして、バトルフェイズ！ディスプレイ・ナイトで、攻撃！」

「攻撃力1700で何になるう！」

「この瞬間、デイスペアー・エンジェルの効果発動！デイスペアーと名のつくカードによつて墓地に送られていた場合、デイスペアーと名のつくモンスターが行うダメージステップ時にデッキの一番上のカードを墓地に送る事で相手モンスター1体の攻撃力分アップする！切り裂け！デイスペアー・スラッシュユ！」

墓地にある天使の力で、絶望の騎士はその力を増して、ジェノサイド・キング・デーモンを破壊した。(タイタンライフ4000—2000—1700+2000=2300)

「手札のデスルークデーモンを墓地に送り、ジェノサイド・キングデーモンを特殊召喚！」

「これでターンエンド！この瞬間、デイペアー・ナイトの効果発動！このカードは破壊され、デッキ、手札から一枚墓地に送る！俺は手札のカードを墓地に送る！」

士ライフ4000手札2枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0

フィールド パンデモニウム

ジェノサイド・キング・デーモン ATK2000

タイタンライフ2300手札4枚

「私のターン！ドロオ！インフェルノクインデーモンを召喚！バトル！ジェノサイド・キング・デーモンでダイレクトアタック！」

「この瞬間、墓地のデイスペアー・ガードナーの効果発動！デイスペアーと名のつくカード効果により墓地に送られた場合、デツキの一番上のカードを墓地に送り、このカードを守備表示で特殊召喚する！自信の効果で特殊召喚した場合、このカードの守備力は3000になる！」

デイスペアー・ガードナーはカードを盾にしてよみがえる。

「く。なら攻撃せず、2枚セットしてターンエンドする。だが、そのモンスターも破壊する効果を持っているのだろうか？」

「その通りだ。エンドフェイズにこのカードを破壊して、デツキの一番上のカードを墓地に送る！……運がなかったな。墓地に送ったカードはデイスペアー・デストロイ。このカードがデイスペアーと名のつくカードで墓地に送られた場合、全てのプレイヤーはデツキの上から5枚のカードを墓地に送られる。」

士ライフ4000手札2枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0

フィールド パンデモニウム

ジェノサイド・キング・デーモン ATK2000 インフェルノクインデーモン ATK900

伏せカード2枚

タイタンライフ2300手札1枚

「俺のターン！ドロー！デイスペアー・パラディンの効果でデツキの上から2枚を墓地に送りパラディンを特殊召喚！さらにもう一枚のデイスペアー・セラフイムの効果で、デツキを上から一枚墓地に送りセラフイムとナイトを特殊召喚する！さらに墓地からデイスペアー・ブレイクとデイスペアー・ワームの効果を発動！ワームの効果で、デツキの一番上のカードを墓地に送り。相手のマジックトラップカードを破壊する。デイスペアー・ブレイクと墓地のデイスペアー・ワームをデツキに戻して、その伏せカードを墓地に送る！」

ミラーフオースとマジックシリンドーカ。ホント成功したためしがないな。

「さらにデイスペアー・パラディンは墓地にあるデイスペアーと名のつくカード一枚につき攻撃力が300アップする！墓地にあるデイスペアーは13枚よって攻撃力は3900アップする！バトルフェイズ！デイスペアー・パラディンでインフェルノクインデーモンを攻撃!!」

その攻撃がタイタンのライフを削りきった。

タイタンの敗北に黒い何かがタイタンを沈めようとして、俺達まで襲い掛かった。

「早くここを出ないと!」

「でも、どこに行けば!」

十代の言葉にある方向が光る。

「あそこだ! 早く行かないと!」

つと、その前に、タイイタンの両手を掴んで思いつきり引つ張る。

「土! 何しているの!」

「こいつを助けたいんだ! ルビー! フレア! 手を貸せ!」

「ウン! ブラック・バーニング!」

フレアの魔術とルビーの炎がタイタンを食らおうとしていた闇を焦がした。本人も

焦げ焦げなのはご愛嬌だろうか?

「動けそうか! タイタン!」

「な、なんとか!」

「ま、まって、さつきので腰抜かしちゃって!」

手間のかかる! 雪乃を抱きかかえるとそのまま走る。

「キャ!!! ちよ、ちよつと!!!」

「動けないなら文句を言うな！」

怒りで顔を紅く染める雪乃の苦情を封殺して走る。しばらく走って出口に飛び込んだ。

「士さん！アニキ！明日香さんに雪乃さん！それにタイタン！」

「どういふことなんだな？」

戻ってきた俺達の姿を見て、翔と隼人が戸惑った声を上げる。

「助けられたのだ。その小娘に。何で助けてくれた？」

「娘じゃなくて、男だ。助けたのはやりたいから助けただけだ。」

「…ありがとう。士。私はここを出たら自首しよう。君達もここを出た方がいい。」

タイタンはそう言っただけで俺達を連れ出した。そのさなかに、タイタンは依頼で、廃寮で俺に闇のデュエルというか、催眠術で、俺を眠らせるらしい。依頼人を確認したが、鮫島校長でもクロノスでもなかったのが意外だった。

「私は自首しよう。君達には迷惑をかけた。」

タイタンはそう言っただけで去って行った。

「で、士はいつまでそうしているのかしら？」

明日香は睨むかのような視線で、俺と雪乃を見ていた。

「まあいいじゃん。それより、明日香の兄さんって子の人か？」

十代はそう言つて、エトワール・サイバーと吹雪さんの写真を渡した。

「まさか、あなた達、これを探すために？」

「まあな。結局、これしか見つからんなかったけどな。」

十代達はそう言つて去つて行つた。俺もついていきたかつたけど、雪乃を抱っこしているから、そちらに行けない。

## デュエル9 制裁デュエルの準備

ドカンッ!!!

「沖田士はどこだあ!!」

なにかの破裂音が聞こえてしばししてからそんな叫び声が女子寮の方から聞こえた。

「士? 呼ばれているけど、どうするの?」

見張りをしてくれた、フレアの言葉に、泉の中から出てそばに置いてあるタオルを手に取る。

「ほつところ。後で校長の所に……」

「誰かいるのかい?」

そばの茂みが揺れる音と男の声が聞こえた。

「いたのか。こんなところで何を……」

茂みから出てきた男が言いかけて固まった。そして、

ブツシャ——



ポンプのような勢いの鼻血を噴射して倒れてしまった。

「何やってるんだ？というか、男の裸を見て鼻血を噴くなんて奇特定の男もいるもんだな。」

その様を見ながら、体を拭き服を着る。

「…う。ここは？」

タイミンングを待っていたかのように男は目を覚ました。

「起きたか？」

呻いて目を覚ました男にそう問いかけた。

「ああ。君はここで何を？」

「水浴びだけど？」

「不用心すぎるからやめた方がいい。それより、学園長が呼んでるから来てほしい。」

廃寮の件か。

<< page >>

「ええ！ 退学!!」

「そうだ！ 遊城十代、丸藤翔、前田隼人、沖田土が立ち入り禁止の廃寮に侵入したことはすでに調べがついている！ よって退学だ！」

校長室にたどり着いた時、こんな声が聞こえた。全くなに話しているんだが？

「何が調べがついてるだ？」

「士さん！」

俺が入室すると、みんながこちらを見て翔が声を上げた。

「貴様が沖田士か？ 貴様も退学だ！」

その言葉に鮫島校長の顔が愉悅に歪んでいた。『ざまあみろ。』とでも思っているのだろうか？

「アホウ。穴だらけの捜査のどこが調べがついてるだ？」

「な！ 我々の捜査の何処が穴だらけなのだ！」

「まず、人数。俺達の他にも天上院明日香と藤原雪乃、それともう一人が一緒にいた。なのにその二人が上がついていない。」

「言い忘れただけだ!!」

怒って反論しようとするが、その言葉こそが俺の狙いだ。

「そんなミスする人が穴の無い完璧な捜査が出来るわけが無いと言い切れるか？」

「つくぐ！」

俺の言った言葉に反論出来ずに口をつくんだ。

「次に時間。俺達が廃寮を出たのが4時。俺達に招集をかけたと思われる時間は朝の6時。その短い時間で、捜査が出来るわけが無い。」

「匿名の情報提供があったからだ！」

「待った！ そんな誰からと言えない情報を証言として扱ってもいいのだろうか！」

「意義あり！ 確かに、情報提供者が怪しいかもしれないが、貴様らが廃寮に侵入していたのも事実だ！」

「意義あり！ その人が俺たちをこの学園から追い出したくて嘘の情報を流していた可能性もある！」

「ぐぐぐ。」

俺の反論に低く唸るだけだ。

「次にアンタらの警備態勢の問題。さっき話に出てきた人物は外部者だ。容易に侵入出来るのは問題だ。」

「な！ ちょ、ちよつと待て！ 外部からの侵入者なんて聞かないぞ！」

俺の言葉に慌てた声が返ってきた。

「職務怠慢だ。次にアンタらの素行の問題。俺の部屋に入るのに爆破したな？」

「俺達のところも同じ様なもんだぜ！ 開けなきや爆破するって！ その言葉に慌てて開けたから爆破はされなかつたけどさ！」

俺の言葉に十代が追加した。

「俺の部屋が無人だし、十代は爆破に驚いて開けたから良かったものの、下手したら大ケ

がだ。十代の場合はオシリス・レッド寮が倒壊して死傷者が出た恐れだつてある。」

「フン！何故、クズのオシリス・レッドの心配しなければならぬ？」

フム。自分で自分の首を締めるくちだとは思わなかつたな。

「最後の問題は、」

そう言つた瞬間、

「コイツなノーネ！」

入り口が開いて、クロノスがロープでグルグル巻きされた男を担いではいつて来た。

「龍牙先生ではないですか？」

ロープで縛られた男の顔を見て鮫島はビックリしていた。

「この男は闇のデュエリスト、タイタンなる人物を雇つて、シニョーラ士を再起不能にしようとしたノーネ！」

「ち、違う！私はそんなことをしていない！だいたい、そんなことをして何の得になる！」

足掻くか。付き合う趣味もないし、サクツとトドメをささせてもらうか。

「リスペクトデュエルを否定された腹いせだろ？」

その言葉に、龍牙が黙る。この男はリスペクト信者である。それも、強硬派というべきだろうか？ようは、『リスペクトを行わない者はデュエリストに非ず。』という考え方

を地で行なっているのである。

「しよ、証拠は何処にある！」

まだ足掻くか。

「コレです。コレが証拠です。」

俺はそう言つて、タイタンから貰つた領収証を突きつけた。

「……………あ……………あ……………あ……………」

龍牙は顔を青くして、魚みたいに口をパクパクさせるだけだ。当然かもな。なにせ、領収証にはしっかりと本人のサインと拇印があるし。

「コレは龍牙とタイタンがつながっていた証拠に他ならない。」

「し、知らない！私はタイタンとかいう男なんか知らない！」

焦りからさらに墓穴を掘ってしまう。

「語るに落ちたな？俺は一度もタイタンを男だと言つた覚えがない。にもかかわらず、龍牙はタイタンを男だと言つた。何故？実際にあつた事があるからだ。タイタンという名前から男だと思つたと言つたのは無しな？そう言つた場合は名前から男だと思つたと言つたなら、まだわかるけどな。」

この瞬間が龍牙元先生の解雇が決まつた瞬間だ。

「そんな事はどうでもいい！それより、貴様等、4人は校則違反により退学だ！」

「待った！その廃寮に侵入した事が原因で退学には無理がある！デュエルアカデミアから支給される手帳には廃寮に侵入したら罰則はあるとは書いてあっても退学にするとは書いてない！コレでは退学には出来ない！」

「フム。これで意見はでそろったようですね？」

俺と倫理委員会の言い合いを聞いていた鮫島が口を開いた。

「私の判断としては、退学処分にするべきだと思います。」

鮫島の言葉に倫理委員会の人がザマアミロといった表情をこちらに向けていた。

「フン！鮫島校長の決定は誰も覆せない！」

鮫島の言葉に倫理委員会の人は胸を張って威張り散らすが虎の威を刈る狐には興味がない。

「鮫島。その考えは俺がサイバー流のリスクペクトをしないからか？」

俺の問いに鮫島の笑みが如実に物語っていた。

「なかなか、面白そうな話だと思わないか？」

俺の言葉に皆が驚いたような表情でいた。

「オベリスク・ブルーはよってたかってオシリス・レッドのカードを強奪。教師は成績優秀なオベリスク・ブルーを鼻頂。倫理委員会はテロリストだし、校長はリスクペクトを守らないとかいうわけのわからない理由で退学にしようとする。そんな学校の話も面白

いと思うけど?」

『確かに、そうだな。沖田士! 鮫島と代われ!』

胸ポケットに入れていた携帯の向こうの命令に鮫島に携帯を渡す。

「鮫島ですが、どちら様で:お、オーナーでございませうか!!」

その一言に、皆が動揺していた。

「で、鮫島校長は本社に減給3週間。倫理委員会は全員解雇。龍牙も解雇だ。一方貴様らも、制裁デュエルを受けてもらう。勝てば、謹慎一週間に反省文10枚、負ければ、謹慎2週間に反省文20枚提出してもらうことになった。」

アレから鮫島校長と先程の電話の主、海馬瀬戸が話し合って決まったことが俺の通話して教えてくれた。

「なあ、どんなヤツが出てくるんだ?」

「それは、デュエルの時に明らかにする。」

まあ、正しい判断だな。デュエルデモなんでも情報は重要だ。優秀な武将程情報を大切にしている。だから、公平にするために対戦相手の情報を伏せているのだろう。

「アポイントも無しに忙しい時間を裂いてくれてありがとうございます。」

俺はそう言って、通話を切った。

「さて、制裁デュエルの話をしますーノ！制裁デュエルはタツグデュエルなノーネ！シニョール十代達4人はペアを組んで、こちらが呼び寄せたデュエリストとタツグデュエルを2回、シングルデュエルを1回してもらうーノ！」

クロノス教諭の言葉に皆がキョトンとした。

「あの、5人って？」

「シニョーラ明日香はタイタンに人質にされていた情報が入っているノーネ。よって免除なノーネ。」

「なら、俺と翔と組む。」

「え？ええ!!!ぼ、ボクとつすか!!!」

「その方がいいかもしれない。なんだかんだ言っても翔と組むのが一番だな。タツグデュエルは互いのデッキを同じテーマにするのが一番だから。翔が一番十代のデッキを多く見ているはずだからな。」

俺の言葉に翔は、でも、と呻いていた。

「大丈夫だって。翔。すげえ強いやつとデュエル出来るんだぜ！」

十代。翔にはそれが重石になってるんだぞ。

「情けないわね。翔のボウヤ？ 十代のボウヤが一緒に戦って欲しいと思っているのに、士も翔のボウヤになら、十代のボウヤを任せられると思っっているのに、ボウヤがそ



れをふいにするなんて。」

雪乃。それはキツイと思うよ？ホラ。翔のやつうつむいて。

「やります！」

オヤ？急にやる気を見せた翔に疑問を覚えながらもまあいいかと片付ける。

「では、次のベアだけど、隼人。俺と組まないか？」

ちよつと待て。隼人。何故顔を紅くする？

「ちよつと待つつス！土さん！何で隼人君と組むんすか？」

当然来るだろう言葉だが、翔から来るとは思わなかったな。

「今回の制裁デュエルはシングル1つにタッグが2つだ。シングルに俺が出ると必然的に雪乃が隼人と組むことになる。」

「そうなると、儀式カードを専門に使う私にはキツイかしら？」

俺の言葉に雪乃は思案顔で呟いていた。

「それは、わかったけど、土はタッグデュエルはやったことはあるのか？」

隼人の問いに首を横に振った。

「んにゃ。タッグデュエル自体やったことがないよ。」

その答えに不安になったらしい隼人に笑みを向けて、

「なるようにしかならないさ。がんばー！」

「お、おう。」

俺の言葉に隼人は顔を紅くして、そう返した。

「隼人君。頑張るツス。(負けたら承知しないツスよ?)」

「お、おう。任せろなんだな。」

良い笑顔で応援する翔に隼人は怯えるかのように答えたのだった。

## デュエル10 退学？隼人の想い

「土さーん!!!」

森の中で見つけた泉で水浴びしていたら、翔の叫びが聞こえた。？なんだろう？疑問に思いながら、水面から出る。

「翔！こっちだ！」

俺の言葉に何処にいるか理解した翔がこっちに来了。

「土さん！大変ツス！はや……………」

焦ったような翔の叫びと共に茂みをかき分けて出て来た翔だが、俺の姿を見た瞬間、ブツシャー——

鼻血を噴いて倒れてしまった。

「？何しに来たんだ？」

疑問に思いながら、髪の毛の水分をタオルに吸わせたりしてから、着替えをすますと「マタタビ！」

叫びながら、翔が飛び起きる。だが、何故マタタビなんだ？

「起きたか?翔。どうした?」

「う、うん!士さん!隼人君が退学させられるかもしれないツス!」

「???どういう意味?」

制裁デュエルは退学じゃないから、別の話か?

「そ、それが、隼人君のお父さんがやってきて明日自分とデュエルして、勝ったらアカデミアに残ってもよし、負けたら、すぐに退学だつて」

「分かった!一度鮎川先生から荷物を受け取ってお前らの部屋に向かうから。」

翔にそう言つて、女子寮に向かい、カードを受け取つて、オシリス・レッドに向かった。

「見事にコアラばつかだな。」

「コアラデツキなんだな。」

デツキを見つめていた翔がガザゴソと自分の荷物を調べて1枚のカードを差し出した。

「隼人君。あげる。」

「良いのか?」

戸惑つたような声をかける隼人に笑みを浮かべて頷いた。

「うん。だってコレがあるとオーストラリアンデッキになるじゃない。」

「よし！ちよつと待つてろ！」

十代はそう言つて、自分の荷物をあさり、マスターオブOZを取り出した。

「俺はコレは使わないし隼人にあげる。」

なら、翔と十代からカードを受け取つて、デッキに追加する。それらのカードにダメ出しをして、夜もふけていく。

「僭越ながら、審判は私大徳寺が勤めさせて頂きますニヤ。最初に確認しますが隼人君のお父さん。隼人君が勝つたらアカデミアに残る事を認めますかニヤ？」

「男に二言はないでござす！」

熊蔵さんの答えに大徳寺先生が満足そうに頷いた。

「では、隼人君。お父さんが勝つたら実家に帰つて、家業を継ぎますかニヤ？」  
「構わないけど、制裁デュエルが終わつてからでいいんだな？」

隼人の問いに熊蔵さんは首を縦に振る。

「お互いに気合い十分！はじめてくださいニヤ！」

「決闘!!」

「俺のターン！ドロー！デス・コアラを召喚！」

隼人がデュエルディスクにカードを置くと、コアラが現れて攻撃姿勢をとった。

「で、デス・コアラを攻撃表示!」

「え?どうしたツスカ?アニキ?」

十代の驚きの意味を理解できなかったのか、キョトンとしながら翔が問いかける。

「どうしたもこうしたもあるか!デス・コアラは守備力1800だけど、攻撃力は1100しかない!」

「しかも、デス・コアラはリバースモンスターだから、その効果を使うには、一度セットしなければならぬ。」

「ああ!!!しまったんだな!」

十代と俺の言葉に隼人はハツと気付いて叫びをあげた。

「嘆かわしいでござす!隼人!おんしはこの学校に来て何を学んできた!」

「ううう。か、カードを2枚セットしてターンエンド。」

隼人ライフ4000 手札3枚

伏せ2枚

デスコアラATK1100

「おいどんのターン!ドロー!手札から酔いどれタイガーを召喚!」

熊蔵さんのフィールドに酔っぱらいの虎が現れる。スゴいなリゾットビジョン。現

れた瞬間から酒臭い。

「酔いどれタイガーでデス・コアラを攻撃！酔いどれパンチ！」

酔いどれタイガーはデス・コアラを殴ろうとして、

スカッ

急にデス・コアラの姿が消え、スッ転んでシルクハットモンスター2体を巻き添えにした。

「リバーズカードオープン！マジカルシルクハット！強制終了！」

「あ、あのコンボは！」

「ああ！土がやったコンボだ！」

「どういうことでごわす！そのシルクハットはなんででた！どうしてデス・コアラはセツトされている！」

「マジカルシルクハットは自分ワールドのモンスター一体とデッキから2枚のモンスターをシャッフルしてモンスターゾーンにセツトするんだな！そして、強制終了の効果で、マジカルシルクハットを墓地に送り、バトルフェイズを強制終了するんだな！」

その瞬間、マジカルシルクハットの効果は終了してシルクハットモンスターが破壊される。

「バトルフェイズが終了した時、シルクハットモンスターは破壊されるけど、セツトされ

た、黄金の邪神像の効果で邪神トークンを2体を特殊召喚するんだな！」

その言葉に、邪神トークンが姿を現す。

「凄い！攻撃を凌いだ上に生け贄まで用意した！」

「それだけじゃない。フィールドのモンスターをよく見ろ。」

「え？ああ！」

しばしフィールドを見た翔が気付いて叫びをあげた。

「デス・コアラがセットされている！」

マジカルシルクハットはデメリットがあるし、守備に使うには、ギャンブルの要素が強いけど、トリックキーかつ強力な効果を持っている。

「カードを2枚セットしてターンエンド！」

隼人ライフ4000手札3枚

伏せ0枚 強制終了

伏せ1枚 邪神トークンDEF×2

酔いどれタイガーATK1800

伏せ2枚

熊蔵ライフ4000 手札3枚

「俺のターン！ドロー！カードを1枚セット！父ちゃん！その伏せカードはデスコアラ



のダメージ軽減の為だろうけど、それがアダになったんだな！手札からダブルサイクロンを発動！自分のマジックトラップと相手のマジックトラップを1枚ずつ破壊する！それにチェーンでサイクロン！」

3つの突風が隼人と、熊蔵さんの伏せカードを破壊した。ミラーフォースとマジックシリンドーか。ホントに成功した試しがないな。

「な、なんだと！しかし、隼人！自分のカードも巻き添えに……………」

熊蔵さんはそこまでしか言えなかった。何故なら、突風が酔いどれタイガーを包み込んでいたからだ。

「俺がセットしたのは荒野の大竜巻なんだな！セットしたこのカードが破壊されると、フィールドのカードを破壊出来るんだな！」

それを証明するかのようにフィールドから吹き飛ばされる酔いどれタイガー。

「邪神トークンを生け贄に捧げ、ビッグコアラを召喚！更にデス・コアラを反転召喚！効果で父ちゃんの手札3枚分1200のダメージを与える！」

「グオオツ!!!」

翻ったデスコアラに攻撃をされダメージをおう。

「コレで勝ちなんだな！2体でダイレクトアタック！」

2体の攻撃で熊蔵さんのライフが尽きる。

「お、おいどんが負けた?」

「父ちゃん。確かに、俺はダメなやつだったんだな。オシリス・レッドに配属されてやる気を無くしてサボってばかりいたダメなやつだったんだな。でも、今は十代。翔。士。それ以外にもこの場にはいない仲間達に支えられここまで来た。この人達と一緒に学びたいんだな!」

隼人の言葉に熊蔵さんは笑みを浮かべ大徳寺先生に振り向いた。

「先生。これからも隼人をよろしくお願いします。」

「任せてくださいニヤ!隼人君は責任をもつて預かります!」

「父ちゃん!」

「隼人。そこまで言えるのなら、もう何も言わん。最後の最後までその想いを貫いていけ。」

熊蔵さんに認められたのが嬉しかったのか笑みを浮かべる隼人。それを見ながら熊蔵さんは何故か俺を見る。

「士といったか。何でそんな言葉遣いなのかは聞かないけど、女の子だからもつとおしとやかにした方がいいでござす。」

「余計なお世話だ!つてかアンタもか!」

俺の跳び蹴りが熊蔵さんの意識を刈り取った。

## デュエル11 恐怖の虫デツキ

とうとうやって来た制裁デュエルの日。その日に翔と隼人は、

「……………ZZZZ……………」

立ちながら寝ているのである。無駄に器用な。そう思いながら、十代に聞いてみたら夕べは一睡も出来なかったらしい。

「……………どうする?…」

「クロノス先生に翔達のことを話したら、2時間予定を遅らせてくれるらしいからこちらもゆつくり休もうぜ?…」

「それもそうね。所で、土。あのドラゴンや、ブラックマジシャンガールは?…」

「ルビーとフレアの事?…」

「呼んだ?…」

「グルル?…」

俺の問いにフレアと手乗りサイズのルビーが姿を現した。

「やっぱり、その二人は貴女の精霊ね？」

「そういうこと。悪いけどさ皆にはコレで。」

そう言って、人差し指を雪乃の唇に当てた。

「わかったわ。バレたらうるさそうだしね。」

「俺も構わない。」

二人の答えにありがとうとお礼を返した。

「そういえば、制裁デュエルの相手って誰なのかしらね？」

「さあ？コレばかりは探りようもないからね。でも、十代達はかなりの強敵だと思うし、俺達の相手はサイバー流の門下生だと思うよ？」

俺の答えに二人は首を傾げる。

「どうしてわかるのかしら？」

「十代達の対戦相手を決めたのがクロノス先生なんだけど、昨日クロノス先生が十代達の相手をワクワクする強そうな相手呼び寄せたって言った。」

「マジか!!!」

「十代のボウヤ。興奮するのはわかるけど、ひとまず落ち着きなさい。で、貴女達の方は、何故そう思うのかしら？」

「先ずは、さつきも言ったけど、俺の対戦相手を用意したのは鮫島だ。皆の前で俺と隼人

を無惨に潰す事で溜飲を下ろすつもりか、あるいは、リスペクトの大切さを説くつもりか。あるいはその両方か。」

だとしたら鮫島のやつ教育者として失格だよな。

○ ○ ○

観客が見守るなか、デュエルフィールドの中央にクロノスが立ち、高らかに宣言した。

「皆さんお待ちせしませしターノー！これより、制裁デュエルの始まりなノーネ！」

その言葉に、殆どのブルーが惜しみ無い拍手を送り、逆にイエローとレッドはお通夜みたいな表情をしていた。退学じゃないから、そこまでがっかりしなくても良いと思うんだが、ひよつとして罰則の内容を知らない？

「フム。して、雪乃君と十代君と翔君の相手は誰がするのでしょうか？また君が相手を？」

「コレは5人の罰則を決める為の罰則なノーネ！なノーデ、それに相応しいデュエリストを呼んであるノーネ！」

『とうっ！』

両サイドから、飛び出し、ばくてん、宙返りを決める禿げチャビン。だけど、

ズルツ！！

ゴチツ！！

予めデュエルフィールドにはレッド達に協力して造ったバナナの皮を置いてあり、ものみごとに踏んづけて滑った。(ズルツはこの音。)

そしてその勢いのまま両者頭を床に強打した。(ゴチツはコレのせい。)

激痛に悶える皆が固まっている。その中で俺はバナナの回収をした。

「我ら！流浪の番人！」

「イヤ、番人が流浪しちゃダメだろ！」

思わずそう返したが、聞いている人はいないようだった。

「コレはコレは。思いきった真似を。迷宮兄弟ですか。兄弟ならではのコンビネーションと優れたタクティクスでデュエルキング、武藤遊戯と城之内克哉を苦しめた伝説のデュエリスト。まさか、この目でお目見えしようとは。」

「それに、シニョーラ雪乃の対戦相手もなかなか手強いノーネー！」

「ヒヨツヒヨツヒヨツ！」

そ、そのインパクトある笑い方は！デュエルフィールドの中央まで歩いてくる水色の髪少年は！

「彼はデュエルキングダムにおいて、最初に武藤遊戯を追い詰め苦しめたインセクター

羽蛾なノーネー！」

そんな。羽蛾が相手なんて。

「雪乃！お前勝てる！人間的に負ける要素が見当たらない！」

「そうね。デュエルの腕ならともかく、人間的なら翔のボウヤにも負けるわ。」

「ウン。僕もこの人に人間的なら負ける気がしない。」

「お、お前ら!!ボクの実力を完全に無視して負ける要素が人間性か!!」

俺と雪乃と翔の言葉に当の本人が激怒しそうだった。

「と、人間のなり損ないがおっしやってますが、雪乃様はどうお思いでしょうか？」

「ウフフ。きつと、本当の事を言われたから、怒って誤魔化そうとしてるのよ。」

「き・さ・ま・ら〜。」

おお。やり過ぎた。リアルファイトになりそうだ。

「先ずは、雪乃。行ってこい。」

「フフフ♪ちやんと勝つてくるわ。」

「……………潰す。」

二人はそう言つて、デュエルフィールドの所定の位置に立ち、それ以外のメンバーは観客席の一番前の席に座る。

「……………土。やり過ぎだ。」

俺が観客席に座ると十代がジト目で指摘した。

「あ。やつぱり?」

〇〇〇

「ねえ。皆。」

制裁デュエルに向けて最終調整も終えた俺達は皆が椅子に座ったのを見て口を開いた。

「明日の制裁デュエルの最初の対戦相手を挑発しよう。」

「え？ そんな事したら、ソイツ怒らないか？」

俺の提案に十代がしかめっ面で指摘した。

「当然怒るだろうな。でも、それが狙いなんだ。」

「……………ああ。そういうことね。」

理解が早いな。雪乃。他の3人は未だ？を乱舞させているのに。

「士は相手を怒らせて冷静な判断させないようにしているのよ。」

卑怯と言うなかれ。イエス・キリストもこう仰っていた。『デュエルとは準備の段階から始まっている。』と。……………嘘です。とりあえず、勝負というものは、準備の段階から始まっていて、どれだけ準備に時間をかけたか、どれだけ情報に時間を裂いたか有利になってくる。

S I D E 雪乃

『決闘！』



「私のターン！ドロー！手札からマンジユゴットを召喚！効果により終焉の王デミスを手札に加えるわ！」

場に現れた、たくさんの手を持つ天使が私のデッキからデミスのカードを抜き取り差し出した。それを抜き取るとマジックトラップゾーンにカードをセットした。

「さらにカードを2枚セットしてターンエンドするわ。」

雪乃ライフ4000手札4伏せ2枚

伏せモンスター0枚 マンジユゴット ATK1400

「舐めやがって！ボクのターン！ドロー！ヒヨツヒヨツヒヨツ！インセクトナイト甲虫装甲騎士を攻撃表示で召喚！」

羽蛾のボウヤのフィールドに装甲を纏った昆虫の騎士が現れた。

「インセクトナイトでそのモンスターに攻撃！」

怒るのはわかるけど、伏せぐらいは気にしなさい。

「リバースカードオープン！収縮！インセクトナイトの攻撃力を半分にするわ！」

私の場の魔法カードの効果によりインセクトナイトは縮み始める。そして、マンジユゴットの腕がインセクトナイトを叩き潰した（羽蛾ライフ 4000—1400+1900÷2=2600+950=3550）

「なあ！お、ボクの虫が！」

インセクトナイトが破壊されると羽蛾のボウヤは半泣きになる。

「感情のままに無謀な突進をするなんてボウヤの証拠よ?」

「グヌヌ。手札から愚かな埋葬を発動! デッキからモンスターを墓地に送る!」

羽蛾が行動に周囲は動揺していた。

「そんな。インセクター羽蛾がプレイングミス?」

「カードを2枚セットしてターンエンド!」

雪乃ライフ4000手札4伏せ1枚

伏せモンスター0枚 マンジュゴットATK1400

伏せモンスター0枚

伏せ2枚

羽蛾ライフ3550手札2枚

「私のターン! ドロー! センジュゴッドを召喚! 効果により救世の美神ノースウエムコを手札に加えるわ!」

マンジュゴットよりも手の数は少ないけど、それでもたたくさんの手を持つ天使が私のデッキからカードを抜き取り差し出した。

「2体でダイレクトアタック!」

「リバースカードオープン! リビングデッドの呼び声! 代打バッターを召喚!」

羽蛾のボウヤの墓地から、昆虫モンスターが蘇生する。

「構わないわ！このまま続行！」

センジュゴッドの攻撃が代打バッターを破壊した。(羽蛾ライフ3550—1400  
+1000=3150)

「ヒョッヒョッヒョッ！代打バッターが破壊された事により、手札からインセクトク  
イーンを召喚！」

代打バッターのつんざくような悲鳴に昆虫の女王が現れる。

「ひうッ!!」

羽蛾のボウヤの場に出現した女王のおぞましさに小さく悲鳴を漏らす。

「私はカードをセットしてターンエンド！」

雪乃ライフ4000手札4伏せ1枚

伏せモンスター0枚 マンジュゴットATK1400 センジュゴッドATK14  
00

伏せモンスター0枚 インセクトクイーンATK2200+200×1

伏せ1枚

羽蛾ライフ3550手札2枚

「ヒョッヒョッヒョッ！ボクのターン！ドロー！速攻魔法カードスケープゴートを発動

「ボクのフィールドに4体の羊トークンを特殊召喚！」

「え？何で羊トークンをや？」

自分のターンに発動！させたカードを見て翔は、首を傾げる。

「インセクトクイーンの効果場にいる昆虫族モンスター1体につき200アップさせるのと相手モンスターは戦闘破壊した時、インセクトモンスタートークンという昆虫族のトークンを特殊召喚する効果をもっている。その見返りなのか、戦闘するには生け贄を捧げる必要があるんだ。」

「？士さん。それなら、余計にスケープゴートは意味無いんじゃないや？だって、羊トークンは生け贄に出来ないんじゃないや？」

翔のその間違いを首を横に振って否定した。

「羊トークンは生け贄召喚の為の生け贄に出来ないだけで効果発動の為の生け贄は可能だ。」

「ヒョッツヒョッツヒョッツ！それだけじゃない！リバースカードオープン！DNA改造手術！フィールド上の全モンスターは昆虫族になる！」

羊トークンや、私の場のモンスターが虫になり、インセクトクイーンの攻撃力が上昇した。(インセクトクイーン攻撃力 2200+200×7=3600)

「ヒョッツヒョッツヒョッツ！インセクトクイーンの攻撃！クイーンズヘルプレス！」

羽蛾のボウヤの宣言にインセクトクイーンはがぶつと羊トークンを捕食してから、マ  
ンジュゴットにプレスを浴びせた。(雪乃ライフ4000—3400+1400=20  
00)

「んんっ!!」

甘い声が出そうになるのを歯を強く噛んで耐える。羽蛾のボウヤにはこの声は聞かせたくない。だけど、背筋にゾクゾクするものがあり自身の体を抱き締めて身を震わせる。

「ヒョッヒョッヒョッ!ボクが勝ったら、付き合ってもらおうかな!」

羽蛾のボウヤは私の全身をなめ回すような視線を向けてからとんでもないことを言ってきた。冗談ではない。私は強い男しか興味がないのだ。怒りに身を震わせているとさらに許せない言葉が飛んできた。

「君もそんな仕草で誘っているわけだし問題ないよね?」

私がそんな安い女に見えるのかしら?

「ヒョッヒョッヒョッ!ボクはターンエンド!」

雪乃ライフ2000手札3伏せ2枚

伏せモンスター0枚 センジュゴットATK1400

伏せモンスター0枚 インセクトクイーンATK2200+200×4 羊トーク

ンDEF0×3

伏せ1枚

羽蛾ライフ3550手札2枚

「私のターン！ドロー！手札から天使の施しを発動！3枚ドローしてから手札2枚捨てるわ！」

よし！これなら！

「手札からエンドオブワールドを発動！フィールドのマンジュゴットと、墓地にある儀式魔人ブレサイダーを生け贄にするわ！」

私の言葉に周囲は動揺している。

「ば、バカな！墓地から、生け贄だど！」

「儀式魔人達は墓地からでも、生け贄に出来るのよ。その場合、儀式魔人達は除外されるけど、終焉の王デミスを儀式召喚！」

私のフィールドに全てに終焉をもたらす王が降臨した。

「ギャ、ギャアアアア!!そ、そのモンスターは!!」

「そう。全体破壊効果を持つているわ。」

「ギャ、ギャアアアア!!女王様がああッ!!………なくんてね♪そのモンスターの効果を使うには、ライフコスト2000支払わなきゃなんない！でもさ、君のライフじゃと

ても出来ないよね？だから、そのモンスターはムダ「リバースカードオープン！女神の加護！」ヒヨツ？」

「女神の加護の効果は私のライフを3000回復させるわ！」

女神の加護の癒しの力が私のライフを回復させる。(雪乃ライフ2000+3000  
 ≪5000)

「で、でも、女神の加護は、フィールドから離れた時、3000ポイントのダメージを受ける！」

「さあ？それはやってみなければわからないわ！終焉の王デミスの効果発動！終焉の嘆き！！」

デミスから、水滴のようなものが落ち、破壊の波紋となり、羽蛾のボウヤの女王や羊トークン、伏せカードや私の場に翻ったカードをも破壊した。(雪乃ライフ5000—  
 2000≪3000)

「ヒヨツヒヨツヒヨツ♪コレで女神の加護も破壊され、3000のダメージを受けてボクの勝ちだ♪」

「何勘違いしているのかしら？」

「ヒヨツ？」

「このデュエルはまだ終わってないわ！」

「ヒョツ?や、やだな?君のライフは3000で女神の加護の効果で受けるダメージも3000だから君のライフはちょうど、」

羽蛾のボウヤはそこまで言いかけて私に降り注ぐ破壊の雨が私のライフを癒していることに気付いた。(雪乃ライフ3000+3000=6000)

「そんな。どうして?」

「デミスの効果発動時にチェーンでレインボーライフを使ったのよ。このカードはダメージを回復に変えるわ。」

「で、でも、デミスの攻撃力じゃ、ボクのライフ削りきれない!」

「それなら援軍を呼ぶまでよ!手札から儀式の準備を発動!まずはデッキから救世の美神ノースウエムコと墓地からエンドオブワールドを手札に加えるわ!」

「……………いつの間に?あ。天使の施しの時か。」

「後、レインボーライフの時もね。さらに死者蘇生を発動!墓地にあるマンジユゴットを特殊召喚!効果により、救世の儀式を手札に加えるわ!救世の儀式を発動!墓地にある儀式魔人リリーサとマンジユゴットを生け贄に救世の美神ノースウエムコを儀式召喚!」

美神。その名に恥じぬ美しさと気高さを兼ね備えた神が私の場に降臨した。

「あ……………あ……………あ……………」





## デュエル12 ダッグデュエル十代+翔VS迷宮兄弟

「やったな！雪乃！」

「おめでとうツス！」

「がんばったんだな！」

雪乃が勝利して、観客席に戻ると十代達が手を上げて祝福した。雪乃はそんな十代達に軽く手を叩いて、答えた。

「次は、十代と翔のボウヤの番よ。がんばってきなさい。」

雪乃の言葉に十代は目をキラキラさせて行った。その十代の後ろ姿を慌てて追いかけてようとした時、翔を雪乃が止めさせた。

「翔のボウヤ。ちよつと待ちなさい。土が言いたいことがあるから。」

急にふられ、狼狽えるものの、雪乃が耳元で囁いた言葉を翔に伝えた。

「翔。頑張れ。もし勝てたら、俺が可能なることをするから1つだけやるよ。」

「そ、それって何でも？」

俺の言葉に翔は震える声で問いかける。なんだが、顔が紅くて息も荒いような？そし

て、何故に明日香は不機嫌になる？

「もちろん。俺が出来る事だけにしろよ？」

答えた瞬間、翔は笑顔でデュエルフィールドに向かい、明日香は、何故かどす黒いオーラを発しているように見えた。

S I D E 翔

「怖じけずによく来た！」

迷宮兄弟が何かを言ってるつすけど、今の僕にはただの猿が喚いているようにしか聞こえない。

「ふ……………フフフ。」

僕の笑い声に迷宮兄弟も、アニキもギョツとした目で僕を見ていた。

「さっさと倒すツスよ。ザコ兄弟。」

「私達は迷宮兄弟だ！」

僕の言葉に迷宮兄弟が訂正を入れるがそんなのどうでも良かった。  
『決闘！』<sup>デュエル</sup>

僕達の言葉に、クロノス先生がタッグルールを説明する。

・ 共通ライフは8000。

・ 墓地はパートナーと共有して自分が使ったカードを。パートナーが使っても問題な

い。

・パートナーのカードを使用、生け贄は問題ないが、攻撃宣言、表示形式の変更は不可能。

・墓地のカードを回収する場合、パートナーのカードであったとしても自分のカードとして扱い回収する。

・順番は僕、迷宮兄、アニキ、迷宮弟で一巡目は攻撃不可能。

「行くよ！僕のターン！ドロー！  
E<sup>エレメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup> フォレストマンを守備表示で召喚  
！」

『な、なっにいっ!!!』

僕のフィールドに現れたモンスターを見て、皆が驚きの声をあげていた。

「……………そんなに驚くことか？」

皆の困惑に戸惑ったような土さんの眩きが耳に入った。まあ、ヒーローといったらまずアニキを連想するもんね。というか、土さんから渡されるまでアニキ以外に持つているとは想わなかったし。

「更にカードを2枚セットしてターンエンド！」

翔&十代ライフ8000

翔手札3枚

伏せ2枚

伏せモンスター0 フォレストマンDEF2000

十代手札5枚

「私のターン！ドロー！手札から地雷蜘蛛を攻撃表示でターンエンド！」

翔&十代ライフ8000

翔手札3枚

伏せ2枚

伏せモンスター0 フォレストマンDEF2000

十代手札5枚

迷宮弟手札5枚

地雷蜘蛛ATK2200

伏せ0枚

迷宮兄手札5枚

迷宮兄弟ライフ8000

「俺のターン！ドロー！スタンバイフェイズ時にフォレストマンの効果発動！デッキ、  
墓地から融合を手札に加える！俺はデッキから融合を手札に加える！」  
E<sup>エレメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup>

バースト・レディを守備表示で召喚！カードをセットしてターンエンド！」

翔&十代ライフ8000

翔手札3枚

伏せ2枚

伏せモンスター0 フォレストマンDEF2000

十代手札5枚

伏せ1枚

伏せモンスター0 バーストレディDEF800

迷宮弟手札5枚

地雷蜘蛛ATK2200

伏せ0枚

迷宮兄手札5枚

迷宮兄弟ライフ8000

「私のターン！ドロー！カイザーシーホースを攻撃表示で召喚！」

アレは確か、光属性モンスターの為の生け贄になるなら、1体で2体分の生け贄になるモンスター。

「更に生け贄人形を発動！兄者の地雷蜘蛛を生け贄に風魔神ヒューガを攻撃表示で特殊

召喚！」

3 魔神の一角をなすモンスター！

「私はカードを3枚セットしてターンエンド！」

翔&十代ライフ8000

翔手札3枚

伏せ2枚

伏せモンスター0 フォレストマンDEF2000

十代手札5枚

伏せ1枚

伏せモンスター0枚 バーストレディーDEF800

風魔神ヒューガATK2400 カイザーシーホースATK1700

伏せ3枚

迷宮弟手札0枚

地雷蜘蛛ATK2200

伏せ0枚

迷宮兄手札5枚

迷宮兄弟ライフ8000

「僕のターン！ドロー！……アニキ？バーストレディーを借りるよ？」

「おう！」

僕の問いにアニキはグツと親指をたてて答えた。

「スタンバイフェイズ時にフォレストマンの効果発動！融合をデッキから手札に加える！融合を発動！バーストレディーと手札のスチームロイドを融合！！」  
エレメンタル E・HEROヒーロー  
 ガイア！」

「何を出すかと思つたら攻撃力は2200！ヒューガより低い！」

「ガイアの効果発動！ヒューガの攻撃力を半分にして、その数値分ガイアの攻撃力をアップさせるツス！」

「なんだと！」

ガイアの力がヒューガの力を弱らせた。

「更にジャイロイドを召喚！ガイアでヒューガを攻撃！コンチネンタルハンマー！」

「ヒューガの効果発「手札から速攻魔法禁じられた聖杯を発動！攻撃力を400アップしてモンスター効果を無効にするツス！」な、何イツ！」

聖杯にくまれた水をかけたら、モンスター効果を失いヒューガは倒された。（迷宮兄

弟ライフ8000-2200-2400÷2+2400÷2+400=8000-3400+1600=6200）



「ば、バカな！ヒューガがこうもあっさり！」

ヒューガが倒された事にビックリしているようだけど、今がチャンス！

エレメンタル

「速攻魔法融合解除を発動！ガイアを融合デツキに戻して素材となった、E・

HERO バーストレディーとスチームロイドを攻撃表示で特殊召喚！スチームロイドでカイザーシーホースを攻撃！スチームロイドは攻撃するとき攻撃力を500アツプするツス！」

スチームロイドの突進がカイザーシーホースを破壊した。(迷宮兄弟ライフ 6200-18000-5000+17000=56000)

「さらに、バーストレディーとジャイロイドでダイレクトアタック！」

2体のモンスターの攻撃が迷宮兄弟のライフを削った。

(迷宮兄弟ライフ 56000-12000-10000=34000)

「僕はターンエンド！」

翔&十代ライフ8000

翔手札0枚

伏せ2枚

伏せモンスター0 ジャイロイド ATK1000 フォレストマン DEF2000

バーストレディー ATK1200

十代手札5枚

伏せ1枚

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚 リビングデッドの呼び声

迷宮弟手札5枚

伏せ0枚

迷宮兄手札5枚

迷宮兄弟ライフ3400

「おのれ！もう容赦せん！私のターン！ドロー！弟よ！お前の力を貸してくれ！」

「望む所だ。兄者。」

「私は手札からコストダウンを発動！手札1枚を墓地に送り手札のモンスターのレベルを2下げる！私がダウンさせるモンスターは雷魔神サンガ！」

これでサンガはレベルが5だから生け贄が1体で済む。

「手札から死者蘇生を発動！墓地から地雷蜘蛛を召喚！地雷蜘蛛を生け贄に雷魔神サンガを攻撃表示で召喚！弟の場からリビングデッドの呼び声を発動！ヒューガを特殊召喚！さらにもう一枚死者蘇生で墓地から水魔神スーガを特殊召喚！」

? どうか。コストダウンの時に捨てていたのか。

「フハハ！コレで揃った！私の場にいる3体の魔神を生け贄にゲートガーディアンを召喚！」

「で、デカイ。」

アニキの言う通り、大きい。だけど、今の僕にとつて、ちよつと大きいだけのザコモンスターに過ぎない。

「ゲートガーディアンでジャイロイドを攻撃！魔神衝撃波！」

雷、風、水。3種類の攻撃がジャイロイドに襲いかかる。

「リバースカードオープン！スパーチャージ！ガードブロック！スパーチャージは、ロイドと名のつくモンスターが攻撃対象になった時2枚ドロウする！そして、ガードブロックによりダメージを0にして、ードロー！そして、ジャイロイドは1ターンに1度、戦闘では破壊されない！」

ジャイロイドは小回りを効かせて魔神が放つ衝撃波をかわした。

「グヌヌ。ターンエンド！」

翔&十代ライフ8000

翔手札3枚

伏せ0枚

伏せモンスター0 ジャイロイド ATK1000 フォレストマン DEF2000

バーストレディー ATK1200

十代手札5枚

伏せ1枚

伏せモンスター0枚

迷宮弟手札5枚

伏せモンスター0枚 ゲートガーディアン ATK3750

伏せ0枚

迷宮兄手札1枚

迷宮兄弟ライフ3400

「俺のターン! ドロー! 翔! 今度はお前のジャイロイドを借りるぞ!」

「ウン! アニキ! 僕は構わないよ!」

「よっしゃ! スタンバイフェイズ時にフォレストマンの効果発動! 融合をデツキから手札に加える! さらに融合を発動! そして、融合を発動! 翔の場にあるバーストレディーとジャイロイドを融合!! 来い E<sup>エレメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup> Great Tornadoを融合召喚!」

HEROと疾風。2つが重なり、風を纏う英雄が降臨した。



伏せモンスター0 フォレストマンDEF2000

十代手札5枚

伏せ2枚

伏せモンスター0枚 エレメンタル E・HERO ヒーロー Great Tornado ATK2800

迷宮弟手札5枚

伏せモンスター0枚

伏せ0枚

迷宮兄手札1枚

迷宮兄弟ライフ2475

「私のターン！ドロー！手札から強欲な壺を発動！2枚ドロー！フハハ！天は私達を見捨ててなかった！手札からライトニングボルテックスを発動！手札1枚を捨てて、相手フィールドの表表示のモンスターを破壊!!」

迷宮弟のカードが雷を呼び起こし、僕達のモンスターを破壊した。

「さらにリバースカードオープン！ダークエレメント！ライフを半分にして闇の守護神——ダークガーディアンを特殊召喚！

ダークガーディアンでダイレクトアタック！ダークショックウェイブ！」（迷宮兄弟ライフ2475÷2=1237.5 1238小数点以下は四捨五入により）

魔神が放つ衝撃波をもろに受けてしまう。

「うわああああっ!!!」

いきなり、半分近く削られてしまう。(十代&翔ライフ8000—3800||4200)

「私はターンエンド。」

翔&十代ライフ4200

翔手札3枚

伏せ0枚

伏せモンスター0

十代手札5枚

伏せ2枚

伏せモンスター0枚

迷宮弟手札5枚

伏せモンスター0枚

伏せ0枚

迷宮兄手札1枚

迷宮兄弟ライフ1238

「僕のターン！ドロー！」

「!!パワーボンド!……ダメだ!手札に融合素材になるモンスターは無い!かといつて、次のターンにまで待ったら、2体のダイレクトアタックで0になる可能性もある!ここまでなのか?」

「翔!俺達の絆は奇跡を起こす!あのモンスターを凍てつかせてやろうぜ!」

「気合いだけは十分のようだな?」

アニキの応援を鼻で笑う迷宮兄弟。だけど、アニキの言葉がきっかけに複数のカードが結びつき、この状況を打破するコンボに繋がった。

「僕はサブマリントイドを召喚!」

「確か、そのモンスターは、ダイレクトアタックを行えるモンスター。だが、効果で表示形式を変えても、守備力は1800。ダークガーディアン<sup>エリメンタル</sup>の攻撃力には及ばない!」

「アニキの伏せカードオープン!ミラクルフュージョン!フィールドと墓地からモンスターを除外してE<sup>エリメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup>と名のつくモンスターを融合召喚出来る!墓地の

エリメンタル

E<sup>エリメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup>

E<sup>エリメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup>

E<sup>エリメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup>

E<sup>エリメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup>

E<sup>エリメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup>

E<sup>エリメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup>

E<sup>エリメンタル</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup>

アブソルートZERO!!」

潜水艦と炎のが合わさり全てを凍てつかせる絶対零度のHEROが姿を現す。

「なかなかやる。しかし、そのモンスターの攻撃力は2500。届かない!」



「そう。だから、手札からパワーボンドを発動！手札のユーフォロイドと、アブソルート Z E R O を融合！ユーフォロイドファイターを融合召喚!!」

アブソルート Z E R O はユーフォロイドに飛び乗り、一体のモンスターと化した。  
(ユーフォロイドファイター ATK 2500 + 1000 = 3500)

「さらに強力なモンスターを召喚するとは驚いた！しかし、それだけではまだ届かない  
！」

「パワーボンドの効果により、ユーフォロイドファイターの攻撃力は倍になる！さらにアブソルート Z E R O の効果発動！フィールドから離れた時相手フィールド上のモンスターをすべて破壊する！」

ユーフォロイドに乗っているアブソルート Z E R O が冷気を放ちダークガーディアンを氷の棺に閉じ込めた、次の瞬間粉々に砕け散った。

「瞬間氷結!!その瞬間、リミッター解除を発動！ユーフォロイドファイターの攻撃力を倍にする！」

「ふぬおおーっ!!!」

リミッターを解除され、より強力な攻撃が迷宮兄弟のライフを削りきった。(迷宮兄弟ライフ 1238 - 3500 × 2 × 2 = 1238 - 3500 × 4 = 1238 - 14000 = -12762)

人  
デュエル13 タッグデュエル!サイバ一流VS士+隼

「勝った!!」

迷宮兄弟に止めを刺した、翔と十代を皆が呆けていた。武藤遊戯と城之内克哉のコンピを苦しめたデュエリストを倒したのが信じられないのだろうか？

パチパチ。

そんな二人を俺が拍手で祝福した。その拍手を皮切りにクロノス先生が、隼人が、明日香が、雪乃が、ジユニコとももえが拍手を送り、やがては、オシリス・レッドとラー・イエローの皆が拍手を送っていた。

「士さん♪ありがとうございます♪」

翔はお礼を言いながら、俺が貸したE・HEROのカードを返した。

「どういたしまして。」

そう返して、カードを受け取ると翔は不安な表情をして問いかけていた。

「あ、あの、士さん。や、約束は覚えてますか？」

「もちろん。どんな事を頼むつもり？」

「そ、それは、」

ギョツ!!

「イテツ!!」

足から来る激痛に悲鳴をあげると、

「あら? ゴメンなさい? それより、次のデュエルが始まりそうよ?」

俺の言葉に形だけの謝罪を述べて、明日香は謝罪した。

「ん? あ、ああ。わかった。」

より不機嫌になった明日香の態度に首をかしげながらもデュエルフィールドに向かうと、鯨島がデュエルフィールドに立っていた。

「沖田土君。前田隼人君。君達のタッグデュエルの対戦相手を紹介します。」

鯨島の言葉に、一組の男女がデュエルフィールドに上がってきた。

「貴様か? 私の弟子、丸藤亮をパーミッション等という、リスペクトの欠片もないデツキで倒した女というのは?」

女の方が射抜くような視線で俺を見て問いかける。

「へえ? 俺以外にもそんなことをした人がいたんだ?」

「何をふざけた事を言ってる? 貴様に決まっているだろう?」

そう言われ、先程の内容を反芻したが、自分がその条件を満たしてないことを再確認

した。

「人違いだと思っ。確かに、亮にパーミッションを使つて勝つた事はあるが、俺は男だ。」  
「ああ!もう!貴様は沖田士だろ!」

「まあ、そう問われたら、俺なのは間違いないが。」

「なら、今すぐデュエルだ!パーミッションを使う貴様を断罪してやる!」

女はそう吠えてから、デュエルディスクを起動させた。

「……………まったく。怒りっぽいな。」

結局、名前らしいのも教えてもらつてないし。……………まあ女の方は、その発言から、サイバー流の門下生だとわかる。

「紹介します。二人はサイバー流の才刃透君と才法要君です。」

やっぱり、サイバー流の門下生を呼び寄せたのか。さっさと倒させてもらおうか?

○○○○

『決闘!』  
デュエル

「俺のターン!ドロー!モンスターをセット!カードをセットしてターンエンド!」

士&隼人ライフ8000

士手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚

隼人手札5枚

「私のターン！ドロー！相手フィールドにのみモンスターがいるときサイバー・ドラゴンを特殊召喚！さらにプロト・サイバー・ドラゴンを召喚！カードを2枚セットしてターンエンド！」

士&隼人ライフ8000

士手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚

隼人手札5枚

透手札5枚

サイバー・ドラゴンATK2100 プロト・サイバー・ドラゴンATK1100伏

せカード2枚

要手札2枚

透&要ライフ8000

「俺のターンなんだな！ドロー！俺もモンスターをセット！カードを2枚セットしてターンエンド！」

士&隼人ライフ8000

士手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚

隼人手札3枚

伏せ2枚

伏せモンスター1枚

透手札5枚

サイバー・ドラゴンATK2100 プロト・サイバー・ドラゴンATK1100伏

せカード2枚

要手札2枚

透&要ライフ8000

「俺のターン!ドロー!俺はサイバードラゴンツヴァイを召喚!俺はコレでターンエンド!」

士&隼人ライフ8000

士手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚

隼人手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ ATK1500

透手札5枚

サイバー・ドラゴン ATK2100 プロト・サイバー・ドラゴン ATK1100 伏

せカード2枚

要手札2枚

透&要ライフ8000

「俺のターン！ドロー！」

フム。今の手札は攻め手に出れるものじゃないな。なら、

「モンスターをセット！カードをセットしてターンエンド！」

士&隼人ライフ8000

士手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター2枚

隼人手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚

サイバー・ドラゴン・ツヴァイATK1500

透手札5枚

サイバー・ドラゴンATK2100 プロト・サイバー・ドラゴンATK1100伏

せカード2枚

要手札2枚

透&要ライフ8000

「私のターン!ドロー!」

ドローしたカードを見て、要はニヤリと笑う。

「私は手札から融合を発動!手札のサイバー・ドラゴンとフィールドのプロト・サイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴンを融合!サイバー・エンド・ドラゴンを融合召喚!」

3体のドラゴンが融合して3つの首を持つ竜が召喚された。

「サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃!エターナル・エヴォリューション・バースト!」

サイバー・エンド・ドラゴンは俺の言葉にモンスターを破壊して俺達のライフを削る。



(士&隼人ライフ80000→40000+1000⇒41000)

「破壊された素早いモモンガの効果発動！戦闘破壊された時ライフ10000回復して2体の素早いモモンガをセット！」

素早いモモンガが最後の力を振り絞って、俺達のライフを回復して同名モンスターをセットした。

「私はコレでターンエンド！」

士&隼人ライフ5100

士手札4枚

伏せカード2枚

伏せモンスター3枚

隼人手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚

サイバー・ドラゴン・ツヴァイATK1500

透手札5枚

サイバー・エンド・ドラゴンATK4000

伏せカード2枚

要手札1枚

透&要ライフ8000

「俺のターンなんだな!ドロー!士!素早いモモンガを借りるんだな!2体のモンス  
ターを生け贄にビッグコアラを召喚!さらに反転召喚!デスコアラ!相手の手札が6  
枚だから2400のダメージを受けるんだな!」

隼人のフィールドに翻ったデス・コアラがカパアッと大きく開けて、

ガブガブ!

「いつてえ!」

男の方が噛まれた。うん。アレは痛そうだ。(透&要ライフ8000—2400—5  
600)

「ビッグコアラでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃!」

「バカな!攻撃力の低いモンスターで攻撃だと!」

「その瞬間、速攻魔法収縮!サイバーエンドの攻撃力を半分にする!」

大きさが半分程になり攻撃力も半分まで落ちたサイバー・エンド・ドラゴンはビッグ  
コアラにあっけなく潰された。(透&要ライフ5600—2700+4000÷2—2  
900+2000—4900)

「よし!デス・コアラでダイレクトアタック!」

「させないわ！トランプ発動！リビングデッドの呼び声！墓地から、サイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚！」

デス・コアラが殴りかかろうとしたところで、墓地から、サイバー・エンド・ドラゴンが復活してデス・コアラの前に立ちはだかった。

「なら、ターンエンドなんだな！」

士&隼人ライフ5100

士手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚

隼人手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚    デス・コアラATK1100    ビッグコアラATK2700

サイバー・ドラゴン・ツヴァイATK1500

透手札5枚

サイバー・エンド・ドラゴンATK4000

伏せカード1枚    リビングデッドの呼び声（対象サイバー・エンド・ドラゴン）

要手札2枚

## 透&amp;要ライフ4900

「俺のターン!ドロー!サイバー・ドラゴン・ツヴァイの効果発動!手札の魔法カード、パワーボンドを相手に見せる事で攻撃力を300アップして、サイバー・ドラゴンとして扱う!」

パワーボンドを見せたってことは、

「パワーボンドを発動!手札のサイバー・ドラゴン2体とサイバー・ドラゴン扱いのサイバー・ドラゴン・ツヴァイを融合!融合召喚!サイバー・エンド・ドラゴン!」

「ゲエ!伏せモンスターはジャイアントウイルス!サイバー・エンド・ドラゴンはパワーボンドの影響で攻撃力が倍になり、攻撃力が8000になる。そして、サイバー・エンド・ドラゴンは守備貫通能力を持っている。だから、攻撃対象になったら、ダメージを防げない。」

「バトルフェイズ!サイバー・エンド・ドラゴンで士のモンスターを攻撃!エターナル・エヴォリューション・バースト!」

「……………トラップ発動!マジカルシルクハット!俺の場のデスクアラとデッキから2枚の魔法か罠をシャッフルしてモンスターゾーンにセットするんだな!」

苦し紛れに使ったのかもしれないが、それでもこの場を打破するコンボに繋がった。

「クロノス先生!!確認するけど、隼人の場のモンスターを生け贄に捧げるのはありだっ

たよな？」

確認の問いにクロノスは首を縦に振った。

「トランプ発動！血の代償！ライフを500支払う度に手札のモンスターを通常召喚が出来る！」  
「ムダだ！どんなモンスターを呼ぼうが、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力には勝てない！」

「攻撃力で勝てないなら効果で勝負だ！隼人のフィールドのシルクハットモンスターと、俺のフィールドにあるジャイアントウイルスの計3体を生け贄に、」

『3体生け贄!!』

俺が行った行為に皆が驚いている。レベル8でも、生け贄は2体でいい。それより1体多いのは神のカードしか思い付かないのだろう。

「神獣王バルバロスを通常召喚！」

俺のフィールドに神の名を関するに相応しい威圧感を持った獣の王が姿を現した。

「青眼の白龍と同じ攻撃力のモンスターだと！しかし、サイバー・エンド・ドラゴンの方が攻撃力は上だ！」

「言ったはずだぞ！攻撃力で勝てないなら効果で勝負だ！バルバロスの効果発動！」  
バルバロスが咆哮すると、対戦相手のフィールドのカードにヒビが走る。

「3体生け贄に捧げて通常召喚した場合相手フィールドのカードを全て破壊する!!」

「な、なんだとお!!!」

その叫びがトリガーとなったのかサイバー・エンド・ドラゴン達が崩壊していく。

「く、くそ!サイバー・ジラフを召喚!効果により生け贄にして、1枚セットしてターン

エンド!」

士&隼人ライフ4600

士手札3枚

伏せカード0枚 血の代償

伏せモンスター0枚 神獣王バルバロスATK3000

隼人手札3枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚 ビッグコアラATK2700

伏せ1枚

透手札2枚

要手札2枚

透&要ライフ4900

「俺のターン!ドロー!手札から天使の施しを発動!3枚ドローして2枚捨てる!」

この効果でドローしたカードはレベルステイラーにバルバロスに受け継がれる力。

……コレは虐め入ってないか？

「この2枚を墓地に送り、墓地にあるレベルスティーラー2枚の効果発動！自分フィールドのレベル5以上のモンスターのレベルを1つ下げる事で墓地のこのカードを特殊召喚！」

バルバロスのレベルを奪い墓地から蘇生するてんとう虫。

「ば、バカナ！いつの間に！」

「天使の施しの時だ。隼人。デスコアラとビッグゴアラを借りるぞ！」

「わかったんだな！」

「レベルスティーラー2体と、デスコアラを生け贄に神獣王バルバロスを召喚！効果により相手フィールドのカードを全て破壊する！さらに、受け継がれる力を発動！自分フィールドのモンスターを墓地に送り、そのモンスターの攻撃力を自分フィールドのモンスターに加算する！ビッグゴアラを墓地に送り、その攻撃力2700をバルバロスに加算する。」

「あ……………あ……………あ……………」

フィールドを丸裸にされ、青ざめる二人。だけど、まだこの程度じゃ終わらないよ？

「手札から死者蘇生を発動！墓地のサイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚！」

「な！私達のカードを！」

俺のフィールドに3つの頭を持つ機械竜が現れたことに対戦相手の怒っているようだがそんなものにとり合う気はない。

「3体でダイレクトアタック!」

神獣の王とビッグゴアラの力を借り強力になったバルバロスにサイバー・エンド・ドラゴン。3体の攻撃が対戦相手のライフを削りきった。



## デュエル14 勉強会水族デツキ

「では、制裁デュエル突破を祝して、」

『乾杯!!』

俺の言葉に皆が手にしているグラスを軽くぶつけ合う。

「皆、ありがとう。また一緒に楽しいデュエルをしようぜ!」

祝ってくれる代表の十代の言葉に、明日香と麗華と名前も知らないラー・イエローの生徒とトメさんが惜しみ無い拍手を送ってくれた。

「ところで、翔。俺に何を命令したいんだ?」

「そ、それっすけど、ぼ、ボクに付き合っただけっす!」

「OK。んじゃ、明日休みだし、10時にオシリス・レッド前に行くな?」

俺の言葉に翔は笑顔で頷いた。

○ ○ ○

とまあ、打ち上げの時に、そんなやり取りがあり、約束通りオシリス・レッド寮に向かった。

「土さん!」

俺を見つけた翔が手を振りながら俺に駆け寄った。

「わり。翔。待たせたか？」

「ううん。ボクも今来たところつつすから、気にしなくて良いっすよ？」

今来たも何も、ここはオシリス・レッド前なんだけど。

「それじゃ行きますか？」

そう言つて翔を連れてデュエルアカデミア資料室に向う。

「シニョーラ沖田にシニョール丸藤なノーネ？」

資料室に入ったら、クロノス先生の声が出迎えた。

「どうしたノーネ？」

「実は翔から勉強を教えて欲しいと頼まれました。」

「へ？」

「それはシニョール丸藤は勤勉なノーネ。オシリス・レッドの人達も徐々に成績が上がり初めているのでワタシとシテーハ、大変喜ばしいノーネ。」

俺の言葉に何故か、翔が戸惑った声を上げる。

SIDE 翔

トホホ。どうやら付き合つてを『勉強に付き合つて』と勘違いされたらしい。

「で、翔。『タイミングを逃す』とは、何か？ 答えられるか？」

「効果発動タイムニングに別のカードが割り込まれる事により、本来発動するはずだったカードの適切なタイムニングに発動出来ず不発に終わる処理の事ツス。

例えばフィールド魔法、ギアタウンは生け贄の軽減の他にも破壊されるとアンティーク・ギアと名のつくモンスターを特殊召喚出来るけど、自分フィールドに発動中のフィールド魔法ギアタウンがあり、自分が新たなフィールド魔法が発動した場合、まずは古い方のフィールド魔法を破壊され、新たなフィールド魔法をセットしてから発動という順番が組み込まれるためタイムニングを逃して、ギアタウンの効果は不発してしまします。」

僕の言葉に、士さんもクロノス先生も満面の笑みで拍手してくれた。

「そういうこと。やればできるじゃん。」

頭を撫でながら誉めてくれる言葉に、嬉しくなり頑張ろうと思ってしまう。

S I D E 士

「そういえば、クロノス先生。どうして、オシリス・レッドが嫌いだったつすか？」  
勉強も進んだとき、翔がクロノス先生に問いかける。

「シニョール丸藤。このデュエルアカデミアは優秀なデュエリストを育成するための養成所なノーネ。そのためにこのオーナーはオベリスク・ブルー、ラー・イエロー、オシリス・レッドの3つの寮にわけそれぞれの寮の待遇に差をつけることでオシリス・

レッドは上の寮を目指したいと思わせ、オベリスク・ブルーはラー・イエローや、オシリス・レッドに抜かせてなるものと頑張りとうと切磋琢磨する。そんな環境を目指したかったらしいノーネ。ワターシはその理念に従ってオシリス・レッドがより上を目指したいと思わせたいと頑張っていたのでスーガ、オシリス・レッドの生徒達は自分達の環境を嘆き、上に行く事を諦めてしまったノーネ。」

まあ、その辺は俺達が入学したときの隼人を見ればわかるな。というか、エアーズ・ロツクにデッキを捨てて未練を絶ち切りたくても出来なかったなら、オシリス・レッドでも足掻けば良いのに。

「コチラが頑張っても成果の出ないオシリス・レッド達に苛ついてしまったノーネ。」

まあ、いくら頑張っても成果の出ない結果に苛ついてしまうのは仕方ないかもしれないけど、大人気無さすぎやしないか？俺の視線に気付かず、勉強頑張ってください。と励まし応援をしてさっていった。

○ ○ ○

「人に歴史ありとはホントだな。」

目の前にあるカレーライスを手を掴みながら潰れていた。

「そうッスね。クロノス先生も問題かもしれないですけど、僕達生徒側にも問題かもしれないッスよね。」

翔はカツ丼を食べながらも先ほどの事を思い返していたらしい。

「翔。それまでの態度を悔やむのなら、これからに集中しろ。」

「……………ウン。そうっすよね。」

俺の言葉に無理矢理納得して箸を動かすのだが、どうにも遅い。まだ、吹っ切れていない模様だ。

「にや、にやにすりゆんでひゆか！ちやかしゃしゃん！」

俺が翔の頬つぺたを引つ張ると、抗議の声をあげる。

「翔。過去は振り返ったって変わる訳じゃない。それならば、気持ちをリセットして遅れた分を取り戻せば良い。」

俺がそういうと翔は自分の頬を叩き気合いを入れようとしたらしい。

「……………痛い。」

小さく呟いた言葉に、俺の口からプツと笑いを洩らしてしまう。それを見た翔が恥ずかしさを隠す為か大急ぎでカツ丼をかつこむ。その様子に微笑を浮かべ、カレーライスと天井、ラーメンとサラダを胃袋に納めていく。

「ごちそうさま。ところで、翔。この後の予定って何かある？」

「土さんってすごい食欲ツスね。ボクはなにもないツスよ？」

「それじゃ、行きますか？の前に、翔。お弁当つけてるぞ？」

唇のはしつこに付いてるご飯粒を指先でとり、ペロツと舐めとった。なんか知らんが、その瞬間翔の顔が真っ赤になった。そして、

ヒュッ！ カツ！

そんな音と共に飛来した何かが翔の頬をかすり、カードが壁に突き刺さった。アレ？ 何でだ？ いくら固いといっても紙製だから壁に突き刺さるなんてありえないはずなんです？ 天上院明日香さん？ カード手裏剣が投擲されたと思われる付近から、金髪が揺れるのが見えた。

「立てる？ 翔？」

顔が青ざめている翔を立たせ手を振りながら視線をずらすと視界の端で金色の髪が踊っているのが写った。

「撒くぞ？」

廊下の角を曲がった所で走る。その様子を見た明日香が慌てて走ってくるのが見えただが、もう遅い。右、左へと走り続けて行くと明日香はきっちりまいたらしい。

「んじゃ、今度こそ行くか。こっちだ。」

翔を案内してたどり着いた先は、水族館だ。デュエルアカデミアはデュエルのための学校とはいえ、孤島故にこういった娯楽がないとストレスが溜まってしまふ。そのため、デュエルだけではなく、水族館、ゲーセンなどが設立されている。

「あゝ翔々これみなよ可愛い♪」

ガラスの向こう側にある、カラフルな魚を指さして言った。

「う、うん。」

どうも、ここに來てから翔の笑顔が固い。

「翔。楽しめつてここは楽しむ為にあるんだから、楽しまないと損だぞ?」

「い、いえ、そうじゃないツス!でも、土さんの言う通りツスよね。」

翔はそう言つて、柔らかな笑顔で水族館の館内を歩き回つた。

○ ○ ○

「あー。楽しかったツス。土さん。連れてきてくれてありがとうツス。」

俺達が水族館を出た頃にはもう日も暮れ始めていた。

「楽しめたようで何よりだ。」

俺がそう言つた時、その楽しさを吹き飛ばすような不快な声が聞こえた。

「ああ!何処に目をつけてやがるんだ!いてえじゃねえか!」

「そ、そんな!そつちからぶつかつてきたんじゃないか!」

倒れたオシリス・レッドの生徒をオベリスク・ブルーの生徒が睨み付けている。

「オシリス・レッドのドロップアウトごときには勿体ないレアカードだぜ!俺様がもらつてやるからありがたく思いな!」





雑魚ライフ4000手札4枚

伏せ1枚

ゴブリン突撃部隊ATK2300

「俺のターン！ドロー！手札から愚かな埋葬を発動！デッキから悪魂邪苦止を墓地に送る！」

「ハッ！やっぱり大した事ねえな！わざわざカードを捨てるなんざ意味の無いことをしやがる！」

俺のプレイングを見て嘲笑うが、翔は呆れた表情でそいつを見ていた。

「さらに、手札からスライム増殖炉を発動！」

「やっぱり大した事ねえな！そのカードは、スライムトークンを出せる代わりに、スライムトークン以外のモンスターを出せなくなるんだぜ？」

俺が場に出した永続魔法を見て小バカにしたように笑うが、このカードをバカにはできないと思うんだが？

「モンスターを1枚セット、カードを1枚セットしてターンエンド！」

雑魚ライフ4000手札4枚

伏せカード1枚

ゴブリン突撃部隊ATK2300

伏せモンスター1枚

伏せカード1枚 スライム増殖炉

士ライフ4000手札2枚

「ば、バカな！なんで出せる！スライム増殖炉は！」

「勘違いしないでスライム増殖炉は『召喚、反転召喚、特殊召喚出来なくなるだけで、セツトすることは』出来るよ。」

俺の言葉に悔しそうに歯噛みした。

グレートまじゅう

「クソ！ゴブリン突撃部隊を生け贄に偉大魔獣ガージェットを攻撃表示で召喚！コイツの攻撃力は生け贄になったモンスターの2倍になるんだぜ！ガージェットでその雑魚を攻撃！」

その言葉に、ガージェットは俺のモンスターを襲おうとするが、

「リバースカードオープン！くず鉄のかかし！攻撃を一度だけ無効にする！」

俺の場に翻ったカードがガージェットの攻撃を防いだ。

「そして、このカードをセツトする！」

俺の宣言にかかしが場にセツトされる。

「ぎげんな！それがある限り攻撃するなって言ってるのと同じじゃねえか！」

その言葉に、思わず首を傾げてしまう。

「ひよつとして、この効果を理解してない？ くず鉄のかかしはセットするから、くず鉄のかかしは1ターンに1度しか使えないよ？」

「ちっ！ クソ！ ターンエンド！」

雑魚ライフ4000手札5枚

伏せカード1枚

偉大魔獣ガーゼットATK2300×2

伏せモンスター1枚

伏せカード1枚 スライム増殖炉

士ライフ4000手札2枚

「俺のターン！ ドロー！ スタンバイフェイズ時にスライム増殖炉の効果発動！ ス

ライムトークンを特殊召喚！」

「はッ！ そんな弱小カードなんか、すぐに踏み潰してやるよ！」

「それはどうかな？ カードを1枚セットしてターンエンド！」

雑魚ライフ4000手札4枚

伏せカード1枚

ゴ布林突撃部隊ATK2300

伏せモンスター1枚 スライムトークンATK500

伏せカード2枚 スライム増殖炉

士ライフ4000

「俺様のターン！ドロー！ゴブリン突撃部隊を召喚！ ガーゼットでスライムトークンを攻撃！ そんなクズカードを踏み潰してやれ！」

「確かに、ガーゼットの効果は強力だけど、それがガーゼットの欠点だ！ 速攻魔法禁じられた聖杯を発動！ ガーゼットの攻撃力を400アップさせる代わりにモンスター効果を無効にする!!」

「ハッ！気でも狂ったか！4500ポイントダメージを受けてくたばれ！」

ガーゼットの一撃を受けて、スライムトークンはバラバラになり、スライムトークンがガーゼットを包み込んだ次の瞬間、ガーゼットは身体中の水分を吸われたかのように干からびた。(雑魚ライフ4000→500→400≡3900)

「ば、バカな！なんでガーゼットがやられる！さてはイカサマをやりやがったな！」  
想定外の事態にいちやもんつけるがそれに首を横に振る。

「禁じられた聖杯によって効果が無効になり、ガーゼットの『生け贄にしたモンスターの元々の攻撃力の倍の数値』になる効果も無効になるんだ。」

よってガーゼットの攻撃力は0。禁じられた聖杯のアップする数値と合計して400。スライムトークンの500には届かずダメージを受けた。

「く、クソ！このままターンエンド！」

雑魚ライフ4000手札4枚

伏せカード1枚

ゴ布林突撃部隊ATK2300

伏せモンスター1枚

伏せカード1枚 スライム増殖炉

士ライフ4000手札2枚

「俺のターン！ドロー！強欲な壺を発動！手札からフィールド魔法、湿地草原、一族の結束を発動！墓地の種族は水族しかないため、同種族のスライムトークンは攻撃力が800アップして、湿地草原の効果により、レベル2以下の水族モンスターのスライムトークンは攻撃力1200アップする！さらにヘルアライランスをスライムトークンに装備！よって同名モンスターが2体いるから攻撃力が1600アップする！サイクロンでその伏せカードを破壊する！！」

破壊したカードは、ミラーフォースか。つくづく成功率が低いな。

「……………あ……………あ……………そんな……………。嘘だ……………こんな男みたいな女に負けるなんて。」

「負けて現実を受け入れろ！！2体で攻撃！！」

スライムトークンの攻撃でゴブリン突撃部隊を干からびかせて、もう一体のスライムトークンがライフをゼロにした。

○○○○

「く、くそ！お、俺が負けただど？」

雑魚が負けたことに衝撃を受けたらしくうずくまっている。所に近づいて言葉をかける。

「約束だ。強奪したカードを返しな。」

「し、知らねえ!!」

「無駄なあがきだ。こういうことに備えて、ポチツとな♪」

俺はそう言ってポケットのテーブルレコーダから先ほどの会話を再生させた。

「し、知るか!!」

そう叫んで逃走しようとする。しかし、

「オラツ!!!」

5D、Sの牛尾そっくりさんがいつの間にか雑魚のそばにいて正拳で鼻っ柱叩き折った。

「弱いものをいたぶってカードを強奪した挙句、その結果を認めずに逃走するとは何事だ!!!」

牛尾のそっくりサンは俺に振り向いて軽く敬礼した。

「違法デュエル及びカード強奪対策委員会ジャツジメント所属の鷲尾頼だ。協力感謝する。……さあ、来い!! 貴様は補習室で一晩補習及び反省文500枚だ!!! 拒否するならば10倍にするぞ!!!」

牛尾のそっくりサンの鷲尾さんは敬礼してから雑魚を捕まえて補習室まで連れて行った。

## デュエル15 真紅の眼と漆黒の龍

「ガンバレ！十代！」

俺の応援に十代は指をたてて応じた。その十代はバットを片手にバッターボックスに立つ。そして、

「いつけー!!」

ピッチャーが投げるストレートをヒットさせる。そのボールはぐんぐん伸びて場外ホームランになった。

「つしやあつ!!」

フェンスを飛び越えていく打球の行方を見ながら一周する。しかし、なんだろう？この違和感、足りない何かがあるような？ホームラン玉に喜ぶジュンコ達の横でそんな事を考えていると、

「すいません!!デツキ構築を考えていたら遅くなりました!」

そう叫んでラー・イエローの生徒が駆け込んできた。?あんな顔いたっけ?転入生かな?考えている間に打順もかなり進んでいたらしく、もう十代の番だ。

「出たな三沢!お前の球もあそこに叩きこんでやる!」



「イヤ。キミのデータは解析済みだ。」

お前はどこぞのメガネマンか？そして、三田沼だっけ？彼が投げる球は十代のバットに掠りもせずミットに収まった。

「コレでラー・イエローの勝ちかな？」

「どうしてよ？攻撃側はラー・イエローだけど、点差は3もあるのよ？その3点差をひっくり返すのは難しいと思うけど？」

「さっきのバツティング勝負では完全に十代の負けだ。あの負けず嫌いの十代の事だ。絶対に三田沼だっけ？彼をマウントに上がらせてバツティング勝負に持ち込ませるだろうよ。例えば、2ストライクでわざとボールの連発するとか。」

その言葉に、明日香はありそうと短く呟いた。

「子供なのね。まあ、そこが可愛いんだけどさ。」

「ほほう？」

ジュンコの言葉に俺はニヤニヤとジュンコを見た。俺だけではなく、明日香とももえもだ。

「な、なによ？皆して？」

「イヤ♪別に？ただ、ジュンコの趣味があんなのだとは思わなかったから。」

ボンッ!! 俺の言葉にジュンコは真っ赤に染まった。

「あ、アタシはじゆ、十代の事なんか……………」

「聞きましたか？浜口さん？」

「ええ。確りとこの耳で聞きました。」

「士は一言も十代の事は口にしてないのにね。」

俺ともえと明日香の言葉にジュンコは耳まで真っ赤に染まった。からかいすぎたか？そう反省していたら、

「ペペロンチイ〜ノオー!!!」

という悲鳴が聞こえた。やっぱり打球がクロノス先生に直撃したのか？

「クロノス先生が心配だから様子を見てくる。」

その場に明日香達を置いて、悲鳴が聞こえた方に向かうとクロノス先生に頭を下げている十代と翔に顔に青アザを作ったクロノス先生がいた。

「大丈夫ですか？」

「シニョーラ沖田。大丈夫なノーネ。」

「すみません。俺の打球のせいで。」

「シニョール三沢。ナイスボールだったノーネ。」

青アザを痛そうにしながらかもクロノス先生はそう誉めてから十代と翔と俺を先に帰らせた。

○○○○

「ぷはあっ!!」

泉の中を潜水していたのだが、息苦しくなり水上に顔を出す。

「な……………。な……………」

ん？いつの間にそこにいたのか万丈目がそこにいた。

「万丈目。どうした？」

何故か顔を真っ赤にしている万丈目に問いかけようと、泉から出た瞬間、

ぶっしやあああっ!!!

と物凄い勢いで万丈目の鼻から鮮血が発射された。

「はあ。またか。奇特な人が多いな。」

眩いて、身体中の水分を拭き取り着替える。着替え終えて、髪をツインテールにした

瞬間、

「猫じゃらしー!」

叫んで万丈目が飛び起きた。何故に猫じゃらしだ？

「起きたか？それで、万丈目？盗んだデッキで何をしたいんだ？」

「な！何でそれを知っている！」

「周囲にばら蒔いたカードを見てみる。」

「え？ ああ！」

拾ったカードを集めて気付いたのか驚きの声を上げた。

「お前はカードに数式を書き込む癖でもあるのか？」

俺の指摘に万丈目は悔しそうに呻いた。

「あ、頼む！ 見逃してくれ明日、三沢に勝たないと、俺は、俺は、」

必死になって懇願する万丈目に俺は、首を横にふる。

「ダメだ。一応言っておくが、お前がやってるのは犯罪だ。それを見逃したら万丈目のためにならない。」

「く、くそ！ なら、デュエルだ！ 俺が勝ったらこの件は黙っていて欲しい！」

「いいだろう。ただし、俺が勝ったら盗んだデッキを持ち主に返して謝罪しろ。」

『<sup>デュエル</sup>決闘!!』

「俺のターン！ ドロー！ ヘルソルジャーを召喚！ ターンエンド！」

万丈目ライフ4000 手札5枚

伏せカード無し

伏せモンスター無し ヘルソルジャーATK1200

「俺のターン！ ドロー！ 手札からジェスターコンフィを特殊召喚！」

俺の言葉に玉乗りピエロが現れた。

「さらにジェスターコンフィを生け贄にマテリアルドラゴンを召喚！」

ジェスターコンフィがガラスのように碎け散り、代わりにドラゴンが出現した。

「マテリアルドラゴンでヘルソルジャーを攻撃!!マテリアルバースト！」

マテリアルドラゴンは強力な閃光を放つてヘルソルジャーを破壊した。(万丈目ライフ 4000—2400+1200=2800)

「くうッ！しかし、ヘルソルジャーの効果発動！このカードが破壊された時に、俺が受けた戦闘ダメージと同じ数値の効果ダメージを相手にも与え……。」

ヘルソルジャーが死に際に際に投げつけた剣。それが俺のライフを回復させたのを見て万丈目に言葉もなかった。(士ライフ 4000+1200=5200)

「マテリアルドラゴンの効果は効果ダメージを回復効果に変換させる。カードを2枚セットしてターンエンド！」

万丈目ライフ2800手札5枚

マテリアルドラゴンATK2400

伏せカード2枚

士ライフ5200手札2枚

「俺のターン！ドロー！手札から死者蘇生を発動！蘇れ！ヘルソルジャーさらに速攻魔法地獄の暴走召喚！ヘルソルジャーをデッキ、手札、墓地から可能な限り特殊召喚！」

万丈目のフィールドに地獄よりの戦士が3体出現した。

「地獄の暴走召喚は俺のモンスターにも影響を及ぼすが、マテリアルドラゴンにはデッキに1枚しかない。」

「さらにヘル・アライランスをヘルソルジャーに装備！同名モンスターが3枚いるから攻撃力が2400アップする！」

バトルだ！ヘルソルジャーでマテリアルドラゴンを攻撃！

マテリアルドラゴンが閃光を放って迎撃するが、ヘルソルジャーはその閃光を吹き飛ばしマテリアルドラゴンを切り裂いた。（士ライフ 5200—1200—2400+2400=4000）

「その瞬間手札1枚をコストにダメージ・コンデンサーを発動！俺が受けた戦闘ダメージ以下の攻撃力のモンスターをデッキから攻撃表示で特殊召喚！来い！軍隊竜！」

俺のフィールドに群をなして軍隊となる竜が姿を現した。

「だけど、ヘルソルジャーの方が攻撃力が上！ヘルソルジャーの攻撃！」

万丈目の言葉にヘルソルジャーは軍隊竜を切り裂いた。軍隊竜は断末魔の悲鳴上げてその場に崩れ落ちた。（士ライフ 4000—1200+700=3500）

「だけど、軍隊竜の効果発動！このカードが戦闘で破壊された時に、同名モンスターをデッキから特殊召喚出来る！」

俺のフィールドに2体目の軍隊竜が出現した。

「く。サーチモンスターだったか。ターンエンド！」

万丈目ライフ2800

伏せカード 無し

伏せモンスター無し ヘルソルジャーATK1200×2 ヘルソルジャーATK

1200+800×3

軍隊竜ATK700

伏せカード1枚

士ライフ 3500手札1枚

「俺のターン！ドロー！軍隊竜を除外してレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！」

俺の場にレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンに似た、より強力な漆黒の竜が召喚された。

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果発動！自分の手札、墓地から同名モンスターを除くドラゴン族モンスターを特殊召喚！来い！真紅眼の黒龍！」

『ギャオオオツ!!!』

ルビーがその力を鼓舞するかのように雄叫びをあげる。

「バトルフェイズ！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンでヘルソルジャーに攻撃！ダークネスメタルフレア!!」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの攻撃により、ヘル・アライランスを装備していないヘルソルジャーが破壊されるが死に際に剣を投げつけて俺のライフを削った。

(万丈目ライフ2800—2800+1200=1200

士ライフ 3500—1600=1900)

「コレで終わり！真紅眼の黒龍でヘル・アライランスを装備していないヘルソルジャーを攻撃！黒炎弾!!」

ルビーがその強力な炎を叩きつけてヘルソルジャーを破壊した。(万丈目ライフ 1200—2400+1200=0)

○○○

「万丈目？約束は覚えているな？」

俺の確認に首を縦に振りながらデッキを差し出す。

「わかってる。これだ。」

俺に数式を書いたカードを差し出すと万丈目はその場を去ろうとする。



「万丈目。卑怯な手段で勝てたとしても、誰も万丈目を見ようともしない。最悪お前を仲間と認めようとしなさい。それを引き替えにオベリスク・ブルーに拘る価値はあるのか？」

去ろうとする万丈目の背中になんか問いかけた。それに対して万丈目は黙考したままその場を去った。その背中が見えなくなったところで、

「良かったの？士？」

「どうやら、俺と万丈目のデュエルを見ていたらしい明日香がそう問いかけていた。」

「やれることはなかったし。果報は寝て待てだ。」

そう答えた俺に対して、明日香はにこやかな笑顔で近づいて、

ガシャン！

とそんな音を立てて俺の手首に手錠をはめてしまった。

「え、えつと明日香さん？この手錠はなんてしようか？」

「士。いい加減野宿はやめてほしいのよ？」

「明日香さん？俺は男ですから女子寮に入れませんか？」

とそう抵抗したけど聞く耳を持たず、明日香の部屋に泊まった。

○ ○ ○

翌日の万丈目の前にラー・イエローの生徒が立っていた。

「三沢。俺は勝つたためにお前のデツキを盗もうとした。すまない。」

「そうか。なら、万丈目。楽しいデュエルをしよう。」

その言葉に唇の端に笑みを浮かばせえ答えた。そして、

「ウォータードラゴンの攻撃!!アクアパニツシャー!!」

三沢の攻撃が万丈目のモンスタを弱体化させ、大津波が砕いた。

「OH!見事なノーネ!シニョール三沢!見事なデュエルなノーネ!オベリスク・ブルーに入寮することを認めるノーネ!」

その言葉に三沢は首を横に振った。

「いえ。それには及びません。自分はデュエルアカデミアの一位になるまでオベリスク・ブルーに入らないと決めましたので。」

「それは残念なノーネ。」

クロノス先生はそう言って残念そうな表情になった。

## デュエル16 SALデュエル

「アニキ！士さん！」

教室で十代と話をしていた時、翔が大急ぎで駆け込んできた。

「どうした？翔？」

「アニキ！万丈目君がいなくなっちゃったツスよ！」

「なんだって！」

翔の言葉に、十代が驚いて立ち上がった。

「はっ！良いザマだぜ！」

「まったくだ。弱いだけのオベリスク・ブルーの恥さらしがいなくなってせいせいするぜ！」

万丈目の失踪をオベリスク・ブルーの生徒が嘲笑うが、

「はっ！そのオベリスク・ブルーの恥さらしに手も足も出さず一方的にやられたのはどこの誰だっけ？」

「ちようど恥さらしがどうのこうのと言っていた奴だと思うんだが？取巻。」

万丈目を恥さらしと嘲笑っていた奴が万丈目の取り巻きに笑われ、カッと赤くなるのを無視して取巻は翔に問いかける。

「翔。万丈目さんがいつから行方がわからなくなったのはわかるか？」

「え？ううん。ボクも行方不明になったってさっき聞いたばかりだから。」

「なら、探しに行こう。雷蔵。お前は校長先生に報告してくれ。」

「わかった！頼むぞ取巻！」

取巻の言葉に、雷蔵と呼ばれた男が応え駆け出した。取巻が駆け出そうとしたところで、

「待てよ！」

十代に止められた。

「俺達も手伝う！俺は誰にも見られずに校舎の外に出れる抜け道を知っている！」

「ありがとう。十代。」

取巻がそう言つて、十代を連れていった。

「ま、待つツス！」

翔と隼人と俺の3人が慌てて、十代の後を追いかけた。

○ ○ ○

「さて、万丈目を探しに……………」

「授業を抜け出してどういうつもりかしら？」

さっそく探しに行こうとしたところでそう呼び止められた。振り向くと明日香達が鋭い眼差しでこちら

を見ていた。

「万丈目を探しに行くんだ！誰にも言うなよ？」

「別に良いけど、私達も協力させてくれないかしら？」

「わたくし達も万丈目さんを放っておけませんわ。」

「助かる。」

俺はそう言つて、明日香に手を差し出すと明日香はやさしく微笑んでその手を握つた。

「ううう。」

親の仇が如くこちらを見る翔に首をかしげながら、森の中を歩いていた。

「万丈目!! どこだ!!」

「万丈目君!! 出てくるツす!!」

皆が周囲に呼びかけている間に俺は隼人に問いかけていた。

「隼人。何で翔が俺をにらんでいたんだ？」

「はあ。士は鈍感なんだな。」

「??? 鈍い? ……ああ。そういうことか。」

「翔は明日香が好きで、手を握っていた俺に嫉妬していたというわけか。」

「ハア。惜しいんだな。」

「という事は雪乃か?でも、この万丈目探索隊には参加してないし。」

「翔。ゴメン。翔の気持ちは全然気づかなかった。」

「つ、士さん!」

俺の言葉に翔は笑顔を浮かべていた。

「翔が誰の事を想っているのか知らないけど、大切な友人として全力で応援するよ。」

俺の言葉に翔は固まってしまった。そして、

「うわああああーんんんん!!! 士さんのぶわつかああッ!!!」

大泣きして走り去ってしまった。

「……………あれ?何でだろ?」

大泣きした原因が理解できず首をかしげていると、

「ウツキー!」

腕にデュエルディスクをつけたサルが襲いかかる。

「うわあ！ さ、サル！」

驚きながらサルを捕獲しようとするがサルは巧みにかわしてしまう。そして、

「あぁーれえー!!」

ももえを拉致つて逃走してしまった。

「待て！ このサル！」

取巻がそのサルを追いかけようとしたところで、茂みから爺さんとメイン・ブラックが飛び出してきた。

「デュエルディスクをつけたサルを知らないか？」

「それなら、アッチへ走つていったが、何か知っているのか？」

答えながら問いかけるが爺さんは問いを無視してメイン・ブラックに指示を出した。

「聞けよ。人の話。」

俺が軽く蹴りを入れてようやくこちらを見る。

「何をする！」

「コチラの質問の答えがまだだ。あのサルはなんなんだ？ 爺さん達は何を知っている？」

俺の問いに爺さんは不愉快そうに鼻を鳴らしてから答えた。

「そんなに知りたいなら教えてやる。あのサルは、我が研究所から逃げ出したデュエル

ザルだ。」

「デュエルザル?」

「そうだ。それもSuper Animal Learning略してSALだ。」

SALってまんまだな。サルじゃなかったSALを追いかけていくとSALが誰かとデュエルをしている。

「って翔?」

○○○○

SIDE 翔

「グスツグスツ。土さんのバカ。」

『一生ただのお友達』って言われてショックで泣き出していると、

「ウツキー!」

「助けてください!」

後ろから動物の鳴き声と聞き覚えのある声が聞こえたので後ろに振り向くとお猿さんがももえさんを抱えて走っていた。何でデュエルディスクをつけているかはわからないけどそれなら打てる手は一つ。

「お猿さん!ボクとデュエルだ!ボクが勝ったらボクの願いを二つ聞け!代わりにお猿



さんが勝ったらお猿さんの手伝いをする！」

ボクの言葉にお猿さんは頷いて木の上に上り太い枝のももえさんを置いた。

〇〇〇〇  
『決闘!!』<sup>デュエル</sup>

僕の言葉にあわせてお猿さんから声が聞こえた。たぶんお猿さんにつけられた機械が訳したんだろう。

「僕のターン！ドロー！スチームロイドを召喚！」

ボクがカードを置くとフィールドに人の顔のついた汽車が現れる。

「さらに、カードを2枚セットしてターンエンド！」

翔ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

スチームロイドATK1800

「私のターン！ドロー！手札から怒れる類人猿バーサークゴリラを召喚！」

お猿さんのフィールドに狂気にまみれたゴリラが現れた。

「翔！」

お猿さんの後ろからアニキが声をかけてきた。

「所長！麻酔銃を撃ちますか？」

兄貴と一緒に来た黒ずくめの一人がお爺さんに声をかけた。

「構わん。予想外の結果が出るかもしれん。」

「そうか。このお猿さんこのお爺さんの研究所から逃げ出してきたんだ。」

「怒れる類人猿バーサークゴリラでスチームロイドを攻撃!!バーサークゴリラバースークウツキー!!」

怒れる類人猿はいきり立ってスチームロイドに襲い掛かるうとする。

「マズイわ!!スチームロイドは攻撃するときは500ポイント攻撃力がアップするけど、攻撃される時攻撃力がダウンしちゃうわ!!」

「ジュンコさんが襲いかかる怒れる類人猿バーサークゴリラに焦ったように声を上げるがまだまだ甘い!

「速攻魔法発動!禁じられた聖杯!攻撃力を400アップする代価にモンスター効果を無効にする!この効果でスチームロイドの効果を無効にする!」

聖杯を注がれたスチームロイドはその力を高めて怒れる類人猿バーサークゴリラを撃破した。(SAL  
ライフ4000-1800-400+2000=3800)

「ウキ……。カードを2枚セットしてターンエンド。」

翔ライフ4000手札3枚

伏せカード2枚

スチームロイドATK1800

伏せカード2枚

SALライフ3800 手札3枚

「ボクのターン！ドロー！ジャイロイドを召喚！ジャイロイドを召喚！2体でダイレクタアタック！」

「ウッキ―！トラップカード攻撃の無力化を発動！攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了！」

時空の渦がスチームロイドとジャイロイドの攻撃を受け止めた。

「ちえつ。ターンエンド！」

翔ライフ4000 手札3枚

伏せカード1枚

スチームロイドATK1800 ジャイロイドATK1000

伏せカード1枚

SALライフ3800 手札3枚

「私のターン！ドロー！怒れる類人猿を召喚！さらに野生解放を発動!!」

怒れる類人猿はいきりたつてドラミングをしだした。

「怒れる類人猿でスチームロイドを攻撃！」

お猿さんの宣言に怒れる類人猿はスチームロイドを殴り破壊した。

「トラップ発動！ガードブロック！ダメージを1度だけ無効にして1枚ドロー！」

今回は凌げたけど、多分アレがある。だとしたらダメージは覚悟しなければならぬい。

「さらにリバースカードオープン！キャトルミューニケーション！フィールドの怒れる類人猿を回収して怒れる類人猿を召喚！」

やっぱり。野生解放は発動したら破壊されてしまうデメリットがある。でも、あれで回収する事でデメリットを回避したんだ。そして、

「バトルフェイズ中の特殊召喚だから怒れる類人猿はまだ攻撃出来る！ジャイロイドに攻撃！バーサークウツキー！」

怒れる類人猿がジャイロイドを攻撃しようとするが、巧みにかわしていたが、空振りした一撃が地面を叩きその破片が僕を直撃した。(翔ライフ4000-2000+1000=3000)

「ターンエンド！」

翔ライフ3000 手札4枚

伏せカード0枚

ジャイロイドATK1000

怒れる類人猿ATK2000

伏せカード0枚

SALライフ3800 手札3枚

状況はかなりマズイ。ライフはまだ半分以上あるけど相手が上だし、フィールドもジャイロイドしかない。でも、ももえさんを助けなきゃいけない。だから、

「ボクのターン!! ドロー!!」

このドローにすべてをかける!!

「手札から死者転生を發動! サブマリンドロイドを墓地に送ってスチームロイドを回収!  
! さらに融合を發動! ジャイロイドとスチームロイドを融合してスチームジャイロイドを融合! スチームジャイロイドで怒れる類人猿バーサークゴリラを攻撃!」

スチームジャイロイドの攻撃がバーサークゴリラを破壊した。

「さらに融合解除を發動! スチームジャイロイドを融合デツキに戻してジャイロイドとスチームロイドを特殊召喚!」

「ウキー!!」

ボクのフィールドにモンスターが特殊召喚されると、別のお猿さんが現れて、お猿さんの前に立ちはだかった。

「そっか、お猿さんは仲間のもとに帰ってたんだね?」

「うき……。」

ボクの問いにお猿さんは寂しげに頷いた。

「ごめんね。デュエルはいつも真剣勝負だよ。2体でダイレクトアタック!」

ボクの宣言に2体のブークロイドがお猿さんにダイレクトアタックを決めた。

○ ○ ○

「お猿さん。約束は覚えてるっすよね?」

ボクの確認にお猿さんは哀しげに頷いた。

「なら、一つ目のお願ひ、ももえさんを解放して。」

ボクの言葉にお猿さんは木の上にももえさんを抱き上げて地面の上に降りた。

「今だ! 捕まえるのじゃ!」

お爺さんの言葉に黒づくめの男たちが飛びかかろうとして

「待っっス!」

とっさにお猿さんの間に割って入る。

「お猿さん! 二つ目のお願ひっス! 仲間のもとで暮らすっス!」

「ウキ?」

言っている意味が分からなかったのか首をかしげるお猿さんにボクは怒鳴った。

「早く逃げるっス! また研究所に戻されちゃうっス!」

「ウキッ！」

その言葉にお猿さんは仲間のもとに走った。

「小僧！ どういうつもりだ！」

「ボクはお猿さんに勝つたらお願いを聞いてとは言ったけど、研究所に戻れと言った覚えはないよ？ お猿さんはこのまま野生に返すツス！」

「フン！ 邪魔だ小僧！」

ボクの言葉にお爺さんはボクを突き飛ばして、お猿さん捕まえようと動いたけど、  
「ハイストツプ。そこまでだ。」

士さんがお爺さんの妨害に入った。

「こんなことが世間に広まったらまずいのは爺さんの方だよ動物虐待で訴えられるよ。  
ついでにこの件に関しては黙っているつもりはないよ？」

士さんの言葉に忌々しそうににらんで黒づくめの人達に撤収するように指示した。

○ ○ ○

S I D E 士

「さて、予想外のことがあったけど、万丈目をさがしに」

「その必要はないのニャ。」

この場にいるはずのない第三者の声が聞こえてすぐそばの茂みから大徳寺先生がこ

ちららに向かつて歩いてきた。

「朝早く万丈目君が船で出て行くところを見てしまったのニヤ。それと、取巻君に慕谷君に託があるのニヤ。」

「え？俺と雷蔵にですか？」

取巻君の問いに大徳寺先生は手紙を差し出した。

『太陽、雷蔵。黙っていなくなつてすまない。デュエルにとつて大事なものを見つけ出したから、一度見つめなおしたいからデュエルアカデミアを離れようと思う。二人とも健康には気を付けてくれ。後、帰ったら楽しいデュエルをしよう。』

「ありがとうございます。」

手紙を一通り読んだ取巻が大徳寺先生に頭を下げて海の方に向かつて叫んだ。

「絶対帰ったら楽しいデュエルをしましょう!!万丈目さん!!」



## デュエル17 月一試験2

「土さん。冬休みはどうするツスか？」

今年最後の月一テストを目前に控えたある日、皆で机に向かって勉強中、翔が問いかける。なぜだが知らないけど、明日香と雪乃がじつと聞き耳をたてている。

「デュエルアカデミアに残るよ？」

どうやら、こちらの世界にトリップしたのは俺だけらしく自宅には誰もいなかった。帰っても誰もいないクリスマスに正月なんて寂しいし。

「そ、そうツスか？じゃあ、ボクも残るツス。」

十代が残るの知っているからかな、一人つきりにならないようにしているだな。でも、その気遣いって意味無いと思うな？だって、ジュンコも残るし、せつかく二人きりになれるチャンスなのに、邪魔したら悪いし。

「では、私も残りますわ。」

恋する乙女なももえが何故か俺を睨むような視線を送ってからそう言った。

「えっと、私も残ろうかしら？」

おや？明日香が翔を睨みながらそう言った。あ。翔も負けてない。二人の間で火花

が散ってるな。二人とも何で睨みあっているんだろう？そんなことを考えている間も夜はふけていく。

○ ○ ○ ○

そして始まった月一テスト。筆記試験の結果はかなり自信があり後は、実技なのだが、対戦相手が相手だけに油断は出来ない。

「よろしくね。土。」

金色の髪を靡かせて笑みを浮かべて言う明日香に俺は頷いてからデュエルディスクを構える。

○ ○ ○ ○

『決闘!!』  
デュエル

「私のターン！ドロロー！エトワール・サイバーを攻撃表示で召喚！カードを1枚セットしてターンエンド！」

明日香ライフ4000手札4枚

伏せカードカード1枚エトワール・サイバーATK1200

「俺のターン！ドロロー！」

エトワール・サイバーに伏せカードか。ドゥーブルパッセか？だとしたらしたら、進歩がないな。

「手札からチェミナイエルフを召喚！チェミナイエルフでエトワール・サイバーを攻撃！」

双子のエルフが明日香のフィールドのバレリーナに攻撃しようとするが、

「かかったわね！トランプ発動！魔法の筒！攻撃を無効にしてその攻撃力だけ相手に効果ダメージを与える！」

明日香のフィールドに現れた筒が攻撃を吸収して打ち返した。

「なーうわあー！」

その攻撃に俺のライフが半分近く削られてしまう。（士ライフ 4000—1900

||2100）

「ビツクリした。はめるなんてやるな。明日香。」

「まあ、以前教えてくれたことだからね。」

「俺はカードを2枚セットしてターンエンド！」

明日香ライフ4000手札4枚

伏せカードカード0枚枚エトワール・サイバーATK1200

チェミナイエルフATK1900

伏せカード2枚

士ライフ2100手札4枚

「私のターン！ドロー！手札から融合を発動！手札からブレードスケーターとフィールドのエトワール・サイバーを融合してサイバーブリーダーを召喚！」

明日香のバレリーナにスケーターが融合して一人の女戦士が現れた。

「バトルフェイズよ！サイバーブリーダーでチェミナイエルフを攻撃！」

サイバーブリーダーの攻撃がチェミナイエルフを破壊し、俺のライフをその差200削る。(士ライフ 2100-2100+1900=1900)

「私はカードを2枚セットしてターンエンド！」

明日香ライフ4000手札0枚

伏せカードカード2枚サイバーブリーダーATK2100

伏せカード1枚

士ライフ 1900手札4枚

「俺のターン！ドロー！手札から見習い魔術師を攻撃表示で召喚！カードを2枚セットしてターンエンド！」

明日香ライフ4000手札0枚

伏せカードカード2枚サイバブリーダーATK2100

伏せカード3枚

士ライフ 1900手札2枚

「私のターン！ドロー！手札から一族の結束を発動！」

ゲツ！あのカードは墓地の種族が一種類の時、同種族モンスターは攻撃力を800アップする効果の永続魔法！素材となった、エトワール・サイバブリーダーもブレードスケーターもどちらも戦士族。だから攻撃力がサイサイバブリーダーの元々の攻撃力2100から800を足して2900になる！

「コレで終わりよ！サイバブリーダーで見習い魔術師を攻撃！」

「リバースカードオープン！マジカルシルクハット！自分のデッキ「伏せカード発動！おじやまトリオ！士のフィールドに3体のお邪魔トークンを特殊召喚！」くっ！ならチエーンで強制終了を発動！俺のフィールドにあるマジカルシルクハットを墓地に送りバトルフェイズを終了！」

『アラン。邪魔モン。』

お前らが邪魔だ。明日香のフィールドの伏せカードが翻った時、そのカードから3体のトークンが現れ、シルクハットモンスターを破壊し、墓地に送った。

「ど、どういふことツスカ！マジカルシルクハットは、」

「必ずデッキから2枚の魔法か罫を使わなくてはならない。だけど、俺のフィールドにはすでに4体のモンスターがいてこれ以上セットすることが出来ないからマジカルシルクハットは不発して対象となつたカードは墓地に送られるんだ。」

何故そうなつたかわからなかつたのか戸惑つた声をあげた翔にそう教えた。

「私はこれでターンエンド！」

明日香ライフ4000手札0枚

伏せカードカード2枚サイバーブリーダーATK2100

見習い魔術師ATK400 お邪魔トークン×3DEF1000

伏せカード2枚 強制終了

士ライフ 1900手札2枚

「強いな。明日香。」

「たくさんデュエルしたからかしらね。それも大切な貴女に追い付きたくて。」

そつか。そんな風に考えてくれたのか。

「明日香。ありがとうな。俺も明日香は大切な友達だぜ？」

俺の言葉に明日香は呆れた表情でため息を吐かれ、翔はホツとした表情で胸を撫で下ろした。

「でも勝つのは俺だ！ドロー！」

明日香の手札を増やすことになるが仕方ない。この手札じゃ動けない。

「壺の中の魔術書を発動！互いに3枚ドロー！見習い魔術師を生け贄にブラックマジシャンガールを召喚！」

『なっ！に！いっ！つ！！』

俺がフレアを召喚すると皆がざわめきだした。

『ウフフ♪』

『ウオオツ！！』

フレアがウインクすると観客が騒ぎだした。

「さらに、死者蘇生でチェミナイエルフを攻撃表示で特殊召喚！速攻魔法ディメンションマジックを発動！俺のフィールドにあるお邪魔トークンを生け贄に手札からブラックマジシャンを攻撃表示で特殊召喚！」

『ブラックマジシャンもだと！』

俺がブラックマジシャンを特殊召喚すると観客が驚いている。

「さらにディメンションマジックの効果により明日香のフィールドのサイバーブレーダーを破壊する！！」

『ハアアアツ！！！！』

フレアとブラックマジシャンの師弟の攻撃によりサイバーブリーダーが破壊された。  
 ……フム。サイバーブリーダーが破壊されても動じないところを見ると、攻撃妨害の  
 カードが伏せられてるな？なら、

「手札から黒・魔・導を発動！相手のフィールドの魔法、罠カードを全て破壊する!!」

ブラックマジシャンが破壊したカードはミラーフォースか。マジで仕事をしてない。

「どうやら、私の負けね。」

「そうだな。2体のダイレクトアタック！」

フレアとブラックマジシャンの同時攻撃が明日香のライフを削りきった。（明日香ラ

イフ 4000—2100—2500—600）

○○○

「……………寂しくなるツスね。」

島から出て自宅に帰るオシリス・レッドの生徒に翔はそう声をかけていた。

「コラコラ。今生の別れじゃないんだ。次に出会えるのを楽しみに待ってれば良いんだ。」

オシリス・レッドの生徒の言葉に、翔は笑みを取り戻した。

「さてと、つ……………ぎ……………は……………」

明日香と翔は船に乗り込もうとする俺を見て固まっていた。



「つ、士さん！ど、どうしてその船に乗ろうとしてるッスか！」

「そ、そうよ！島に残るって言ってたじゃない！」

何故か焦ってる明日香と翔の問いに答えを返した。

「それなんだけどき、実は昨日になってある人に呼び出されたんだよ。」

断ろうにもホテル代等は向こうなのだから断りづらい。

「アラ？貴女も帰るの？」

ムギユツ！いつの間にか雪乃が抱きついてきた。

「実は、私もなの。泊めてくれないかしら？」

俺の家に何の興味が有ったか知らないけど、それは不味くないか？

「雪乃。いくらなんでも二人きりで一つ屋根の下にいるのはちよつと問題じゃないか？」

「？」

「アラ？どんな問題があるのかしら？」

答えるより早く、船員が時間になったことを告げたため俺達は船に乗った。

『土ー!!カムバック!!』

二人の叫びを背に船は発進した。

## デュエル18 予想外?青眼VS青眼

波に揺さぶられて、数時間したところで、ようやくと本当に来れた。船を降りたところで、

「沖田土様ですね?」

メインブラックの男の人が手の中の写真と俺を交互に確認して声をかけてきた。「そうですけど。アナタは?」

「御紹介が遅くなりました。私は主より案内役を任せられました磯野と申します。」

磯野さんと名乗った人はそう言うてから、深々と頭を下げた。

「既にご存知のようですが、沖田土です。」

「私は士の付き添いで藤原雪乃よ。」

磯野さんの自己紹介に俺達も名乗り、磯野さんの車に乗り、目的地に向かった。

「で…でつかい。」

俺は目の前に建つビルを見上げていた。

「こちらです。」

磯野さんは俺達を案内する。雪乃はなれたもので、平然と磯野さんの後を追いかける。それに対して、俺は未だに呆然としていたが、

「置いてくわよ？」の雪乃の言葉に慌ててついていく。磯野さんの後をついていき、会長のドアに立ちノックした。

「オーナー。私です。沖田士を連れてまいりました。また、藤原雪乃も同伴でついて来ました。」

「入れ。」

その言葉に磯野さんはドアを開けた。

「貴様か。沖田士は？」

「ええ。電話以外ははじめましてですね。海馬オーナー。」

俺を呼び出した張本人、海馬瀬人は俺と雪乃を見て頭を下げた。

「その節はすまなかった。まさかデュエルアカデミアの教師がタイタンを雇うなどするとは思わなかった。」

「それは別にいいです。それより、わざわざ呼び出してたんですか？」

「それなんだが、何故、ブラック・マジシャン・ガールのカードを持っている？」

それに対して、少しの間黙考して首を横に振った。

「それに関しましては、今は言う事が出来ません。少なくとも今はですが。」

そうやってチラリと視線を雪乃に向ける。

「じゃ、私は外で待つてるわ。」

「磯野。お前もだ。」

「はい。」

海馬の指示に一礼して磯野さんはドアに向かい、雪乃もその後を追いかけて退室した。

「これからする話は自分も他人から聞かされたら、信じてもらえないような話だということ念頭に話を聞いてください。」

俺の言葉に海馬は首を縦に振った。

「俺はこの世界の事を漫画という形で知られている世界からこの世界の俺に憑依して来ました。」

「憑依だと?」

海馬の言葉に首を縦に振って答える。

「ええ。何故、向こうで俺が持っていたカードとそれ以外のカードを持っていたのか、わかりませんがそれで間違いないと思います。俺がこの世界に来たのが1年前ですから、転生ではないし、トリックパー体ごとこの世界に来たのなら俺の戸籍があるのはおかしいですから、これで間違いないと思います。」

「……この世界に来たきつかけは?」

その問いに首を横に振った。

「まったくわかりません。なにせ、憑依？する前は、ベッドの上で寝てただけですし。目が覚めた時点で、この世界に来てましたから、さっぱりです。」

そう答えてから、ふと疑問に思ったことを問いかける。

「よく、俺が言ったことを信じてくれましたね？」

オカルト嫌いの海馬なら信じるどころか、キレかねないと思っただけに拍子抜けというか、あつさり信じてくれてラッキーというべきか微妙な心境だ。

「言うだけあって確かに信じられない話だった。狂人は自分から、信じられないだろう話を普通なら信じてくれないことを前提で話などしない。」

その言葉に笑みを浮かべ、一つの言葉を口にした。

「海馬オーナー。お願いがあります。」

「だが、断る！」

…まだ何も言つてN E E !

「俺達はデュエリストだ言いたいことがあるならデュエルで語れ！」

出たよ。デュエル脳。別にイヤじゃないけどさ。

『決闘!!』  
デュエル

「俺のターン！ ドロー！ 手札から青き眼の乙女を召喚！」

俺がフィールドにカードを置くと、そのカードを興味深げに見つめていた。

「それが、貴様の世界のカードか?」

「はい。その通りです。チューナーというこの世界にはまだないカテゴリーのモンスターなんです。さらに、カードを二枚セットしてターンエンド!」

士ライフ4000手札3枚

伏せカード2枚

青き眼の乙女ATK0

「俺のターン! ドロー!」

海馬はそう言つて勢いよく引いたカードを見てニヤリと笑つた。

「貴様にも伝説を見せてやろう! 正義の味方カイバーマンを召喚!」

さっそく出たのか。

「その様子だと知つているようだな! 正義の味方カイバーマンを生贄に手札から、青眼の白龍を特殊召喚!!」

カイバーマンはステータスこそ低いけど、その身を生贄とすることで手札から青眼の白龍を特殊召喚する能力を備えている。

「青眼の白龍の攻撃! 滅びの爆裂疾風弾!!」

海馬は自信満々に攻撃を宣言するけど、それこそが俺の狙つた瞬間でもあるのだ。

「青き眼の乙女の効果発動！」

そう宣言した瞬間、青き眼の乙女のカードを守備表示に変更した。

「攻撃を無効にして、表示形式を変更することで、デッキ、手札、墓地から青眼の白龍を特殊召喚!!」

そう宣言してから、デッキから青眼の白龍を俺のデッキからサーチした。

「何!!」

海馬は俺のデッキから青眼の白龍が呼び出されたことに驚きの声を上げる。だが、間違はなく、俺のデッキから青眼の白龍を置いてみせると青眼の白龍を凝視した。

「…カードを一枚セットしてターンエンド！」

士ライフ4000手札3枚

伏せカード2枚

青き眼の乙女ATK0 青眼の白龍ATK3000

青眼の白龍ATK3000

伏せカード一枚

海馬ライフ4000手札3枚

「俺のターン! ドロー! 手札から暴風竜の防人を攻撃表示で召喚!! 効果を発動!! このカードを青眼の白龍に装備!! バトル! 青眼の白龍で海馬の青眼の白龍を攻撃

！」

俺の攻撃宣言時に海馬はにやりと笑って手札の天使を墓地に送った。

「ダメージステップ時にオネストを発動!! 俺の青眼の白龍は貴様のフィールドの青眼の白龍の攻撃力分だけアップする!」

俺の青眼の白龍の分だけ攻撃力をアップして返り討ちにしようとした。(土ライフ  
4000-3000-3000+3000=1000)

「暴風竜の防人の効果で青眼の白龍の破壊をこのカードが身代わりとなることで無効にする!」

防人のカードを墓地に送り破壊を無効にした。

「手札からワンフォーワンを発動! 手札の正義の味方カイバーマンを墓地に送って伝説の白石を特殊召喚! フィールド上のレベル8青眼の白龍とレベル1チューナーモンスター伝説の白石をチューニング!」

俺はそう言ってフィールド上の青眼の白龍と伝説の白石を墓地に送った。(★1+☆  
8=☆9)

「シンクロ召喚!! 蒼眼の銀竜!!」

「それが貴様の世界のカードか。」

俺のフィールドに特殊召喚されたモンスターを見て海馬はそれを興味深く見ていた。



「まあね。チューナーとチューナー以外のモンスターという条件を満たし、かつ、召喚したいモンスターのレベルと等しくなるようにれ別を調整して墓地に送ることで融合デッキ特殊召喚できる召喚シンクロ召喚でシンクロ召喚によって召喚されるモンスターをシンクロモンスターっていうんだ。それと伝説の白石の効果で青眼の白龍をデッキから手札に加える！青き眼の乙女を攻撃表示に変更してターンエンド！」

士ライフ1000手札3枚

伏せカード2枚

蒼眼の銀竜ATK2500青き眼の乙女ATK0

青眼の白龍ATK3000

伏せカード一枚

海馬ライフ4000手札2枚

「俺のターン！ドロー！手札から融合を発動！！手札の青眼の白龍2体とフィールドの青眼の白龍を融合させて、青眼の究極竜を融合召喚！！バトルフェイズ！！青眼究極竜で蒼眼の銀竜を攻撃！アルティメットバースト！」

「伏せカードオープンくず鉄のかかし！攻撃を無効にしてセット！」

必勝の攻撃を外され海馬は悔しそうに表情を歪める。しかし、気を取り直して伏せカードを発動させた。

「伏せカード融合解除を発動! 青眼の究極竜を融合デッキに戻して青眼の白龍3体を特殊召喚! バトルフェイズ中の特殊召喚により青眼の白龍にも攻撃が可能! 青き眼の乙女に攻撃!」

「和睦の使者を発動! ダメージを0にする! さらに青き眼の乙女の効果により表示形式を変更して青眼の白龍の効果を無効にしてさらに青眼の白龍を特殊召喚!!」

「く。これでターンエンド!」

士ライフ1000手札3枚

伏せカード0枚

青眼の白龍 ATK3000 青き眼の乙女 DEF0

青眼の白龍 ATK3000×3

伏せカード0枚

海馬ライフ4000手札0枚

「俺のターン! ドロー! 蒼眼の銀竜の効果で墓地から青眼の白龍を特殊召喚! さらに融合発動! 手札の青眼の白龍とフィールドの青眼の白龍を墓地に送り青眼の究極竜を融合召喚! 団結の力を青き眼の乙女に装備! そして青き眼の乙女の表示形式を変更! バトルフェイズ! 青眼の究極竜で青眼の白龍を攻撃!! アルティメットバースト!」

その言葉に海馬は青眼の白龍を墓地に送った。(海馬ライフ4000—4500+3000=2500)

「とどめに融合解除を発動！ 青き眼の乙女で青眼の白龍を攻撃！ さらに青眼の白龍で残った青眼の白龍を攻撃！」

その言葉に俺と海馬は同時にカードを墓地に送った。これで残るは俺のフィールドのモンスターのみ。そして海馬はその攻撃を自身の体で受けるのみだ。(海馬ライフ2500—4000+3000=1500)

「残りの青眼の白龍2体と蒼眼の銀竜でダイレクトアタック!!」

残りの3体の攻撃が海馬のライフを焼き尽くした。(海馬ライフ1500—3000×2—2500=1500—6000—2500=1500—8500=7000)

「俺の負けか。」

海馬は青眼の白龍の攻撃で尽きたライフを見てつぶやいていた。

「海馬オーナー。頼みが3つあります。」

海馬はその言葉に笑みを浮かべた。

「敗者に沈黙は許されん。言ってみろ。」

その言葉に頼み事を口にした。

## デュエル19 アンチリスペクト

「サイバー・エンド・ドラゴンのダイレクト!!」

俺の場にいるモンスターが対戦相手のライフを削りきった。何故こういうことをしているかというと、海馬に頼まれたのだ。

時は海馬とデュエルした直後までさかのぼる。

「そちらの頼みを聞く代わりにこちらからも頼みがある。」

海馬はそう言ってディスクから紙束を取り出した。その紙束を受け取ってそれに書かれていることを確認した。受け取った紙束はとあるカード強奪集団に関する資料だ。

「アンチリスペクト?」

「ああ。名前から想像出来るだろうが、サイバー流に敵対するために作られた組織だ。もともとはサイバー流がもてはやされロック、バーン等のように、リスペクトに反するカードの使い手が自分達の居場所を造るために集まったのが始まりだっのだが、ある日境界に穏健派と過激派の2つに分かれ別々の道を歩むことになった。」

「やたらと詳しいですね?」

いくら何でも成り立ちまで理解しているなんて難しいのでは?

「実は少し前に穩健派からの接触があつてな。情報はその時にもらつたんだ。」  
「穩健派が？何で？」

「過激派の暴走に穩健派も過激派のサイバー狩りを無視する訳にはいかなかつたらしくてな。情報の提供と労働を見返りにアンチリスペクトの討伐を依頼してきたんだ。」

成る程。それで、詳しくたわけだ。

「わかりました。その頼みを引き受けます。」

了承の言葉に海馬は頭を下げていた。

「…助かる。」

…とまあこんな事があつてサイバー流の門下生のフリしていろいろな人達とデュエルして3日目。そろそろ、アンチリスペクトも動きそうだ。

「…キサマ。サイバー流の門下生だな？」

俺を隠れて様子を見ていた連中が隠れるのをやめて姿を現れた。

「だつたらどうする？」

「俺達とデツキをかけたアンティデュエルをしてもらおう。負けた方がデツキをすべて失う。」

俺を囲んでいる連中を見回してから問いかける。

「俺に拒否権は？」

「あると思うか？」

まあこの状況でメリットがないんで帰りますって言っても納得しないか。

「いいだろう。ただし、こつちが勝ったらデッキの代わりにお前たちのアジトを教えろ。」

「いいだろう。」

○○○○

『決闘!!』  
デュエル

「俺のターン！ドロー！」

相手達がどんなデッキでくるかわからない。このターンで終わらせてもらう。

「手札から天使の施しを発動！3枚ドローして2枚捨てる！」

よし！コレで必勝パターンが揃った！

「この2枚を捨てて手札から永続魔法生還の宝札を発動！コレでターンエンド！この瞬間、暗黒のマンティコアの効果発動！墓地に送られたターンのエンドフェイズ時に手札、フィールドの獣、獣戦士のどちらかの種族を1枚墓地に送る事で墓地のこのカードを特殊召喚！」

墓地から咆哮を放ち姿を現す黒い翼をはやした獣。

「生還の宝札の効果でドロー！そして、墓地に送ったカードも暗黒のマンティコアで

あるため、フィールドの暗黒のマンティコアを墓地に送り、暗黒のマンティコアを特殊召喚！そして、生還の宝札の効果でドロー！」

「こ、これは、まさか!!」

俺がやろうとしていることに気付いたのか驚きの声を上げた人がいたがもう遅い。

「そうだ。無限ループだ。そして、デッキには封印されしエクソディアを入れてある。

この無限ループなら、1ターンのみでエクソディアを完成させることは可能だ。」

そう言いながらドローを続けていく。ドローを続けていくうちに、

「よし。そろったよ。エクソディア。俺の勝ちだ。」

そろった手札を見せた瞬間、背後に強大力を持つ魔神が出現した。

「エクソディアの攻撃!!怒りの業火!!エクゾードフレイム!!」

エクソディアが炎を放ち敵のライフを0にした。

「さて、俺の勝ちだな？」

手札をデッキに戻してから問いかける皆が仇を見るかの表情で俺を見ていた。

「そんなに睨んでも無駄。勝ちも勝ちだ。お前らのアジトの場所を教えろ。」

「くっ！だっ誰が言うか!!」

俺の言葉に不審者達は叫びをあげるが、それに溜め息を吐いた。

「ハア。何言ってるんだが？アンティデュエル持ち出したのはそちらだろうが。その

デュエルに負けたのそちらがこちらの条件を拒むってどこのジャイアンだ？ 図体ばかりでかくてみつももないとは思わないのか？」

俺の問いに殺気立っていたようだが、その人達に声をかける人がいた。

「そうだな。ちよつと往生際が悪すぎる。」

その声をかけてきた人物は俺に歩みより、問いかける。

「彼等連れて行って構わないかな？ 代わりに君の条件は俺が教えるからさ。」

「高梨さん！ そんなことをする必要無いです！」

「黙りな。そちらがよく考えもせず、アンティ持ち出したから俺がその尻拭いするハメになったんだろうが。それにコイツはサイバー流の人間じゃない。アンティを挑んだ連中をつぶしてアジトを聞き出す為のエサだ。つまりお前達は釣られたのさ。」

抗議するフード達を言葉だけで黙らせる。

「まあ、俺としては約束を実行してくれるなら、誰が肩代わりしても文句は挟まないけど。」

そう言って不審者達を押しつけて彼に近づくとメモを渡した。几帳面な性格らしく、マスをはみ出さないように丁寧な字で住所が書かれていた。

「俺としては君がコチラに来てくれるなら嬉しいんだけどな。」

彼はそう言って不審者達を連れて行った。



## デュエル20 帝王の迷い

「なるほど、そこにアジトがあったのか。」

海馬が俺から渡されたメモを見ていた。童美野町の町外れにある廃工場。そここそがアンチリスペクトのアジトらしい。

「明日、襲撃する。その入り口に人を集めよう。今日はゆっくりと休め。」

海馬の言葉に頭を下げて退室した。

○○○○

俺と雪乃が集合場所にたどり着いた時には、何人集まっていた。その内の数人は見覚えがあった。

「武藤遊戯さんに城之内克也さんに孔雀舞さん。それと鷺尾さん。ひよつとして、貴方達もアンチリスペクト討伐に？」

「ああ。はじめましてだね？僕は武藤遊戯。よろしくね。」

「俺は城之内克也だ。よろしくな。」

「あたしは城之内舞だよ。よろしくね。」

「既に知っているはずだが、鷲尾頼だ。」

「私は藤原雪乃よ。よろし…?」

そこまで言いかけて、雪乃は首を傾げていた。それは俺もだ。

「城之内舞?」

舞の姓は孔雀のはず。という事は、

「へえ。おめでとうございます。」

俺はそういつて2人に拍手をしていた。

「…ふん。来たか。」

そういつて海馬が姿を現した。

「既に知っているはずだが、今からアンチリスペクトのアジトを強襲してボスを捕らえる。何か質問は?」

「質問という訳ではないが…。」

そう前置きしてさっきから騒いでいるアジトを見ていた。

「ちよつと騒ぎすぎじゃないですか?」

「確かに。あれで隠れ家には無理があるな。」

俺の言葉に海馬が同意した時、廃工場の一角で爆発音が響いた。

「どうやら、ただ事ではないらしい。突入!」

海馬の言葉に皆が突入した。

SIDE 亮

「サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト!!」  
俺の場に現れた、三首の機械龍の攻撃がアンチリスペクトのライフを削りきった。

「数が多すぎる。」

次から次へと押し寄せてくる敵に焦りを感じた時、

「あんたは丸藤亮？なんでここに？」

俺オベリスク・ブルーの女子、沖田士が俺を見て怪訝な表情でそこにいた。側には武藤さんを始め、名高いデュエリストがそこにいた。

「退け!!デュエルキングとデュエルなんか出来るか!!」

その言葉を皮切りに蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。

「すまない。助かった。」

「それは別に気にしなくてもいいけど、こんなところでどうしたんだ？」

「師範に頼まれたんだ。…それに…。」

そう言いかけて言うべきか黙るべきか迷ったが言うことにした。

「迷っているんだ。月一試験でお前に負けてからリスペクトというものがよくわからなくなってしまうんだ。あの時は俺は師範の指示でリスペクトに反する沖田士を倒そ

うとして、逆に倒されてしまった。それで、反サイバー流の連中と闘えば答えが見つかるかもしれない。そう思ったんだ。お前たちは何故ここに？」

「丸藤亮と同じだ。アンチリスペクトの討伐出来たんだ。」

ほとんど皆がそれに同意していたが、…たしか、鷲尾だったか、彼は別の答えを出した。

「…俺はこの一件を依頼した側だからな。」

その話を知らなかったらしい士は驚いていた。

「じゃあ、あんたは反サイバー流の穏健派の人間なのか。」

その言葉に鷲尾は首を縦に振った。

「ああ。つと、無駄話してもしようない。いこう。」

『ああ。』

その言葉に皆が答え先へと進んだ。

「き、来たぞ！先へ進ませるな！」

アンチリスペクトの連中がデュエルディスクを構え、立ちふさがる。だけど、

「道を開けろ！雑魚ども！青眼の白龍のダイレクトアタック！滅びの爆裂疾風弾！」

青い眼をした白龍の吐息が、

「ブラックマジシャンの攻撃！黒・魔・導一決闘！」

黒衣の魔法使いの攻撃が、

「真紅眼の黒龍のダイレクトアタック！黒炎弾！」

紅い眼の黒龍の炎が、

「ハーピー・レディのダイレクトアタック！」

扇情的な姿をした女鳥人の爪が、

「ブラックマジシャンとブラックマジシヤンガールのダイレクトアタック！」

黒衣の魔術師の師弟が、

「サイバー・エンド・ドラゴンのダイレクトアタック！！エターナル・エヴオリユーション・

バースト！！」

3つ首の機械龍が、

「デミスの効果によりフィールドのカードを破壊するわ！さらに、救世の儀式で救世の

美神を召喚して2体でダイレクトアタック！！」

2体の儀式モンスターがアンチリスペクトの連中のライフ削っていった。

「この先か！！」

士が目の前扉を蹴り開けるが女の子なんだから跳び蹴りはどうかと思うぞ？そして、扉の先には一人の男が俺達をみていた。

「よう。久し振りだな。頼？」

「高梨だったっけ？」

「君もいたのか。そっちについたのか。昨日ぶりだな。」

鷺尾が哀しそうな表情で高梨と呼ばれたに近づいた。

「鷺尾。まさかお前が立ちふさがるとは思わなかったよ。」

「俺もまさかお前と争わなきゃならないとは思わなかった。こんなことになるなら、あの時、袂を別れず、もっと話し合っていればと思っっているよ。」

鷺尾の言葉に高梨は静かに首を横に振る。

「話し合ってなんになるんだ？頼は言葉で世間を納得させ、自分達の居場所を認めさせると決意したし、逆に俺はサイバー流をつぶし、自分達が日陰から抜け出すと決めていた。互いの互いに理解し合えない物を掲げているんだ。袂を別れるのは必然だっさ。」

「信。すまない。捕まってくれないか？お前と敵対したくない。」

鷺尾の言葉に高梨は静かに首を横に振った。

「悪いが断る。」

「…そうか、仕方ない。お前を倒す。」

その言葉にデュエルディスクを構える。

『デュエル  
決闘!!』

「俺の先行！ドロー！」

そう宣言してドローする鷲尾。

「俺はモンスターをセット！更にカードを1枚伏せ錬金釜―カオスデイスティル発動！このカードを発動させたプレイヤーのカードは墓地に送られることなく除外される！ターンエンド！」

鷲尾ライフ4000 手札4枚

伏せ1枚 錬金釜―カオスデイスティル

伏せモンスター 1枚

「俺のターン！ドロー！モンスターを伏せてターンエンド！」

鷲尾ライフ4000 手札4枚

伏せ1枚 錬金釜―カオスデイスティル

伏せモンスター 1枚

伏せモンスター 1枚

高梨ライフ4000 手札5枚

「俺のターン！ドロー！手札から永続魔法、魂吸収を発動！そして、伏せモンスターを生贄に、雷帝ザボルグを召喚！」

「もしかして、除外帝？」

「デッキの正体に気付いたのか、士がポツリと呟いていた。」

「なんだ？それ？」

「ああ。帝という生贄召喚に成功することで効果の発揮するモンスター群と異次元の偵察機という除外されると特殊召喚される効果を利用したデッキだ。」

「その通りだ。雷帝ザボルグの効果で、その伏せモンスターを破壊!!そして、魂吸収の効果でライフ500回復する！」（鷲尾ライフ 4000+500=4500）

ザボルグの雷が伏せモンスターに直撃した。その伏せカードはデスコアラか。ということは高梨のデッキはバーンデッキか？

「ザボルグでダイレクトアタック!!」

ザボルグの雷が高梨に直撃してそのライフを激減させた。（高梨ライフ 4000-2400=1600）

「カードを2枚伏せてターンエンド!この瞬間生贄に捧げた異次元の偵察機を攻撃表示で特殊召喚する！」

鷲尾ライフ4500 手札1枚

伏せ3枚 錬金釜1カオスディステイル 魂吸収

伏せモンスター 0枚 雷帝ザボルグ ATK2400 異次元の偵察機 ATK80

0



伏せモンスター 0枚

高梨ライフ1600 手札5枚

「俺のターン！ドロー！カードを3枚セットして、さらにモンスターをセットしてターンエンド！」

鷲尾ライフ4500 手札1枚

伏せ3枚 鍊金釜—カオスデイスティル 魂吸収

伏せモンスター 0枚 雷帝ザボルグATK2400 異次元の偵察機ATK80

0

伏せモンスター 1枚

伏せカード 伏せカード3枚

高梨ライフ1600 手札2枚

「俺のターン！ドロー！異次元の偵察機を生贄に、氷帝メビウスを召喚！生贄召喚成功したことにより信のフィールドの2枚のマジック、トラップカードを破壊する!!」（鷲尾ライフ4500+500=5000）

鷲尾の場に現れた帝の威圧により、2枚の伏せカードは氷つき砕かれてしまった。

「ザボルグでその伏せモンスターを攻撃!!」

ザボルグの攻撃が伏せモンスタージャイアントウィルスを破壊した。

「ジャイアントウィルスの効果発動!!このカードが先頭によって破壊された時、相手ライフに500ダメージを与えさらにデッキから同名モンスター2体を攻撃表示で特殊召喚!!」(鷲尾ライフ50000-5000=45000)

「氷帝メビウスでジャイアントウィルスを攻撃!!」

「その瞬間トラップカードリアクティブアーマーを発動!!メビウスを破壊する!!」

メビウスを鎧をまとった瞬間破壊されてしまった。(鷲尾ライフ45000+5000=50000)「これでターンエンド!エンドフェイズ時に異次元の偵察機を特殊召喚!」

鷲尾ライフ45000 手札1枚

伏せ3枚 鍊金釜—カオスデイスティル 魂吸収

伏せモンスター 0枚 雷帝ザボルグATK2400 異次元の偵察機ATK80

0

伏せモンスター 0枚 ジャイアントウィルスATK10000×2

伏せカード 伏せカード0枚

高梨ライフ16000 手札2枚

「俺のターン!ドロー!ジャイアントウィルスを守備表示に変更!」

高梨がモンスターカードの表示を変更させるとウィルスの色が変わった。

「さらに、カードを一枚セットしてターンエンド!」

鷲尾ライフ4500 手札1枚

伏せ3枚 錬金釜1枚 カオスデイスティル 魂吸収

伏せモンスター 0枚 雷帝ザボルグ ATK2400 異次元の偵察機 ATK80

0

伏せモンスター 0枚 ジャイアントウイルス DEF1000×2

伏せカード 伏せカード1枚

高梨ライフ1600 手札2枚

「俺のターン！ドロー！異次元の偵察機を生贄に地帝グランマーズを召喚！効果でその伏せカードを破壊！」

「伏せカードオープン！死のデッキ破壊ウイルス！！ジャイアントウイルスを生贄にフィールドと3ターン内にドローしたカードの攻撃1500以下を破壊する！！」

その言葉と同時にウイルスに感染して苦しみ破壊されるザボルグにグランマーズ。  
「手札に邪帝ガイウスがいる。」

その言葉とともに手札を除外する。（鷲尾ライフ 4500+5000×4=6500）

「だけど、これでお前の負けだ！！リバーサカードオープン！！異次元からの帰還！！ライフ半分をコストに俺の除外されたモンスターを可能な限り特殊召喚する！！」（鷲尾ライフ

6500÷2=3250)

そう言いながら、異次元の偵察機と帝達を特殊召喚する。

「異次元の偵察機でジャイアントウィルスを攻撃!!」

異次元の偵察機の光線がジャイアントウィルスを破壊した。

「そして、4体の帝でダイレクトアタックする!!」

帝達が高梨のライフを削りきって初期ライフの倍に達するダメージを受けた。(高梨ライフ1600—2400×4=8000)

○○○○

「……………どうだ?丸藤?答えは見えたか?」

鷲尾の問いに首を横に振った。

「いいや。まだ見えない。」

答えが見つかるかと思っただが、答えが見つからない。余計に深くなつたと言える。高梨信も目の前にいるこの男も自分のデッキを大切にしていることがわかる。

「丸藤。よければ、ジャッジメントで働いてみないか?」

「なに?」

「ジャッジメントは海馬オーナーが俺達の為に用意した場所なんだ。」

「世間が貴様等を認めないのなら、言葉で自分達を認めさせる。そのための活動の場所

だ。その対価としてデュエルアカデミアの治安維持活動をしてもらっているがな。なるほど。そんな経緯があったのか。

「鷺尾。俺にもジャッジメントの仕事をやらせてくれないか？」

俺の言葉に鷺尾は笑顔で手を差し出した。

## デュエル21 再戦!VSサイバー流

俺の部屋を見たって雪乃の為になるようなものは何もないだろうに。そう心の中で呟いてポケットから鍵を取り出す。

「何も無い部屋だけど、ゆっくりくつろいでくれ。」

そう言つて玄関を開け、すぐそばのブレイカーを上にした。1Kの狭い部屋。そこに雪乃を招き入れた。

「邪魔するわね?」

「おう。上がつてくれ。」

雪乃を部屋に上がらせ、食材片手にキッチンに向かう。

「つて土?あなた料理出来たの?」

「今の一言で俺がどんな人物かイメージ出来たぞ?」

俺の一言に雪乃は引きつった笑みを浮かべた。

「あ、アハハ。ホラ、土が料理したところ見たこと無いじゃない?」

「…まあ確かにあまり作らないけどさ。」

その言葉に「でしょ?」と言つて続けた。

「だから、土が料理出来るなんて知らなかったのよ。」

その言葉にため息を吐いていた。

「それじゃ、俺の料理堪能しな。」

そう言つてスパゲティを鍋で茹でながら、ニンニクと鷹の爪を輪切り、短冊斬りにしたベーコンと一緒にフライパンで炒め、茹でたスパゲティを絡めたら皿に盛り付けて完成。

「…けっこう美味しいわね。…御馳走様。」

「お粗末様。風呂がそっちにあるし、シャワーなり風呂に入るなりしたら？」

俺の一言に従つて風呂に向かう雪乃を尻目にデッキ制作に取りかかった。来る強敵の為のデッキだ。

「…最後にコレを入れて完成！」

「あいたわよ？」

雪乃の言葉に後ろに振り返つて、バスタオルを巻いただけの格好に吹いてしまった。白い太ももやら素肌がまぶしいですね？

「…雪乃。バスタオルを巻いただけは止めてくれ。」

「あら、何で？」

俺の言葉に雪乃は可愛らしく首を傾げた。

「これから人が来るんだ。」

「それなら、しようがないわね。」

納得して風呂場に戻るのと呼び鈴が鳴り響いた。

「来たか。上がってくれ。丸藤亮。」

「あ、ああ。」

俺の言葉に丸藤亮は戸惑った表情を浮かべて部屋に上がる。

「あら、アナタだったの?」

着替え終わった雪乃が丸藤亮を見て軽く驚いていた。

「そういう君は藤原雪乃か。」

「んなどころで立ってないでその炬燵にでも入ってくれ。」

寒かったのか、俺の指示に2人とも素直に従う。そして、互いのデツキをシャツフルして 相手に返す。そして、同時にサイコロを投げる。サイコロはコロコロと炬燵の上を転がり、俺が4丸藤亮が3の目で止まった。

○ ○ ○

『<sup>デュエル</sup>決闘!!』

「俺のターン!!ドロー!!黒龍の雛を召喚!!このカードを生贄に真紅眼の黒龍を召喚!!さ



らに手札から黒焔弾を発動!!真紅眼の黒龍の攻撃力2400分丸藤亮のライフを削る!!」

『グルルウ♪』

俺の言葉にルビーが歓喜の声を上げる。(亮ライフ4000—2400||1600)

「そして、カードを一枚セットしてターンエンド!」

士ライフ4000手札2枚

伏せ1枚

真紅眼の黒龍ATK2400

伏せカード0枚

亮ライフ1600手札5枚

「俺のターン!ドロー!サイバー・ドラゴン・ツヴァイを召喚!さらに手札から融合を見せてサイバー・ドラゴンにして融合を発動!!」

丸藤亮のフィールドに双頭の機械龍が召喚された。

「サイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚!!バトルフェイズ!!サイバー・ツイン・ドラゴンで真紅眼の黒龍を攻撃!!」

その宣言にルビーのカードを墓地に置いた。(士ライフ4000—2800+240

0||3600)

『グルルウ。』

ごめんよ。ルビー。

「サイバーツイン・ドラゴンは2回攻撃ができる!!サイバー・ツイン・ドラゴンのダイレクトアタック!!」

「そつちは通さない。リバーズカードオープンガードブロッカー!ダメージを0にする!」

「なら、このままターンエンド!」

士ライフ3600手札3枚

伏せ0枚

サイバー・ツイン・ドラゴンATK2800

伏せカード0枚

亮ライフ1600手札3枚

「俺のターン!ドロー!カードを一枚セットしてサイバー・ダーク・エッジを召喚!!」

「な、なんだ?このモンスターは?」

見たことのないらしいカード達を見て戸惑う丸藤亮。

「こいつらは、サイバー流のカードでありながら、リスペクトに反するという理由でサイ

バー流に封印されたカード達だ。サイバー・ダーク・エッジの効果で墓地にあるレベル3以下のモンスター、黒龍の雛を装備！」

俺はそう言いながら黒龍の雛をマジックトラップカードゾーンに置く。

「サイバー・ダーク・エッジでダイレクトアタック!!この時、サイバー・ダーク・エッジの攻撃力が半分になる!これでターンエンド!」

士ライフ3600手札2枚

伏せ1枚

サイバー・ダーク・エッジATK800+800

サイバー・ツイン・ドラゴンATK2800

伏せカード0枚

亮ライフ800手札3枚

「俺のターン!ドロー!手札から融合解除を発動!サイバー・ドラゴンとサイバー・ドラゴン・ツヴァイを特殊召喚!さらに、プロト・サイバー・ドラゴンを召喚!このカードはサイバー・ドラゴンになる!パワーボンドを見せてパワーボンドを発動!サイバー・ドラゴン扱いになっているモンスター2体とサイバー・ドラゴンを融合してサイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚!!」

丸藤亮はフィールドのモンスターを墓地に送って、融合デッキから三つ首の機械龍を

特殊召喚した。(サイバー・エンド・ドラゴンATK4000×3=8000)

「サイバー・エンド・ドラゴンでサイバー・エンド・ドラゴンで攻撃!」

「サイバー・ダーク・エッジは破壊される時、このカードの装備したモンスターを身代わりにする!」

このままなら、その差分5600分のダメージを受けてライフ2000になっちゃうんだよな。

「伏せカードオープン!パワー・ウォール!デッキからカードを墓地に送ることで、送ったカード一枚につき100のダメージを減らすことができる!俺が送ることカードは30枚。よって減るダメージは3000!」

その言葉とともにカードを墓地に送っていく。(ライフ3600-4000×2+2400+3000=3600-8000+5400=3600-2600=1000)

「なら、サイバージラフを召喚!! 生贄に捧げ、ダメージを0にして、ターンエンド!」

士ライフ600手札2枚

伏せ0枚

サイバー・ダーク・エッジATK800+800

サイバー・ツイン・ドラゴンATK2800

伏せカード0枚

亮ライフ8000手札0枚

「俺のターン！ドロー！手札から貪欲な壺を発動！墓地にある黒龍の雛、サイバー・ダーク・ホーン、サイバー・ダーク・キール、仮面竜を2枚デッキに戻して2枚ドロー！そして、パワーボンドを発動！手札のサイバー・ダーク・キール、サイバー・ダーク・エッジ、サイバー・ダーク・ホーンを融合素材にして鎧黒龍—サイバー・ダーク・ドラゴンを融合召喚!!」

俺は手札、フィールドから3枚のモンスターを墓地に送り融合デッキからモンスターを取り出してフィールドに置いた。(鎧黒龍 サイバー・ダーク・ドラゴン ATK1000×2=2000)

「サイバー・ダーク・ドラゴン：攻撃力1000：パワーボンドの効果を使っても2000止まりそこから何をやる気だ？」

ゴメンな、ルビー。

「サイバー・ダーク・ドラゴンの効果で墓地にある真紅眼の黒龍を装備してその攻撃力分攻撃力2400を得る！さらに自分の墓地あるモンスターの枚数分1000攻撃力がアップする！俺の墓地にあるモンスターは18枚よってアップする攻撃力は1800！」

そう言いながら、墓地にあるルビーのカードをマジックトラップカードゾーンに置いた。(サイバー・ダーク・ドラゴン攻撃力1000×2+2400+1800=6200+4200=6200)

「バトルフェイズ!サイバー・ダーク・ドラゴンでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃!」  
「バカな!サイバー・ダーク・ドラゴンの攻撃力6200!対して、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力は8000!受けるダメージは1800!」

「そうだから、リミッター解除を発動!!よって攻撃力は12400!」

「…俺の負けか…」

丸藤亮はフィールドのカードを見て静かに呟いていた。

「亮。俺がサイバー流を嫌うのはサイバー・ダーク達が原因なんだ。」

亮は俺のフィールドのサイバー・ダーク達を見つめていた。

「このカード達はリスペクトに反すると言った理由で封印されたカード達だ。別に禁止でも制限カードでもないのに、ルールで禁止されている訳でもないのにだ。」

他にも、ロックやバーンパーミッション等のカード等のカードもリスペクトに反するとされている。

「亮。考えてみる。そんなのつてただのブーイングだ。使われるのがイヤなら、対策をとるのが当然だろ?でも、サイバー流の人達は違った。自分達の行いが正しいようなふ

るまいリスペクトに反するカードの使う人を悪役にする事で使わせないようにしたのさ。自分が使わないのは自由だ。だけど、他人にそれを強要するのはダメだ。」

そこまで言ってから息を吐いた。

「まあ、コレは俺の中の答えで亮にとつての正解とは限らない。だから、自分にとつて正しい答えを探してみるといい。」

俺の言葉に亮は小さく頷いた。

SIDE 鮫島

私が校長室で待機していると、ドアがノックされた。

「お久しぶりです。師範。」

かつての門下生で今はI2社のカードデザイナーの人が私を訪ねて来た。

「ランキングを見ました。まだサイバー流の人達は中堅止まりなんですね。」

「そうなんですよ。プロの人達にリスペクトの素晴らしさを理解してくれないのか、皆さん外道なデツキを使うんですよ。」

私の言葉にかつての門下生はニヤリと笑みを浮かべ丁寧に包装されたカード達を差し出した。

「師範。差し上げます。」

見たことの無い白いカード達とチューナーというカード達だった。

「最近、KC社で提案された種類のカード達です。」  
渡されたカード達を見てニコリと微笑んでいた。



## デュエル22 新たな日常。VSミラーマツチ

「デュエルアカデミアよ！ 私は帰って来たぞ！」

フェリーから降りながら叫んだ。さて、皆元気かな？そんな事を考えながら、オシリス・レッドに向かう。

「久しぶり。十代。隼人。翔。」

「お、士に雪乃じゃないか！ 久しぶり！」

「そうなんだな！」

レッド寮のとある部屋に入ると、十代達が歓迎した。中でも、

「士さん!! お久しぶりッス!!」

翔は俺にすごい勢いで俺に抱きつくという歓迎ぶりだ。というか、雪乃が視界が映っていないらしい。

「ホント、久しぶりって気がするわね。」

「そうですね。実際は2週間ぐらいですのに。」

ジュンコとももえが微笑んでいた。その腕には黄色と赤色の腕章がついている。こ

の腕章は俺が依頼して試験的に導入してもらったものだ。赤い腕章はオシリス・レッドと同レベル。黄色い腕章はラー・イエローと同レベル。そして、青い腕章はオベリス・ブルーと同レベルであることを指す。

「久しぶりだな二人とも。」

「元氣だったかしら？」

「ええ。あたしは元氣いっぱいよ。」

「わたくしもですわ。」

ジュンコとももえが笑みを浮かべる。

「よし！ 士！ 戻って来たことだし、デュエルしようぜ！」

「悪いな。十代。デュエルしたいが女子寮に行かなきゃいけないからな。」

闘志を漲らせる十代にそう返すと、不満そうに口を尖らせる。

「ちえつ。仕方ねえな。その代わり、用事が終わったらデュエルしようぜ。」

その言葉を背にオシリス・レッド寮を後にした。

しばらく、歩いて、こじやれたペンションなラー・イエロー寮が見えた。

「……………別に良いか。知り合いいないし。」

「待ったー!!」

俺の言葉に叫び声を上げる黄色いの制服を着た男が走り出した。

「え、えっと、はじめまして？」

俺の言葉に男にラー・イエローの生徒が何故か跪いていた。

「俺と士は初対面じゃない！」

「？ 他人の空似じゃないか？」

俺の言葉により黒いオーラを纏った男をその場を後した。

「思ったより時間はかかったけど、やっと到着したな。」

湖のそばに建つ城を見上げて呟いた。

「士さん？」

入り口から鮎川先生が声をかけてきた。

「お久しぶりです。そして、短い間でしたがお世話になりました！」

「いえいえ。こちらこそお世話になりました。お部屋にあった荷物は向こうに運んであるわ。一応、お引越先の寮長も私つてことになってるから、困っていることがあったら、遠慮なく言いに来てね？」

俺の言葉に鮎川先生は柔らかく微笑んで返した。その言葉に頭を下げ海馬に建ててもらった専用寮（というか家）に向かった。

「急ピッチで建ててもらったわりに広くて頑丈そうだ。」

思ってた以上にしっかりしている建物を見て呟いた。海馬オーナーにもらった鍵で

ドアを開ける。

「…さて、明日から新学期を頑張ろう。まずは、荷物の整理か。」

そう言つて段ボールを開封した。

○○○○

SIDE 亮

「…どういふつもりですか？」

「言葉通りの意味です。俺は、今からサイバー流の敵となります。」

その言葉に師範：いや、もう、師範と呼べない。鮫島校長以外のサイバー流の門下生達は皆騒然としていた。

「ば、バカな！ お前がサイバー流を止めるだと！ 何故だ！」

「サイバー流のリスペクトが正しいと感じられなくなった。それだけだ。」

俺の返答に姉弟子の要が驚愕の叫びを上げた。

「バカな!! デュエリストにとつてリスペクトは何よりも大切な物！ 亮！ お前はリスペクトの精神を捨て外道に堕ちるといふのか!!」

「確かに！ 確かにリスペクトは大事な物！ しかし、リスペクトは1つの形に非ず！

ただ、サイバー流のリスペクトが正しいと思えなくなったただけだ！」

「フン！ 我々以外のリスペクトだと！ そのような物は幻想に過ぎん！ 幻想など、



てターンエンド！」

亮 ライフ4000 手札5枚

伏せカード1枚

サイバー・ドラゴン・コアATK400

「私のターン！ ドロー！ このターンで終わりにしてやる！ パワーボンドを発動！！

サイバー・ドラゴン3枚を融合！！ サイバー・エンド・ドラゴンを召喚！！」

要のフィールドに3つの首の機械龍が現れる。このモンスターは攻撃力は4000。サイバー・ドラゴン・コアに攻撃しても本来はライフが残るのだが、パワーボンドの効果で攻撃力が倍加して8000になっている。

「サイバー・エンド・ドラゴンでサイバー・ドラゴン・コアを攻撃！！ エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

3つ首の機械龍の閃光がサイバー・ドラゴン・コアを破壊した。

「リバースカードオープン！ ガードブロック！ ダメージを無効にして1枚ドロウ！」

俺のフィールドに翻ったカードがダメージを無効にした。

「小賢しい！ サイバー・ジラフを召喚！ 生贄にしてダメージを無効にしてターンエンド！」

亮 ライフ4000 手札6枚

サイバー・エンド・ドラゴン ATK8000

要 ライフ4000 手札1枚

「俺のターン！ ドロー！ サイバー・ラーヴァを召喚！ 1枚セットしてターンエンド！」

亮 ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

サイバー・ラーヴァ ATK400

サイバー・エンド・ドラゴン ATK8000

要 ライフ4000 手札1枚

「私のターン！ ドロー！ 手も足も出まい！ サイバー・エンド・ドラゴンでサイバー・ラーヴァを攻撃！」

サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃でサイバー・ラーヴァが破壊される。

「サイバー・ラーヴァは表側表示のこのカードが攻撃対象になった時、このターンのダメージを無効にする！ さらに戦闘破壊された時、デッキからサイバー・ラーヴァを1体特殊召喚できる！」

そう言いながらデッキからサイバー・ラーヴァをサーチしてフィールドに置く。

「フーン！ ターンエンド！」

亮 ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

サイバー・ラーヴアATK400

サイバー・エンド・ドラゴンATK8000

要 ライフ4000 手札2枚

「俺のターン！ ドロー！ 1枚セットしてターンエンド！」

亮 ライフ4000 手札4枚

伏せカード2枚

サイバー・ラーヴアATK400

サイバー・エンド・ドラゴンATK8000

要 ライフ4000 手札2枚

「私のターン！ ドロー！ サイバー・エンド・ドラゴンでサイバー・ラーヴアを攻撃！」

3つ首の機械龍の効果で破壊されるが、効果により3度召喚されるサイバー・ラーヴア。

「私はターンエンド！」

亮 ライフ4000 手札4枚



伏せカード2枚

サイバー・ラーヴァATK400

サイバー・エンド・ドラゴンATK8000

要 ライフ4000 手札3枚

「俺のターン！ ドロー！ 俺は何もせずにターンエンド！」

亮 ライフ4000 手札5枚

伏せカード2枚

サイバー・ラーヴァATK400

サイバー・エンド・ドラゴンATK8000

要 ライフ4000 手札2枚

「私のターン！ ドロー！ サイバー・エンド・ドラゴンでサイバー・ラーヴァを攻撃！

これで貴様を守る盾などあるまい！ ターンエンド！」

亮 ライフ4000 手札5枚

伏せカード2枚

サイバー・エンド・ドラゴンATK8000

要 ライフ4000 手札2枚

「それは違う。俺のターン！ ドロー！ サイバー・ヴァリーを召喚！ さらに、手札か

ら機械複製術を発動！ 攻撃力500以下のサイバー・ヴァリーを2体特殊召喚してターンエンド！」

亮 ライフ4000 手札4

枚

伏せカード2枚

サイバー・ヴァリーATK0×3

サイバー・エンド・ドラゴンATK8000

要 ライフ4000 手札2枚

「私のターン！ ドロー！ サイバー・エンド・ドラゴンでサイバー・ヴァリーを攻撃！

エターナル・エヴォリュション・バースト！」

攻撃力の差8000を受けて負ける事を期待しているだろうが、甘い。

「サイバー・ヴァリーの効果発動！ 攻撃対象となったこのカードを除外して1枚ドローしてバトルフェイズを終了！」

「帝王も落ちたものだな!! 私ライフは1ポイントに削れてないぞ!! 盾に縋り付いてみつもまないぞ!!」

要の言葉に鮫島校長だけが青い顔をしていた。この状況に気づいていたからだろう。確かに要のライフを1ポイントも削ってはいないが、逆にこちらのライフを1ポイント

も削られてはいないのだ。

「1枚セットしてターンエンドだ！」

亮 ライフ4000 手札5枚

伏せカード2枚

サイバー・ヴァリー ATK0×2

サイバー・エンド・ドラゴン ATK8000

要 ライフ4000 手札2枚

「俺のターン！ ドロー！ サイバー・ヴァリーの効果発動！ このカードと自分フィールドの表側表示のモンスターを除外することで2枚ドローする！ 2枚のヴァリーを除外して2枚ドローする！ さらに異次元からの埋葬を発動！ 除外したサイバー・ヴァリーを墓地に送る！ さらにサイバー・ドラゴン・コアを召喚！ サイバネティック・フュージョンサポートを手札に加えて手札からサイバー・リペア・プラントを発動！ このカードは墓地にサイバー・ドラゴンがある時発動可能！ デツキから光属性機械族のカードを手札に加える！」

「ま、また私が知らないサイバーだと！ し、しかし判断を誤つたな！ 貴様の墓地にサイバー・ドラゴンは存在しない！」

俺が発動させたカードを見て驚いた要だが、意外に冷静に指摘した。

「サイバー・ドラゴン・コアはフィールド、墓地にある時サイバー・ドラゴンになる。効果により、デッキからサイバー・ドラゴンを手札に加える！さらに手札から機械複製術を発動！ デッキからサイバー・ドラゴンを2体を特殊召喚！」

「くっ！サイバー・ドラゴン・コアがサイバー・ドラゴンになった恩恵か。」

フィールドのサイバー・ドラゴン・コアを見て悔しそうに呟いていたのを見ながら、デッキからサイバー・ドラゴンをサーチした。

「俺は手札からサイバネティック・フュージョンサポートを発動！ ライフコスト半分を支払い、墓地、フィールド、手札の決められたモンスターを除外して機械族モンスターを融合召喚の素材にすることができる！ さらにパワーボンドを発動！ 手札、フィールド、墓地にあるサイバー・ドラゴンを含むサイバー・ヴァリー3体、サイバー・ラーヴァ3体、サイバー・ドラゴン・コア2体、サイバー・ドラゴン3体を融合！ キメラテック・オーバー・ドラゴンを融合召喚！」

「そ、そのモンスターはリスペクトに反するが故に封印されたカード!! 亮！ 貴様はそこまで堕ちたというのか！ ふざけるな伏せカードオープン！ 奈落の落とし穴！」

「トラップ発動！ トラップスタン！このターン、このカード以外のトラップの発動を無効にする!! さらにチェーンでハーフィヤットを発動！ サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力を半分する代わりに戦闘での破壊を無効にする！」 な、何!!」

俺の場に現れたモンスターが俺の場のカードを墓地に送り、その中の一枚のカードがサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力を弱める。(キメラテック・オーバー・ドラゴン ATK 800×11×2=17600)

(サイバー・エンド・ドラゴン ATK 4000×2÷2=4000)

「キメラテック・オーバー・ドラゴンの効果でこのカード以外のカードを墓地送りバトルフェイズ! キメラテック・オーバー・ドラゴンでサイバー・エンド・ドラゴンに攻撃! エヴオリュション・レザルト・バースト!」

「迎え撃て!! サイバー・エンド・ドラゴン!!」

3つ首の機械龍と数多の首を生やした機械龍が口にエネルギーを溜め、

『ダメージステップ時に(優先権でリミッター解除)(手札からオネストを捨てて)発動!!』

背中に翼を生やした機械龍とリミッターを外した数多の首を生やした機械龍の閃光がより強く輝く。

「さらに2枚のリミッター解除発動!!」

俺の場の機械龍が要のフィールドの3つ首の機械龍の攻撃に競り勝った。(要ライフ 4000—17600×2×2+4000+17600×2×2=4000—140800+74400=66400)

「キヤアアアツツ!!!」

超過ダメージにより要のライフは0以下になった。それで済ますつもりはない。

「キメラテック・オーバー・ドラゴンは融合素材の枚数分モンスターに攻撃できる！エヴォリューション・レザルト・バースト！ ジュウイチレンダアア!!」

俺の攻撃宣言によりキメラテック・オーバー・ドラゴンはサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃して要のライフにダメージを与える。（要ライフ—66400—（140800—4000）×11—66400—136800×11—1571200）

○○○○

「俺の勝ちだ。約束通りサイバー流を離れてもらうぞ。」

「ふざけるな!! リスペクトの欠片すらないカードを使う外道が!! このデュエルは貴様の反則負けだ!!」

憤慨する要の言葉に首を横に振った。

「要。デュエルモンスターズのルールにはリスペクトに反するカードを使ったら負けなどというルールはない。要のそれはいいかがりだ。俺の反則負けは認められない。」

「いえ。キメラテック・オーバー・ドラゴンというリスペクトに反するがゆえに封印されたカードを使う時点で亮の負けです。」

鮫島校長の言葉に俺は鮫島校長に対する尊敬が壊れていく姿が見えた気がした。

「鮫島校長。キメラテック・オーバー・ドラゴンは禁止制限には含まれてない。それと一つ教える。止めを刺すなら、前のターンで十分可能だった。」

俺の融合デツキには、キメラテック・フォートレス・ドラゴンがいる。サイバー・リペア・プラントの効果でサイバー・ドラゴンをサーチしてしまえば前のターンでサイバー・ドラゴンをサーチ。サーチしたサイバードラゴンを除外してしまえば準備はOK。サイバー・ドラゴンを特殊召喚して、ヴァリーを召喚。機械複製術でヴァリーを並べる。後は要のサイバー・エンド・ドラゴンを含めた機械族モンスターをすべて墓地に送ってフォートレスを召喚。この場合の攻撃力は5000。要のライフを削るには十分な数値だ。」

「何故？手抜きを？」

「理由は、サイバー流への離縁の為だ。サイバー流の象徴であるサイバー・エンド・ドラゴン。それに勝つ事でサイバー流から離れる事を宣言するため。そして、要の切り札であるサイバー・エンド・ドラゴンに打ち勝つ事で要の心を折るつもりだった。」

鮫島校長にそう言い、サイバー流の門下生に向かって言い放った。

「サイバー流の皆。たった今から、丸藤亮はサイバー流の敵になるだろう。俺は恩があるから、そちらが敵対行動を取らない限りこちらからは何もしない。ただし、そちらが俺の仲間やともに害を与えるするなら、遠慮はしない。全力でつぶす。それを覚悟し

ろ。」

かつての兄弟子に姉弟子と師範にそう宣言してその場を後にした。



## デュエル23 青春 デュエルテニス

「ブラックマジシャンでダイレクトアタック！黒・魔・導!!」  
ブラック・マジック

黒衣の魔術師の攻撃が誰かはわからないけど、オベリスク・ブルーの生徒のライフを削りきった。

「つたく、鬱陶しい。」

思わずぼやいてもしかたないと思う。これで、本日5組目の挑戦者なのである。

○○○○

話は2学期の始業式、つまり3日前の朝まで遡る。鮫島の長くて退屈な話を除いて、殆ど、問題なく進行した。ただ、最後になって鮫島から驚くべき話をしだした。

「では、最後に今期から、賞金稼ぎデュエルを開催したいと思います。」

…は？賞金稼ぎデュエル？

「内容は簡単です。こちらが選んだデュエリストはこの賞金のカードの入ったケースを所持してもらいます。そして、その人は賞金のカードをかけ、デュエルで護っていただきます。」

…何だがイヤな予感がして来たんだが？

「賞金首の方はデュエルを挑まれた場合、拒否する事は出来ません。そして、カードを手に入れた方はこちらまで来て下さい。そのカードと引き換えに10000DPを進呈します。」

DPはデュエルアカデミア内にて流通している電子マネーと言えればわかりやすいと思う。デュエルした場合、デュエルの内容により妥当な額のDPがPDAに加算される。デュエルアカデミア内でしか流通してないので、卒業間近にはDPを使い切る為にカードを買いまくったり、後輩に譲ったりしているらしい。(隼人談)

「今週私が選ぶのは、沖田士君です。」

やっぱりだよ。ド畜生。

「期間は1週間。その間、士君はこのカード達を死守して下さい。」

やってくれるな。鯨島の狙いもわかっている。先ずは俺のテンションを落とすこと。何回勝つても得られるのはもとからデュエルで得られるDPのみ。この状況でテンションの維持は困難。テンションが落ちた所でサイバー流の誰かが倒しにくるかもしれない。

2つ目は俺のデッキの研究。数多のデュエリストとデュエルする事でたくさんカードを使う。そのデュエルの内容はデュエルアカデミアのホストコンピューターに記録される。しかも、負けたら、それを口実にデュエルアカデミアから追い出しかねない。

だからこそ気が抜けない。サイドデツキを入れ替えたり、デツキそのものを交換したりして、上手く回したりしているが、沢山のデュエルするハメになるのか。拒否しようにも、対戦相手のデュエルの学習という名目で拒否させないだろうし。そう思うと、憂鬱なんですか？ そう思いながら、近くのイスに腰掛けると先客の明日香が声をかけてきた。

「お疲れ様。ホント大変ね？」

「そう思うならデュエルかわつてくれよ？」

文句をいいながら、明日香が持っているペットボトルを取り上げ飲み干した。

「ふう。ああ、明日香。勝手に取り上げて悪かった。つて、明日香？ どうした？」

何故か耳まで真っ赤な明日香にペットボトルを渡そうとしたのだが、ピクリとも動いてない。なんか湯気まで吐いてる様な？

しばし揺さぶると明日香はフリーズから復帰したらしい。辺りを見回し、俺を見てある提案をする。

「つ、土？ そ、その、十代の所に行ってみない？」

ああ、そういうえば体育の授業の時にテニスボールを田中先生の顔面直撃させた罰で一日テニス部入部させられたんだっけ？

「俺自身は別に構わないけど、賞金稼ぎデュエルのせいで挑まれたらその場から離れら

れないから、移動に時間がかかるぞ？」

「大丈夫。考えがあるわ。とりあえず、十代の様子を見たら向こうでデュエルしてくれないかしら？賞金のカードをかけて。」

？ ……そういう事か。

「わかった。行くか？」

「ええ。」

イスから立ち上がる俺に同じく立ち上がる明日香。案の定、挑んでくる人がいるのだが、「悪いな。デュエルの先約が有るんだ。」

その言葉でデュエルを断った。デュエルを拒否出来ないとは言っても、それは先約が無い状態ならだろう。仮に鮫島あたりがイチヤモンつけに来たとしても、

『デュエルの先約があつて急いでいた』と口実にすりやどうとでもなるか。…で、テニスコートで十代がしごかれるのを見ていたわけだが、

「はあ。どうしてこうなつたんだか。」 テニスコートの向こう側で炎を纏ううぎやか部長を見て深々と溜め息を吐いていた。初めはジュンコのフィアンセをかけたデュエルだった。十代にスポーツドリンクを持って行く姿が自分への差し入れと勘違いしてスルーされ、嫉妬のあまり十代にデュエルを挑んだらしい。

「手札から速攻魔法融合解除を発動！ フレイムウィングマンの融合解除してフェザー

マンとバーストレディーを特殊召喚!! 2体でダイレクトアタック!」

特に言う事もなく後攻1キルで勝ってしまった。うざやか部長がサービスエースでダメージを与えた後、1伏せ神聖なる球体を守備表示でエンド。十代のターンでフレイムウィングマンを手札融合、エアーマンを通常召喚。効果で伏せカードを破壊。バトルフェイズ。エアーマンで、神聖なる球体を攻撃。そして、フレイムウィングマンでダイレクトアタックの後、融合解除して2体でダイレクトアタックを決めたのだが、揃い過ぎだ。

その後に俺と婚約者の座をかけたデュエルを挑まれた。

『ざけんな。何で俺が男と結婚せにやあかん。この変態。』

思わず吐いてしまった毒も『照れてるんだね?もつと素直になろうね?』と言いやがる。

まったくなんで男にプロポーズしやがるんだ? この変態は。

デュエル  
『決闘!!』

「俺のターン!! ドロー!手札からジェスター・コンフィーを特殊召喚! ジェスター・コンフィーを生贄にマテリアルドラゴンを召喚!カードを一枚伏せてターンエンド!」

士ライフ4000手札3枚

伏せ1枚

マテリアルドラゴン ATK2400

「僕のターン！ ドロー！ 手札からサービスイースを発動！ 効果は知っているよね？ ボクはこのカードを選ぼう。さあ、種類を選択してくれたまえ！」

「トランプカード。」

「残念。モンスターカードホーリーシャインボール神聖なる球体だよ。除外して士君に1500ポイントのダメージを与え…る…？」

俺のライフを削る為に放たれたテニスボール。それが俺のライフを回復させた事に首を傾げるうぎやか部長。

「マテリアルドラゴンは効果ダメージをライフ回復に変更するんだ。」

「な、なるほど、カード1枚で僕の足を止めるなんて、やるね。流星は僕のフィアンセだ。」

誰がお前のフィアンセだ？というか、バーンデッキならこの手の対策は必要だと思うんだが？

「僕はカードを2枚伏せてターンエンドだ。」

「俺のターン！ ドロー！ 手札から軍隊竜を召喚！ 軍隊竜を除外してレッドアイズダークネスメタルドラゴンを召喚！ 効果により真紅眼の黒龍を特殊召喚！」

『ガアアッ!!』

俺のフィールドに現れたルビーは歓喜の雄叫びを上げる。手札に黒炎弾があるから余計に嬉しいだろうけど、このターン、黒炎弾なんて使わないぞ？ マテリアルドラゴンは相手に与える効果ダメージもライフ回復に変更される。つまりただの役立たずだ。『グルウ!!』

その言葉にショックを受けるルビー。

「バトルフェイズ！マテリアルドラゴンでダイレクトアタック！」

マテリアルドラゴンが輝く吐息でうぎやか部長のライフを削ろうとした時、うぎやか部長の伏せカードが翻った。

「リバースカードオープン！ 次元幽閉！ マテリアルドラゴンを除外する！」

上手い手だ。マテリアルドラゴンには魔法、罠、モンスター効果の発動を無効にして破壊する効果があるけど、あくまでも『破壊する』効果が発動した場合のみである。つまり、マテリアルドラゴンでは除外するこのカードを無効には出来ないのである。

「土君と明日香君と3人で明るい結婚生活はもうすぐだ！」

余りにおぞましい事を言いやがるうぎやか部長。

「…ふざけてろ。…てめえのその妄想がてめえ以外を幸せに出来ないっていうなら、

まずはその幻想からぶち壊す！

次元幽閉にチェーンでリバースカードオープン！ トラップスタン！ トラップス

タン以外のトラップの発動と効果を発動ターンのみ無効にする！」

次元の檻がマテリアルドラゴンを拘束しようとする直前、バチバチとショートして次元の彼方に消え去り、マテリアルドラゴンの攻撃を阻む物は何もなかった。マテリアルドラゴンの吐息で大ダメージを負う。

「真紅眼の黒龍のダイレクトアタック！ 黒炎弾！」

自分の必殺技が役立たず扱われた腹いせなのか普段より強力な火炎弾がうざやか部長に襲いかかる。

「ま、待ってくれないか？ き、君が望む物を上げる。だ、だから、ま、負けてくれないか？」

「ダメだ。お前もわかってるんだろ？ お前の中の幻想なんてとつくに終わっちゃまっているんだよ。みっともなく幻想にすがりづいてないで現実を見ろ！ レッドアイズダークネスメタルドラゴンでダイレクトアタック！」

レッドアイズダークネスメタルドラゴンが放った攻撃が残り僅かなライフを削りきった。

○○○○

「お、オベリスク・ブルーの、そ、それも、カイザーに匹敵するはずのこの僕がドロップアウトと同ランクに負けたなんて……」



ああ。そういうことか。納得しながら、自分の左腕の真つ赤な腕章を見た。

「デュエルは寮で決まるわけじゃない。お前の敗因はそのおごりと慢心だ。それを捨て去ればきつと伸びるさ。」

「うう。土君。」

とここまでは若干良いシーンだったのかもしれないが、

「アレ？ひよつとして、アニキの一日体験入部はもう終わっちゃったツスか？」

と翔がももえを連れて来たせいで台無しになった。いや、翔は決して悪くはない。悪いのは変なスイッチ入ったうざやか部長だから。

「いやあ、君可愛いね。一緒にお茶しようよ。」

うざやか部長の言葉を不愉快に感じたらしく、青筋浮かべたももえは断りの言葉を口にした。

「結構ですわ。あなたより、翔様の方が素敵な殿方ですもの。」

ご丁寧に翔の腕に腕を絡めた上に胸を押し付けるのも忘れず、頬にキスするといういちやつきぶりを披露してくれた。そして、嫉妬したうざやか部長が翔にデュエルを挑んだのだが、

「大嵐を発動！ さらにパワーボンドを発動！ スチームロイド、ドリルロイド、サブマリンドロイドを墓地に送り、スーパービークロイドジャンボドリルを融合召喚！」

ホーリーシャイン・ボール  
神聖なる球体に攻撃！ その瞬間、リミッター解除を発動！」

とーキルを決めたのだが、それにシヨックを受けたのか、号泣して去っていった。

「なんなんスか？今の？」

事情を飲み込めず首を傾げる翔だった。

○ ○ ○

余談になるけどうざやか部長こと綾小路ミツルがオベリスク・ブルーに入ること疑問を感じた俺は海馬に調査を依頼したのだが、親が金で成績を買っていたらしいことが発覚。その教師は解雇され、テストを受けさせた結果、オベリスク・ブルーからラー・イエローに降格となり、そこで頑張っているらしい。

追加の余談でその教師の部屋に何故か魔宮の賄賂のカードが大量にあり、解雇されそうな時も魔宮の賄賂で丸め込もうとして海馬の怒りを買ったのだった。

## デュエル24 バレンタイン

SIDE 明日香

「ううう。」

私と雪乃は目の前の黒くて甘い香りのお菓子をえている。

明日は2月14日。バレンタインデーなのである。女の子達がチョココレートという武器で好きな異性に挑む日である。私も雪乃もチョココレートを用意してあるけど、大きな問題が。それは、

「私達ってお菓子を作った事が無いのよね。」

私達はお菓子を作った事が無く素人で、間の悪い事に鮎川先生はお仕事で離れていて、戻るのは当分先らしい。どうしようと途方にくれていたら、

「アレ?どうしたの?」

と士の精霊であるブラックマジシャンガールのフレアが問いかける。フレアは私達の手元にあるチョココレートを見て、状況を察したらしく、ニコニコと笑みを浮かべ、提案した。

「私、ザツハトルテっていうチョコレートケーキの作り方知っているし、教えようか？」  
『せひー!』

私と雪乃は同時にフレアの手を握っていた。

SIDE 士

「士。卵黄はこんな感じで大丈夫?」

「どれどれ? そうだ。後は卵白を泡立ててメレンゲを作り、卵黄と溶かしたチョコレートとメレンゲを混ぜ合わせるんだ。」

「士さん。メレンゲはこんな具合でよろしいのですか?」

ももえの言葉に泡立て器を借り、メレンゲに角を立てさせる。立った角が盛り上がったままを維持している。

「OK。後は泡を潰さないようにしながら混ぜ合わせるんだ。」

ももえに指示を出しながら、自分が作った生地をバターを塗った型に流し込み型で軽くテーブルを叩いてからオーブンに入れる。

その後、ジュンコやももえに指示を出し、彼女達の生地がオーブンに入れたら焼き始める。焼きあがったら、オーブンから出し、冷ましている間にチョコレートを溶かす。そして、冷めたスポンジを二つにきり、杏ジャムを挟み、チョコレートでコーティングする。

「士。ありがとう。」

「助かりましたわ。わたくし達は作り方全然知らなかったものですから。」

「いやいや。困ったときはお互い様だよ。」

ジュンコの言葉に苦笑しながら返すとももえが首を傾げて問いかける。

「所で、ザツハトルテの作り方をご存知でしたのは？」

ももえの何気ない問いかけに俺は黒いオーラを纏いながら答えた。

「もともとチョココレートとか好きってのもあるけど、バレンタインになると男子勢からチョココレート要求されるだ。」

男が男に渡しても意味ないのに。

「だから、バレンタインの日になると手の込んだチョコレートケーキをダミーに作るようになったんだ。」

俺の言葉に俺の頭を撫でながら慰めようとするジュンコ。

「…苦労しているのね？」

「まあね。ジュンコ。サンキュー。」

その後、出来上がった2人のチョココレートを冷蔵庫に保管してその日は解散した。

○○○○

「士さん。おはようッス。」

翔が俺の顔を見て何かを期待するかのような顔で俺に挨拶した。

「お、早よ。翔。十代。隼人。」

「よ。士。」

「おはようなんだな。」

「つ、士さん。あ、あの、」

「? ああ。そうだ。ほい。3人とも。」

そう言いながらチョココレートをチョココレートを差し出した。差し出したチョココレートを受け取りながら、翔が顔を朱く染める。

「いつもありがとう。」

お礼の言葉に何故か翔が涙を流していた。

「…士さんの本命をもらえるのを期待してたのに。」

「ったく。男に何を期待してるんだか?」

「俺に期待するより、向こうに期待しろ。というかしてくれ。さつきから嫉妬で俺の胃のライフは0だぞ?」

俺が視線をずらすと、拗ねたような表情のジュンコとももえがいた。特にももえに至ってはどす黒いオーラを纏いながら、青筋を浮かべている。うん。こんな姿を子供が見たら悪夢を見そうだ。

「ほら。頑張れ。踏み出さなきゃ想いは伝わらないぞ?」

俺の言葉に、ジュンコとももえがそれぞれが大好きな異性に近づいた。ただし、体中カチコチな状態で緊張しているのがモロバレだったりする。

「じゅ、十代、こ、これどうぞ!!」

「お、おう。サンキューなジュンコ。」

顔を真っ赤に染めるジュンコにシンクロしたのか、顔を真っ赤に染める十代。

「しよ、しようしやま。う、受け取ってくだしやいまし。」

顔を朱く染め、ザツハトルテを差し出すももえに緊張する翔がいた。

「隼人。お邪魔虫だしとつとと行こう?」

「そうなんだな。」

4人その場に残し先を急ぐのだった。

○ ○ ○

「ただいま。」

誰もいないはずの寮のドアを開けたら、

『おかえりー♪』

なんと、人の声がして、フレアと明日香と雪乃が顔を見せた。どうやら、フレアが入れたらしいな。





## デュエル25 ドロー勝負VS雪乃

ベッドで寝るのは気持ちいいな。デュエルアカデミアに来てからは、硬い土や木の上などで野宿だったからな。そんな事を考えながら、目の前の抱き枕に手を伸ばした。

「はぁん♪」

何故か頭上から艶めかしい声が聞こえた。：なんだろう？ 視線を上に向けたら、抱き枕になってた雪乃と目が合った。そして、俺の右手が雪乃の自己主張の激しいお山に埋まっていた。って、

「ウワアアアツ!!!」

思わず後ろに飛び退こうとして床にお尻を打ち付けてしまった。

「ふぁ？ おはよう。土。」

雪乃も今ので目が覚めたらしく、寝ぼけ眼をこすりながら挨拶した。

「あ、ああ。おはよう。で、雪乃？なんでお前が俺の部屋にいる？ここは俺の部屋だし、しっかり施錠したから入って来れないはずなんだが？」

「良いじゃない。細かいことは言いつこなしよ？」

問いかけに笑いながらもベッドから抜け出る。つて雪乃のあまりの刺激的な格好に思わず吹いてしまった。スケスケのネグリジエの向こうにグラマーな肢体がうっすらと透けている。

「雪乃！　なんて格好で寝るんじゃない！」

「あら？　何でかしら？」

俺の言葉に雪乃は可愛らしく首を傾げるとぼけた。

「俺と一緒にベッドで寝て、俺が狼になったらどうするんだよ。」

頭をさすりながら、洗面所のドアを開けた。

SIDE 雪乃

「さて、鬼の居ぬ間にね。」

そうつぶやきながら士のタンスを調べた。

「やっぱり、士は男の娘だったのね。」

デュエルアカデミアに入学してから、今までに女の娘らしいところをあまり見せなかった士だけど、彼を見ているうちにあることに気付いた。

それは士が女の娘なら必ず月に一度は来なかつたらおかしい日が来ている様子が見えなかつたので、タンスを調べてみたら想像通りあの日に必要な物や女物の下着がなかつた。それだけでも疑う余地は少ないのに、タンスから男物の下着が収納されていた

のだ。

「黙っていた方が良いかしら？」

私は誰もいない部屋で首を傾げていた。

○ ○ ○ ○

「雪乃！」

お昼ご飯を食べてた私に十代のボウヤが声をかけてきた。

「どうしたのかしら？」

「トメさんから聞いたんだけどさ、この頃黄金の卵パンだけ盗んでいくヤツがいるらしいんだ。」

黄金の卵パンというのは、デュエルアカデミアで飼育されてる鶏達が1日1回産む黄金の卵を使ったパンでその卵パンとそれ以外の食材で作ったパンをどれがどれだかわからないようにして販売するドロパンが大人気だったりする。

「あの大量のパンの山からたった1個のパンだけ盗んでいくのってとんでもない強運ね？」

「んで、その窃盗が起こるのって深夜ぐらい何だが、良けりや一緒に来て泥棒捕まえるの手伝ってくれねえか？」

「面白そうじゃない。参加させてもらうわ。」

十代のボウヤのお誘いに了承すると、十代のボウヤは集合場所と時間を教えてその場を去っていった。

○○○○

「今日も来るかしら?」

倉庫の入り口を見ながら私は呟いていた。

「多分来るだろ。ここんとこ毎日盗まれているみたいだし。」

同じく入り口を見張っている土が思い出したように問いかける。

「そういえば、黄金の卵パンってそんなに美味しいの?」

「そうね。十代に食べさせてもらったことがあったけどすごく美味しかったわよ。」

土の問いにジュンコが答えた時、近くの枝からガサガサという音が聞こえて黒い人影が倉庫の入り口めがけ飛び降りた。

「止まるッス!」

翔のボウヤの制止の声に人影が近くの木の枝に飛び移った。

「あくあくあく!」

そんな叫び声を上げながら、枝に飛び移った。

「追うぞ!」

「待てい!!」

その叫びとともにデュエルアカデミアの生徒でも、教師でもない男性が私達の前に立ちふさがった。

「通してくれ。俺達はあれを追いかけたいんだ。」

「知らないな。そんな事。俺とデュエルしてもらおう。」

「そんな事している余裕はないんだ。通るぞ。」

士の言葉に男は否定の言葉を口にした。

「そうはいかない。少なくとも、沖田士は俺とのデュエルを断れない。」

？　なんで士だけ？

「沖田士！　賞金のカードをかけてデュエルしてもらおう！」

やってくるわね。私は怒りの表情で彼を見ていた。賞金のカードをかけたデュエルは拒否出来ない。

「仕方ない。コイツとデュエルするから、みんなは泥棒を追いかけろ！」

「わかったわ！　気をつけて！」

明日香の言葉に皆が駆け出したけど、人影らしきものは見えない。ただ、あのターザンのような叫び声が聞こえる方向に急ぐこと数分で叫び声が聞こえなくなった。それから注意しながら、近づいてみると野性味溢れる大男が私達を見ていた。

「あなたが黄金の卵パンを盗んで行った子かしら？」

「人聞きの悪い言い方は止めてもらいたい。俺はただ、ドロウの修行に持っていっただけだ。」

私の言葉にターザンはそういい返す。だけど、ドロウの修行って何よ？

「俺はかつてオベリスク・ブルーに所属していた。だが、ドロウが思うようにいかず、いつも負けてばかりだった。だからこそ、来る日も来る日もドロウの修行に明け暮れていた。今回の一件もその成果だ。」

それで連続で黄金の卵パンを盗めるのならたいした努力の結果よね？でも、

「どんな言葉を言い繕っても泥棒は泥棒よ？」

「それなら、俺とデュエルしてもらおう！俺が勝ったら、俺を見逃し、俺が負けたらもう2度とこのようなことをしないと約束しよう。」

私はその言葉に頷いてから、デュエルディスクを起動させた。

○ ○ ○

『決闘!!』  
デュエル

「私のターン！ドロウ！私はマンジユゴッドを召喚するわ！効果で終焉の王デミスを手札に加えるわ。私はカードを2枚セットしてターンエンドよ。」

雪乃ライフ4000手札4枚

伏せカード2枚

マンジユゴツド ATK1400

「俺のターン！ ドロー！ ドローラーを召喚！ 効果によりデッキの一番下に置いたカード一枚に付き500ポイントアップする！ 俺は手札を5枚デッキに送る！」

ターザン男がデッキにカードを送り続け強化していくロードローラー。

「手札を全て？ 無謀ね？」

「なんとでも呼べ。出たとこ勝負だ。最強のドローを持つ俺は負けん！ ドローラーでマンジユゴツドを攻撃！」

ターザン男の宣言にローラーロードが攻撃を仕掛けるが、

「あら？ 激しいのね？ でも焦っちゃだめよ？じっくり焦らさないと。リバースカードオーブン！ 速攻魔法禁じられた聖杯を発動！ ドローラーの効果が無効にして攻撃力を400アップさせるわ！ ただし、ドローラーの攻撃力が上昇する効果も無効になり、攻撃力が0になってから400アップするわ。」

私のフィールドから翻った聖杯から水をかけるとドローラーが錆び付いて攻撃力がダウンしてしまいマンジユゴツドが返り討ちにした。(大山ライフ4000—1400+400=3000)

「な！ く、た、ターンエンド…。」

雪乃ライフ4000手札4枚

伏せカード2枚

マンジュゴッドATK1400

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

大山ライフ3000手札0枚

「私のターン！ ドロー！ 私は手札から儀式魔法エンドオブワールドを発動！ 手札の救世の美神ノースウェムコを生け贄にして終焉の王デミスを儀式召喚するわ！」

相手のフィールド、手札にカードは無し。墓地には1枚だけあるけど攻撃を阻止するカードじゃない。

「もう終わりかしら？ 案外早いよね？ 激しいのは嫌いじゃないけど、これじゃあ、欲求不満よ？ 2体でダイレクトアタック！」

マンジュゴッドとデミスの攻撃ターザンのライフを削りきった。

「く！ 何故だ！ 何故勝てない！ ドロー修行をした俺がなんで！」

ターザンは自身の敗北に地面に跪いてそうもらしていた。

「当たり前だ。お前に足りない物が多すぎる。」

いつの間そこにいたのか、土がそう言った。

「デュエルにおいて重要な物は何だと思う？」



「ドローの強さではないのか？」

「確かに必要かもしれないが一番重要ではない。じゃあ、十代は？」

「デュエルを楽しむって事だろ？」

「好ましい解答ありがとう。だけど、ハズレ。カードに対する幅広い知識に戦略にドロー。この3つは必要だ。ドローだけ磨いたとしても意味がない。」

「だったら、どうやって戦略を磨けばよいのだ？」

「デュエルに足掻いて自分のカードを理解していけばいい。そうすれば、その分だけ戦略が生まれるはずだ。」

士の言葉をターザンは真剣に聞いていた。

○○○○

「アラ？ 士？」

購買に行く途中で珍しく購買に向かう士を見つけ声をかけた。

「雪乃か？ ひよつとしてドローパンを買いにか？」

「ええ。ちよつと気分だね。士は珍しいわね。」

「弁当を忘れてな。」

購買部にたどり着くとドローパン売り場が大勢の人が並んでいた。その列に並び、ドローパンを一つ購入して口に運ぶ。濃厚な何かとプルプルな何かのコラボレーション

がとても美味しい。なにか入ってるんだろうと思ひ、パンを見てみると黄金の卵パンだった。

「お、おめでどう。」

ドローパンを見た士を見てちよつとイタズラ心が芽生えた。ドローパンを半分にちぎり、士の口元に運ぶ。

「はい。士。あーん。」

「え？ あ、あの、雪乃？ お前がちぎった方を差し出したら関節キスになるんですが？」

その言葉をスルーして口を開けるように要求する。その要求に戸惑ったように顔を赤らめて目を閉じて口を開いた。その態度を可愛らしく思ひながら、半分がちぎった黄金の卵パンを士の口に運んだ。

## デュエル25, 5 VS サイバー流

俺はデュエルを挑んだ男を睨んでいた。

「お前はひよつとしてサイバー流の人達か？」

「さあてな。そんな事はどうでもいいだろ？」

俺の言葉に男はニヤリと笑いながら、デュエルディスクを展開させる。

「このデュエルに俺が勝ったら、サイバー流に関わるな。」

「わかった。良いぜ。」

俺の言葉に男はうなづいた。

○○○○

『デュエル  
決闘!!』

「俺のターン！ ドロー！ モンスターをセット！ カードを2枚セットしてターンエ

ンドー！」

土ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター一枚

フィールド無し

「俺のターン！ ドロー！ 手札から魔法カード、サイバーサーチ発動！ 相手フィールドにのみモンスターがいる時、サイバーと名の付くモンスター、サイバー・ドラゴンを手札に加える！ そして、お前のフィールドにのみモンスターが存在するからサイバー・ドラゴンを特殊召喚！」

その言葉に姿を現す機械竜。

「さらにサイバー・ナイトを召喚！」

サイバー・ナイトで守備モンスターを攻撃！ サイバー・ナイトは攻撃力1400だが、守備モンスターに攻撃する時のみ、攻撃力は2000アップする！」

サイバー・ナイトが突撃して守備モンスター見習い魔術師が倒される。

「だけど、見習い魔術師の効果発動！このモンスターが破壊され墓地に送られる時、レベル2以下の魔法使い族モンスターをセットする！」

俺はそう宣言して見習い魔術師をもう1体セットする。

「サイバー・ドラゴンでもう1体の伏せモンスターを攻撃！ エボリューションバースト！」

サイバー・ドラゴンの閃光が見習い魔術師を倒したが見習い魔術師の効果により、執

念深き老魔術師をセットする。

「俺は1枚伏せターンエンド!」

士ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚

フィールド魔法無し

サイバー・ドラゴン ATK2100 サイバー・ナイト ATK1400

伏せカード1枚

? ライフ4000 手札3枚

「俺のターン! ドロー! 執念深い老魔術師を反転召喚! 効果により、お前のフィールドのサイバー・ドラゴンを破壊!」

執念深い老魔術師が呪文を唱えようとしたとき、サイバー・ナイトが庇い身代わりとなつて碎け散つた。

「サイバー・ナイトの効果発動! 自分フィールドの『サイバー』と名の付くモンスターが効果対象となつた時、対象をこのカードに変更する!」

「なら、速攻魔法ディメンションマジックを発動!」

「トラップ発動！ 帝王の裁定！ 自分フィールドに『サイバー』と名の付くモンスターがいる時、相手のカードの発動と効果を無効にする！ さらにこのカードをデッキに戻しシャッフルする！」

俺の知らないカード？ ともなく、生け贄に捧げたモンスターは戻ってこない。なら、別の手段で突破するしかない。

「手札からコストダウンを発動！ 手札1枚を墓地に送り、手札のモンスターを2つ下げる！ 俺が対象にとるのは、ブラック・マジシャン・マジシヤンガール！ レベルの下がったブラック・マジシヤンガールを通常召喚！」

その宣言にフィールドに舞い降りるフレア。その攻撃力は2300。

「そうか。コストダウンの時にブラック・マジシヤンを捨てていたのか。」

「そういう事だ。ブラック・マジシヤンガールの攻撃！ ブラック・バーニング!!」

『ハアアツ！ ヤアツ!!』

ブラック・マジシヤンガールの攻撃がサイバー・ドラゴンを破壊して相手のライフを削った。(相手ライフ4000—2000—300+2100=3800)

「ターンエンド！」

士ライフ4000 手札0枚

伏せカード2枚

伏せモンスタ―0枚　ブラック・マジシヤンガ―ATK2000+300  
ファイールド魔法無し

伏せカード0枚

?ライフ3800手札3枚

「俺のタ―ン!　ドロ―!　強欲な壺を発動!　2枚ドロ―!　プロト・サイバー・ドラゴンを召喚!　融合を発動!　ファイールドと手札の3枚のサイバー・ドラゴンを融合!!  
来い!　サイバー・エンド・ドラゴン!」

「ここまでは俺の思惑通りだ。リバースオープン!　黒魔族復活の棺!」

このカードの効果により、サイバー・エンド・ドラゴンとフレアが棺に吸い込まれた。  
ごめん。フレア。

『いいっていいって。頑張つてね?』

「サイバー・エンド・ドラゴンとブラック・マジシヤンガ―を墓地に送り、ブラック・マジシヤンを特殊召喚!」

いったん閉じられた棺が開かれると黒衣の魔術師が現れる。

「なら、天よりの宝札を発動!」

その宣言に手札の補充をする。

「アハハ!　来てくれたぜ!

まずは墓地のサイバー・サーチの効果発動！ 自分フィールドにカードが存在しない時、このカードを除外して、手札のサイバーとなの付くモンスターを特殊召喚できる！  
サイバー・エンジェルを攻撃表示で召喚！

さらに、フィールドにサイバーと名の付くモンスターがいるから、チューナーモンスターサイバー・フェアリーを特殊召喚！」

その宣言に機械仕掛けの天使とゾツとするおぞましい妖精が現れた。見たことないモンスターよりも、サイバー・フェアリーの前につけられた言葉に反応する。

「チューナーモンスターだって！」

「どうやら、知っているから説明は省くぞー！ サイバー・フェアリーのレベルを8に変更する！レベル8サイバー・フェアリーにレベル4サイバー・フェアリーをチューニング！」

サイバー・フェアリーは8つの輪になりサイバー・エンジェルが飛び込むと12の星になった。

「シンクロ召喚！ サイバー・プラス・ドラゴン！」

そして、サイバー・フェアリーの効果によりサイバー・プラス・ドラゴンの攻撃力は倍になりサイバー・プラス・ドラゴンの効果により、サイバー・エンド・ドラゴンを装備してその攻撃力と効果を得る！！ サイバー・プラス・ドラゴンで攻撃！」



サイバー・エンド・ドラゴンを装備したことでサイバー・フェアリーの効果により攻撃力がますサイバー・プラス・ドラゴン。

「リバースオープン！ 和睦の使者！」

和睦の使者が張ったバリアがその攻撃を阻んだ。

「しづとい！ コレでターンエンド！」

士ライフ4000 手札6枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 ブラック・マジシャンATK2500

フィールド魔法無し

サイバー・プラス・ドラゴンATK4000+4000+4000

伏せカード0枚

? ライフ3800 手札4枚

「俺のターン！ ドロー！ モンスターを1枚伏せさらに2枚伏せターンエンド！」

士ライフ4000 手札4枚枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚 ブラック・マジシャンATK2500

フィールド魔法無し

サイバー・プラス・ドラゴンATK4000+4000+4000

伏せカード0枚

? ライフ3800手札4枚

「はっ! 亀みたいに縮こまってんじやない! 俺のターン! ドロー!」

サイバー・プラス・ドラゴンで攻撃!」

「リバースオープン!マジカルシルクハット! チェーンで強制終了を発動!」

マジカルシルクハットがブラック・マジシャンとデッキから選んだ2枚のトラップを伏せてシャッフルした。そして、サイバー・プラス・ドラゴンの攻撃がシルクハットに隠れたトラップカードを吹き飛ばす。その瞬間、風がサイバー・プラス・ドラゴンを包み込んだ。

「セットされた黄金の邪神像に荒野の大竜巻の効果により邪神トークンの特殊召喚にサイバー・プラス・ドラゴンを破壊!」

宣言に竜巻により機械竜が吹き飛び、邪神トークンが姿を現した。

「クソガキが!! 1枚伏せてターンエンド!」

士ライフ4000 手札4枚

伏せカード0枚 強制終了

伏せモンスター1枚 邪神トークンATK1000

フィールド魔法無し

伏せカード1枚

? ライフ3800 手札4枚

「俺のターン！ ドロー！ 手札から魔法カード死者転生を発動！ 手札のレベル・ステイラーを墓地に送り、墓地のブラック・マジシヤンガールを手札に加える！ さらにブラック・マジシヤンを反転召喚してレベル・ステイラーの効果を使ってブラック・マジシヤンのレベルを1つ下げて特殊召喚！ レベル・ステイラーを生け贄に捧げ、ブラック・マジシヤンガールを召喚！」

『私、再び参上!!』

時を走るバイク乗りセリフを発しながら姿を現したフレア。

「バトル！ 3体で総攻撃！」

「トラップ発動！ 攻撃の無力化！」

時空の渦が3体の攻撃を飲み込んだ。

「レベル・ステイラーの効果でブラック・マジシヤンのレベルを1つ下げて特殊召喚してターンエンド！」

士ライフ4000 手札3枚

伏せカード0枚 強制終了

伏せモンスター0枚 邪神トークン ATK1000 ブラック・マジシャンガール ATK2000 ブラック・マジシャン ATK2500 レベル・ステイラー DEF0  
 フィールド魔法無し

伏せカード0枚

? ライフ3800手札4枚

「俺のターン! ドロー! 墓地のサイバー・エンジェルの効果発動! 自分フィールドにカードが無いときこのカードを墓地から特殊召喚出来る! さらにサイバー・フェアリーを召喚! 効果によりレベルを8にする!

レベル8サイバー・フェアリーにレベル4サイバー・エンジェルをチューニング!

来たれ雷!

リスペクトを守らぬ者に裁きの雷を!

シンクロ召喚!

サイバー・バニシング・ドラゴン!!」

まがまがしい威圧感を放つ機械竜が現れると同時に雷が荒れ狂う。

『な、何? この雷? し、痺れて力が出ない。』

雷の影響かうずくまるフレア達。

「バニシング・ドラゴンはサイバーと名の付かないモンスターの攻撃力を0にした上で

元々の攻撃力を自身以外モンスター元々の攻撃力の合計になる!!」

つまり、今のあいつはサイバー・フェアリーも合わせ12100の攻撃力か。

「コレで終わりだ! サイバー・バニシング・ドラゴンでブラック・マジシャンを攻撃!」

勝ち誇るのはいいが、フィールドのカードは気にしなさい。

「強制終了の効果によりレベル・ステイラーを墓地に送りバトルフェイズを終了!」

レベル・ステイラーが身を挺して攻撃をそらした。

「しつこい! 1枚伏せてターンエンド!」

士ライフ4000 手札4枚

伏せカード0枚 強制終了

伏せモンスター0枚 邪神トークンATK1000 ブラック・マジシヤンガールA

TK2000 ブラック・マジシヤンATK2500

フィールド魔法無し

サイバー・バニシングドラゴン・ドラゴンATK11500

伏せカード1枚

? ライフ3800手札4枚

「俺のターン! ドロー!」

「1つ教えといてやるぜ! バニシング・ドラゴンは効果では破壊出来ない! そして、

伏せカードは最終突撃部隊！」

なるほど、チェックがかかっているわけだ。たが一手遅い。

「手札から禁じられた聖杯を発動！ バニシング・ドラゴンの効果を無効にして攻撃力を4000アップさせる！」

聖杯に汲み上げた水を掛ける事により雷も収まりフレア達も力を取り戻した。

「だけど、それだけで勝てるとは思うな。」「確かに。バニシング・ドラゴンの現在の攻撃力は6500。でも、効果破壊出来ない効果も消えるよな？」

手札から千本ナイフを発動！ バニシング・ドラゴンを破壊!!」

千本のナイフがバニシング・ドラゴンを切り裂いた。

「ブラック・マジシャン師弟でダイレクトアタック！」

フレアとブラック・マジシャンの攻撃が敵のライフを削り取った。

○○○○

「さて、思わぬ時間はくつたけど、雪乃達を追いかけないと。」

そういつて地面に残された痕跡を頼りに雪乃達の後。追いかけた。

「…要もやってくれる。」

雪乃と一緒にドローパンを食べてた時、亮が苦虫を噛み潰したかの表情で漏らしてい

た。

「どうした？」

「以前、サイバー流に関わらないという条件でデュエルした人がいるんだが、新サイバー流とやらを興していた。」

「それは約束違反じゃないかしら？」

「いや、それまでのサイバー流とは全く別のサイバー流だから、問題ないというのが向こう側の言い分だ。」

「本当にしつこいね？」

思わず吐いた溜め息が風に流されていった。

## デュエル26 史上最弱の死者

「どこに目をつけてやがる!!」

「ご、ごめんなさい!!」

教室に向かう途中、そんな声が聞こえたのでそつちを見ると女の子がオベリスク・ブルーの男子にいちやもんつけられているところだった。

「許して欲しけりや、カードを超越しな! って、おい! こいつのデッキ、ワイトじゃねえか!」

珍しいとは思いますが、それがどうしたんだろうか?

「まさか、そんな屑カードを使っている奴がいるとは思わなかったぜ。」

「か、返してください! お姉ちゃんからの贈り物なんです!」

男は女の子の必死の訴えに嘲りの笑みを浮かべ、デッキを床にばらまいて、

「そんな屑カードは使えないようにしてやるよ!」

右足でカードを踏みにじろうとするより早く、

「せいっ!!」



俺の右足が男のシンボル目掛けフルスイングしていた。

「\* > | - + ? 」 , @ ~ # | 「 ~ ~ \$ \* . ? ~ ? . \$ % / ^ ! ! ! 」

激痛にのた打ちまわっている間に女の子のカードを広い集め、女の子に渡した。

「大丈夫?」

「は、はい!! ありがとうございます!」

「て、てめえ!! 何しやる!!」

男が噛みついてくる。まだ痛いのか、内股なのがかつこがつかない。

「それはこちらのセリフだ。カードを取り上げたり、踏みにじろうとするなんて、デュエリストとして最低だ。」

俺の顔を見た男はニヤリと笑みを浮かべた。

「沖田士! 賞金首のカードをかけてデュエルしてもらうぜ!!」

ただし、この女のデッキを使ってもらうぞ!!」

「そ、そんな!! 無理です!!」

「いや。やろう。ただし、デッキの調整をさせて欲しいから放課後にな。」

俺の答えに男はニヤリと笑みを浮かべて去っていった。

「君。デッキを見せて。」

「あ、あの。良いんですか? 私のデッキなんかじゃあすぐに負けちゃいますよ。」

「良いよ。俺のデツキで勝てても君のデツキを認めようとしないだらう。」

その答えに嬉しそうな笑みを浮かべる。

「どうやらこの子のデツキは純アンデッドの構成らしい。」

「デツキの構成をちよつと崩すけどいい？ えつと、」

「あ、あたしは水上香奈美です。デツキの方は構いません。」

香奈美から許可をもらいデツキをいじくつた。

○ ○ ○

「レディースエーンドジェントルメン!! 長らくお待ちせしませしターン!」

事情をクロノス先生に話して審判を務めてもらったのはいいが、何故か全生徒、教員

までその話が広まり、皆が見に来ていたりする。

「今日この場でデュエルは雑魚田蔵!」

その言葉に対戦相手の男がデュエルリングにあがる。

「対するは沖田士!」

俺がデュエルリングにあがると大半のブルー生からブーイングが鳴り響いた。

○ ○ ○

『<sup>デュエル</sup>決闘!!』

「俺のターン! ドロー!」

かなり良い手札だ。

「ワイトキングを攻撃表示で召喚!!」

俺のフィールドにワイト達の王様が現れると大半のブルー生が俺を馬鹿にしたような目で見る。

「さらにカードを2枚セットしてターンエンド!」

士ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚

ワイトキングATK0(10000×0)

「俺のターン! ドロー! そんな雑魚すぐに潰してやるよ!

電動刃虫を攻撃表示で召喚!!」

男のフィールドにチェンソーで武装した虫が現れた。

「チェンソー・インセクトでその雑魚に攻撃!」

伏せカードくらい気にしろよ?

「リバーズカードオープン! 手札断札を発動! 全てのプレイヤーは2枚捨てて2枚ドローする!」

ワイトキングと電動刃虫がぶつかりあい、拮抗している。

「な、何！」

「ワイトキングは墓地にあるワイトとワイトキングの枚数×1000がもともとの攻撃力になる！」

「だ、だが、その効果で得られる攻撃力も2000どまりのはずだ！」

「墓地に送ったワイトプリンスの効果発動！ワイトとワイト夫人を墓地に送る！そして、ワイト夫人も既に墓地に送ったワイトメアもワイトプリンスも墓地ではワイトになる！よって攻撃力は4000！ワイトキングの反撃！ホーンテッドラッシュ！」

ワイトとワイト夫人を墓地に送ると、墓地からワイト達が飛び出して、電動刃虫を皆でフルボッコして墓地に戻った。ちなみにその光景を見ていた雪乃は恐怖で震えていたらしい。（田蔵ライフ4000-4000+2400=2400）

「電動刃虫の効果で1枚ドロする！」

「く。カードを1枚伏せてターンエンド！」

士ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

ワイトキング ATK 4000 (1000×4)

伏せモンスター0枚

伏せ1枚

田蔵ライフ2400手札4枚

「俺のターン！ドロー！手札から魔法カード、強欲な壺を発動！2枚ドロー！ワンフォーワンを発動！手札のワイトプリンスを墓地に送り、デッキからレベル1のワイトキングを特殊召喚!!」

俺はデッキからワイト、ワイト夫人、ワイトキングをサーチして墓地とフィールドに置く。

「さらにワイトプリンスの効果発動！このカードとワイト2枚を除外してワイトキングを特殊召喚!! さらに異次元からの埋葬発動！除外したワイト2枚にワイトプリンスを墓地に戻す！手札から魔法カード生者の書禁断の呪術を発動！ワイトプリンスを特殊召喚して電動刃虫を除外！ワイトプリンスを生け贄に捧げレッドアイズ・アンデッドドラゴンを生け贄召喚！ワイトプリンスが墓地に送られたことでワイトとワイト夫人を墓地に送る!」「す、すごい。」

「ちよつと待って！土の墓地にワイト、ワイト夫人が3枚ワイトメアが1枚、ワイトプリンス2枚あるわ!!」

「ということとはワイトキングは攻撃力9000!」

『三沢君いたんだ。』

「最初からいたぞ!!」

上から翔、明日香、三沢っていうラー・イエローの生徒の声が聞こえるが三沢なんていたか?

「バトル!ワイトキングでダイレクトアタック!!ホーンテッドラッシュ!」

「かかったな!!リバースカードオープン!聖なるバリアーミラーフォース!」

虹色の閃光がフィールドを満たす。

「はっ!てめえのデツキには強力なカードなんかねえだろ!!雑魚を踏み潰されるのを指を加えて見てるんだな!」

勝ち誇ったような声を上げるが、その閃光が収まると無傷のワイトキング3体がそこにいた。

「てめえ!まさかイカサマを!」

「いや、ミラーフォースにチェーンでリビングデッドの呼び声を発動してワイト夫人を呼び出した。ワイト夫人はワイト夫人以外のレベル3以下のアンデッドを戦闘、効果から守る。この効果によりレベル1のワイトキングは守られた。」

ワイトキングが墓地のワイト達を呼び出して攻撃をしかけた。

「ワイトキングのダイレクトアタック!! ホーンテッドラッシュユー!」

フィールドにいたワイトキング墓地のワイト達を呼び出して攻撃をしかけた。

「ラスト! ワイトキングのダイレクトアタック!! ホーンテッドラッシュユー!」

俺の宣言にワイトキングは墓地からワイト達を呼び出して攻撃をしかけた。

「そこまで! 勝者、沖田士なノーネー!」

クロノス先生の言葉に明日香達は喜び、それ以外のオベリスク・ブルーは葬式か通夜みたいになくなっていった。

「お待ちください。今のデュエル士君の反則負けです。」

その言葉に明日香達は落ち込み、逆にそれ以外のオベリスク・ブルーは我が事のように喜んでいった。

「鮫島。理由を聞いても?」

「自らのデツキをゴミのように扱い、高い攻撃力で反撃を許さないだけではあきたらず、決着ついた相手を傷つける。そこにリスペクトは感じられません。」

その言葉にため息を吐いていた。

「鮫島はそう言ってますが、あなたは どう思いますか?」

胸ポケットに入れといた携帯に向かってそう言うと、向こう側から答えが返ってきた。

「イヤ、鮫島の発言には正当性が何もない。反則負けにはならない。」

その言葉に鮫島は顔を青ざめる。

「その声はオーナーですか!!」

「鮫島! このデュエル士の勝ちだ!」

その言葉に鮫島は悔しそうに俺を睨んでいた。

その日の晩、泣きついて来た雪乃と何故か泊まりに来た香奈美に抱きつかれ、明日香並みに豊満な双子の山の感触を堪能していた。



## デュエル27 デツキ泥棒VSクロノス

「なあ、士。ちよつといいか？」

休日、川に釣竿を垂らしている俺に十代が声をかけてきた。

「何？ 十代？」

「リスペクトってなんだろうな？ この前のデュエルの時、士は別に禁止カードを使っていた訳じゃないのに、リスペクトに反するって理由で反則負けにされそうだったし。

俺さ、どんなデュエルでも楽しいんだけどさ、鮫島校長が割り込んで来たのだけ、楽しくなかったんだ。」

十代は苦痛な表情を見せていた。

「十代。デュエルは楽しいか？ っと。」

俺は十代に答えるより前に問いかけてみた。その時魚を引いたので、魚を引き上げ、釣り針を抜いて、クーラーボックスに放り込んだ。

「え。当たり前だろ？ デュエルは楽しいものだし。」

「なら答えは簡単だ。お前の苦痛はデュエルが楽しいって気持ちを否定されたからだ。」

釣り針に餌をつけながらの俺の答えに十代は黙って耳を傾けていた。

「リスペクトは尊敬するって意味だ。」

デュエルが楽しくてもケチがついたデュエルが楽しいと思うか？」

「：じゃあ、なんでオベリス・ブルーの人達は鮫島校長の判断に喜んでいたんだ？」

「それは簡単だ。自分達に被害が無いからだ。十代。花火は好きか？」

「あ、ああ。見てて飽きないし楽しいけど。」

「それじゃあ、その火花が危険なもの？」

俺の問いに十代は首を縦に振る。

「人間って時に残酷な物でね。対岸の火事を娯楽に捉えてしまう面もあるんだ。」

恐らくは、サイバー流がもて囃されてるのは、攻撃力4000、パワーボンドとリミッター解除も合わせれば攻撃力16000という素人にもわかりやすいステータスで惹きつけ、リスペクトという大衆受けしそうな言葉で味方を増やしたんだろう。たまにリスペクトという言葉に疑問を持つ者が現れても、そいつをリスペクト違反者という形で断罪して正義の味方みたいな錯覚させたんだ。

「あくまでもコレは俺の考え方だ。実際は違うかもしれない。」

俺の言葉に十代は何かを考えるかのようにその場に佇んでいた。

○ ○ ○

宿題も終わらせ、さて、寝ようと思った所でPDAになる。とって見たら、翔が映し出された。

「土さん。夜分遅くに申し訳ないです。明日武藤遊戯さんのデッキを見れるツスけど、今から見に行きませんか？」

「別に構わないよ？　じゃ、後でね？」

翔にそう返して、着替え、財布にデュエルディスクとデッキを持ち出した。

「よ。お待たせ。」

翔達と合流して薄暗い展示スペースを歩いていく。それは良いけど、雪乃と香奈美はひつつかんでくれ。歩きにくいし、柔らかくて大きな果実が二の腕辺りを挟んでるし、明日香や翔がにらんでるし。

「ペペロンチイイイーローノオオオ!!!」

そんな叫び声が聞こえ、身構えたがすぐに叫び声が誰の物か気づいた。というかあの独特の叫び声はクロノスしか考えられない。

駆けつけてみると、思った通り、クロノス先生がいて展示ケースが割られていた。

「ああ!!　無いツス!!　遊戯さんのデッキが無いツスよ!!」

「まさか、教師ともあろう人が窃盗なんて、見損ないました!!」

「ヒイツ!!　ち、違うノーネ!!」

皆に疑われ青ざめるクロノス先生。そこに手をさしのべる予想外の味方。

「クロノス先生が犯人のわけないじゃん。鍵持ってるはずだし。」

「そ、そうなのーネ!! 鍵を持ってるのーネ!!」

「じゅ、十代! 精神科に受診しろ!!」

「どうした?」

「頭を使う十代なんて十代じゃない!」

「それ失礼だからな!」

俺の言葉にツツコミを入れる十代。

「それはともかく、早く見つけださないと。」

「手分けして探そう!」

「つて、あ。ちよつと!」

十代の発言に皆解散した。

○○○○

「えつと、こつちか。」

俺は小型機械の案内の元、デッキ泥棒を追いかけた。

「君がデッキ泥棒なんだな?」

黄色い制服を来たラー・イエローを来た生徒は俺を見て笑みを浮かべた。

「その通りだ。良くわかったな？」

「単純な話だ。君が盗んだデツキは発信機付きの偽物だ。」

「何！」

俺の言葉に男は驚いていた。

「後はその発信器を追跡するだけ。簡単だった。」

それと、まだ間に合う。クロノス先生達に謝罪とデツキは返しておけ。お前がやった事は窃盗に器物損壊だ。」

「断る！ 俺はこのデツキで最強になるんだ！」

「他人が作ったデツキを盗んでも最強になんてなれない。余計な罪を背負いこむだけだ。」

「うるさい！ 最強の女帝のお前に俺の何がわかる！」

逆切れか？ 最近の若いのはすぐ切れるな？

「なら、デュエルだ。俺が勝ったらデツキは返して、クロノス先生達に謝罪しろ。」

後、俺は男だ。」

「いいだ……ろ……？」

デツキをセットしたラー・イエローのデュエルディスクからエラー音が鳴り響いた。

コレは制限、禁止カードの使用を警告する為の物だ。

「そのデッキは禁止カードに認定されてる。」

呻きながらデッキを取り替えた。

○○○○

『決闘!!』  
デュエル

「俺のターン！ ドロー！ 手札から魔法カード天使の施しを発動！ 3枚ドロウして

2枚捨てる！ カードを2枚セットしてモンスターをセットしてターンエンド！」

士ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚

「ワタシのターン！ ドロー！ 手札から魔法カード磁石マグネットサークルの召喚円LV2を発動なノ

ネ！」

アンティークデッキか。というかほとんど物まねのレベル高いな。

「このカードは手札のLV2以下の機械族モンスターを特殊召喚出来るノーネ！

アンティークギアアンティークギアの効果により、手札のアンティークギアを

特殊召喚！ 手札からフィールド魔法歯車街ギア・タウンを発動！ アンティークギアを召喚する

時必要な生け贄が減るノーネ！ 手札から魔法カード天よりの宝札を発動！ 手札を

6枚になるようにドロウ！ アンティークギアを生け贄に古代の機械巨人アンティークギアゴレムを生け贄召

喚！　そして、二重召喚を發動！アンティークギアを生け贄にもう一体のアンティークギア・ゴーレムを生け贄召喚！　アンティークギア・ゴーレムでその伏せモンスターを攻撃！」

機械巨人の正拳が伏せモンスターを破壊して俺のライフを削った。（士ライフ400  
0—30000+8000=18000）

「見習い魔術師の効果発動！　このカードが破壊された時、レベル2以下の魔法使い族モンスターをセット出来る！　水晶の占い師をセット！」

「だが、コレで終わりのないネー！　アンティークギア・ゴーレムで、そのモンスターを攻撃！」

機械巨人の正拳が伏せモンスターを殴ろうとして、

「墓地からネクロガードナーの効果発動！　このカードを除外して攻撃を無効にする！」

魂の障壁に阻まれた。

「1枚セットしてターンエンド！」

士ライフ1800　手札6枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚

アンティークギア・ゴーレムATK3000×2体

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

物まねクロノスライフ4000 手札3枚

「俺のターン！ ドロー！ 水晶の占い師を反転召喚！」

水晶の占い師が場に現れると2枚のカードの絵柄が水晶に映し出された。1枚目は魔法カード、千本ナイフ<sup>サウザントナイフ</sup>。2枚目はモンスターカード、見習い魔術師。……とりあえず、賭には勝った！

「水晶の占い師の効果によりサウザントナイフを手札に加え、見習い魔術師をデツキの一番下に置く！ 伏せカード発動！ 漆黒のパワーストーン！ このカードに魔力カウンターが3個乗る！ そして、奇跡の復活を発動！ 魔力カウンターを2個取り除いて墓地からブラツク・マジシャンを特殊召喚！」

「くっ！ 来たノーネ！ しかし、アンティークギア・ゴーレムの方がまだ攻撃力が上なノーネ！ 1体は倒せてももう1体は無理なノーネ！」

「手札から速攻魔法デイメンションマジックを発動！ 水晶の占い師を生け贄にブラツク・マジシャンガールを特殊召喚！」



『ハアア！ ヤアツ！』

フレアが舞い降りた時放った魔力弾がアンティークギア・ゴーレムを破壊した。

「さらにサウザントナイフを発動！ アンティークギア・ゴーレムを破壊！」

ブラック・マジシャンが投げたナイフがいくえにも分身して機械巨人を切り裂いた。

「2体でダイレクトアタック！」

「マダなノーネ！ ブラック・マジシャンに収縮を発動！」

黒魔導師の師弟の攻撃を耐えきる物まねクロノス。(物まねクロノスライフ4000

—2500÷2—2000=750)

「カードを3枚セットしてターンエンド！」

士ライフ1800 手札1枚

伏せカード3枚

漆黒のパワーストーン(魔力カウンター2個)

伏せモンスター0枚

ブラック・マジシャン ATK2500 ブラック・マジシヤンガール ATK2000

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

物まねクロノスライフ750 手札3枚

「ワタシのターン！ ドロー！ 手札から魔法カード、ダブルサイクロンを発動！ ワタシとシニョーラ沖田の魔法トラップカードを1枚破壊するノーネ！」

物まねクロノスのカードが俺のブラフのミラーフォースと、ギアタウンを破壊した。「ギアタウンが破壊された事で古代の機械アンティークギア・ガゼルドラゴン巨竜を特殊召喚するノーネ！

さらに死者転生を発動するノーネ！ 手札のアンティークギア・ソルジャーを墓地に送つて、墓地のアンティークギア・ゴーレムを回収するノーネ！ 最後に手札から魔法カードアンティークギア・ファクトリーを発動！ 墓地からレベル2のアンティークギア2枚、レベル4のアンティークギア・ソルジャー、レベル8のアンティークギア・ゴーレムを除外することで手札のアンティークギア・ゴーレムのレベルの倍になり生け贄の必要がなくなったノーネ！」

その宣言に姿を現す機械巨人。

「アンティークギア・ゴー「ストップ！」

…なんなんだ？」

いきなりストップをかけられ巢に戻る物まねさん。

「バトルフェイズに入った瞬間、マジカルシルクハットと強制終了を発動。この2枚のカードにデッキから2枚のトラップカードとブラックマジシャンをセットして、バトル

フェイズを終了する。ただし、シルクハットモンスターは破壊され、シルクハットモンスターにした荒野の大竜巻でアンティークギア・ゴレムは破壊される。」

その解説と共に突風でバラバラにされる機械巨人達。

「ターンエンドなノーネ。」

士ライフ1800 手札1枚

伏せカード0枚

漆黒のパワーストーン 強制終了

伏せモンスター1枚

ブラック・マジシャンガール ATK2000

物まねクロノスライフ750 手札0枚

「俺のターン！ ドロー！ ブラック・マジシャンを反転召喚して2体でダイレクトアタック！」

黒魔導師師弟の攻撃が今度こそ物まねクロノスのライフを0以下にした。

○○○○

「また、負けた。」

「コピーデッキが悪いわけじゃない。だが、真似たデッキには君自身の思想は反映され

ないそんなデッキを使いこなすのは無理だ。」

ポツリとつぶやく少年にそう指摘した。

ぱちぱち。

「ナイスファイトだったノーネ。シニョール神楽坂。」

「クロノス先生。」

いつからそこにいたのは知らないけど、クロノス先生がそこにいて拍手を送っていた。

「ごめんなさい。アナタの苦悩に気づかなかったノーネ。教師として恥ずかしく思うノーネ。」

クロノス先生は神楽坂に土下座して謝罪する。

「顔を上げてください。俺だって先生に相談すれば良かったのにしなかった挙げ句、デッキを盗んでしまったのですから俺が悪いんです。」

神楽坂はそう言ってデッキを返却した。

SIDE 鮫島

「さて、武藤遊戯さんのデッキを見に行けるまたとないチャンスです。これも教師の特権です。」

ドアを開けた私を出迎えたのが、割られた、展示ケースだった。

「こ、これは！」

思わず硬直した時、

「泥棒！ 何やってるんですか！」

私の背後から鮎川先生が声をかけていた。

その後駆けつけた警備員により捕まり、処罰を受けそうだったが、神楽坂君の説明により解放してもらった。

## デュエル28 恋する乙女VS十代

デュエルアカデミアに向かう途中、十代達に気づいて声を上げた。

「はよ。十代。翔。隼人。…で、君は？ 見ない顔だけど？ 俺は沖田士だ。」

「おはよう。士。コイツは昨日から俺達の同室で早乙女レイだ。」

「士さん。おはようツス。」

「おはよなんだな。」

「はじめまして。ボクは早乙女レイです。」

俺の挨拶に4人が挨拶する。って、この子が男装少女のレイか。

「なあ。レイ。お前って一人部屋じゃないだろ？ 確か、オシリス・レッドって空き部屋

無いと思ってたけど？」

「いや、ボクは十代達と同じ部屋だよ。」

やっぱりそうか。

「なら、俺の所に移らないか？ 十代の所はいっぱいだろ？」「つ、士さん！ そんな事

をする必要ないツスよ！」

俺の提案になぜか翔が早乙女を睨む様に見ていた。

「うーん。確かにあの部屋を4人で住むのは手狭だよな。」

早乙女はあの部屋を思い出して呟いていた。その瞬間、翔の視線が強くなったが早乙女が何か呟いた途端に翔はホッと息を吐いていた。

「うーん。確かにあの部屋は手狭なんだけど、引越しを決めるのはレイ君だよ。」

その結果、早乙女は俺の所に引越しを決めた。

○○○

「はい。コレが早乙女の部屋のカギ。」

カギを手渡ししてから案内する。

「…で、早乙女。女の子が男のフリしたのは何でだ？」

「…気づいてたの？ ボクが女だって？」

俺の問いに早乙女は目を丸くしていた。

「ま、ね。で、何で男装を？」

「ごめん。言えない。」

「なら、仕方ないっか。ようこそ、デュエルアカデミアに。」

俺の言葉に早乙女は首を傾げていた。

「聞かないの？」

「別に言いたくないのを無理やり聞かせるのはよくないよ。誰だって言いたくない話の1つや2つはあるさ。」

俺の言葉に信頼してくれたからか、頼み事をしてきた。

「士さん。お願いしても良いですか?」

「何?」

俺の問いに早乙女は答えた。曰わく、自分は小学生であること、ここには1週間ぐらいの体験学習であること、小学校の担任も両親も了解を得ているものの課題を言い渡され、内容次第では留年もありうると。

「課題の1つに自分のデツキのメリットとデメリットを分析してレポートにするというものなんだ。」

「わかった。変わりにこちらからも頼むけどさ、翔が好きな女の子がいるんだけど、なかなか告白しないんだ。その子を一步前に踏み出させてほしいんだ。」

頷いた早乙女からデツキを受けとり、机の上に並べる。

「恋する乙女と乙女カウンターを利用したコントロール奪取系デツキか。」

とりあえず、パッと見た感じ気づいたのは、まず、1キルのようなデツキやバーン、終焉のカウントダウンやエクゾディアのように特殊条件での勝利を狙ったデツキにはこのデツキは無力化すること。



乙女カウンターとキューピットキスで相手モンスターを奪うまでにダメージを受けすぎる。

例えば、攻撃力10000のモンスターを奪うとしよう。そのためにまず一回殴られる。恋する乙女の攻撃力は400。差が600を受けて殴っての2回受けなきやなんない。

キューピットキスでコントロールを奪取するには乙女カウンターが乗っている状態で攻撃してダメージを受ける必要があり、スピリットバリアでダメージを防ぐとコントロールを奪えない。

次に攻撃力が変動するモンスターを奪った際はどうか？ 例えばワイトキングだ。あれは墓地にあるワイト、ワイトキング、ワイト扱いになってるモンスターの枚数で攻撃力が変動するけど、ワイトは早乙女のデッキには入ってないから攻撃力は0。

最後にコントロール奪取出来ないモンスターは、そもそもコントロール奪取出来ない状況だとキューピットキス、ハッピーマリッジも無力化する。」

俺の解説を早乙女はマジメにメモしていた。

○○○○

「よう。十代。」

何故かオベリスク・ブルー寮を心配そうに見上げている十代を見つけ声をかけた。

「士か。あれ見てくれ。」

十代が指差した先には、木登りしている早乙女がいた。しかも、あつという間に丸藤亮の部屋まで辿り着いて部屋の中に侵入してしまった。

「住居不法侵入じゃねえか！ 止めないと！」

十代は叫んでから、木に登り、丸藤亮の部屋に入ろうとする。

その様子を見ながらPDAを取り出した。

『どうした？』

「今、丸藤亮の部屋に忍び込んだ奴がいて、十代が止めようと忍び込んだから十代は大目に見てくれ。」

『わかった。』

俺の頼みを快く了承して通話を切る。それから少しして十代が走ってきた。どうやら、丸藤亮か、あるいはその取り巻きが入り口まで案内してくれたらしい。

「士！ レイを見なかったか？」

「十代が来る少し前にあつちに走って言ったが何かあったんだ？」

「…実はレイが、」

「女の子だって事だろ？ 知ってるよ？なんでわざわざ男装しているのかは知らないけど。」

「そっか。じゃ、誰にも話さないでくれないか？俺が聞き出してみる。」

十代の頼みに首を縦に振る。もとより誰かに話すつもりなど毛頭にもないし。

「サンキュー。」

十代は俺が指示した方向に走って行った。

○ ○ ○ ○

その後、どういう展開になったのかは知らないが、海辺で十代と早乙女がデュエルディスクを構えている。

「本当にボクが勝ったら黙っていてくれるんだね？」「ああ。デュエルすればその人の事がわかる。わざわざ教えてもらう必要がなくなる。」

十代の言葉に早乙女は呆れ顔になるが、表情を引き締める。

○ ○ ○ ○

『決闘!!』  
デュエル

「ボクのターン！ ドロー！ 手札から黄金の天道虫ゴールドエン・レディバグを見せて効果発動！ 手札のこのカードを相手に見せる事でボクのライフを500回復させる！

そして恋する乙女を攻撃表示で召喚！ そして、カードを1枚伏せてターンエンド  
！」

ライフ4500 手札4枚（黄金の天道虫）

伏せカード1枚

恋する乙女ATK400

「俺のターン！ ドロー！ エレメンタル E・HERO ヒーロー フェザーマンを攻撃表示で召喚！

フェザーマンで恋する乙女を攻撃！ フェザー・ブレイク！」

『キヤア！』

フェザーマンの羽ばたきが恋する乙女を攻撃する。

『うう。酷いです。』

恋する乙女の言葉に戸惑うフェザーマン。

「ダメージ計算時にガード・ブロックを発動！ 戦闘ダメージを0にして1枚ドロー！

そして、恋する乙女を攻撃したモンスターには乙女カウンターが乗るよ。」

「コレでターンエンド！」

レイライフ4500 手札5枚（黄金の天道虫）

伏せカード0枚

恋する乙女ATK400

フェザーマンATK1000（乙女カウンター1有り）

伏せカード0枚

十代ライフ4000手札5枚

「ボクのターン！ ドロー！ ボクの手札から黄金の天道虫ゴールドエンレディ・バグを見せてライフ500回復させる！ そして、キューピットキスを恋する乙女に装備して恋する乙女でフェザーマンに攻撃！」

『フェザーマン様あ！』

恋する乙女がフェザーマンの胸元に飛び込み、フェザーマンが優しく抱き止め、2人の唇が重なった。(レイライフ5000-1000+400=4400)

「キューピットキスの効果発動！ このカードを装備したモンスターが乙女カウンターに乗ったモンスターに攻撃してダメージを受けた場合そのモンスターのコントロールを得る！」

『お願いします！ フェザーマン様!! 力を貸してください!』

『よし!! 任せろ!!』

「そ、そんなあ！ フェザーマン！」

「フェザーマンでダイレクトアタック！ フェザーブレイク！」

『くらえ!! この悪党!』

フェザーマンが羽ばたきで十代を攻撃する。恋する乙女を攻撃させた恨みからか先ほどより羽の量が多い気がする。(十代ライフ4000-1000=3000)

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

レイライフ4400 手札3枚(黄金の天道虫)

伏せカード2枚 キューピットキス

恋する乙女ATK400 フェザーマンATK1000(乙女カウンター1有り)

伏せカード0枚

十代ライフ3000手札5枚

「俺のターン！ ドロー！<sup>エレメンタル</sup> E・HERO<sup>ヒーロー</sup> エアーマンを召喚！ エアーマンの効果

でスパークマンを手札に加える！

エアーマンでフェザーマンを攻撃！」

エアーマンは風でフェザーマンを攻撃しようとするが、恋する乙女がフェザーマンの前に躍り出た。

「永続罫カード、ディフェンスメイデンを発動！ 乙女カウンターが乗っているモンスターが攻撃対象になった時、恋する乙女を攻撃対象に変更する！」

『キヤア！』

『エアーマン！ か弱き少女に手を上げるとは何事だ！』

『うう！ 俺はなんて過ちを！』

こうして、エアーマンにも乙女カウンターが乗る。(レイライフ4400—1800+400=3000)

「コレでターンエンド！」

レイライフ3000 手札3枚(黄金の天道虫)

伏せカード1枚 デイフエンスメイデン キューピットキス

恋する乙女ATK400 フェザーマンATK1000(乙女カウンター1有り)

エアーマンATK1800(乙女カウンター1有り)

伏せカード0枚

十代ライフ3000手札6枚

「ボクのターン！ ドロー！ ゴールドン・レディバグ黄金の天道虫を見せてライフを500回復させるよ。手

札からハッピーマリッジを恋する乙女に装備！ ボクのフィールドに十代さんからコ

ントロールを得たフェザーマンがいるから、攻撃力が1000アップするよ！

恋する乙女でエアーマンを攻撃！」

『エアーマン様あ！』

恋する乙女はエアーマンの胸元に飛びついて、エアーマンも恋する乙女を抱きしめて唇を重ねた。(レイライフ3500-1800+400+1000=3100)

『エアーマン様もお力貸して下さいますよね？』

恋する乙女が顔を紅くして問いかける。それだけで、

『か弱き少女に力になることこそHEROの務め！』

舞い上がって十代を裏切るエアーマン。まあ、効果だから仕方ないけどさ。

「フェザーマンとエアーマンでダイレクトアタック!」

『食らえ! か弱き少女に攻撃させる悪党!』

エアーマン。すつかり、十代を悪役扱いか。マスター十代なのに。(十代ライフ3000—1800—10000=200)

「ボクはターンエンド!」

レイライフ3100 手札5枚(黄金の天道虫)

伏せカード1枚 デイフェンスメイデン キューピットキス ハッピーマリッジ

恋する乙女ATK400 フェザーマンATK1000(乙女カウンター有り)

エアーマンATK1800(乙女カウンター有り)

伏せカード0枚

十代ライフ2000手札5枚

「俺のターン! ドロー! 手札から愚かな埋葬を発動! デツキからE・HERO

バーストレディーを墓地に送り、オーオーバーソウルを発動! 墓地からバーストレ

ディーを特殊召喚!」

『小娘の色香に惑わされるとは嘆かわしい。それでもHEROか! 手札に戻れ!』

『は、はい!! 姐さん!!』



バーストレディの喝で慌てて手札に行くエアーマンとフェザーマン。

「手札からバーストリターンを発動！ バーストレディ以外の<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup>は持ち主の手札に加わる！ HEROの絆はカード効果じゃ壊せないって事だ！<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup> スパークマンを召喚！ 手札からスパークガンスパークマンに装備！ 恋する乙女を攻撃表示から守備表示にする！」

スパークマンは恋する乙女に向けて弾丸は発射する。その瞬間、恋する乙女は守りに移った。

「この時、ガードペナルティーを発動！このカードの対象になった、恋する乙女が守備表示に変更した事により、1枚ドロ！ スパークガンの効果で恋する乙女の表示形式を2回変更して1枚ドロ！ 3回効果を使ったことによりスパークガンが破壊されるが、手札から融合を発動！ 手札のフェザーマンとフィールドのバーストレディを融合！<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup> フレイムウィングマンを攻撃表示で召喚！ スパークマンで恋する乙女を攻撃！」

上手いな。恋する乙女は守備表示なら、戦闘では破壊出来ないって効果も使えない。でも、それは想定済みの戦略みたいだよ？

「攻撃宣言時にリバースカードオープン！ 最終突撃部隊！ フィールド上の全モンスターは攻撃表示になる！」

守備表示の恋する乙女が攻撃表示になった。(レイライフ3100—1600+400—1900)

「フレイルムウイングマンで恋する乙女を攻撃!」

「ダメージ計算時にガードブロックを発動! ダメージを0にして、ドロ—!」

「速攻魔法融合解除! フレイルムウイングマンを融合デッキに戻してフェザーマンとバーストレディーを特殊召喚! 2体で恋する乙女を攻撃!」

フェザーマンとバーストレディーが恋する乙女を攻撃した。(レイライフ1900—1000—1200+400+400—1400—2200+800—1900—1400—500)

コレでもライフがわずかだけ残っている。ゴールデン・レディバグ黄金の天道虫が効いてるんだな。

「速攻魔法瞬間融合! フェザーマンとバーストレディーを融合してフレイルムウイングマンを融合召喚! 恋する乙女に攻撃! フレイルムシュート!」

フレイルムウイングマンの龍の口がレイのライフを焼き尽くした。(レイライフ500—2100—1600)

○○○○

「そんな。恋する乙女が負けるなんて。」

「ガツチャ! 楽しいデュエルだったぜ!」

早乙女の言葉に十代はいつもの決め台詞を口にした。

「終わったな。行つてやれ。」

隠れて様子を見ていた丸藤亮に声をかけた。

「亮様。ボクは、」

「すまない。その好意は嬉しく思う。しかし、俺はデュエルにしがみついていた。こんな身勝手な俺が誰かを幸せにする事など出来ない。」

早乙女の想いを遮って丸藤亮は謝罪した。

その時、俺は見逃していた。隠れて様子を窺っていたもう一人の人物を。

## デュエル29 デッキの魂

「にしても、質の悪い話だな。」

包丁の音がリズミカルに響く中、十代が呟いた。

「十代も気づいたのか？」

俺の問いの意味が分からなかったらしい、早乙女が首を傾げた。

「えっと、何の話？」

「最初からレイを留年させる気なんか無かったって事。」

「小中学校を簡単に留年出来ないだろうね。」

「え？ でも、担任の先生が留年もありうるって。」

まだ、言葉のマジックに騙されてる？

「ありうるって事はあるかもしれない。1%でもその可能性があるだけの事だよ。」

俺の指摘に早乙女はハッと息を呑んだ。

「でも、先生はなんでそんなことを？」

「単に留年の話をちらつかせてやる気を促そうとしたただけだろうぜ。飴と鞭の両方があつてやる気がでるし。」

それより、早く食わないと冷めるぞ？」

十代の指示にカレーを食べようとしたところでハッと気づいた。

「十代って料理出来たんだけ！」

「そこまで驚くことか？」 両親が共働きで家にいない事が多くて安上がりな自炊してたら、色々作れるようになったんだ。」

なるほどと納得しながらカレーを一口。

「美味しいですけど、スープっぽいのとなんか酸っぱい味がします。」

後から来る酸味に眉をしかめる早乙女。スープっぽいのは水を入れすぎたからドロっとせずにはサラサラしているんだらうけど、酸味は？ もう一口カレーを食べてその正体に気づいた。

「トマトの酸味か。」

「大正解。トマトを煮ながら潰して果汁を使ったんだ。」

こうすると、トマトの果汁の分、水量が増えて水っぽくなる。

「そうなんですか。トマトカレーも美味しいです。」

「どうやら、早乙女からも好評らしい。十代手作りカレーに舌鼓をうった。」

○○○

「早乙女君。急にお呼びしてすみません。」

デュエルアカデミアに到着した途端、PDAがなり、出てみたら鮫島校長からの呼び出しだった。それに対して不安を覚え、早乙女に同行して今に至るといふわけだ。

「それはいいですけど、なにがあつたんですか？」

「早乙女君。君はコントロール奪取のデッキを使うのですね？」

「どうやら、十代とのデュエルを誰かに見られてたらしいな。」

「リスペクトに反するのみならず、プロのデュエリストを育成するこの、デュエルアカデミアの育成方針に反します。そのデッキを封印して下さい。」

などとふざけた事をのたまう鮫島。

「鮫島。そのデュエルアカデミアの育成方針に反するのはコントロール奪取が一方的に相手のモンスターを奪い殴るのが一般受けしづらいからか？」

「プロのデュエルはモンスタアの殴り合いが華だし、観客はわかりやすい方を好む。」

つまり、鮫島はリスペクトに反してるし、コントロール奪取は観客が見てもわかりづらいだろうし、何よりも華がないから止めなさいって言いたいわけだ。

「早乙女。どうしたい？ デッキを封印したいか？」

俺の問いに早乙女は静かに首を横に振る。「俺もデッキを封印なんて話は反対だ。」

デュエリストにとってデッキはその人の魂みたいなものだ。

リスペクトに反するとかいう口実で禁止カードでもないカードを使わせない事こそ

がリスペクトに反する行為だと思う。」

「し、しかし、コントロール奪取は観客に受けが悪いですし。」

「それも大丈夫だと思う。早乙女のデツキは恋する乙女と乙女カウンターを利用したコントロール奪取だけど、コントロール奪取するには多量にダメージを受ける必要がある。そんな負けやすいデツキで勝てたらすごいワクワクすると思う。」

俺の言葉に鮫島は最終提案を出した。

「なら、デュエルアカデミアらしくデュエルで決着をつけるのはどうでしょう？」

勝てたら、この話は無かったことにします。

なお、今回のデュエルに関しては私も言いません。」

想定外にサービスのし過ぎだ。何か裏がある気がする。だとはいえ、ここでゴネたところで後が面倒だ。

「わかった。早乙女もそれでいいな？」

早乙女が頷いたのでその場は解散になった。

○ ○ ○

どうやら、俺の予想が現実になったようだ。青い服を着た人物で埋め尽くした観客席を見てそう判断した。

「コントロール奪取を扱う異端者なんか軽くひねり潰してやるよ。」

オベリスク・ブルーの藻部栄太郎が早乙女を見下して言った。

〇〇〇〇  
 『決闘！』  
デュエル

「俺のターン！ ドロー！ ゴ布林突撃部隊を攻撃表示で召喚！ ターンエンド！」

栄太郎ライフ4000手札5枚

伏せ0枚

ゴ布林突撃部隊 ATK2300

「ボクのターン！ ドロー！ ボクは手札からゴールドン・レディバク黄金の天道虫を見せてライフ500回復

させる！ 恋する乙女を攻撃表示で召喚！」

早乙女のフィールドに可愛らしい容姿の少女が現れた。

『攻撃力たったの400の雑魚モンスター！』

「そんな雑魚モンスターなんか蹴散らしてやるよ！」

みんなが罵声の声をあげている中、早乙女は怯えを見せながらも、デュエルを進行させる。

「さらにカードを2枚伏せてターンエンド！」

「俺のターン！ ドロー！ 俺は、ゴ布林エリート部隊を攻撃表示で召喚！」

バトル！ ゴ布林エリート部隊で恋する乙女に攻撃！」

鎧に身を包んだゴ布林達が突撃する瞬間、



「リバースカードオープン！ 立ちはだかる強敵！ チェーンでレインボーライフを発動！ 手札1枚を捨てる変わり、このターンのボクへのダメージは回復として加算される！ さらに立ちはだかる強敵の効果で、そっちのモンスターは恋する乙女に攻撃しなければならぬ！」

レイの言葉にゴ布林突撃部隊が恋する乙女に攻撃をする。（レイライフ4500 + 2300 + 2200 - 400 - 400 = 8200）

「恋する乙女は戦闘では破壊されず、恋する乙女に攻撃した事で乙女カウンターがゴ布林突撃とゴ布林エリート部隊に乗るよ。」

（酷いわ！ 酷いわ！ みんなして私一人をぼこるなんて！）

涙目の恋する乙女に顔を紅くするゴ布林達。

「カードを2枚伏せてターンエンド！」

栄太郎ライフ4000手札3枚

伏せ2枚

ゴ布林突撃部隊DEF0（乙女カウンター有り）   ゴ布林エリート部隊DEF（乙女カウンター有り）

恋する乙女ATK400

伏せカード0枚

レイライフ4500手札3枚

「ボクのターン！ ドロー！ 手札の黄金ゴールデン・レディバクの天道虫を見せてライフ500回復！  
キューピッド・キスを恋する乙女に装備！

恋する乙女でゴ布林突撃部隊を攻撃！」

「ざけんな！ リバースカードオープン！ 最終突撃部隊！ 全モンスターは攻撃表示になる！」

栄太郎のフィールドに翻ったカードの効果により、ゴ布林達が攻撃表示になり、ゴ布林突撃部隊が迎え撃とうとするがその攻撃をかわしてゴ布林突撃部隊の1体とキスした。(レイライフ8700-2300+400=6800)

「キューピッド・キスの効果発動！ このカードを装備したモンスターが戦闘によりダメージを受けた時、そのモンスターのコントロールを得る！」

『ゴ布林突撃部隊A様。お力をかしていただけますか？』

恋する乙女のお願いにゴ布林突撃部隊の1人がフラフラと恋する乙女に近づく。

そのとたん、仲間からブーイングの嵐をプレゼントされた。

しかし、ゴ布林が一声鳴くと、顔を見合わせたゴ布林突撃部隊達が一齐に早乙女のフィールドに駆け寄る。

「ゴ布林突撃部隊でゴ布林エリート部隊に攻撃！」

早乙女の宣言にゴ布林突撃部隊がゴ布林エリート部隊に向かって突進した。(栄太郎ライフ4000—2300+2200=3900)

『コントロール奪取!』

『リスペクトに反する外道!』

早乙女の行動に外野が騒ぎ立てるが宣言通り何も言おうとしない鮫島。

「静まれ!!」

俺の叫びに観客が沈黙した。

「禁止カードでもないカードを使う事があたかもルール違反みたいに言うのを止めろ!」

俺の喝にみんなが静かになった。

「ありがとう。士さん。カードを1枚伏せてターンエンド!」

栄太郎ライフ3900手札3枚

伏せ1枚 最終突撃部隊

恋する乙女ATK400 ゴ布林突撃部隊ATK2300

伏せカード1枚 キューピッドキス(恋する乙女に装備)

レイライフ6800手札2枚

「俺のターン！ ドロー！ 手札から死者転生を発動！ 手札のモンスターを墓地に送り、墓地のモンスターを手札に加える！」

そう宣言しながら、ゴブリンエリート部隊を回収する藻部。

「そして、リバースカードオープン！ リビングデッドの呼び声！ 蘇れ！ 絶対服従魔人！」

カードの効果により、嫌そうな感じで墓地から召喚される魔人。

「でも、その魔人は手札もフィールドもそれ1枚の時しか攻撃出来ないよ。」

「言われなくてもわかってるぜ!! コイツは単なる使い捨ての駒だ！」

あ。魔人が嫌な表情の訳がわかった。自分を好いてる以前にただの駒としかみなさない相手を気に入れない。カードは相手を選べない。同情するよ。

「絶対服従魔人を生け贄に偉大魔獣グレートマジゅうガーゼットを生け贄召喚！」

コイツの攻撃力は生け贄にしたモンスターの攻撃力の倍になる！ 絶対服従魔人は攻撃力が3500だから攻撃力が7000だ！

そして、二重召喚を発動！ 効果により、俺はもう1度通常召喚出来る！ 俺はゴブリンエリート部隊を通常召喚！」

『攻撃力が7000と2200！』

『これならあの異端者でも、勝てないだろ!!』

「ガーゼットで恋する乙女に攻撃！」

「リバースカードオープン！ 和睦の使者！ 戦闘ダメージを無効にする！」

恋する乙女を攻撃するつもりだったらしいその攻撃は使者が張ったバリアにより防がれた。

『ウフフ♪』

恋する乙女は攻撃失敗した後、ガーゼットにウィンクした。

「クソ！ これでターンエンド！」

栄太郎ライフ3900手札3枚

伏せ0枚 最終突撃部隊 リビングデッドの呼び声 偉大魔獣ガーゼットATK7

000（乙女カウンター有り） ゴ布林エリート部隊ATK2200

恋する乙女ATK400 ゴ布林突撃部隊ATK2300

伏せカード0枚 キューピッドキス（恋する乙女に装備）

レイライフ6800手札2枚「ボクのターン！ ドロー！ ボクは手札のゴールドエンレディバク黄金の天道虫を相手に見せライフを500回復させる！

そして、手札から魔法カード、壺の中の魔術書を発動！ 全てのプレイヤーは3枚ド

ローする！

藻部さん。1つ教えます。」

「ふん。雑魚の足掻きが醜いことか?」

ニヤリと笑う藻部に早乙女は静かに首を横に振った。

「ううん。そうじゃなくて切り捨てられるカード達の痛みをだよ?」

手札から魔法カードエネミーコントロールを発動! 恋する乙女を生け贄に、ゴブリンエリート部隊のコントロールを得る!

…ごめん!」

早乙女の謝罪に、恋する乙女は首を横に振り、自ら墓地へと消え去った。

「そして、ゴールドエン・レディバク黄金の天道虫を攻撃表示で召喚!

そして、マジックカード発動!」

フィールドに召喚された天道虫は自ら、藻部のフィールドに行く。

「強制転移の効果でボクは黄金の天道虫とそっちのモンスター、偉大魔獣ガーゼットを

交換!

さらに死者蘇生を発動! 墓地の絶対服従魔人を攻撃表示で召喚!」

4体のモンスターに並ばれ、ライフが0になることを悟ったのだろう。体がふるえている。しかし、どうやら、早乙女はそれだけではすまずつもりがないらしい。

「さらに、ハッピーマリッジをゴブリン突撃部隊に装備! この効果は、ボクのフィールドにコントロールラーが相手のモンスターの攻撃力分だけ、装備モンスターの攻撃力が

アップする！」

鬼か。早乙女のフィールドにいるモンスターは全て相手のモンスター。アップする数値は3500+2300+2200+7000=15000でゴ布林突撃部隊の攻撃力は17300。こうなると、絶対服従魔人が戦闘出来ないのが良かったというベ  
きか。

「ゴ布林エリート部隊と偉大魔獣ガーゼットで攻撃！」

ゴ布林エリート部隊と偉大魔獣ガーゼットが攻撃する。黄金ゴールドエン・レディバクの天道虫の攻撃力は0。ダイレクトアタックと変わらない。(栄太郎ライフ3900—7000—2200+0=6300)

「さらにゴ布林突撃部隊でダイレクトアタック！」

ゴ布林突撃部隊の攻撃にあわせ、皆が突撃した。

「ウワアアアアー!!」

その攻撃に悲鳴を上げる藻部。その様は剣客漫画のぼんじゅーるみたいだ。「流石、ソリッドビジョン。攻撃しても不殺だけは守ってるか。」

てか、本当にソリッドビジョンだよな？

「イカサマだ！ コイツイカサマしてやがる！」

突如、観客の1人が騒ぎ出した。

『そうだそうだ！ イカサマだ！』

『男らしくないぞ！ 正々堂々デュエルしろ！』

その言葉を皮切りに、オベリスク・ブルー生の大半が早乙女を非難しだした。言いがかりをつけて無理やり反則にするつもりらしい。

「その辺にしておけ。」

丸藤亮が止めに入る。静かだが、その声がよく響き皆が騒ぐのを止めた。

「聞くが、何故イカサマだとわかった時に言わなかった？」

丸藤亮の問いに言い返せない。当然だ。彼自身も根拠があつた訳ではなく、言いがかりをつけているだけだから。

「イカサマしてるなどと言いがかりをつけるな。人としてどうかと思うぞ。」

丸藤亮の言葉にその男は齒軋りしながら早乙女を睨んでいた。



## デュエル30 恋する乙女のデュエット

「早乙女さん。土さん。おはようございます。」

デュエルアカデミアに向かう途中、聞き慣れた声に後ろに振り返ったらももえがこちらに駆け寄る所だった。

「おはよう。ももえ。早乙女。こいつは友達の浜口ももえだ。」

「ももえですわ。よろしくお願いたします。」

「ボクは早乙女レイだこちらこそよろしく。」

ももえの自己紹介に頭を下げて自己紹介する早乙女。

（早乙女。以前話した翔に惚れてるって娘はこの娘だ。頼む。）

（ラジャー♪）

早乙女に囁くと、笑顔で答えた。

Side ももえ

……面白くないですわ。私の右側に座る早乙女さんを見てそう思った。いつもなら、翔様の隣がわたくしの席なのに今日に限っては土さんと早乙女さんにとられてしまった。

「…ラフ？ シニョーラ浜口？」

クロノス先生の声によく我にかえる。

「は、はい！」

「シニョーラ浜口？ すでに知っている内容だとしても、聞き流すのは感心しないノーネ。罰として、この問題を解いてもらおうノーネ。」

と書いて黒板に書かれた問題は、

『今現在の攻撃力が1200のオブションに巨大化を装備した場合、あるいは収縮を發動した場合の攻撃力の变化とその理由を述べよ。ただし、ライフは相手の数値が多いものとして扱う。』

「巨大化を装備した場合はオブションの攻撃力が倍の2400になり、収縮を發動した場合は攻撃力が600になります。」

わたくしの答えに周囲がクスクスと笑っていた。

「ももえ。オブションの攻撃力は永続的に適用する数値だ。この場合、いったん2400、あるいは600になりその後、1200に戻るんだ。」

えっと、つまりは変動しないが答えですか？ してやられたとそんな気分になった時、チャイムがなり、今日の授業は終了になった。

〇  
〇  
〇

授業に集中出来なかった事に反省しながら廊下を歩いていたら、翔様を見つけた声をかけようとしたところで、

「浜口さん。ちよつとデュエルしませんか?」

早乙女さんに声をかけられ、そちらに振り向いていた間に翔様を見失ってしまった。

「いいですけど、場所を変えませんか? ここじゃ目立ちますわ?」

○○○○

『決闘!!』  
デュエル

わたくしと早乙女さんは宣言してからカードをドロウする。

「ボクのターン! ドロー! カードを2枚セット! 恋する乙女を攻撃表示で召喚!

そして、手札から魔法カード、終焉のカウントダウンを発動!! これで20ターン、ボ

クのターンで数えて10ターン後にボクの勝利が確定するよ!

これでターンエンド!」

レイ ライフ2000 手札2枚

伏せカード2枚

恋する乙女ATK400

終焉のカウントダウン01

「わたくしのターン! ドローしますわ! 手札から永続魔法黒蛇病を発動します!

そして、デス・ウオンバットちゃんを攻撃表示で召喚します！ このカードがあるかぎりわたくしは効果ダメージが0になりますわ！ そして、黒蛇病はわたくしの最初のスタンバイフェイズに200。以後ダメージが倍になりますわ！」

わたくしのデッキはデス・ウオンバットちゃんをわたくしを守りつつ、黒蛇病で相手のライフを削るロックバーンのデッキ。デュエルアカデミアではロックバーンが受けが悪く、だからオシリス・レッドの腕章をつけられ、最下位のランクな訳である。それでも、大好きなこのカード達と共に闘いたい。その想いは裏切られたらしい。

「リバースカードオープン！ アンシユ・ベージェ！ このカードが表側表示である限り、通常召喚したももえさんのモンスター元々の攻撃力の半分のダメージを受けることでそのモンスターに乙女カウンターを乗せる！」（レイライフ2000—1600÷2  
||1200）

アンシユ・ベージェ（オリカ） 永続罫カード

このカードが表側の時、相手プレイヤーが通常召喚する度にそのモンスターの元々の攻撃力の半分の効果ダメージをこのカードのコントローラーが受けることでそのモンスターに乙女カウンターを一つ乗せる。

『デス・ウオンバット様あ♪』

早乙女さんの言葉に恋する乙女ちゃんがデス・ウオンバットちゃんに投げベージェをす

ると、デス・ウオンバットちゃんは電気を流されたかのように硬直した。

「バトルフェイズに入りますわ！ デス・ウオンバットちゃんを恋する乙女ちゃんを攻撃！」

乙女カウンターを乗せる事が避けられないなら、キューピッド・キスが来る前に決着をつけるべきだと思っただけ、そもいかなかつたらしい。

「リバースカードオープン！ ガードブロック！ ダメージを無効にして1枚ドロースるよ！」

デス・ウオンバットちゃんの攻撃に対してトラップカードで防いだ。

「わたくしはターンエンドしますわ。」

レイ ライフ1200 手札3枚

伏せカード0枚 アンシユ・ベーゼ

恋する乙女ATK400

終焉のカウントダウン02

デス・ウオンバットATK1600

伏せカード0枚 黒蛇病

ももえライフ4000 手札4枚

「ボクのターン！ ドロー！ 手札の黄金の天道虫ゴールデンレディバグを見せてボクのライフを500回復

させるよ！

そして、手札から魔法カード、アームズ・ホールを発動！

このターン、ボクは通常召喚出来ない上にデッキトップのカードを1枚墓地に送らなければならぬけど、デッキから装備魔法、キューピッド・キスを手札に加える！

そして、ボクが墓地に送ったカードはトックロがんでイバグ髑髏顔天道虫。効果によりボクのライフを1000回復するよ？」

きゅ、キューピッド・キスまで加えただけじゃなく、ライフを1500も回復したなんて。(レイライフ1200+500+1000=2700)

「恋する乙女にキューピッド・キスを装備してバトルだよ！

恋する乙女でデス・ウォンバットに攻撃！ 一途な想い!!」

早乙女さんの宣言に恋する乙女ちゃんはわたくしのフィールドにいるデス・ウォンバットちゃんに抱きついてチュツとキスした。

次の瞬間、デス・ウォンバットちゃんは恋する乙女ちゃんに従う形で早乙女さんのフィールドに向かってしまった。

「デス・ウォンバットでダイレクトアタック！」

早乙女さんの宣言にデス・ウォンバットちゃんがわたくしに襲いかかる。(ももえライフ4000-1600=2400)

「1枚セットしてターンエンド!」

レイ ライフ1500 手札2枚（1枚は黄金の天道虫）

伏せカード1枚 アンシユ・ベーゼ キューピッド・キス（装備対象 恋する乙女）恋

する乙女 ATK400 デス・ウオンバット ATK1600

終焉のカウントダウン03

伏せカード0枚 黒蛇病

ももえライフ2400 手札4枚

「わたくしのターン! ドロー!」

「この瞬間リバースカードオープン! 聖なる輝き! このカードがあるかぎりモンス

ターを裏側表示出す事が出来ないよ! 表側表示なら出せるけどね。それと、黒蛇病の

ダメージも受けてもらうからね?」

早乙女さんの宣言にわたくしのカードがわたくしのライフを削る。（ももえライフ2

400—2000=2200）

まずいですわ。あのカードがあるかぎりわたくしのモンスターはセット出来ず、表側

表示しか出せない。でもそうすれば、乙女カウンターが乗ってしまう。それなら、

「ジャイアントウィルスを攻撃表示で召喚します!」

「でも、その瞬間アンシユ・ベーゼの効果でジャイアントウィルスに乙女カウンターが乗

るよ?。」

早乙女さんの宣言通り恋する乙女がジャイアントウイルスに投げベーゼをしたら、ジャイアントウイルスが一瞬硬直した。

「ジャイアントウイルスでデス・ウオンバットちゃんに攻撃しますわ!」

わたくしの宣言にジャイアントウイルスがデス・ウオンバットちゃんに攻撃するけどデス・ウオンバットちゃんの反撃にあう。(ももえライフ2200—1600+1000=1600)

「ですが、ジャイアントウイルスの効果が発動しますわ。相手に500の効果ダメージを与え、同名モンスターを2体特殊召喚します。」

宣言してからジャイアントウイルスをサーチしてフィールドにおく。

「わたくしはターン終了しますわ。」

レイ ライフ1500 手札2枚(1枚は黄金の天道虫)

伏せカード0枚 アンシユ・ベーゼ キューピッド・キス(装備対象 恋する乙女)

恋する乙女ATK400 デス・ウオンバットATK1600

終焉のカウントダウン04

ジャイアントウイルスATK1000×2

伏せカード1枚 黒蛇病



ももえライフ1600 手札3枚

「ボクのターン！ ドロー！ 手札の黄金の天道虫ゴールドエンレディバグを見せてライフを500回復させるよ！ 手札から魔法カード天使の施しを発動！！ 3枚ドローして2枚捨てる！！」

早乙女さんはそう宣言してからカードを引いて捨てる。(レイライフ1500+500=2000)

「さらに捨てた2枚の鬮ドクロがんでイバグ顔天道虫の効果によりボクのライフを2000回復させるよ！」(レイライフ2000+2000=4000)

そ、そんな！ 半分以下だったライフが元に戻るなんて！

「手札からハッピー・マリツジを恋する乙女に装備するよ。」

これで終わり！ デス・ウオンバットでジャイアントウィルスを攻撃！

デス・ウオンバットちゃんがジャイアントウィルスを噛み砕きわたくしのライフを削る。(ももえライフ1600-1600+1000=1000)

「恋する乙女でジャイアントウィルスを攻撃！ 一途な想い！！」

「させませんわ！ リバースカードオープン！ ホーリーシャベリン！ 恋する乙女ちゃんの攻撃力、2000ポイントだけライフを回復させますわよ！」(ももえライフ1000-2000+1000+2000=2000)

「……………ねえ、ももえさん。1つ賭けをしませんか？」

「賭けですか?」

自分が有利になったとたん賭けを持ち出す事が気に入らないけど、何を賭けるのか気になって首を傾げた時、早乙女さんの口からとんでもない言葉が出た。事が気に入らないけど、何を賭けるのか気になって首を傾げた時、早乙女さんの口からとんでもない言葉が出た。

「このデュエルに勝った方が先に翔様に告白するというのはどうですか?」

「……………へ?」

わたくしの口からはその言葉しか出てこなかった。もしかして、早乙女さんって同姓愛好者?

「とんでもない勘違いしているみたいですから訂正しますけど、ボクは女ですよ?」

早乙女さんはそう言いながら、帽子を取る。ふあさ。早乙女さんの帽子の下から長い髪が零れ出て風に舞い踊る。う、嘘? 本当に女の子だったの? 愕然としているわたくしに早乙女さんはクスクスと笑っていた。

「男の子に見えるように演技していたから誤解されてもしようがないけどね♪ ボクは翔様に会いに来たんだ。3年くらい前に翔様に助けられて以来、ボクは翔様の虜なんだ。」

そう言いながら、うつすらと頬を赤く染めながら幸せそうにはにかむその表情は恋す

る乙女のそれで、わたくしの心に不安の音色をかき鳴らすには十分だった。

「で、でも、翔様は、」

「士さんが好きでしょ？　ちゃんと知ってるよ？　でも、それでも振り向いて欲しいし、

その心を独占したい。

それに、どんな事があつたとしても士さんが翔様を愛する事は絶対にないよ。

失恋の痛みを味わう事になるけど、その痛みも一緒に包んで癒したい。」

わたくしは早乙女さんを見て不安でいっぱいになった。小柄でかわいらしいこの思  
わぬ強敵ライバルが翔様に告白されたらと思うと不安だった。…だからなのか。

「……………んわ……………」

思わずそんな言葉が漏れていた。

「…なんですか？」

強者の余裕を崩さない早乙女さんにわたくし自身でも驚くような声量を放っていた。

「絶対に誰にも渡せませんわ!!!」

その叫びにも早乙女さんは余裕を崩さなかった。

「なら、ボクに勝つ事だよ？　ターンエンド!」

レイ　ライフ4000　手札2枚（1枚は黄金の天道虫）

伏せカード0枚　アンシユ・ベーゼ　キューピッド・キス（装備対象　恋する乙女）

ハッピー・マリッジ（装備対象 恋する乙女）

恋する乙女 ATK 400 + 1600 デス・ウオンバット ATK 1600

終焉のカウントダウン05

伏せカード0枚 黒蛇病

ももえライフ2000 手札3枚

「わたくしのターン！ ドロー！」

来た！ 逆転に必要な1枚が！（ももえライフ2000—2000×2＝1600）

「デス・ウオンバットちゃんは返して頂きますわ!! 手札から魔法カード所有者の刻印を発動します！ デス・ウオンバットちゃんはわたくしのモンスターですから、こちらに戻りますわ！ それに、デス・ウオンバットちゃんがこちらに戻ったからハッピー・マリッジのパワーアップ効果も無意味ですわ。」

わたくしが発動したカードにデス・ウオンバットちゃんはこちらに駆け寄る。

「うえっ!!」

そのデス・ウオンバットちゃんを見て驚きの声をあげる早乙女さん。

「デス・ウオンバットちゃんを生け贄に、マテリアルドラゴンを召喚!!」

デス・ウオンバットちゃんがガラスのように砕け散りそこに巨大なドラゴンが現れる。

「で、でも、アンシユ・ベーゼの効果によりマテリアルドラゴンに乙女カウンターが乗るよ。」

恋する乙女ちゃんがマテリアルドラゴンに投げベーゼをすると、早乙女さんのライフが回復する。(レイライフ4000+1200=5200)

「?、なんでボクのライフが?」

「マテリアルドラゴンの効果ですわ。このカードはダメージ効果をライフ回復に変換しますの。」

バトルフェイズ!!

マテリアルドラゴンで恋する乙女ちゃんを攻撃! マテリアルバースト!!」

マテリアルドラゴンが放つ7色の閃光が恋する乙女ちゃんを襲いかかる。(レイライ

フ5200-2400+400=3200)

『キヤア!! ひ、酷いですわ!!』

『グルル。』

恋する乙女ちゃんの訴えにマテリアルドラゴンが困惑したようだった。

「カードを2枚セットしてターンエンドです!」

レイ ライフ3200 手札2枚(1枚は黄金の天道虫)

伏せカード0枚 アンシユ・ベーゼ キューピッド・キス(装備対象 恋する乙女)

ハッピー・マリッジ（装備対象 恋する乙女）

恋する乙女 ATK 400

終焉のカウントダウン 06

マテリアルドラゴン ATK 2400

伏せカード2枚 黒蛇病

ももえライフ1600 手札0枚

「ボクのターン！ ドロー！」

「この瞬間リバースカードオープン！ シモツチによる副作用！ このカードは早乙女さんのライフを回復効果をダメージ効果に変換しますの！ この場合もし、ダメージ効果を発動した場合、ライフ回復効果に変換した後ダメージ効果に再変換しますの。」

つまり、黒蛇病はわたくしのライフを回復しますが、早乙女さんのライフを削り続けますわ。もちろん、アンシュ・ベーゼも同様ですの。

「次のターンも来させずに終わらせる！ マテリアルドラゴンを通常召喚したのは失敗だったよ！」

バトルフェイズ!!

恋する乙女でマテリアルドラゴンを攻撃！ 一途な想い!!」

『マテリアルドラゴン様！』

恋する乙女ちゃんはそう言いながらマテリアルドラゴンに飛びつく。…それって節操がないと言いませんか？（レイライフ3200—2400+400〓1200）

「キューピッド・キスの効果でマテリアルドラゴンのコントロールを得るよ！」

「しまった！ わたくしとしたことが！」

『マテリアルドラゴン様は私の味方ですよね？』

恋する乙女ちゃんの間に困惑しながらも早乙女さんのフィールドに来るマテリアルドラゴン。

「マテリアルドラゴンでダイレクトアタック!!」

マテリアルドラゴンが7色の閃光を放ちわたくしに襲いかかる。

「キヤアアアアアア!!!」  
マジックシリンダー ……なんて言うと思いませんか？ リバースカードオープン!!

魔法の筒!!」

わたくしのフィールドに現れた筒がマテリアルドラゴンの閃光を受け止め打ち返した。（レイライフ1200—2400〓—1200）

○○○○

「…か…勝てましたわ。」

なんとか阻止できたと安堵していたら、早乙女さんが声をかけてきた。

「フフフ♪ ももえさんが翔様に告白するんですね？」

「〃全メ〇、?々?〃全一」〔{?、ⅤⅢⅢ〕

「…ももえさん。深呼吸して落ち着いてください。テンパリすぎて何を言いたいかわかりません。」

「そ、そうですね。ヒ、ヒ、フー。ヒ、ヒ、フー。」

「何を出産するつもりですか?」

呆れを含んだ早乙女さんの言葉に漸く落ち着く事が出来た。

「わたくしは翔様が好きです。…だから士さんにも、早乙女さんにも翔様を渡せませんわ。」

「そのいきだよ。ももえさん。頑張つて。」

早乙女さんは応援してから帽子をかぶり直した。



## デュエル31 恋する乙女と魔導少女の戦争

「もう帰っちゃうつすね？」

港で船を待っている早乙女に翔が声をかける。

「しょうがないですよ。もともと1週間だけって条件ですし。」

寂しそうな表情を見せる翔に早乙女が苦笑する。

「それでも、まさかレイが女の子だったなんて思わなかったんだな。」

「そう見えるように演技頑張りましたからね♪」

隼人の言葉に早乙女が苦笑する。まあ、オシリス・レッドの食堂で早乙女自身が性別をばらした時驚きの嵐だったからな。その時の事を思い出していたら、早乙女が口を開いた。

「ねえ、土さん？ 船が来るまで時間がありますから、デュエルしませんか？」

突然のデュエルの申し込みににはビックリしたが、しばらくは早乙女とデュエルできないし、ちょうどいいかなと思いいデュエルディスクを起動させる。○○○

『決闘!!』

「ボクのターン！ ドロー！ モンスターをセット！ さらにカードを2枚セットして

ターンエンド！」

レイ ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚

どうするかな？ もろに赤一色だよ。

「俺のターン！ ドロー！」

またトラップカードか。

「俺はカードを3枚セットしてターンエンド！」

レイ ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚

伏せモンスター0枚

伏せカード3枚

士ライフ4000 手札3枚

「ボクのターン！ ドロー！ 恋する乙女を攻撃表示で召喚!!」

来たのかよ。

「バトルフェイズ！ 恋する乙女でダイレクトアタック!! 一途な想い!!」

早乙女の宣言に恋する乙女が俺に飛びつこうとするが、俺の前に現れた魔法陣が邪魔するのを見て戸惑っている。

「リバーズカードオープン！ マジシャンズサークル!! 魔法使い族モンスターが攻撃した時互いにデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族モンスターを攻撃表示で特殊召喚!! 俺が召喚するのは、ブラック・マジシャン・ガール!」

『ウフフ♪』

俺のフィールドにブラック・マジシャン・ガールのカードを置くとウインクをしながらポーズをとるフレア。

「う、うそ？ なんて、ブラック・マジシャン・ガールが?」

思わぬカードの出現に驚いて呆然としているようだ。

「驚くのはわかるが、デュエルを続行してくれないか?」

「…あ、ごめんなさい。ボクは恋する乙女を攻撃表示で召喚します。

攻撃しないでターンエンド。」

レイ ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚 恋する乙女ATK400×2

伏せモンスター0枚 ブラック・マジシャン・ガール ATK2000

伏せカード2枚

士ライフ4000 手札3枚

「俺のターン！ ドロー！」

と勢いよくドローしたもののどうしようかと悩んでいる。恋する乙女にキューピッド・キスは装備してないが次のターンに来るかもしれないし、逆に来ないかもしれない。「このまま、こうしているわけにもいかないか。」

判断して手札のモンスターを召喚する。

「手札からゼエミナイエルフを攻撃表示で召喚！

バトルフェイズ！

ゼエミナイエルフで伏せモンスターを攻撃!!」

俺の宣言にゼエミナイエルフが伏せモンスターに攻撃をしかける。

「伏せモンスターは素早いモモンガ！ 戦闘によつて破壊されたから、ボクのライフを1000回復して同名カードを2体セットするよ！」

と早乙女は自分のデッキから素早いモモンガ2体をサーチしてフィールドにセットする。(レイライフ4000+1000=5000)

「ブラック・マジシャン・ガールでその素早いモモンガに攻撃!!」

黒・魔・導・爆・裂・破!!」

フレアの魔術により素早いモモンガは破壊される。(レイライフ5000+1000  
 ||6000)

「メインフェイズ2に移行。カードを1枚セットしてターンエンド!」

レイ ライフ6000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚 恋する乙女ATK400×2

伏せモンスター0枚 ブラック・マジシャン・ガールATK2000 ゼエミナイエ

ルフATK1900

伏せカード3枚

士ライフ4000 手札2枚

「ボクのターン! ドロー! ボクはカードを1枚セットしてターンエンド!」

レイ ライフ6000 手札3枚

伏せカード3枚

伏せモンスター1枚 恋する乙女ATK400×2

伏せモンスター0枚 ブラック・マジシャン・ガールATK2000 ゼエミナイエ

ルフATK1900

伏せカード3枚

士ライフ4000 手札2枚

「俺のターン！ ドロー！」

バトルフェイズ！

ブラック・マジシャン・ガールで伏せモンスターを攻撃!! 黒・魔・導・爆・裂・破!!」

俺の宣言にフレアが杖に魔力を為素早いモモンガめがけて解き放つ。しかし、その一撃を恋する乙女が庇う。

「かかったね！ リバースカードオープン！ 立ちはだかる強敵！ レインボーライフ！」

な！ そこでこの2枚か！

「効果は説明するまでもないよね？」

「まあね。立ちはだかる強敵は俺のモンスターの攻撃を早乙女の1体のみにさせるカードでレインボーライフは手札1枚をコストにする代わり、ダメージをライフ回復するんだろ。」

「その通りでございます。」

立ちはだかる強敵の効果で恋する乙女に攻撃してもらおうよ？ そして、レインボーラ

イフの発動時に捨てた罫體ドクロがんでイバク顔天道虫の効果でボクのライフが1000回復するよ!」

早乙女の宣言にヂェミナイエルフが魔術で恋する乙女に攻撃する。(レイライフ 6  
000+2000+1900+1000-400-400=10900-800=1  
0100)

うわあ。とうとう、向こうの初期ライフさえも超えちゃったよ。

「もちろん、恋する乙女を攻撃したことでその2人にも乙女カウンターが乗るよ!」

『ひ、酷い! 酷いわ! 私何もやってないのに!』

『ど、どうしよう! とりあえず、落ち着いてね?』

恋する乙女の涙に困惑しながら宥めるフレア。

「カードを1枚セットしてターンエンド!」

レイ ライフ10100 手札2枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚 恋する乙女ATK400×2

伏せモンスター0枚 ブラック・マジシャン・ガール(乙女カウンター有) ATK2

000 ギェミナイエルフ(乙女カウンター有) ATK1900

伏せカード4枚

士ライフ4000 手札2枚

「ボクのターン！ ドロー！ 手札から壺の中の魔術書を発動！！ フィールド魔法サベージ・コロシアムを発動！！」

このカードの効果は攻撃可能なモンスターは必ず攻撃しなきゃならない。

そして、手札からマジックカードアームズホールを発動！！ デッキトップを墓地に送り！ デッキからキューピッド・キスを恋する乙女に装備！ さらに閃光の双剣—トライスをキューピッド・キスを装備している恋する乙女に装備！！」

げ！ キューピッドキスだけじゃなくてトライスまで！

「そして、トライスとアームズホールで墓地に送られたカードは髑髏顔天道虫だから合計で2000ライフが回復するよ！」

もならんだけ〜としか言いようがない。(レイ ライフ10100+1000+1000=1000)

「これで終わりだよ！ 恋する乙女でブラックマジシャンガールを攻撃！！ 一途な想い！！」

『ブラックマジシャンガール様あ〜♪』

『ごめん。』

恋する乙女がブラックマジシャンガールに飛び付こうとする直前、その姿が消失する。



「リバースカードオープン！ マジカルシルクハット！ 効果によりブラックマジシャンガールとデッキから2枚のマジックかトラップを選んでセットする！」

俺のフィールドに伏せられたカードを見て硬直する早乙女。マジカルシルクハットの効果でフレアは伏せられている。そのおかげで乙女カウンターが消えているから攻撃しても早乙女のライフが減るだけ。

「攻撃を巻き戻してチェミナイエルフを攻撃!!」

『チェミナイエルフ様あゝ♪』

恋する乙女は今度こそチェミナイエルフに飛びついてキスをする。さっきはフレアで今度はチェミナイエルフか節操ないとは言わないか？（レイライフ12100—1900—10200）

「キューピッドキスの効果発動!! ボクがダメージを受けたことによりチェミナイエルフのコントロールを得る！」

『チェミナイエルフ様。私の味方になってくださいませんか?』

『え? しかし、』

恋する乙女のお願いにチェミナイエルフは困惑する。

『お願いします。私の味方になってください。』

恋する乙女が涙目お願いすると困惑しながら互いの顔を見る双子のエルフ。

『…………仕方ないか。さっきは攻撃したわけだし。』

「ヂエミナイエルフはそう言いながら早乙女のフィールドにつく。

「恋する乙女で右側の伏せモンスターに攻撃するよ。」

恋する乙女は両手に握られた刃で襲いかかる。

「伏せモンスターは外れだ。シルクハットで疑似モンスターになっているスキルサクセ

サーだ。守備力が0な為ダメージは無し。」

刃かシルクハットに通ることなく弾かれる。

「もう一人の恋する乙女で今度は真ん中を攻撃！」

真ん中のシルクハットは恋する乙女が触れた瞬間、硝子細工のように砕け散るシルク

ハット。

「これもシルクハットの疑似モンスターだ。」

「ヂエミナイエルフで伏せモンスターを攻撃!!」

ヂエミナイエルフは早乙女の宣言にシルクハットに攻撃してその中に隠れていたフ

レアに襲いかかる。

「ああ。ブラックマジシャンガールが…いて！」

「落胆の溜め息を吐いた翔の背中を誰かがつねっていたらしい。まあ犯人は想像つくけど。」

「あらあら。ごめんなさい。翔様？でも今は応援に集中しませんと？」

黒いオーラを身に纏いながらももえの言葉に翔はかくかくと壊れたように何度も頷いていた。

「メインフェイズ2に移るよ？」

まずはサベージコロシアムの効果によりボクのライフが300回復するよ？

そして、手札からマジックカード、死者蘇生で土さんの墓地からブラックマジシャンガールを守備表示で召喚する！」

早乙女が発動したカードの効果により墓地からフレアがフィールドに現れる。（ライフ102000+3000=10500）

「そして、エンドフェイズ。サベージコロシアムにより攻撃に参加していない攻撃表示のモンスターは破壊されるけど、ボクのモンスターには攻撃表示のモンスターは攻撃している。

ターンエンド。」

レイ ライフ10500 手札0枚

伏せカード1枚 キューピッドキス（恋する乙女に装備） 閃光の双剣トライズ（恋する乙女に装備）

伏せモンスター1枚 恋する乙女 ATK400 恋する乙女 ATK400—500

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000 ゼエミナイエルフ（乙女カウンター有） ATK1900

サベージコロシム

伏せモンスター0枚

伏せカード3枚

士ライフ4000 手札5枚

「俺のターン！ ドロー！」

違う！ このカードじゃない！

「リバースカードオープン！ 最終突撃部隊！」

効果により表表示モンスターは攻撃表示になるよ！」

まずいな。モンスターを守備表示でだしても総攻撃を食らう可能性がある。

「手札からマジックカード一時休戦を発動！ 互いに1枚ドローして次の俺のターンまで攻撃してもダメージは発生しない！」

よし！ このカードだ！

「俺は1枚セットしてターンエンド！」

レイ ライフ10500 手札1枚

伏せカード1枚 最終突撃部隊 キューピッドキス（恋する乙女に装備） 閃光の双

剣トライス（恋する乙女に装備）

伏せモンスター1枚 恋する乙女ATK400 恋する乙女ATK400―500

ブラック・マジシャン・ガールATK2000 ゼエミナイエルフ（乙女カウンター

有）ATK1900

サベージコロシアム

伏せモンスター0枚

伏せカード4枚

士ライフ4000 手札5枚

「ボクのターン！ ドロー！」

1枚セットしてバトルフェイズに入るよ。

表表示のモンスターで攻撃するけど、一時休戦の効果でノーダメージだね。サベ

ジコロシアムの効果でボクのライフが300回復してターンエンド。」

レイ ライフ10800 手札1枚

伏せカード1枚 最終突撃部隊 キューピッドキス（恋する乙女に装備） 閃光の双

剣トライス（恋する乙女に装備）

伏せモンスター1枚 恋する乙女ATK400 恋する乙女ATK400―500

ブラック・マジシャン・ガールATK2000 ゼエミナイエルフ（乙女カウンター

有) ATK1900

サベージコロシアム

伏せモンスター0枚

伏せカード4枚

士ライフ4000 手札5枚

「俺のターン！ ドロー！」

よし！ このカードだ！

「リバースカード聖なる輝きを発動!!」

「その2枚で攻撃を強制する気か。だけでももう遅い！」

マジックカード愚かな埋葬を発動!! デッキからモンスターを墓地に送る！

そして、漆黒のパワーストーンを発動!! 発動時魔力カウンターが3つのる！

そして、もう1枚のリバースカードオープン！ 奇跡の復活！魔力カウンターを2つ

取り除き、墓地からブラックマジシャンを特殊召喚する！

来い！ ブラックマジシャン！」

俺がフィールドにブラックマジシャンを置くと早乙女が両目が飛び出さんばかりに

驚いていた。

「ブラックマジシャンが出てきたのはびつくりしたけど、ブラックマジシャンだけじゃ

ボクのライフが0にならないよ?」

「まあ、そうだね。」

手札からマジックカード拡散する波動を発動!! このカードの発動コストとしてライフ1000支払い、レベル7以上の魔法使い族モンスターは相手フィールドの全モンスターに1回ずつ攻撃しなければならない!」

俺がマジックカードはフィールドにセットしたらブラックマジシャンは杖に魔力を溜めはじめる。

「バトルフェイズ! ブラックマジシャンの攻撃!! ブラック・マジック 黒・魔・導!!」

その宣言にブラックマジシャンが魔力を解き放つ。

「その瞬間、墓地からトラップカードスキルサクセサーを2枚発動発動!! 墓地から発動した場合、攻撃力が800アップする!」(ブラックマジシャン ATK 2500 + 800 × 2 = 4100)

ブラックマジシャンの魔力の波動がフレアを打ち倒す。(レイライフ10800 - 4100 + 2000 = 8700)

「この瞬間リバースカードオープン! リビングデッドの呼び声! ブラックマジシャンガールを特殊召喚!」

俺のカードがフレアをフィールドに舞い戻らせる。

そして、拡散する魔力の波動がヂェミナイエルフ、恋する乙女2体、伏せられた素早いモモンガに襲い掛かる。(レイライフ8700-4100×4+1900+1000+4000||8700-16400+3300||8700-13100||4400)

○○○○

「…負けちゃいました。」

早乙女のライフがつかまるのを見て悔しそうに、そして楽しそうに笑っていた。

「でも、楽しかったです。」

「ああ。俺もだ。」

レイにそう返して、その右手を握った。その右手をほどこいてからレイが十代に向き直る。

「あ。十代さん。ちよつと屈んでくれませんか？」

「? こうか？」

言われた通り屈んでみせた十代の答えは、

CHU♪

と、唇と唇がふれあうキスだった。

「ボクのファーストキスですから大事にしてくださいね十代様♪」

「……………」



あかん。想定外の事態に十代がフリーズしてる。

「じゃ、また会いましょう。」

レイはそう言つて船に乗り込もうとして、船から降りてくる人物にぶつかった。

「あなたは……………」

みんな、その男性を見ていた。

## デュエル32 制裁デュエル VS真紅眼

『海馬さん!!』

皆、船から降りてきた人物を見て驚きの声をあげる。

「お久しぶりです。海馬。」

「土。お前、海馬さんと知り合いなのか？」

「まあね。冬休みの時に海馬に呼び出されたんだ。」

訝しげな十代の問いにそう答えてから海馬に問いかける。

「で、海馬。態々何のようですか？」

「フン！ 貴様か考案したシンクロ召喚とやらを構築できたのでな。」

その事を報告しに来た事とその実演を兼ねたデュエルをしに来た。他にも用事があるが。」

あ。そういう設定になっているのか。そりやまあ、異世界人が考えたなんて言えるわけがないしなそれは仕方ないか。

「土が考案したのね？」

シンクロ召喚ってどんな召喚方法なの？」

「メインフェイズのみ行うことが出来て自分フィールド上にチューナーとチューナー以外のモンスターが揃っている状態で召喚したいモンスターとレベルの合計が合うように墓地に送る事でそのシンクロモンスターを融合デッキから特殊召喚する召喚方法だ。例えば、レベル1とレベル7のチューナーがいればレベル8が召喚出来るというわけだ。」

「融合が要らない融合みたいなものなんだな？」

話を整理した融合使いの十代がくいついてきた。

「確かにそれに近いが、あくまでもチューナーとチューナー以外のモンスターであることが必須なだけで融合みたいに素材が厳しく限定されてる訳じゃないんだ。」

「なるほど、儀式と融合を混ぜたものと考えれば良いのかしら？」

「そうだな。儀式召喚に必要な儀式カードはチューナーが担当していると考えればいい。」

思案顔の明日香に首を縦に振りながら答えた。

「で、海馬。他の用事って？」

「それは校舎についてからだ。」

海馬はそう言って、視線を未だに倒れているレイに向けた。

「貴様か、体験入学を希望していた早乙女レイか。」

「貴様もデモデュエルを見学していくか？」

と、手を差し出ししながら問いかけた。

「いいんですか？」

「構わん。ここはデュエルアカデミア。デュエルの為の学校だ。学びたいという気持ちに年も立場も関係ない。」

海馬の答えにレイは満面の笑みで十代に抱きついた。

「コラ!! 十代の迷惑でしょ! 離れなさい!」

嫉妬の表情を浮かべたジュンコの言葉にも耳を貸す気を見せない。それどころか舌をちよつとだけ出して、舌をちよつとだけ出して人差し指で目の下を軽く引つ張った。

「っ!!」

時間にして1秒も満たない。でも、ジュンコの神経を逆撫でするには十分効果的だったようだ。

「怒ると小皺が増えるよ年増のおばさん?」

青筋浮かべるジュンコの心に止めの一言を放つ。  
ガッソンをドクドクと注ぎ込む

プツン!

「っんのガキヤア!!」

聞こえてはならない音と共にジュンコがキレた。俺はその振り上げたジュンコの右手を掴んだ。

「待てよ。ジュンコ。」

「何よ？ 士？」

その俺に鋭い視線を送る。ハッキリ言つて、今のジュンコなら修羅でも裸足で逃げそうな程に怖い。でも、意を決して口を開いた。

「怒りたくなる気持ちもわかるけど口で言われて手を出したら、ジュンコの負けだつて。」

そう言いながら、今度はレイの頭を掴む。

「アダっ!! ちよ! 士さん! 痛いです!」

「レイもレイだ。どんな理由があつたとしても、挑発したりしたらダメだつて。そんなことが恋する乙女のやり方か? それで、十代に嫌われたらどうするんだ?」

俺の指摘に息を呑むレイ。

「…枕田さん。御免なさい。」

「ああ。うん。わかってくれば良いのよ。…で、十代のことを離してちょうだい。」

「それはやです。」

「ヒキ!!」

レイの言葉にジュンコのおでこに青筋が浮かんでいた。

ズイッ

「お、おい。じゅ…ンム!!」

黒い嫉妬ジエラシの焰を纏ったジュンコが一步近寄ると、焦ったような表情の十代の首に手を回し自分の唇で十代の唇をふさいだ。

「＼全々〇〇〇〇〇〇／(?!)」

しかも、目を白黒させてる十代の反応から舌をねじ込まれて蹂躪されてるみたいだ。

「ああ!! 枕田さん!! 何やってるんですか!!」

「別にいいじゃない。これは、あたしと十代の問題であんたは関係ないじゃない。」

レイの言葉にジュンコが答えてから十代の腕に抱きついた。

「ああ!! 何抱きついてるんですか!!」

「…その言葉、そっくりあんたに返すわよ?」

激昂するレイにそう返すジュンコ。その2人の間で激しく火花が散ってる。

「もてるのね。十代?」

「…勘弁してくれ。」

明日香のからかいに疲れたように十代は呟いていた。

「さっさと行くぞ。こちらの用事を済ませたい。」

海馬はそう言いながら校舎へと進む。

校舎内を歩いて校長室にたどり着いた。

「鮫島！ 俺だ！ ここを開けろ！」

ドンドンと叩く海馬の声にも反応を見せない。デュエルアカデミアの監視カメラに侵入した限りでは校長室にいるのは間違いない。

「開けろ！ 鮫島！」

「ちよつと下がって。」

海馬を下がらせながらノートパソコンを端末機に接続して侵入する。電子世界に仮想構築した古い街並みを進んでいくと城門とその門を護る騎士が現れる。ファイヤールールとセキュリティプログラムだ。

『パスワードを提示してください。』

パスワードなんて知らないし、ゆっくりしてられないから強引に押しきる！

セキュリティプログラムを黙らせて城門を突破する。それと同時にけたたましい警報が鳴り響く。

「何？ この警報？」

「デュエルアカデミアのホストコンピュータに不正侵入してるんだよ。」

急に鳴り出した警報に驚きながらの言葉に答えてから<sup>デロイ</sup>プログラムを30程放つ。

セキュリティプログラムがあちこちに散らばる圏を追いかけている間に校長室のロックを解除すべくコントロールルームへ向かおうとするのだが、

「その前にデュエルアカデミアの名簿を手に入れてくれないか？」

と、海馬の言葉に資料室に向かう。

言われた通り名簿を手に入れるため資料室に来たけど、

「名簿はたくさんありすぎてどこから手をつければいいのかやら。」

「大丈夫だ。今期の女子だけでいい。」

女子だけ？ それなら制限時間内でもなんとかなるだろう。

今年在学中の女子の名簿を手に入れてから、ホストコンピューター内を探索して目当ての場所を見つけた。

「これだ。開けるよ。」

海馬にそう言いながら、パスワードを打ち込みエンターキーを叩いた。次の瞬間、プシューという音と共に校長室のドアが開かれた。

「先に入っているぞ。」

海馬は断りを入れてから校長室に入る。それを見送ってからデコイプログラムを追加で投入して攪乱する。

デコイプログラムがあちこちに出歩いてホストコンピューター内が混乱している間



に侵入した端末まで戻る。

「これでヨシツと。」

接続してた端末をノートパソコンから外して俺達も入室した。

「鮫島！ どういう事だ？」

「お、オーナー？ ど、どういう事とは？」

怒りを滲ませる海馬の問いに額に汗を流しながら問いかける禿チャピン。

「俺の口から言わせたいか？ なら言わせて貰おう。今期に入ってから沖田士のデュエル記録が膨大になった。それに疑問を覚えた俺はデュエルアカデミアを調査したら賞金稼ぎを開催されているそうじゃないか。」

海馬の言葉に鮫島は体を震わせていた。

「貴様はデュエルアカデミアを虐めの舞台にしたいのか？」

しかも、それだけならまだいい。あくまで、デュエルの腕を磨くために必要な措置ともとれる。

だが、それなら、これの辻褄があわない。」

そう言いながらつきだしたりリストはデュエルアカデミアの生徒の名簿らしい。：アレ？ 俺が持つてるのとどこか違うような？ ノートパソコンの名簿を見比べる事数分して違いに気づいた。俺を初めとして何人かの生徒のランクが違っている。つてか、

何で俺が女の方で登録されてるんだ？

「これは貴様が月一試験後に貴様が送ったリストだ。

見てわかるように、実際のランクが違っている。」

海馬の追及に鮫島の顔色は青白くなっている。

「鮫島貴様はクビだ！」

その一言に土気色になる鮫島に蜘蛛敵いの手の糸が垂らされる。

「と言いたいが、貴様を首にしたところで後釜が簡単に見つかるわけではないからな。

貴様には沖田士と制裁デュエルを受けてもらう。

貴様が勝てば、給料20%カット。負ければ給料を60%カットになる。」

文字通り首の皮一枚分とはいえ、助かった事実胸を撫で下ろす鮫島。

「2人ともデツキの調整をして、1時間後に制裁デュエルをしてもらう。」

海馬の指示に頷いてから相手に見られないよう注意をはらいながらデツキの調整を行う。

○ ○ ○

デュエルフィールドを挟んで俺と鮫島の視線が交差する。

「僭越ながらワターシが審判を勤めるノーネ。

まずはデュエルアカデミアの天災未だに無敗エツプレスの女帝、シニョーラ沖田！」

クロノス教諭の言葉に一部のオベリスク・ブルーから大ブーイングが、それ以外からは声援を飛ばしてくれるのはうれしいんだけど、『愛してる!!』だの、『結婚してください!!』

という声を男子からもろうのは気持ち悪いんだけど？ あ、ももえが翔に何かして痛がつてる。

「対するは、サイバー流師範でデュエルアカデミアの校長マスター鮫島！」

クロノス教諭の言葉に俺の時とは逆にオベリスク・ブルーが応援してそれ以外からブーイングの嵐が起こる。

「沖田君。君に勝ってリスペクトの正しさを証明しましょう。」

鮫島のその言葉にデュエルディスクを起動させる。

『決闘!!』

俺と鮫島は同時に叫んで5枚ドロースる。

「先攻は譲りましょう。」

よく言う。サイバー流は後攻有利。一気にぶちのめす腹積もりなのだろう。

「お言葉に甘えて、ドロロー！ 黒竜の雛を攻撃表示で召喚！」

俺のフィールドに卵の殻に覆われた雛龍が現れる。

「可愛いらしいモンスターですが、攻撃力がたったの800を攻撃表示ですか。」

「慌てるな。黒竜の雛を生け贄に真紅眼の黒レッドアイズ ブラックドラゴン竜を特殊召喚！」

『グアアアツ!!』

俺がフィールドにルビーのカードを置くとデュエルフィールドに舞い降りながら、咆哮するルビー。

『レッドアイズだと!』

『レアカードをなんであいつが!』

ルビーの出現に騒然となる。

「真紅眼の黒竜を召喚したことには驚きましたが、サイバー・オーガには届きませんか?

私のターン!」

「まだ俺のターンは終わってない。

手札から魔法カード、黒炎弾を発動!!」

勝手にターンを進めようとする鮫島にそう制してから魔法カードをデュエルディスプレイに読み込ませると、ルビーの口から炎の塊を吐き出して鮫島にぶつけた。(鮫島ライフ4000→2400⇒1600)

「先攻1ターン目は攻撃宣言出来ないけどさ、魔法カードによる攻撃なら問題ないよな?」

「…いえ。あります。」

俺の言葉に鮫島は首を横に振る。

「バーン等というリスペクトの欠片もないようなカードを初手から使ったら防げないではないですか。」

『そうだそうだ!』

『反則負けだ!』

『正々堂々勝負しろ!』

鮫島の言葉にオベリスク・ブルーの一部の生徒達が罵倒する中で視線をクロノス教諭に向けるとクロノス教諭は首を横に振る。

「確かに初手からバーンは防げないノーネ。シカーシ、バーンも立派な戦略なノーネ。よって反則負けは認められないノーネ。」

「というわけで進める。カードを2枚セットしてターンエンド!」

士ライフ4000 手札1枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚 真紅眼の黒竜ATK2400

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

鮫島ライフ1600 手札5枚

「私のターン！ ドロー！」

手札からパワーボンドを発動します!! 手札のサイバー・オーガ2枚を融合してサイバー・オーガ・2を融合召喚します!!」

2体のサイバー・オーガが融合され新たなサイバー・オーガとして姿を現す。(サイバー・オーガ・2 ATK2600+2600=5200)

「これがリスペクトの力ですよ!!」

サイバー・オーガ・2で真紅眼の黒竜を攻撃します!!この時、サイバー・オーガ・2は自身の効果で真紅眼の黒竜の攻撃力の半分アップします!!」

勝ち誇ったように吼える鯨島。

「そよ風程にも感じない!! リバースカードオープン!! バーストブレス!! 生け贄に捧げたドラゴン族モンスターは攻撃力以下の守備力の相手モンスターを全て破壊する! やれ! ルビー!!」

ルビーがその命を糧に吐き出した炎が鯨島のフィールドのサイバー・オーガ・2を破壊した。

「サイバー・ジラフを召喚。生け贄に捧げこのターンの効果ダメージを回避します。カードを1枚セットしてターンエンド。」

士ライフ4000 手札1枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

鮫島ライフ1600 手札1枚

「俺のターン！ ドロー！ 手札からワンフオーワンを発動!! 手札のモンスターを墓地に送り、デッキからレベル1のモンスターを特殊召喚！ 伝説の黒石を特殊召喚！」

ブラック・オウ・レジェンド

伝説の黒石は1ターンに1度しか使えないがこのカードを生け贄に捧げることでレッドアイズモンスターをデッキから特殊召喚するか、墓地にあるレッドアイズモンスターをデッキに戻し、墓地にあるこのカードを手札に加える。

俺は伝説の黒石を生け贄に真紅眼の黒竜を特殊召喚！」

俺の発言に黒石が砕け散り、もう1体の黒竜に観客が騒然となる。

『バカな！ 2体目の真紅眼だと！』

「真紅眼の黒竜のダイレクトアタック!!」

ルビーが漆黒の炎を吐こうとしたところで、

「リバースカードオープンガードブロック!!」

鮫島が発動したカードが攻撃を防いだ。

「ダメージを0にして1枚ドローします!」

宣言してドローする鮫島。

「エンドフェイズ時に真紅眼レッドアイズワイバーンの飛龍の効果発動!! 通常召喚を行わなかったターンにこのカードを除外して真紅眼の黒竜を特殊召喚する!」

士ライフ4000 手札0枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 真紅眼の黒竜ATK2400×2

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

鮫島ライフ1600 手札2枚

「私のターン! ドロー! 手札から魔法カード一時休戦を発動!! 互いに1枚ドローして戦闘ダメージを次の私のターンまで0にします! 私はさらにサイバー・サーチを発動!! デッキからサイバー・エスパーを手札に加えます!」

私はこれでターンエンドします!」

士ライフ4000 手札1枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 真紅眼の黒竜ATK2400×2



伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

鮫島ライフ1600 手札3枚

「俺のターン！ ドロー！ カードを1枚セットしてターンエンド！」

士ライフ4000 手札1枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚 真紅眼の黒竜ATK2400×2

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

鮫島ライフ1600 手札3枚

「私のターン！ ドロー！ サイバー・エスパーを召喚！」

「この瞬間、リバースカードオープンキックバック！ 通常召喚したサイバー・エスパー

は手札に戻る！」

俺が発動したカードの効果により、サイバー・エスパーは手札に戻る。

「何故だ？ 何故、このタイミングでキックバックを使ったのですか？」

サイバー・ジラフを召喚した時にキックバックを使えば楽に私を自滅させることも出

来たのに何故？」

「何簡単なことだ。サイバー流のリスペクトを再現しただけだ。」

「手抜きとリスペクトは違います。」

「サイバー流が掲げるリスペクトつてのは相手に全力を出させてそれ以上の力でぶつ潰すつてものだろう？」

しかも、全力を妨害するカウンタートラップを主体としたパーミッションや、ロックバーン、全力を出させないデッキですやハンデスを異端としてるんだろ？

十分手抜きだ。しかも、サイバー流内で満足してるなら立派な考えだっただろう。だけれどそうはならなかった。」

「ええ。リスペクトという考えに賛同してくださる皆さんのおかげです。」

ニコリと笑みを浮かべる鮫島に俺は首を横に振る。

「いや、これもあんたの策略通りだろ？ リスペクトなんていう民衆受けしそうな言葉と攻撃力4000というわかりやすいステータスで人を引き付けたんだ。しかも、できるだけ一般人には被害を出さないことでサイバー流を正義の味方に誤認させたんだ。もし、リスペクトに疑問をもったらサイバー・エンド・ドラゴンがその牙を向けられるのにな。」

俺の言葉に観客のほとんどが息を呑んでいた。例外は一部オベリスク・ブルーぐらいだ。デュエルアカデミアに所属する生徒なら亮とのデュエルで充分に味わっているは

ずだ。その攻撃を無慈悲に、無惨に、残酷に浴びせられる事を想像して震えているのだろう。

「な、何て事を言うのですか！ それはリスペクトなんていうものではなく、ただの暴力です!!」

「さてな？ これは俺の想像、いや妄想を口にしたただけだ。違うなら態度で示せ。お前のターンだぞ？」

「…墓地のサイバー・サーチを除外してサイバー・エスパーを特殊召喚します！」

そして、チューナーモンスター、サイバー・フェアリーを特殊召喚！」

『チューナー?』

観客が聞いたことの無いカテゴリーに首を傾げている。例外はシンクロモンスターの事を聞かされた為首を傾げているよりも鮫島がチューナーを持つて驚いている。

「これはインダストリアル・イリュージョン社と海馬コーポレーションが協力して発明した新しい召喚方法に必要なモンスターです。

サイバー・フェアリーの効果でサイバー・フェアリーのレベルを8にしてレベル4のサイバー・エスパーとレベル8のサイバー・フェアリーをチューニング。つまりレベルを合計します。」

鮫島の言葉にサイバー・フェアリーは8の輪になり、サイバー・エスパーがその輪の中に飛び込み12の星になった。

★8+☆12||☆12

「シンクロ召喚！」

サイバー・バニシング・ドラゴン！」

観客達も自分達が知らない召喚方法に戸惑っている。

「……ふうん。そういえば、元は海馬コーポレーションにサイバー流の元門下生がいたが、そいつとその信者が協力して作らせたか。おそらく、インダストリアルイリユージョン社にもいるのだろう。」

突然現れた暴龍に腕を組んで呟いていた。

「サイバー・バニシング・ドラゴンとサイバー・フェアリーの効果でこのカードの攻撃力は9600までアップして、真紅眼の黒竜は攻撃力0になります。」

サイバー・バニシング・ドラゴンで真紅眼の黒竜を攻撃します!!」

バニシング・ドラゴンが放つ雷がルビーに襲いかかる。

「リバースカードオーブンガードブロック!! ダメージを0にして1枚ドロウ！」

ダメージを回避してドロウする。

「私はターンエンド。」

士ライフ4000 手札1枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 真紅眼の黒竜ATK0

伏せモンスター0枚 サイバー・バニシング・ドラゴンATK7200

伏せカード0枚

鮫島ライフ1600 手札2枚

「俺のターン！ ドロー！ ビッグバン・シュートをサイバー・バニシング・ドラゴンに  
装備!!」

俺が装備カードをバニシング・ドラゴンに装備させると、オベリスク・ブルーの生徒  
から嘲るような声が聞こえる。

『装備カードを相手モンスターに装備だと！ 気でもふれたか!』

「ビッグバン・シュートは攻撃力をアップして守備貫通を与えるものです。それでどう  
するつもりですか。」

「チューナーモンスター、リトルフェアリーを召喚！

レベル7真紅眼の黒竜とレベル1リトルフェアリーをチューニング!!」

俺の言葉にリトルフェアリーが1つの緑色の輪になり、ルビーが潜り抜けると8つの  
星になった。

☆7+★111☆8

「シンクロ召喚！ ルビーアイズフェアリードラゴン 紅玉眼の妖精竜！」

俺のフィールドに紅玉ルビーのような輝きを放つ真紅の眼で敵を睨みつつ、蝶々のような羽根で空を舞うドラゴンが現れた。

「あなたがシンクロ召喚を行ったのには驚きました。しかし、そのモンスターもサイバー・バニシング・ドラゴンには無力です。」

サイバー・バニシング・ドラゴンはサイバーと名のつくモンスター以外の力を無力化するからな。（紅玉眼の妖精竜 ATK2500↓0）

「紅玉眼の妖精竜の効果発動!! 俺のフィールドの表表示の魔法カードを手札に戻し、このカードの攻撃力を500アップする! マジカルフォース!」

紅玉眼の妖精竜が羽ばたかせるとビッグバン・シユートが俺の手札に加わり、それと同時にサイバー・バニシング・ドラゴンが次元の渦に飲み込まれ消滅する。

「な、何が? サイバー・バニシング・ドラゴンは破壊されないのにな?」

「破壊は出来なくても除外は出来る。ビッグバン・シユートはフィールドから離れたら装備していたモンスターは除外されるんだ。」

バトルフェイズ! 紅玉眼の妖精竜でダイレクトアタック!!」

紅玉眼の妖精竜が白色に輝くプレスを放ち鯨島のライフを削った。

○○○

「それまでなノーネ！ 勝者シニョーラ沖田!!」

審判のクロノス教諭が叫ぶと観客のほとんどが喜んでいた。例外はオベリスク・ブルーの一部やサイバー流の信者らしき教師ぐらいだ。

「鮫島校長。あなたは教師失格なノーネ。」

確かにワターシも上に上がろうとする努力を無くしたオシリス・レッドのドロップアウトボーイズは大嫌いで見下してましたが、それと同じくらいに自分の考えを押し付けようとするあなたは最低なノーネ。」

項垂れる鮫島にクロノス教諭にそう言うのを観客のほとんどが静かに聞いていた。

## デュエル33 選抜デュエル

SIDE クロノス

とうとうやって来たノーネ！ デュエルアカデミアノース校との友好デュエル。去年はカイザーが圧勝して一昨年の借りは返せたカーラー出来れば今年も勝って欲しいノーネ。その為には強いデュエリストを代表に選ばないといけないノーネ。

「さて、今年も代表は丸藤亮君に決定でしょうか？」

鮎川先生の言葉にワタシは首を横に振る。

「残念ながーら、本人から辞退されてるノーネ。」

ワターシの言葉に皆ががっかりしたような表情になるけどすぐに代案を出した。

「でしたら、特別寮所属の沖田士さんはどうでしょうか？ カイザーに勝てた実力者ですし、デュエルアカデミア内でもほとんどのデュエルで1ポイントも削られずに勝てる程の実力があります。」

友好デュエルというたくさんの観客に見られる状況で実力を出しきれるか不安ですが、彼女なら友好デュエルにもキチンと勝ってくれるでしょう。」



「残念ながら、彼女も代表を辞退してます。」

手をあげながら鮫島校長が言うのだが、周囲の反応は冷やかなものだった。

「校長。いくら彼女が気に入らない人物であたの言うリスペクトに反するデツキを使うからと言っても嘘をついてまで代表から外すのは些か大人気ないと思いますよ?」

冷やかな視線を投げ掛けた教師の一人がそういうと周囲がウンウンと頷いた。

「田中先生。今回は嘘じゃないノーネ。」

ワタシが証人になるノーネ。

それとこの証拠もあるノーネ。」

ワタシが鞆からワタシと鮫島校長の前で書いた直筆の書類を読み上げる。

「私、沖田士はノース校との友好デュエルを辞退します。」

ちゃんと直筆のサインと拇印もキチンとされてるノーネ。」

ワタシが読み上げると、教師一同がばつの悪い表情になった。

「校長。疑ってすみません。」

「普段が普段ですかーらそう思っても仕方ないノーネ。」

「ちよつと待つてください。それでは私がダメ人間ではないですか?」

…自覚ないノーネ? リスペクトに従わないシニョーラ沖田を退学しようとしている時点で校長の威厳は地の底なノーネ。

「ふむ、では遊城十代君はどうでしょうか？」

ふむ、シニョール十代ですか？ 入学当初の彼の筆記の成績は壊滅的、赤点ストレスでしたが目覚ましい成長を遂げてこの前の試験は満点をとったノーネ。迂闊にも名前の記入ミスで0点にしてしまったけどあの時喜びのあまり小躍りしそだったノーネ。

「ワタシはシニョール十代と、その弟分シニョール翔の両名をあげたいノーネ。」

「なるほど。丸藤翔君もなかなかの成績ですし、彼も面白いデュエルを魅せてくれることでしょう。ですが、私はオベリスク・ブルー所属の遠藤才波君えんどうさいはと茂木もけ夫君とラー・イエロー所属の三沢大地君に任せたいです。」

マジモンの校長失格なノーネ！ シニョール遠藤はサイバー流の門下生ですし、シニョールもけ夫は彼とデュエルするデュエリストはデュエルの情熱を失い、次々に自主退学していったノーネ。狸親父の狙いもわかっているノーネ。恐らくは彼とシニョール十代達を争わせて自主退学させるつもりなノーネ！ しかもデュエルを観戦している人達さえも巻き添えにして。

「では、他に意見はないようですので、彼等5人で選抜デュエルをしてもらいましょう。」  
くう。校長権限で無理矢理押しきられたノーネ。こうなったらシニョール十代達に任せるしかないノーネ。

## SIDE 土

「お、いたいた。」

亮にききたい事があるとかで十代と翔の付き添いでジャッジメントを訪れた時、亮はちょうどデュエルの最中だったので、見学させてもらうことにした。

「俺のターン！ ドロー！ サイバー・ドラゴン・コアを攻撃表示で召喚！」

「む…。」

亮のフィールドに召喚されたモンスターを見て低く唸る。けど結局何も言わなかったのを見てターンを進める。

「効果でサイバネティックフュージョンサポートを手札に加える！」

バトル！

サイバー・ドラゴン・コアでダイレクトアタック！」

サイバー・ドラゴン・コアが放つ光線が対戦相手のライフを僅かだが削る。

「さらに、カードを1枚セットしてターンエンド！」

亮ライフ2000 手札2枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 サイバー・ドラゴン・コアATK400

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚 グラビティバインド

モブAライフ4000 手札2枚

「俺のターン！ ドロー！ 波動キャノンを発動！ 墓地に送るまでの間の表表示でいたターン数×1000ダメージを与える！

ターンエンド！」

亮ライフ2000 手札2枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 サイバー・ドラゴン・コアATK400

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚 グラビティバインド 波動キャノン

モブAライフ4000 手札2枚

「俺のターン！ ドロー！ サイバー・ヴァリーを通常召喚！ そして、手札から機械複

製術を発動！ 攻撃力500以下の機械族モンスターをデッキから2体特殊召喚！

さらにサイバー・ヴァリーの効果発動！ フィールド上の伏せカードとサイバー・

ヴァリーを除外して2枚ドロー！

さらにサイバー・ヴァリー2枚除外して2枚ドロー！

手札からエヴォリユーションバーストを発動！」

亮の宣言にサイバー・ドラゴン・コアが閃光で超重力の網を吹き飛ばす。

「パワーボンドを発動！」

フィールド上のサイバー・ドラゴン・コアと手札の2枚サイバー・ドラゴンを融合してサイバー・エンド・ドラゴンを融合召喚！」

亮のフィールドに舞い降りたサイバー・エンド・ドラゴンはパワーボンドの影響で攻撃力が倍加する。(サイバー・エンド・ドラゴン ATK 4000 + 4000 = 8000)

「甘いぞー！ リバースカードオープン！ 奈落の落とし穴！」

サイバー・エンド・ドラゴンは除外してもらおうぞー！」

その言葉にサイバー・エンド・ドラゴンが奈落の底へと落ちて行く。

「ああ。お兄さんのサイバー・エンド・ドラゴンが……」

サイバー・エンド・ドラゴンが除外されるのを見て悲しそうに呟いた。このままターンエンドを宣言すればパワーボンドのデメリット融合召喚したサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力4000を受けて0になってしまう。

「大丈夫だ。翔。亮の表情はミミも動いてない。

恐らく伏せカードが召喚妨害のトラップだと読んでたのだろう。そして、それを読んでその上で、サイバー・エンド・ドラゴンを召喚したのなら、相手のセットカードの打

開策があるのだろうか。」

「その通りだ！ 手札から魔法カードサイバネティックフュージョンサポートを発動して俺のライフを半分支払い、このターンの機械族融合モンスターを融合召喚をする場合、墓地、手札、フィールド上の条件を満たすモンスターを除外するそれらを融合素材とする事ができる！」

さらにパワーボンドを発動！

墓地のサイバー・ドラゴンを2枚除外してサイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚！  
シギヤア！ フィールドに現れたサイバー・ツイン・ドラゴンが歓喜の声を上げた。

「あちゃあ。俺の負けか。」

「サイバーツインでダイレクトアタック！」

双頭の機械竜の閃光が相手のライフを削りきった。

○○○○

「負けたけど楽しかったよ。」

「こちらもです。ありがとうございました。」

対戦相手に礼を述べこちらに向き直る。

「どうした？ 翔達？」

「代表選抜を知ってるよね？」

翔の問いに頷く亮。

「その選抜に選ばれた茂木もけ夫についてなにかしら聞いたことないかな？」

「……茂木もけ夫か。当時俺は中等部在学だったからな。少ししか知らない。

だが、彼とデュエルする人物はやる気を失いデュエルアカデミアを自主退学していったという話だ。」

翔の問いに亮は遠くを見るように思い返していた。

「デュエルする人が自主退学。まさか、僕達もそうなたちやうのかな？」

「そうなたって欲しくないノーネ。」

翔の不安の眩きにつからそこにいたのかクロノス教諭が声をかけてきた。

「シニョール翔。ワターシは貴方に期待しているノーネ。ですが、目指すべき目標に追い越そうと足掻くその姿勢は高く評価しているノーネ。シニョール翔を評価しているノーネはきつとワターシだけじゃないノーネ。選抜デュエル頑張ってるノーネ。」

クロノス教諭の激励に翔は嬉しそうに頷いていた。

「そして、シニョール十代。あなたも選抜デュエル頑張ってるノーネ。」

クロノス教諭の言葉に十代は深く頷いていた。

## デュエル34 選抜デュエル 最弱の天使

とうとうやってきた選抜デュエル。総当たり戦でまず前に出たのはシルバー○ヤリオットレクイエムならぬもけもけを使った脱力デュエルの茂木もけ夫だ。最初にまず最初にデュエルするのは遠藤なのだが、

『えくお知らせします。本日出場予定の遠藤君ですが、急な体調不良で保健室で休んです。ですので不戦敗とみなし茂木君と三沢君がデュエルしてください。』

あ。ズルい。逃げやがった。しかも、よく見たらオベリスク・ブルーだけ数足りてない。恐らくはサイバー流やその信者を適当な用事をでっち上げて隔離させてるんだろう。

名前も知らないラー・イエローとの一進一退の攻防が続いて勝利を納めたのは名前も知らないラー・イエローだ。

「君が十代君かよろしくね。」

茂木の言葉に十代がデュエルディスクを起動させる。

○ ○ ○



『決闘!!』  
デュエル

「俺のターン！ ドロー！ エレメンタル E・HERO バーストレディーを守備表示で召喚！

カードを1枚セットしてターンエンド！」

十代ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 E・HER バーストレディーDEF800

「僕のターン。ドロウ。ハッピー・ラヴァーを守備表示で召喚するよ。カードを2枚セットしてターンエンドするね。」

十代ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 E・HER バーストレディーDEF800

伏せモンスター0枚 ハッピー・ラヴァーDEF500

伏せカード2枚

もけ夫ライフ4000 手札3枚

「俺のターン！ ドロー！ エレメンタル E・HERO スパークマンを攻撃表示で召喚！

ストレディーを攻撃表示に変更！

バトルフェイズ！

バーストレディーでハッピー・ラヴァーを攻撃!! バーストファイアー!!」

十代の宣言にバーストレディーが炎を放ちハッピー・ラヴァーを焼き付くした。

「さらにスパークマンでダイレクトアタック! スパークフラッシュ!」

「させないよ。蘇りし魂を発動するよ。墓地にある通常モンスターのハッピー・ラヴァーを守備表示で特殊召喚するよ。」

スパークマンが光を放とうとする直前に翻ったカードがハッピー・ラヴァーを蘇らせる。

「だけど、スパークマンの攻撃力の方が高い! 行け!! スパークマン!」

スパークマンの攻撃がハッピー・ラヴァーを打ち倒す。

「一枚セットしてターンエンド!」

「エンドフェイズに人海戦術を発動するよ。効果によって僕はもけもけをデッキから特殊召喚するよ。」

ポウンとそんな音をたてながら頭に?を浮かべた天使が現れると会場の女子から可愛いと言う声をあげた。

十代ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚 E・HER バーストレディーATK1200 E・HERO  
スパークマンATK1600

伏せモンスター0枚 もけもけATK300×2

伏せカード0枚 人海戦術

もけ夫ライフ4000 手札3枚

「僕のターン。ドロロー。怒れるもけもけを発動するよ。さらにもけもけを召喚するね。」  
揃ったか。もけもけの必勝パターンが。

「さらに思い出のブランクを発動して墓地のハッピー・ラヴァーを攻撃表示で召喚。バトルフェイズに入るよ。」

ハッピー・ラヴァーでバーストレディーを攻撃するよ。

ハッピービーム。」

茂木の言葉にハッピー・ラヴァーが攻撃しようとして、

「させるか！ ヒーローバリア！ 攻撃を1度だけ無効にする！」

十代が展開したバリアがハッピー・ラヴァーの攻撃を防いだ。

「トラップを使つてまで自爆特効を防いだ？」

「多分十代は、自分が受けるダメージを少しでも少なくすると茂木へのダメージを少しでも多く与えるの両方を考えたんだろう。」

明日香の眩きにそう答えた。

「もけもけデツキはかなり厄介だね。怒れるもけもけがある限り、天使が戦闘破壊されれば攻撃力が3000になる。」

「もけもけでバーストレディーを攻撃。もけもけウェーブ。」

『もけー!!』

もけもけの口から凄まじい音波でバーストレディーに攻撃する。

「だあー！ うるせえ！ バーストレディー！」

十代の心からの叫びにバーストレディーは炎を放ち、もけもけを打ち倒す。(もけ夫  
ライフ4000—1200+300=3100)

その瞬間もけもけが怒り、赤く膨れ上がった。(もけもけ ATK300↓3000)  
その瞬間、男子からも怒った姿も可愛いといい始めた。

「もけもけでバーストレディーとスパークマンに攻撃するよ。」

茂木の言葉に2体のもけもけがもの凄い音波でバーストレディーとスパークマンに  
攻撃する。(十代ライフ4000—3000—3000+1200+1600=80  
0)

危な!! ギリギリでライフが残った!

「頑張りなさいよ!!! 十代!!! アンタの負ける姿もなんて見たくないわよ!!!」(十代ライ

フ4000—3000—3000+1200+1600=800)

危な!! ギリギリでライフが残った!

「頑張りなさいよ!!!!!! 十代!!!!!! アンタの負ける姿なんて見たくないわよ!!!」

「頑張ってください!!!!!! 十代さん!!!!!!」

ジュンコの応援とほぼ同じタイミングで茶髪のショートカットの女子が応援する。ジュンコはその女子に対してきつい視線をぶつけるのだが、女子の方はニコニコと笑みを浮かべているのみで暖簾に腕押し柳に風といった感じだ。

「おうー サンキューー! ジュンコー! ゆまー!」

2人の応援に十代は親指を立てて答える。つてか、あの娘はもう一人のHERO使いの宮田ゆまか。

「僕は速攻魔法神秘の中華鍋でもけもけの攻撃力だけライフを回復させるよ。エンドフェイズ時に人海戦術の効果でハッピー・ラヴァーを特殊召喚して思い出のブランコの効果でハッピー・ラヴァーが破壊されるよ。ターンエンド。」

十代ライフ800 手札3枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 もけもけATK300

伏せカード0枚 人海戦術 怒れるもけもけ

もけ夫ライフ6100 手札1枚

「俺のターン！ ドロー！ 手札からマジックカード強者への贈り物発動!! このカードの効果によりお前は3枚までのモンスターを任意の枚数分召喚条件を無視して特殊召喚出来て、召喚した枚数分俺はドロー出来る!!」

「じゃあ、僕はもけもけ2体とハッピー・ラヴァーを特殊召喚するよ。」

「じゃあ、俺は3枚ドロー！ リバースカードオープン！ HERO復活！ 全てのプレイヤーは自分の墓地からHEROと名の付くモンスターを特殊召喚出来る！ 来いスパークマン！」

さらに<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup> エアーマン!!」

十代のフィールドに空気を読まない三沢大地が現れる。つて、三沢つて誰だっけ？  
「びえつくし!!」

何故か控室で盛大なくしやみが響いた。

「エアーマンの効果で<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup> エッジマンを手札に加える！ さらにスパークマンにスパークガンを装備してもけもけを全て守備表示にしてスパークガンを破壊する！ そして、Eーエマーゼンシーコールで<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup> ワイルドマンを手札に加える！

そして、融合発動!! ワイルドマンとエッジマンを融合して Eエレメンタル・HEROヒーロー ワイルドシャギーマンを融合召喚!!」

「まさか、十代のやつ!」

もけもけをぶっ潰すつもりか!

「そして、メテオストライクをワイルドシャギーマンに装備して守備貫通効果を与える!

……ここはちよつと殺風景すぎるな。こんなんじや俺のヒーロー達は真価を發揮できない。だから、ヒーローにふさわしい戦いの舞台に場所変えだ!! 手札からワイルド魔法摩天楼ースカイスクレイパー発動!!」

鬼か? これでもけもけに攻撃するとき攻撃力アップは確定じゃないか。

「バトル!」

ワイルドシャギーマンは相手フィールドのモンスターに1回づつ攻撃できる! ワイルドエッジスライサー! グオレンダア!!」

「それ、キャラが違うから!!」

俺のつつこみを無視してワイルドシャギーマンがハッピー・ラヴァーに刃を飛ばして打ち倒す。(もけ夫ライフ6100—2600—2600+800+800+800—6100

—3600—2500)

さらに、もけもけに刃を飛ばして襲いかかる。

「でも、怒れるもけもけの効果でもけもけの攻撃力が3000になるよ。」

「構わないぜ！ っていうか、怒れるもけもけは守備力が3000になる訳じゃないっ。」

そう。守備力が3000になったり、攻撃表示に変更される効果等なく、守備表示の時は守備力100の低ステータスをさらしたままになる。(もけ夫ライフ2500—2600—2600—2600—1000—1000—1000+100+100+100+1000—2500—10800+3000—2500—10500—8000)

「さらに、スパークマンとエアーマンのダイレクトアタック!!」

「もう止めて！ H a g a のライフは0よ！」

思わずそんなセリフを言った時スパークマンとエアーマンがダイレクトアタックをした。(もけ夫ライフ—8000—1600—1800—11400)

○○○○

「凄いわよ!! 十代!!」

「凄いですよ!! 十代さん!!」

十代の勝利にジュンコとゆまが喜んだ。っていうかオーバーキル過ぎるわ。最初のもけもけへの攻撃だけで十分じゃん。



「頑張れよ！ 翔！」

「うん！ 行つてくるツス！」

控室から出てきた翔と手を叩きながら、通路を通り俺達の所に来た。

「十代。ここ、空いてるわよ？」

「十代さん。どうぞ座つてください。」

ジュンコとゆまは同時に自分の隣の席を指差した。奇しくもそれは同じ席だった。

つまり、十代を挟んで2人の乙女が座るといふ羨ましい状況なのだが、ジュンコが不機嫌な表情でゆまを見ている。

「あんたは十代のなんなの？」

「私は十代さんの相手ですよ。」

その一言にジュンコの嫉妬の視線が一段と強くなつた。

「1週間前に十代さんに相手してもらつた後で十代さんの部屋でもらつたんです。」

：シテつて、まさか十代つて意外と手が早い？

「他人のデツキの調整つてのも面白いよな。」

十代の一言に誤解がはれたのか、ジュンコの嫉妬ジエラッのオーラが霧散する。

「十代さん手作りのトマトカレーつて凄く美味しいですよね。」

だああ！ どうしてこのタイミングで爆弾発言できる！ 見ろよ！ ゆまの爆弾発



エンドツス！」

翔ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚

「僕のターン。ドロー。僕はハッピー・ラヴァーを守備表示で召喚。

さらに2枚伏せてターンエンドするよ。」

翔ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚

伏せモンスター0枚 ハッピー・ラヴァーDEF500

伏せカード2枚

もけ夫ライフ4000 手札3枚

「僕のターン！ ドロー！ サブマリノイドを攻撃表示で召喚！！

バトルツス！

サブマリノイドはダイレクトアタックが出来る効果を持つてるツス！」

その一言にサブマリノイドはもけ夫に直接襲いかかる。(もけ夫ライフ4000—

8000 || 3200)

考えたな。怒れるもけもけが強力でもその効果を発動するにはモンスターを戦闘破壊する必要がある。でも守備表示のモンスターには殴っても破壊できない。

「そして、サブマリントロイドを守備表示に変更してカードをセットしてターンエンドッス！」

翔ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚 サブマリントロイドDEF1800

伏せモンスター0枚 ハッピー・ラヴァーDEF500

伏せカード2枚

もけ夫ライフ3200 手札3枚

「僕のターン。ドロロー。よく考えた戦略だけどまだまだだね。リバースオープン。最終突撃部隊。すべての表表示モンスターは攻撃表示になるよ。そして、手札からもけもけを攻撃表示で召喚。そして、もう1枚リバースオープン。同姓同名同盟。もけもけを2枚デッキから召喚するよ。そして、バトルするよ。ハッピー・ラヴァーでサブマリントロイドを攻撃。」

「この瞬間、リバースカードオープン！ スーパーチャージ！ 2枚ドロロー！」

もけ夫の攻撃宣言に翔がドロワーしてからハッピー・ラヴァーが攻撃を仕掛ける。しかし両者とも攻撃力が800な為相討ちになる。

「この瞬間、怒れるもけもけの効果でもけもけの攻撃力が3000になる。もけもけの攻撃。もけもけウエーブ。」

その指示にもけもけが大声で伏せモンスターのスチームロイドを破壊する。(翔ライフ4000—3000+1800+500=2300)

「2枚目のもけもけのダイレクトアタック。もけもけウエーブ。」

「させないツス！ リバースカードオープン！ ガードブロック！ ダメージを0にして1枚ドロワー！」

翔が発動させたカードがダメージを防いだ。

「これで防げる物は何もないよね？ 最後のもけもけでダイレクトアタック。もけもけウエーブ。」

「翔様!!」

もけ夫の攻撃宣言にももえが叫び、そしてもけもけの音波が終わってもその2つの足でしっかりと立っていた。(翔ライフ2300—0=2300)

「あれ？ 何でライフが減ってないの？」

「ダメージ計算時にカイトロイドを捨てていたツス。このカードはダイレクトアタック

のダメージ計算時に手札から捨てることで僕へのダメージを0にするツス。「これもダメだったか。僕はターンエンドするよ。」

翔ライフ2300 手札5枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 もけもけATK3000×2

伏せカード0枚 人海戦術 最終突撃部隊 怒れるもけもけ

もけ夫ライフ6200 手札1枚

「君のターンだけどき、何で諦めなかったの？ 僕のフィールドに攻撃力3000のもけもけが3体も並ばれたもうダメだと思わなかったの？」

「そんなの当たり前ツス。アニキのセリフっすけど、このドローで世界がガラリと変わるかもしれないツスよ？」

実際にカイトロイドはガードブロックでドローしたカードツス。「でもさ、そう簡単には望んだカードは来ないよ？」

「じゃあ、そこで見てるツス。世界が変わる瞬間を！」

かっつとピンググッスよ!! 僕!!

「それ世界が違うから！」

俺の突っ込みを無視してターンを進めていく翔。

「僕は死者転生を發動ツス！ 手札のモンスターを墓地に、墓地のモンスターを手札に加えるツス！ ドリルロイドを墓地に、スチームロイドを手札に加えるツス！」

そして、パワーボンド！ ジャイロイドとスチームロイドを墓地に送ってスチームジャイロイドを融合召喚ツス！

さらにサイバネティックフュージョンサポート發動ツス！ 続いてもう1枚のパワーボンドを發動ツス！

スチームロイド、ドリルロイド、サブマリンロイドを除外してスパービークロイドジャンボドリルを融合召喚ツス！」

凄い!! 攻撃力3000オーバーのモンスターを1ターンで2体も揃えた!

(翔ライフ2300÷2=1150)

スチームジャイロイドATK2200+2200=4400

スパービークロイドジャンボドリルATK3000+3000=6000)

「バトルツス！」

スパービークロイドジャンボドリルでもけもけを攻撃!!」

翔の攻撃宣言にジャンボドリルはそのドリルでもけもけに襲いかかる。(もけ夫ライ

フ6200-6000+300=500)

「そしてスチームジャイロイドでもけもけを攻撃!!」

怒れるもけもけの効果で赤く膨れ上がり攻撃力が3000になっているが、それでもパワーボンドで強化されたスチームジャイロイドには届かない。(もけ夫ライフ500

—4400+3000—900)

○○○

「…なんで僕がデュエルにしがみ続けてきたのか…。」

「…え？」

もけ夫の眩きに翔は思わず問いかけていた。

「僕の事は知ってる？ 対戦相手が次々と辞めていった時、デュエルアカデミアは2つの選択肢を突きつけたんだ。1つは特別寮に籠り誰とも交わらないで生活する事もう1つはデツキを手放して、デュエルとは関係無い生活する事。

デュエルとは関係無い生活すればデュエルへの情熱を失う人もいなくなる。そんな事も選べたはずなのに、僕は特別寮に籠る選択肢をとってまでデュエルにしがみついたしまった。

その理由がわかったよ。僕はこのもけもけ達と一緒に熱いデュエルをしたかったんだ。」

そう言ったもけ夫が翔に右手を差し出した。



「また、デュエルしてくれるかな？」

「もちろんツスよ。」

もけ夫の問いに翔は笑みと共にその手を固く握った。

## デュエル35 選抜デュエル サイバー流の呪い

もけ夫とのデュエルで観客も次の選手までもが寝てしまった。すごいな。白銀の戦  
 ○鎮魂歌。デュエルを観戦している人に限らず大勢の人達を眠らせるなんて。あのま  
 ま続いていたら、他人と肉体が入れ替わっていたり別の生き物に進化していたかもしれ  
 ない。

次に前に出たのは名前も知らないラー・イエローの生徒だ。

○○○○

『決闘!!』  
デュエル

遠藤とラー・イエローの生徒は同時にドロウした。

「俺のターン！ ドロー！ 手札から魔法カード天使の施しを発動！ 3枚ドロウして  
 2枚捨てる！」

そして、オキシゲドンを攻撃表示で召喚！ カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

? ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 オキシゲドン ATK1800

「俺のターン!! ドロー! その雑魚には早々と退場してもらうぜ!

手札から融合発動! サイバー・ドラゴン2体を融合してサイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚!

サイバー・ツイン・ドラゴンでその雑魚を攻撃!! エヴォリューションツインバースト!」

遠藤の攻撃宣言に双頭の機械竜が閃光を放とうとして、

「リバースカードオープン! 攻撃の無力化! 攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する!」

時空の渦が攻撃を飲み込んだ。

「くそ。仕留めきれなかったか。ターンエンド!」

? ライフ4000 手札4枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 オキシゲドンATK1800

伏せモンスター0枚 サイバー・ツイン・ドラゴンATK2800

伏せカード1枚

遠藤ライフ4000 手札2枚

「俺のターン! ドロー! 手札から死者蘇生を発動! 自分の墓地のハイドロゲドン

を特殊召喚！　そして、ハイドロゲドンを攻撃表示で召喚！

手札からボンディングH20発動！　フィールドのハイドロゲドンとオキシゲドン2体を生贄に捧げ、デッキにあるウォーター・ドラゴンを攻撃表示で召喚！

あ、こりや伏せカードが攻撃妨害系のカードじゃない限り勝ったな。

「バトルフェイズ！

ウォーター・ドラゴンでサイバー・ツイン・ドラゴンを攻撃!!」

大津波と閃光がぶつかり合い発生源を飲み込んで消滅する。

『自爆特攻!!』

『何て外道な!』

『あんな使い方されるウォーター・ドラゴンが可哀想だな。』

サイバー流の信者から非難の声をあげるが、自爆特攻も立派な戦術だぞ？

「ウォーター・ドラゴンが破壊された時、墓地からハイドロゲドンとオキシゲドン2体を特殊召喚！

バトルフェイズ中の特殊召喚のため、こいつらにも攻撃可能！　3体のダイレクトアタック！」

水の竜から呼び出された恐竜達が遠藤に襲いかかり、

「させるか！　リバースカードオープン！　ガードブロック！　オキシゲドンのダメー

ジを0にして1枚ドロー！」

「倒せなかったか。ターンエンド！」

? ライフ4000 手札2枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 オキシゲドン ATK1800 ハイドロゲドン ATK160

0×2

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

遠藤ライフ4000 手札3枚

「俺のターン！ ドロー！ 手札からサイバネティック・フュージョン・サポートを発動  
 ！ そして、パワーボンドを発動！ 手札と墓地のサイバー・ドラゴンを3体除外して  
 サイバー・エンド・ドラゴンを融合召喚！ パワーボンドの効果でサイバー・エンド・ド  
 ラゴンの攻撃力は倍になる！そして、手札から魔法カード、天よりの宝札発動！ 全て  
 のプレイヤーは手札が6枚になるようにドロー！ ハハハ！ こりやいや！ サイ  
 バー・エンド・ドラゴンでオキシゲドンを攻撃!! エターナルエヴォリューションパー  
 スト!!」

3つ首の機械竜が閃光を放とうとして、



したが、もう1つのプランで沖田君達を切るだけです。」

三沢君ははっきり言えば、第2の刃の研ぎ石。デュエルを通じて第2の刃を輝かせるための研ぎ石でしかない。サイバー・ツイン・ドラゴンを戦闘破壊しただけでなく、ハイドロゲドンとオキシゲドンが並ばれた時は肝を冷やしましたが、予想外に事が運びました。

1つのグループの中で反逆者が現れた時どうするべきか？ ひとつはさっさと追いつ出す。もう1つは圧倒的な力で牙を叩き折ること。牙を叩き折られた人物は噛みつく事すら出来ない。デュエルアカデミア1年の中では1番の実力者と評判の三沢君の牙を叩き折ることで、デュエルアカデミアの生徒の牙を叩き折ったことになる。

「もう少しですね。」

私の呟きは誰にも聞かれる事はなかった。

S I D E 士

次は十代とラー・イエローの生徒とのデュエルなのだが、彼は気絶しているため残りのデュエルが不戦敗になりそうだったが、十代達の強い要望により次の日に持ち越しとなった。

「へへ。楽しいデュエルしようぜ。み……………み……………」

「お前もか！ お前も俺の事を忘れるのか！」

ラー・イエローの生徒の言葉に十代が答えを返した。

「The earth Three swamp!」

「なぜそこで英語が出てくる! しかもかなり上手いし!」

十代の流暢な英語に思わず突っ込みを入れる三沼地球。そういえば、十代つて英語の成績は異様に良かったよな。

〇〇〇〇

『決闘!!』<sup>デュエル</sup>

十代と三沼は互いに宣言してカードを引いた。

「俺のターン!! ドロー!」

手札から<sup>エレメンタル</sup>E・<sup>ヒーロー</sup>HERO バブルマンを攻撃表示で召喚!!

出た!! 強欲なHERO!! アニメ効果だと強いんだよな。

「バブルマンの効果発動!! 俺のフィールドがバブルマン1枚の時、2枚ドロー!」

ハイ。アニメ効果でした。

「さらにカードを1枚伏せてターンエンド!」

三沼ライフ4000 手札5枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚



伏せモンスター0枚 バブルマンATK800

伏せカード1枚

十代ライフ4000 手札6枚

「俺のターン！ ドロー！ 手札から魔法カード天使の施し発動！ 3枚ドロウして2枚捨てる！ 死者蘇生を発動！ オキシゲドンを特殊召喚！ さらにハイドロゲドンを召喚！」

バトルフェイズ！

オキシゲドンで攻撃!!」

「くっ！ リバースカードオープン！ ヒーローバリア！ オキシゲドンの攻撃を無効にするぜ！」

十代が発動したカードにより、オキシゲドンの攻撃が防がれる。しかし、これは三沼の予想通りだったらしい。

「さらにハイドロゲドンでバブルマンを攻撃!!」

ハイドロゲドンの攻撃がバブルマンを倒してその効果によりもう1体のハイドロゲドンを呼び出してダイレクトアタックする。(十代ライフ4000—1600—1600+800=1600)

「そして、ボンディングH20発動！ ハイドロゲドン2体とオキシゲドンを生贄に

ウオーター・ドラゴンを特殊召喚!」

水素の恐竜と酸素の恐竜が合わさり、水の竜が現れる。

「3枚のモンスターと魔法カード使って攻撃力2800って弱くないか?」

効果だって炎族か炎属性が出てくるとは限らないし。まあ、破壊されたら、素材が戻ってくるって効果は強みだけどき。

「1枚伏せてターンエンド!」

三沼ライフ4000 手札2枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 ウオーター・ドラゴンATK2800

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

十代ライフ1600 手札6枚

「俺のターン! ドロー!」  
エレメンタル E・ヒーロー HERO エアーマンを召喚! 効果により エレメンタル E・

「そうはいかない! 封魔の呪印発動! 手札の魔法カードを墓地に送り融合を無効にして破壊する! さらにデュエルが終わるまで融合は使えない!」

三沼が発動したカード十代の融合を破壊した。

「してやられたな。だが、まだだ！ 手札からミラクルフュージョンを発動！！ 墓地の  
 バブルマンとフィールドのエアーマンを融合！ 来い極寒のHERO！ HERO！ HERO！  
 HERO！ アブソルト ZERO！」  
エレメンタル

「しまった！ 融合を封じて融合モンスターを封じたはずだったのに！」

十代が融合召喚すると悔しげにアブソルトZEROを見る三沼。

「へへ♪ 融合だけが融合召喚の方法じゃないぜ！ アブソルトZEROの攻撃力は  
 2500！ だけど、フィールドにいる水属性モンスターの枚数1枚につき攻撃力が5  
 00アップする！

行け！

アブソルトZEROの攻撃！！ 瞬間氷結！！

十代のフィールドに現れた白銀のヒーローが水の竜を打ち倒す。

「だ、だが、破壊したウォーター・ドラゴンの効果発動！ ハイドロゲドン2体とオキシ  
 ゲドンわ特殊召喚！」

「へへへ。やるな！ 三沼！ ウォーター・ドラゴンが破壊されても後続を残すなんて  
 な。」

2枚伏せてターンエンド！」

三沼ライフ3800 手札1枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 ハイドロゲドンATK1600 オキシゲドンATK180

0

伏せモンスター0枚 アブソルートZEROATK2500+500×2

伏せカード2枚

十代ライフ1600 手札3枚

「俺のターン！ ドロー！ ファイヤー・スネークを攻撃表示で召喚！」

ファイヤー・スネークはその長い燃える尻尾をハイドロゲドンとオキシゲドンに巻きつけたと思ったら激しく燃え上がり巨大な焰の竜へと進化した。

ファイヤー・スネーク（オリカ） 炎属性レベル3

攻撃力700 守備力600

【は虫類族・効果】自分フィールドのこのカードとハイドロゲドンとオキシゲドンをすべて生け贄に捧げることで、デッキ、手札、墓地からバーニング・ドラゴンを特殊召喚する。

「ハイドロゲドンとオキシゲドンを生け贄にバーニング・ドラゴンを特殊召喚！」

ファイヤー・スネークの焰により産み出されし焰の竜の出現にアブソルートZEROは苦しみ、その力を失う。（アブソルートZEROATK2500↓0）

「どうした！ アブソルートZERO！」

「バーニング・ドラゴンがフィールドにある限り、水属性、海竜族、魚族はその力を失う！ また、このカードの攻撃力は1300に墓地にあるハイドロゲドンとオキシゲドン1枚につき500攻撃力が加算される！ よって、攻撃力が2800だ！」

バーニング・ドラゴンの攻撃!! 炎撃のバーニング・ストリーム！」

バーニング・ドラゴンのブレスがアブソルートZEROに襲いかかる。

「リバースカードオープン！ ガードブロック!! ダメージを無効にして1枚ドロー！」

そして、アブソルートZEROの効果発動！ このカードがフィールドから離れた時相手フィールドのモンスターを全て破壊する！」

アブソルートZEROが死に際に放った凍気が氷の棺となってバーニング・ドラゴンを倒した。

「くっ！ 手札から魔法カード遅延魔法―ディレイスペルを発動！ 墓地の通常魔法を除外してその効果を発動する！ ボンディングH20を除外する！ この効果で俺はウォーター・ドラゴンを特殊召喚！」

遅延魔法 通常魔法（自作オリカ）

自分の墓地の通常魔法を除外する。このカードのカード名と効果はこのカードにより除外した通常魔法となる。

三沼が呼び出した水の竜に周囲がざわめいた。

「な、何でウォーター・ドラゴンが呼び出せるのよ！ あれには、ハイドロゲドン2体とオキシゲドンの3枚が必要でしょ！」

「それは、ボンディングH20の発動に必要なコストだ遅延魔法が発動するのはあくまでもカード効果だ。どんなコストがあっても関係無いんだ。」

驚くジュンコにそう解説した。

「十代さん。」

三沼のフィールドに宮田が不安そうにしていた。

「大丈夫だつて。十代を信じな。」

俺の言葉に宮田は力強く頷いた。

「俺はターンエンド！」

三沼ライフ3800 手札1枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 ウォーター・ドラゴン ATK2800

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

十代ライフ1600 手札4枚

「俺のターン!! ドロー!! 手札から永続魔法、未来融合フューチャーフュージョン発動! 俺のデッキから<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup>・HERO<sup>ヒーロー</sup> ネクロダークマンと<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup> ワイルドマンを墓地に送り、<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup> ネクロイドシャーマンを融合召喚する!」

「甘いぞ! 十代! そのモンスターでウォーター・ドラゴンを退場させるつもりだろうが、そのモンスターが召喚されるまでの2ターンまでの間に貴様のライフを0にするだけだ!」

「俺の狙いはネクロイドシャーマンじゃないぜ! ネクロダークマンの効果! このカードが墓地にある時、1度だけ<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup>の通常召喚に生け贄が必要なくなる!<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup> エツジマンを通常召喚!」

? 十代。なんか通常召喚していることを主張してないか?

「高レベルの<sup>ヒーロー</sup>HERO<sup>ヒーロー</sup>には驚いたが、バーニング・ドラゴンが墓地にある限り相手モンスターは炎属性になる! そして、ウォーター・ドラゴンは炎属性か炎族の攻撃力を0にする!」

バーニング・ドラゴン 炎属性 レベル7 (自作オリカ)

攻撃力1300 守備力1000

【炎族・効果】

このカードはファイヤー・スネークの効果でのみ召喚できる。(1)墓地にあるハイド

ロゲドンとオキシゲドン1枚につき攻撃力が500アップする。(2) フィールドの属性、海竜族、魚族モンスターは攻撃力が0になる。(3) このカードが墓地にある限り相手フィールドのモンスターは炎属性になる。

バーニング・ドラゴンの力に苦しめられるエッジマン。

「そんな効果があつたのか。でも、関係ない!! リバースカードオープン! エッジマンマー! エッジマンを生け贄にして相手モンスター1体を破壊して、その攻撃力だけ相手にダメージを与える!」

十代が発動したカードがウォーター・ドラゴンを打ち倒し、その衝撃波が三沼を襲う。(三沼ライフ4000—2800—1200)

「グハアア! だが、エッジマンを失った十代に勝機はない! そしてウォーター・ドラゴンの効果発動! 破壊された時、」自分の墓地のハイドロゲドン2体とオキシゲドンを特殊召喚!

「まだだ! 手札から<sup>パラレル・ワールド・フュージョン</sup>平行世界融合発動! 除外したエアーマンとバブルマンをデッキに戻し、<sup>エレメンタル</sup>E・<sup>ヒーロー</sup>HERO・<sup>グレート</sup>GREAT・<sup>トールネード</sup>TORNADを融合召喚する!

このカードを発動するターンは通常召喚とこのカードの効果による融合召喚以外は召喚できなくなる。」

そうか。このためにわざわざ通常召喚と言っていたのか。



「そして、GREAT TORNADの効果により三沢のフィールドのモンスター達は攻撃力守備力が半分になる！ タウン・バースト!!」

逆巻く嵐のHEROヒーローの力により力が半減する酸素と水素の恐竜達。(ハイドロゲドン  
 ATK1600÷2=800

オキシゲドンATK1800÷2=900)

「これで終わりだ！ GREAT TORNADでハイドロゲドンを攻撃!! スーパーセル!!」

十代のフィールドのヒーローが嵐の塊をハイドロゲドンに叩きつけた。(三沼ライフ  
 1200-2800+800=800)○○○

「ふう。負けたよ。」

「ガツチャ！ 楽しいデュエルだったぜ！」

「…ああ。俺もだ。」

そう言った三沼はいきなり十代にヘッドロックを شدした。

「…ただ、今は悔しいって気持ちで一杯だがな。…つたく。なんで、あんなタイミングで逆転の1枚をドロー出きるかな？」

「ぐえ。み、三沢。しまってる。しまってる。」

しばらくヘッドロックした三沢が十代と握手する。

そして、十代が退場して翔が前に出た時、予想外の事態が起きた。

「……う……うあ……。」

三沼の体が震えていた。その顔も青ざめている。

予想外の事態に困惑し、お互いの顔を見る翔とクロノス教諭。

「……な、何でだ？ 何で動かないんだ。動いてくれ……。」

頭ではデュエルディスクを構えようとしているみたいだが、意に反して体がデュエルするのを拒んでいるみたいだ。

「トラウマか？」

症状に気づいた俺はそう呟いていた。

「多分、三沼はサイバー・エンド・ドラゴンによる圧倒的な敗北を迎えた。その時の恐怖が心の傷として、デュエルするのを拒んでいるんだ。」

「ですが、士さん。」

三沢さんは十代さんとのデュエルするのを拒んでいませんでしたのになんで翔様とは……サイバー・エンド・ドラゴンとビークロイドは共に機械族モンスター。」

俺はももえの正解に頷いた。

「そう。サイバー流のデッキはパワーボンドでサイバー・の融合モンスターを強化するパワーデッキ。対するビークロイドも機械族だからパワーボンドで強化できるし。た

ぶん、無意識に翔のプレイングにサイバー流の陰を見ているんだと思う。」

俺は震えが止まらないでいる三沼を見ながらそう判断した。俺は震えが止まらないでいる三沼を見ながらそう判断した。

「…落ち着け…。」

三沼は自分に言い聞かせているが効果がない。

「クロノス先生。デツキ調整してもいいツスか？」

「…翔？」

翔の行動に首を傾げるなか、翔は自らのデツキからパワーボンドやリミッター解除等の切り札を抜き始めた。

「三沢君は昨日のデュエルのせいで機械族モンスターがものすごい攻撃力になるのが恐いんだよ。だから、攻撃力を上昇するカードはできるだけ抜いていくツス。」

翔の気持ちを理解したのか、三沼はありがとうと頭を下げた。

「…よし。これでOKツス！ 三沢君。手加減はダメツスよ？」

「わかっている。」

答えた三沼がデュエルディスクを起動させる。

「ところで三沢って誰？」

その質問に答える人はいなかった。

○○○

『決闘!!』  
デュエル

翔と三沼が同時にドロローする。

「俺のターン！ ドロー！ オキシゲドンを攻撃表示で召喚！ カードを1枚伏せて  
ターンエンド！」

三沼ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 オキシゲドンATK1800

「ボクのターン！ ドロー！ ジャイロイドを守備表示で召喚！ カードを2枚伏せて  
ターンエンド！」

三沼ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 オキシゲドンATK1800

伏せモンスター0枚 ジャイロイドDEF1000

伏せカード2枚

翔ライフ4000 手札3枚

「俺のターン！ ドロー！ ハイドロゲドンを攻撃表示で召喚！」

バトルだ！

オキシゲドンで攻撃!!」

「リバースカードオープン!! スーパーチャージ!! 僕のフィールドのモンスターが口イドだけの時2枚ドロロー! ジャイロイドは1ターンに1度戦闘では破壊されない!!」

「そんなことは百も承知だ! ハイドロゲドンで攻撃!!」

三沼の宣言にハイドロゲドンがジャイロイドに襲いかかり、屑鉄で出来た案山子が攻撃を受け止めた。

「トラップカードオープン! くず鉄のかかし! 攻撃を無効にしてセットする!」

翔が発動したカードを見てサイバー流とその信者が何故か騒いでいる。

『あの案山子がある限り攻撃が届かないじゃないか!』

『卑怯者! そこまでして勝ちたいか!』

『女々しいぞ! 正々堂々戦え!』

『リスペクト違反のゴミ野郎!』

翔への罵倒が続く中3つの怒声が響いた。

『うるっせえ!!!』

『うるさいぞ!!!』

「ブーイングできるなら今すぐ降りて俺とデュエルしろ!」

「翔は禁止カードを使っている訳じゃないのに文句言うのは違うだろ！」

「禁止カードを使つてないのに文句を言う貴様らにこそ、リスペクトが無いと知れ！」

俺と十代と亮の言葉に皆が沈黙する。

「俺はターンエンド！」

三沼ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 オキシゲドンATK1800 ハイドロゲドンATK160

0

伏せモンスター0枚 ジャイロイドDEF1000

伏せカード1枚

翔ライフ4000 手札5枚

「僕のターン！ ドロー！ サブマリノイドを攻撃表示で召喚！」

バトルツスよ！

サブマリノイドでダイレクトアタック！」

翔の攻撃宣言にサブマリノイドは地中に沈み、いきなり三沼に襲いかかった。（三

沼ライフ4000—800〓3200）

『モンスターを無視して直接攻撃するカードだと…。』

『なんて汚いカードを使うの…。』

翔の使うカードを見てサイバー流とその信者から嫌悪の眩きが漏れて聞こえた。直接言わないのは俺達の怒りを買いたくないからだろう。

「サブマリントロイドの効果でサブマリントロイドを守備表示に変更する！ 僕は1枚伏せてターンエンド！」

三沼ライフ3200 手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 オキシゲドン ATK1800 ハイドロゲドン ATK160

0

伏せモンスター0枚 ジャイロイド DEF1000 サブマリントロイド DEF18

00

伏せカード2枚

翔ライフ4000 手札4枚

「俺のターン！ ドロー！ 俺は手札からサイクロン発動！ くず鉄のかかしを破壊する！」

三沼のフィールドから突風が発生してくず鉄のかかしを吹き飛ばす。

「そして、ハイドロゲドンを攻撃表示で召喚！」

バトルだ！ オキシゲドンでジャイロイドを攻撃!!」

「その瞬間、リバーズカードオープン!! スーパーチャージ!! そして、ジャイロイドは1ターンの1度戦闘では破壊されないツスよ!」

ドローしながらの翔の言葉通り、旋回してオキシゲドンの攻撃を回避する。

「だが、ジャイロイドの効果はもう使えまい! ハイドロゲドンでジャイロイドを攻撃!!」

旋回していたジャイロイドに照準を合わせて攻撃するハイドロゲドン。その咆哮にもう1体のハイドロゲドンが姿を現す。

「手札からボンディングH20発動! デツキからウォーター・ドラゴンを特殊召喚!

俺はターンエンド!」

三沼ライフ3200 手札2枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 ウォーター・ドラゴンATK2800 ハイドロゲドンATK

1600

伏せモンスター0枚 サブマリンロイドDEF1800

伏せカード0枚



翔ライフ4000 手札6枚

「僕のターン！ ドロー！ 手札から魔法カードサイクロン発動！ その伏せカードを破壊するツス！」

さっきのお返しと言わんばかりの突風が三沼の伏せカード聖なるバリアーミラーフォースを吹き飛ばした。

「手札から融合発動！ フィールドのサブマリンロイド、手札スチームロイド、ドリルロイドを融合してスーパービークロイドジャンボドリルを融合召喚！」

翔の手札、フィールドの3体のロイドが重なり、新たなビークロイドが現れた。

「攻撃力が3000とは驚かされる！ しかし、それだけで俺の負けにはならない！」

機械族融合モンスターの出現に青い顔をするも、何とか言葉を発する三沼。

「手札から一族の結束発動！ 素材となったスチームロイド、サブマリンロイド、ドリルロイド。」

それ以前のターン破壊されたジャイロイドも全て機械族！ よって、攻撃力が800アップして攻撃力3800になるツス！

バトル！ ジャンボドリルでウォーター・ドラゴンを攻撃!!」

翔の攻撃宣言にジャンボドリルがウォーター・ドラゴンに襲いかかった。（三沼ライ

フ3200—3000—800+2800=2200）

「だ、だが、ウォーター・ドラゴンの効果発動！ 墓地にあるハイドロゲドン2体とオキシゲドンを守備表示で特殊召喚！」

残念だったな！ 俺のターン！」

「何勘違いしてるツスか？ 僕のバトルフェイズはまだ終了してないツスよ！」

速攻魔法融合解除を発動！ ジャンボドリルを融合デッキに戻し、スチームロイド、ドリルロイド、サブマリンドロイドを特殊召喚！ バトルフェイズ中の特殊召喚の為攻撃可能！ ドリルロイドとスチームロイドでハイドロゲドンを、サブマリンドロイドでオキシゲドンを攻撃ツス！

最後の速攻魔法、瞬間融合発動！ 3体のビークロイドを融合してスーパービークロイドジャンボドリルを融合召喚！ ジャンボドリルでダイレクトアタック！」

翔の攻撃宣言にジャンボドリルが三沼に襲いかかった。(三沼ライフ2200-3000-800)

○○○

「……………負けた。でもなんだろう。嬉しくて仕方ない。ありがとな。わざわざパワーボンドを外してまで俺に合わせてくれて。」

「三沢君。楽しかったツス。」

「ああ。俺もだ。残りも頑張ってくれ。」

翔の言葉に三沼は晴れやかな笑顔で翔の手を固く握った。

## デュエル36 選抜デュエル 強者の証明

SIDE 十代

俺と翔はデツキの調整していた。正直言つて今まではデュエルを全力で楽しんでいった。だけど、今回は違う。相手にどういう理由が有ったかは知らない。だけど、遠藤が三沢を傷つけた。俺の脳裏には遠藤に敗れ、倒れ伏す姿、機械族融合モンスターというだけで怯える三沢の姿が浮かんだ。絶対に許さない。俺の内に怒りが渦巻いていた。

どうすれば、奴に勝てるか？ それを考えながらデツキを調整する。その時、コンコン。

「いるか？ 十代？ 翔？」

ノックがしてドアが開かれる。

「……………三沢？ どうしてここに？」

「夜分にすまないな。だが、今日中に伝えておかないと。」

と思つてな。」

そう言いながら、散歩に誘う三沢。その背中を追いながら海岸までたどり着いた時、背後にいる俺に問いかける。

「十代。明日は俺の仇討ちで遠藤に挑むつもりか？」

「ああ。遠藤にどんな理由が有ったか知らないけど、三沢を傷つけた事は許せない。」  
「僕も同じ気持ちツス。」

俺達の言葉に三沢はこちらに振り向いて口を開いた。

「その気持ちは嬉しく思う。だけど、仇討ちなら、俺にやらせてくれないか？」

「それじゃ、明日は遠藤君に負けろと言うツスか？」

「もちろん、そんなことは言わないさ。勝ってほしいし負けてほしくない。」

十代。翔。お前達にとってデュエルとはなんだ？」

三沢の言葉に俺達はハッと気づかされた。

「デュエルは楽しむもの。」

「そうだ。その気持ちを忘れて欲しくないんだ。」

三沢の言葉に俺達は頭を下げていた。

「サンキュー。三沢。」

「危うく大事な事を忘れるところだったツス。」

「別にいいさ。明日は勝てよ？」

三沢は激励してから自分の寮に戻った。

○ ○ ○

S I D E 鮫島

思った以上に三沢君第2の刃の研ぎ石とのデュエルが効果を発揮してくれたようですね。

観戦者達を見てそう思った。

三沢君とのデュエルの前は一部のオベリスク・ブルーだけが、サイバー流を支持していた。

だけど、オベリスク・ブルーに限らず、ラー・イエローやオシリス・レッドからもサイバー流を支持する声が聞こえた。彼等が心からリスペクトをしてくれたわけでもサイバー流に傾いたかというところではない。

デュエルアカデミアの中でも一番の秀才と名高い彼に、64000という圧倒的な攻撃力での敗北。

きつと彼等の中で『サイバー流から攻撃を受けたくない。』  
こう思ったはずだ。

となると、サイバーエンドドラゴンの攻撃を受けないようにするカードやプレイングを要するのだが、誰もが三沢君のように優秀ではない。攻撃を防ぐのが無理なら、私達に傾倒するしかない。この前の私への理不尽な制裁デュエルで対戦相手の沖田士が言っていた。『少しでもリスペクトに疑問をもったらその人物にサイバー流の牙が向く。』

それなら、サイバー流に対する恐怖から逃げるにはサイバー流に屈服するしかない。  
 沖田士をはじめとしたリスペクトの素晴らしさを理解しない人達がサイバー流に傾  
 倒するのを想像して微笑んだ。

○ ○ ○ ○

S I D E 士

デュエルワールドの挟んで翔と遠藤が向かいあっている。

「よく来たな。お前も三沢みたいにしてやるよ。」

「そうはいかないツスよ。僕が勝つツス。」

2人の勝つてみせる。その言葉に2人はデュエルディスクを展開して開始の言葉を  
 宣言した。

○ ○ ○ ○

『決闘!!』  
デュエル

開始の言葉を宣言しながら5枚のカードをドローする。

「俺のターン！ ドロー！」

サイバー流は基本的に後攻優位なデッキ。なのに、先攻を選んだ。

「やっぱりそうなるわな。」

そう呟いてから、控え室に行った時のことを思い返していた。

『よ。十代。翔。』

『士。どうした?』

『ちよつと忠告しにな。』

『? 忠告ツスか?』

首を傾げる翔に頷いてから口を開いた。

『ああ。デュエルの序盤は何もしないで様子を見ているだけにしてはいるはずだ。』

『? それは何でだ?』

『遠藤と十代達では勝利条件が違うんだ。』

俺の言葉の意味を理解できないのか、互いの顔を見る翔と十代。

『どういう事だ? 俺達のライフを0にすれば遠藤の勝ちじゃないのか?』

『確かにデュエルはそうだ。だが、それだけじゃないんだ。』

このデュエルは翔達はこのデュエル負けられない。だからこそ、反則しなければ、どんな手段だろうと勝てばいい。

だけど、遠藤はそれだけじゃ足りない。なんだと思う?』

俺の問いに2人は宙をにらんでいたが、何かに気づいたのか翔があつと小さくもらして  
いた。



『いかなる抵抗も無駄だという事の証明ツスカ?』

翔の回答に俺は縦に頷いた。

『ああ。三沼を圧倒的な攻撃力で打ち倒す事で観客の心を恐怖で縛り十代達に勝つことでサイバー流に敵対する恐怖から逃げられないって言おうとしたんだろう。』

『でも、士。お前はどうなるんだ。』

『そうなんだよな。』

俺はサイバー流が掲げるリスペクトに賛同してないし、

2回、いや、亮も含めたら3回だな。も勝ったからな。

俺がいる限り、サイバー流の思い通りにならないだろうに。』

ひよつとしたら俺を、退学にしなくてもデュエルアカデミアから追い出す計画でも出たのだろうか? 後で海馬に調べてもらえるように頼んでみるか。

『抵抗が無駄だという証明のためにしばらくは手出ししないはずだ。なにもしないうちから倒したら抵抗が無駄だという証明にならないからな。ましてや何もしないうちから1K111なんかしたら十代達を恐れているって話になりかねない。』

だからこそ、後攻優位なデッキのサイバー流が先攻をとるはずだ。最初のターンは攻撃する事は出来ないがドロローを妨害されず守りの罫を張ることもできる。

「…くのターン! ドロロー!」

おっと、いつの間にかターンが進んでいたらしいな。えっと、状況は、

遠藤ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚 サイバラーヴァATK400

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

翔ライフ4000 手札6枚

「僕はパワーボンドを発動！ スチームロイド、ドリルロイド、サブマリンロイドの3体を融合してスーパービークロイド ジャンボドリルを融合召喚!!」

カードを2枚セットしてターンエンド!

その瞬間、パワーボンドのデメリットにより僕は3000のダメージを受ける!」

遠藤ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚 サイバラーヴァATK400

伏せモンスター0枚 スーパービークロイド ジャンボドリルATK3000+3

000

伏せカード2枚

翔ライフ1000 手札0枚

「俺のターン！ ドロー！」

遠藤がドローした瞬間、ジャンボドリルが謎の大爆発を起こした。その煙がはれると、そこには銃を構えた翔がいた。その目の前には伏せられた2枚のカードが表になっていた。つてああ。そういうことか。

「じゅ、銃刀法違反だ。というか、撃たれたら俺死ぬから！」

「大丈夫ツス。峰打ちツス。」

「無いから！ 拳銃に峰打ちは無いから！」

あるよ。ゴムスタン弾とか。

「それにこの銃はカウンタートラップ地獄の扉越し銃ツス。ジャンボドリルに破壊輪を発動した時にチェーンで発動したツス。」

このカードは僕が受けることが決定している効果ダメージを相手に移しかえる効果ツス。」

翔の言葉にもまだ何かしらの余裕があるらしいな。遠藤の顔には笑みが浮かんでいた。

「ハハハ！ 驚かせやがって！ 俺も地獄の扉越し銃を発動………？」

高笑いしながらトラップカードを発動しようとするが、エラー音が虚しく響き渡るだ

けだった。

「地獄の扉越し銃の効果は効果ダメージをそつちに移しかえるだけで効果ダメージをそちらに与える訳じゃないッス。つまり地獄の扉越し銃は地獄の扉越し銃には対応しないッス。」

そう言いながら翔は遠藤に向かって引き金を引いた。  
バアン

と破裂音をたてながらするとまっすぐに、遠藤のシンボルに命中した。次の瞬間、泡吹きながら遠藤は倒れていた。(遠藤ライフ4000—3000—3000—3000—2000)

その様を見ていた観客席の男が青白い顔色で自分のシンボルを抑えていた。

次に前に出たのは十代だ。やる気満々でデュエルディスクを構えるのに対して遠藤は腰が引けた姿勢でデュエルディスクを構えていた。

〇〇〇〇  
『決闘!!』  
デュエル

宣言しながらカードを引く十代と遠藤。

「俺のターン! ドロー! カードを2枚セットしてターンエンド!」

遠藤ライフ4000 手札4枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

十代ライフ4000 手札5枚

「俺のターン！ ドロー！ 手札から融合発動！ 手札のフェザーマンとバーストレ  
 デイを融合！ エレメンタル E・HERO ヒーロー フレイム・ウイングマンを融合召喚！！

フレイム・ウイングマンでダイレクトアタック！」

十代の攻撃宣言にフレイムウイングマンは炎を纏った体当りをした。って、お前は風  
 属性だろう？ 炎より風を使え。（遠藤ライフ4000→2100||1900）

「だが、この瞬間、リバースカードオープン！ ダメージ・コンデンサー！！ 俺が受けた  
 ダメージ以下の攻撃力のモンスターを特殊召喚する！ 来い！！ サイバードラゴン！」

遠藤のフィールドに白銀の機械竜が降臨した。

「やるな！ 遠藤！ 2枚伏せてターンエンド！」

遠藤ライフ1900 手札3枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 サイバードラゴン ATK2100

伏せモンスター0枚 E・HERO フレーム・ウイングマン

伏せカード2枚

十代ライフ4000 手札1枚

「俺のターン！ ドロー！ チューナーモンスターサイバーシャドウを攻撃表示で召喚  
!!」

「チューナーを呼んだって事はシンクロ召喚する気か！」

「その通りだ！ このカードは自分フィールドにサイバーと名の付くモンスターが存在  
するとき好きなレベルに変更可能！」

サイバーシャドウをレベル7に変更!!

いくぞ！ レベル5サイバードラゴンにレベル7サイバーシャドウをチューニング  
!

星の光集いしとき

邪悪を断つ騎士が現れる！

シンクロ召喚!!

敵を映す鏡と成せ！

サイバードラゴンナイト！」

遠藤のその言葉にサイバードラゴンと真つ黒いサイバードラゴンみたいな竜が緑色

の輪になり、サイバードラゴンがその輪に飛び込み12の星になった。(サイバーミラーナイトATK0 DEF0 攻撃表示)

「攻撃力…0?」

サイバーバニシングドラゴンのように攻撃力が上がる訳でもフレイム・ウィングマンの攻撃力が下がる訳でもないモンスターに困惑する十代。

「さらにサイバネティック・フュージョンサポート発動!。そして、パワーボンドを発動!。手札と墓地からサイバードラゴンを除外してサイバーエンドドラゴンを融合召喚!!

サイバーミラーナイトで、その雑魚を攻撃!!」

「攻撃力0のモンスターで!」

予想外の攻撃宣言に驚く中、フレイム・ウィングマンが炎を纏った体当りで迎撃しようとしてサイバーミラーナイトが鏡の盾にフレイム・ウィングマンを映したら鏡の盾からフレイムウィングマンが飛び出してフレイム・ウィングマンと相打ちになった。(十代ライフ4000-2100×2+2100=1900)

遠藤ライフ950+4200=5150)

「サイバーミラーナイトの効果!。このモンスターが戦闘を行うダメージステップ時に戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の倍の数値までアップする!」

「なっ！ それじゃ、戦闘じゃ破壊出来ないじゃない！」

サイバーミラーナイトの効果に驚くジュンコ。

「それだけじゃない！ このカードはこのカードの効果でアップした分だけ俺のライフが回復する！ そして、このカードは俺が発動するカード以外のカード効果を受けない！」

サイバーミラーナイト 光属性レベル12 自作オリカ

攻撃力0 守備力0

【機械族・シンクロ 効果】

サイバーと名のつくチューナー+チューナー以外のサイバーと名のつくモンスター1体以上

(1) このカードはこのカードのコントローラー以外のカード効果を受けない。

(2) このカードの効果によって上昇した数値分だけこのカードのコントローラーのライフが回復する。

サイバーシャドウ 闇属性 レベル2 自作オリカ

攻撃力0 守備力0

【機械族・チューナー 効果】

このカードは通常召喚できない。自分フィールドにサイバーと名のつくモンスター



が存在するとき手札、墓地から特殊召喚出来る。このカードは任意の数字にレベルを変更できる。

このカードをS召喚の素材になった時、そのモンスターに以下の効果を加える。

このカードは1ターンに1度戦闘では破壊されない。「イカサマもほどほどにしない！」

高らかに宣言する遠藤がくつてかかるジュンコ。

「そして、雑魚モンスターが破壊された瞬間、リバーズカードオープン！ 強者への報酬！ 戦闘で相手モンスターを破壊した時そのモンスターの攻撃力分だけ俺のライフが回復する！」（遠藤ライフ5150+2100=7250）

強者への報酬 通常トラップ（自作オリカ）

戦闘で相手モンスターを破壊した時そのモンスターの攻撃力分だけこのカードのコントローラーのライフが回復する。

「これで止めだ！ サイバーエンドドラゴンでダイレクトアタック！

エターナルエヴォリションバースト！」

サイバーエンドドラゴンの三首から閃光を放とうとした時、

「リバーズカードオープン！ ガードブロック！」

十代が発動したカードが攻撃を防いだ。

「じぶといい！ ターンエンドー！」

遠藤ライフ3250 手札1枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 サイバーエンドドラゴン ATK4000+4000 サイ

バーミラーナイト ATK0×2

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

十代ライフ1900 手札2枚

「俺のターン！ ドローー！」

ドローしたカードを見てじつと考えてしている十代。そして、にやりと笑みを浮かべた。

「手札から愚かな埋葬で<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup> ネクロダークマンを墓地に捨てる！」

「バカか？」

『自分のカードを捨てただと？』

といった言葉がサイバー流の信者が言っているのが聞こえた。墓地肥やしも立派な戦術なのにな。

「墓地にあるネクロダークマンの効果で<sup>エレメンタル</sup>E・HERO<sup>ヒーロー</sup> エッジマンを生け贄無しで通

常召喚!!

そして、カードをセットしてターンエンド!」

遠藤ライフ3250 手札1枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 サイバーエンドドラゴンATK4000+4000 サイ

バーミラーナイトATK0

伏せモンスター0枚 エッジマンATK2600

伏せカード2枚

十代ライフ1900 手札0枚

「俺のターン! ドロー! サイバーミラーナイトでエッジマンを攻撃!!」

遠藤の攻撃宣言にサイバーミラーナイトの鏡の盾から飛び出したエッジマンがエツジマンに攻撃を仕掛けようとして、十代のフィールドのエツジマンが回避する。サイバーミラーナイトから飛び出したエツジマンはそのまま十代に襲いかかり、十代のエツジマンは遠藤に襲いかかった。(遠藤ライフ3250-2600=650

十代ライフ1900-0=1900)

「トラップカードドゥールパッセ発動!

エツジマンへの攻撃を俺に切り替え、エツジマンの攻撃力だけ効果ダメージを相手

に与える！」

「だ、だけど、サイバーミラーナイトはエッジマンの攻撃力の2倍になるはずなのに？」  
「それは発動タイミングの違いだ。サイバーミラーナイトはダメージステップに発動する。で、ドゥープルパッセは攻撃宣言時に発動する。この場合攻撃対象をエッジマンから十代に切り換えるが、十代には攻撃力の概念がない為アップする攻撃力はない。」

これが、サイバーミラーナイトの欠点。攻撃力が相手モンスター依存だから、攻撃力0のモンスターやプレイヤーに攻撃しても攻撃力は0のまま。

「くそー！ なら、サイバーエンドドラゴンでエッジマンを攻撃!!」

「させないぜ！ リバースカードオープン！ くず鉄のかかし！ 攻撃を無効にしてセツトする！」

サイバーエンドドラゴンが放つ閃光をかかしが受け止めた。

「しぶといやつだ！ ターンエンド！」

遠藤ライフ650 手札2枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 サイバーエンドドラゴン ATK4000+4000 サイ

バーミラーナイト ATK0

伏せモンスター0枚 エッジマン ATK2600

伏せカード1枚

十代ライフ1900 手札0枚

「俺のターン！ ドロー！ エッジマンでダイレクトアタック！」

「ば、バカな！ 俺のフィールドにはサイバーミラーナイトとサイバーエンドドラゴンがいるのに！」

「へへへ。ドゥーブルパッセのもうひとつの効果さ。発動した次のターン、攻撃対象になったモンスターはダイレクトアタックが出来る。」

十代の説明にエッジマンが回転しながら姿を消した次の瞬間、遠藤の真上からエッジマンが落下して遠藤を切り裂いた。(遠藤ライフ650→2600→1950)

○○○○

「そこまでなノーネ!! 勝者、シニョール十代!!」

クロノス先生の言葉にサイバー流の信者がガツカリと肩を落としてデュエルアカデミアの生徒は割れんばかりの声援を飛ばしていた。

## デュエル37 選抜デュエル 代表決定十代VS翔

『……………』

十代と翔は互いに背を向け自分のデッキを調整していた。

互いに無言でいたが口元は実に楽しそうだった。きつと、明日のデュエルの事を考えているんだろうな。

「…これでいいッスかね。」

デッキ調整が終わったらしい翔が顔を上げると十代が問いかける。

「お。翔。終わったか？」

「うん。アニキは？」

「俺もだ。とりあえず、ぶ〇ぶ〇でもやるか？」

「ッスね。」

そう言いながらテレビの電源を入れる十代。

「つて何あつさりしてるんだな？ どっちを応援するのか困っているのに。」

「んなもんどっちもがんばれで良いじゃん。」

「ツスね。勝つても負けても兄貴は兄貴ツス。」

翔の言葉に隼人は笑みを浮かべていた。

「よし。全力で応援するんだな。」

笑顔で答えた隼人と俺達も参戦して夜も更けて行く。

○ ○ ○

「レディースエーンドジエントルメエーン!!」

皆様大変お待たせしましたターノ！ これより、選抜デュエル決勝戦を開始しますノー

ネー！」

クロノス教諭の言葉に会場のみんなが拍手をする。

「選手を発表する前に一時報告しますノーネ！」

今回の選抜デュエル決勝戦まで勝ち進んだのはなんと両者とめオシリス・レッドな

ノーネ！

これはオシリス・レッドが落第スレスレのドラップアウトの集まりなんて認識を改め

なければなりませんノーネ！」

クロノス教諭。嬉しいことを言ってくれ。

「赤コーナー！ オシリス・レッドのカリスマ、遊城十代!!」

クロノス教諭の言葉に十代が皆の声援に手を振って応えた。

「青コーナー！ 私の注目株丸藤翔!!」  
まるふじしやう

クロノス教諭の言葉に翔がデュエルフィールドまで歩く。若干緊張しているのか動きがやや固い。しかし、デュエルフィールドに辿り着いた時、深呼吸したら落ち着いたらしい。そして、デュエルディスクを起動させた二人は開始の言葉を口にした。そして、デュエルディスクを起動させた二人は開始の言葉を口にした。

○○○○  
 『決闘!!』  
デュエル

2人の決闘者はそう宣言してカードをドロウする。  
デュエリスト

「僕のターン！ ドロー！ スチームロイドを攻撃表示で召喚!! さらに2枚伏せてターンエンド！」

翔ライフ4000 手札4枚

伏せ1枚

伏せモンスター0枚 スチームロイドATK1800

「俺のターン！ ドロー！」

勢い良くカードを引いた十代だが、じつとスチームロイドを見つめている。おそらくは翔の罠を推察しているのだろう。

スチームロイドは初手で出すようなモンスターじゃない。攻撃する瞬間こそ攻撃力



2300になるが攻撃されるときは1300まで下がる。攻撃の出来ない初手に出すようなモンスターじゃないのに攻撃表示で出すなら、何か罠があるはず。

『E・HERO エレメンタルヒーロー バーストレディを攻撃表示で召喚!!』そして、バーストインパクトを発動!

バーストレディ以外のモンスターを全て破壊して、破壊したカード1枚につき300ポイントをそのモンスターのコントローラーに与える!

破壊するカードはスチームロイド1枚! よって、翔のライフに300のダメージを与える!」

『ハアアツ!!』

バーストレディが火球を放ちスチームロイドを破壊した。(翔ライフ4000-300=3700)

「さらに融合発動! フェザーマンとバーストレディを融合してフレイムウイングマンを融合召喚!!」

フレイムウイングマンでダイレクトアタック!! フレイムシュート!!」

十代の言葉にフレイムウイングマンは焔を纏った体当たりをする。(翔ライフ3700-2100=1600)

「おっしや! これでターンエンド…」この瞬間、リバースカードオープン! リビング

デッドの呼び声！ 僕の墓地にいるスチームロイドを特殊召喚!!」

なっ！ 翔の墓地から復活するスチームロイドを見て俺は驚いていた。

「してやられた。

まさか、罾があるそう思わせること事態が罾だったとはな。」

これは十代にとっては辛い立ち上がりになる。

翔ライフ1600 手札4枚

伏せ0枚 リビングデッドの呼び声（対象 スチームロイド）

伏せモンスター0枚 スチームロイドATK1800

伏せモンスター0枚 フレイムウイングマンATK2100

伏せカード0枚

十代ライフ4000 手札2枚

「僕のターン！ ドロー！ 僕も融合発動!! スチームロイドと手札のジャイロイドを融合してスチームジャイロイドを融合召喚!!

バトルツス！ スチームジャイロイドでフレイムウイングマンを攻撃!! ハリケー

ンスモーク!!」

翔の言葉にスチームジャイロイドは黒煙を吐きながらフレイムウイングマンに接近

する。(十代ライフ4000—2200+2100=3900)

「さらに速攻魔法融合解除を発動!! スチームジャイロイドを融合デッキに戻し、スチームロイドとジャイロイドを墓地から特殊召喚!!」

スチームジャイロイドが歪み、次の瞬間にはスチームロイドとジャイロイドに分離した。

「バトルフェイズ中の特殊召喚の為、この2体も攻撃可能ツス! 2体のダイレクトアタック!!」

翔の攻撃宣言に2体の乗り物達が十代に襲いかかった。(十代ライフ3900—1800—1000=1100)

不味いな。もう一度スチームロイドのダイレクトアタックを受けたら十代が負ける。

「気張れ! 十代!!」隼人の応援に十代は親指を立てて答えた。

「僕は1枚伏せてターンエンド!」

翔ライフ1600 手札0枚

伏せ1枚 リビングデッドの呼び声(対象)

伏せモンスター0枚 スチームロイド ATK1800 ジャイロイド ATK100

0

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

十代ライフ1100 手札2枚

「俺のターン！ ドロー！」 エレメンタル E・HERO ヒーロー バブルマンを攻撃表示で召喚！！ バブル

マンの効果発動！！ 俺のフィールドに他にカードがないとき2枚ドロー！

手札から融合発動！！」

十代の言葉に雷を操るHEROと粘土のHEROが融合された。

「エレメンタル E・HERO ヒーロー スパークマンと エレメンタル E・HERO ヒーロー クレイマンを融合！！ エレメンタル E・

ヒーロー HERO サンダー・ジャイアントを融合召喚！！

サンダー・ジャイアントの効果発動！！ 召喚された時フィールドにいる元々の攻撃力

がこのカードよりも低いモンスタ―1体を破壊する！ ヴェイパー・スパーク！！」

その言葉にサンダー・ジャイアントは雷は落とし、ジャイロイドを破壊した。

「バトルだ！

サンダー・ジャイアントでスチームロイドを攻撃！！ ボルテックサンダー！」

サンダー・ジャイアントが右手に雷を集め解き放とうとした時、

「リバースカードオープン！ スーパーチャージ！ 僕のモンスタ―がロイドのみで相

手から攻撃された時、2枚ドロー！」

スチームロイドの破壊と引き換えに2枚手札を増強する。(翔ライフ1600—2400—500+1800=500)

これで十代の勝ちかな？

「バブルマンのダイレクトアタック!!」

バブルマンが右手から大量の泡を発射してそれが、翔に当たる直前、上空から落ちてきたモンスターが身代わりになってダメージを防いだ。

「手札のカイトロイドを捨てて効果発動!! ダイレクトアタックのダメージを0にする！」

「ちえ。1枚伏せてターンエンド!」

翔ライフ500 手札1枚

伏せ0枚 リビングデッドの呼び声(対象)

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 バブルマンATK800 サンダー・ジャイアントATK2400

伏せカード1枚

十代ライフ1100 手札0枚

「僕のターン！ ドロー！ 手札からマジックプランターを発動ツス！ リビングゲッ  
ドの呼び声を墓地に送り、2枚ドロー！」

サブマリントロイドを攻撃表示で召喚するツス！ そして、大嵐を発動ツス！」

フィールド内を荒れ狂う竜巻が十代のフィールドで翻ったカードを破壊した。

「サブマリントロイドでダイレクトアタック!!」

翔の攻撃宣言にサブマリントロイドが地中に潜伏して十代に強襲した。しかし、十代の前に展開されている防御壁がサブマリントロイドの攻撃を防いだ。

「そんな。兄貴のフィールドには攻撃妨害のカードなんてないの？」

「へへへ♪ こいつさ。」

そう言いながら十代が見せたカードは、ヒーローバリアだ。

「いつそのカードを使ったの？サブマリントロイドが攻撃した時は何もなかったのに。」

「大嵐にチェーンでヒーローバリアを使っていたのさ。」

そういう事か。ヒーローバリアはフリーチェーンのカード。大嵐にチェーンで使っても何の問題もない。

「してやられたツス。1枚セットしてターンエンド。」

翔ライフ500 手札0枚

伏せ1枚

伏せモンスター0枚 サブマリノイドATK800

伏せモンスター0枚 バブルマンATK800 サンダー・ジャイアントATK2400

伏せカード0枚

十代ライフ1100 手札0枚

「俺のターン！ ドロー！」

…カードを1枚セット!!

バトルだ！ サンダー・ジャイアントでサブマリノイドを攻撃!! ボルテックサンダー！」

サンダー・ジャイアントの雷がサブマリノイドを破壊した。しかし、

「リバースカードオープン！ ガードブロック！ ダメージを0にして1枚ドロー！」

「なら、バブルマンでダイレクトアタック!!」

「墓地のカイトロイドの効果発動ツス！」

墓地のカイトロイドを除外してダイレクトアタックのダメージを0にするツス！」

勝機を3度も潰されて悔しいのか若干ふてくされたような表情をしていた。

「俺はこれでターンエンド！」

翔ライフ500 手札1枚

伏せ0枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 バブルマン ATK800 サンダー・ジャイアント ATK24

00

伏せカード1枚

十代ライフ1100 手札0枚

「僕のターン！ ドロー！ 手札から壺の中の魔術書を発動ツス！ 互いに3枚ドロー！」

翔の言葉にカードをドローする翔に十代。カードを引く度に2人の表情が変化する。

「手札から魔法カードサイバネティック・フュージョン・サポートを発動!! さらにパワーボンドを発動!!」

翔の言葉に3体のビークロイドが合体され、巨大なビークロイドになった。

「そして、強欲な壺を発動!! 2枚ドロー！ 手札のドリルロイド、墓地のサブマリノロイドとスチームロイドを除外してスーパービークロイドジャンボドリルを融合召喚!!

パワーボンドの効果によりスーパービークロイドジャンボドリルはその攻撃力分攻撃力がアップするツス！」



翔のフィールドに現れたビークロイドはより大きな力を發揮する。(翔ライフ500  
 ÷2=250)

スーパービークロイドジャンボドリルATK3000+3000=6000)  
 「バトルツスよ！」

スーパービークロイドジャンボドリルでサンダー・ジャイアントに攻撃!!」

ジャンボドリルがサンダー・ジャイアントを貫こうとする直前、

「リバースカードオープン！ガードブロック！」

十代の伏せてあったカードが十代のダメージを防いだ。

「1枚セット、サイバー・ジラフを召喚。サイバー・ジラフの効果によりサイバー・ジラフを生け贄に捧げ、効果ダメージを0にするよ。これでターンエンド！」

翔ライフ500 手札0枚

伏せ1枚

伏せモンスター0枚 ジャンボドリルATK3000+3000

伏せモンスター0枚 バブルマンATK800

伏せカード0枚

十代ライフ1100 手札4枚

「俺のターン！ ドロー！」

手札からミラクルフュージョンを発動!!

墓地のスパークマンとフレイムウイングマンを除外して エレメンタル E・HERO ヒーロー シャイニ

ング・フレア・ウイングマンを融合召喚!! シャイニング・フレア・ウイングマンは墓

地にいる エレメンタル E・HERO ヒーロー 1枚つき300攻撃力がアップする! 俺の墓地にいる

エレメンタル E・HEROは全部で4枚! よって、アップする数値は1200!

バトル!

シャイニング・フレア・ウイングマンでスーパービークロイドジャンボドリルを攻撃  
!!

「バカな!! シャイニング・フレア・ウイングマンよりもスーパービークロイドジャンボ  
ドリルの方が攻撃力が高い!!」

「…三沢君いたの?」

「最初からいた!!」

明日香の呟きに名前も知らないラー・イエローの生徒が憤慨していた。

「明日香の知り合い? はじめまして。沖田土です。」

俺の自己紹介に何故かラー・イエローの生徒は観客の誰かの背中にもこの字を書いていた。

「速攻魔法決闘融合けつとうゆうごう―バトル・フュージョンを発動!! シヤイニング・フレア・ウイングマンはスーパービークロイドジャンボドリルの攻撃力分攻撃力がアツプする!」

「ただでは負けられないツスよ! リバースカードオープン! 決戦融合けっせんゆうごう―ファイナルフュージョン! スーパービークロイドジャンボドリルとシヤイニング・フレア・ウイングマンを破壊してその攻撃力の合計分のダメージをお互いが受ける!」

シヤイニング・フレア・ウイングマンとジャンボドリルがぶつかり合い眩いまでの白光がフィールドを埋め尽くしていた。

(翔ライフ500―2500―1200―6000―6000〓―15200)

十代ライフ1100―2500―1200―6000―6000〓―14600)

〇〇〇

白光が収まるとデュエルが終了したことに気づいてどよめいていたが、オシリス・レッドからの拍手を皮切りに、ラー・イエローやオベリスク・ブルーからも拍手を送られた。例外はサイバー流の関係者くらいか。

「十代よ!」

「いいえ! 翔様こそ代表に相応しいんです!」

横を見ると、ジュンコとももえが言い争っていた。……あ、このデュエル、ノース校との友好デュエルの代表を決めるものだったけ? ……でも、引き分けってことはどうす

るんだらう？

「オホン。代表が2人という事は認められないでしょう。」

「ここは、両者失格にして遠藤君を代表に……」

『却下。』

その場にいたほとんどの人の言葉が合致した。打ち合わせも何もしてないのに凄いな。

「しかし、引き分けである以上仕方ないと思います。」

「……」

『それなら、両者を代表に選ぶまでだ。』

このデュエルの様子をカメラで見えていたらしい。海馬の声がスピーカーから響いていた。

『俺の権限で両者を代表にする！』

その言葉にアカデミアの生徒からの歓声により、ブーイングはかき消された。

## デュエル38 デュエルアカデミアの闇

「……………どうしよう。これを入れるとこつちが動かないしこつちを入れるとこつちが邪魔だし。」

「それなら、ウォーター・ドラゴンを使うべきだ！ 炎属性と戦うとき圧倒的に有利になる！」

などと、デツキを眺めてあーだこーだ考えている十代と翔にラー・イエローの…えつと、三沼だっけ？ 彼がウォーター・ドラゴン片手に近寄る。その横で明日香や隼人が自分のカードを使つて欲しいと近寄る。おいおい。あまりやかましいと、

「うるさいうるさいうるつさーいっ!!! あんたらね！ 邪魔するなら帰りなさい!!」  
「そうですわ！ 翔様は大事な友好デュエルに向けて調整中ですわ！」

十代達の邪魔をするのは例え明日香であっても許せないらしい。どす黒い殺気を放ちながら威嚇する2人に何も言わず引き下がるしかなかった。というか、下手に言おうものなら、

「しかしだな、友好デュエルは……………グフツ!!」

三沼のようにみぞおちを殴られ沈させられるだろう。

「……ここでは、静かにデツキ調整なんて無理そうですわ。」

「士。あんたのどこの部屋まだ余りはあるでしょ？十代達に貸してあげて。」

ジュンコのお願いに俺は鍵を十代達に渡した。

とまあ、こんな騒動はあつたものの、俺の周りは概ね平和だと思う。しなし、俺達はデュエルアカデミアに潜む悪意に気づかなかつた。それに気づいたのは友好デュエルの日だった。

○ ○ ○

ふう。危うかつた。手洗いにデュエルアカデミアのトイレに向かい、その帰りに近道だからと体育の道具が収納されている倉庫前を通りすぎようとした時、

「ほ、ホントに黙ってくれるでしょうね？」

と、怯えの含んだ問いが倉庫から聞こえた。

「ああ。安心しろ。俺は喋らねえよ。」

お前が俺の要求を飲み続けている間はな。」

脅迫？ 聞こえる話の内容からそう判断して、倉庫の窓から中を確認する。

「や、約束が違うじゃない!! あ、あんたの指示を1回聞けば黙ってくれるって、」

窓から様子を確認しようとしたところで、女の子の声が聞こえた。そつと覗いてみる

と、女の子が怯えた表情で男を見ていた。

「ハッ！ テメエみてえな女を一度食ったぐらいで簡単に手放してやるわけないだろ？」

悪いことは出来ないなあ？」

やはり、弱味を握られて強要されているのか。携帯で2人の行動を撮影する。

「そ、そりや、私がやったことは良くないことわかってるわよ。でも、それを理由に脅迫するあんた最低じゃない！」

「ああ？ うるせえんだよ！」

オベリスク・ブルーの男子えつと、確か獅倉ししくら誠まことだっけ？ がオシリス・レットランクの腕章を着けた女子確か、花園はなぞの百合ゆりの制服を破いた。

「キヤア!!」

花園は顔を赤くして、制服や下着を破られ裸になった胸を隠そうとしたが、そんなじゃ明日香並みに豊満な胸を隠すことは出来ない。はみ出たバストがかえっていやらしく映る。つと、じっくり見てる場合じゃなかった。

「その辺にしといたら？」

2人から見えないよう注意を払いながら丸藤亮にメールを送りながら外から声をかけてやると、慌てながら俺を見る獅倉。

「や、やあ沖田さんじゃないか。こんなところでどうしたんだい？ ああ、花園さんのこ

とかい？ 心配要らないよ？ 俺達は演劇部に所属しててね。さっきのも役作りの為の練習なんだ。」

聞かれてもないのにペラペラと獅倉。よほど焦っているらしい。

「嘘つけ。さっきの会話はどう考えても教育上よろしくないことしようとしたようにしか見えなかったぞ。さっきのやり取りは録画させてもらった。これが公表されればお前はおしまいだ。」

俺の言葉に獅倉は凄まじい形相で俺を睨んでいた。

「デュエルだ！ 俺が勝ったらそのデータを削除しろ！」

○○○○

『決闘!!』  
デュエル

俺達はそう宣言しながらカードをドロウする。

「俺のターン！ ドロー！ モンスターをセット！ さらにカードを2枚伏せてターンエンド！」

士ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター1枚

フィールド魔法無し



伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

誠ライフ4000 手札5枚

「俺のターン！ ドロー！ 手札からパワーボンドを発動！！ サイバー・ドラゴン3体を融合してサイバー・エンド・ドラゴンを融合召喚！！」

キシヤアアツ！！ 獅倉のフィールドに現れた3つ首の機械龍は俺を見て咆哮をあげた。

「パワーボンドの効果により攻撃力が2倍になる！ サイバー・エンド・ドラゴンでその伏せモンスターを攻撃！！ エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

サイバー・エンド・ドラゴンの閃光が伏せモンスターのマスクド・ドラゴン面竜を破壊する。

「ダメージステップ時にリバースカードオープン！！ ガードブロック！！ ダメージを0にして1枚ドロー！」

俺のフィールドで翻ったカードが俺のライフを0にするのを防いだ。

「さらにマスクド・ドラゴン面竜の効果発動！！ このカードが戦闘破壊され墓地に送られた時デッキから攻撃力1500以下のモンスターを特殊召喚！！ 黒竜の雛を守備表示で特殊召喚！！」

「サイバー・ジラフを召喚！ 生け贄にしてパワーボンドのデメリットを回避する！！」

さらにカードを1枚伏せてターンエンド！」

士ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 黒竜の雛DEF300

フィールド魔法無し

伏せモンスター0枚 サイバー・エンド・ドラゴンAttack4000+4000

伏せカード1枚

誠ライフ4000 手札0枚

「俺のターン！ ドロー！ 黒竜の雛を生け贄に捧げ、手札の真紅眼の黒<sup>レッドアイズ・ブラックドラゴン</sup>竜を特殊召喚する!!」

俺のフィールドに現れたルビーは怒りの咆哮をその場に轟かせた。

「さらに、ボマー・ドラゴンを攻撃表示で召喚！

バトル！

ボマー・ドラゴンでサイバー・エンド・ドラゴンを攻撃!!」

「バカが！ その雑魚の攻撃力でサイバー・エンド・ドラゴンを倒せる訳がないだろう！」

「確かに攻撃力では勝てないな。だが、ボマー・ドラゴンは戦闘によって発生する戦闘ダメージを0にしてこのカードを破壊したモンスターを破壊するんだ。」

「サイバー・エンド・ドラゴンが！ クソがつつ！！！」

「さらに、レッドアイズ・ブラックドラゴン 真紅眼の黒 竜のダイレクトアタック!! 黒炎弾!!」

ルビーの放つ炎が獅倉のライフを焼いた。(誠ライフ40000—24000||1600)

「1枚伏せてターンエンド！」

士ライフ4000 手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚 真紅眼の黒竜

フィールド魔法無し

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

誠ライフ4000 手札0枚

「俺のターン！ ドロー！ 手札から天よりの宝札を発動!!互いに手札が6枚になるようにドロー！ さらにリバースカードオープン!! サイバー・サーチ!! プロト・サイバー・ドラゴンを手札に加えて召喚!! さらにサイバー・フェアリーを特殊召喚!!」

来るか？ サイバー流のイカサマカード。

「サイバー・フェアリーの効果でサイバー・フェアリーのレベルを9にして、

レベル3プロト・サイバー・ドラゴンにレベル9のチューナー、サイバー・フェアリーをチューニング!!」

その言葉に サイバー・フェアリーは緑色の輪になり、その中にプロト・サイバー・ドラゴンが飛び込み、12の星になった。

「シンクロ召喚!! サイバー・ネクロマンサー!! サイバー・ネクロマンサーの効果発動!! 1ターンの1度サイバーと名のつくモンスターを墓地から可能な限り特殊召喚する!! この効果によって召喚されたモンスターは攻撃力が4000アップする!」

獅倉の宣言にフィールドに現れた、機械仕掛けの人形操り師は墓地に糸を垂らして引き上げる。そこには、スクラップで今にも崩壊しそうなサイバー・エンド・ドラゴン達の姿があった。

「サイバー・ネクロマンサーはフィールドにあるこのカード以外のサイバーがいる限り相手のカード効果を受けず、攻撃力もサイバー達の合計となる! しかも、相手の攻撃対象は俺が決める事が出来る!」

これで終わりだ! サイバー・ネクロマンサーで「リバースカードオープン!! 和睦の使者!!」

ウザい! さっさと降参してデータを渡しやがれ! もうテメエには後がないだろう!

ターンエンド！」

士ライフ4000 手札6枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 真紅眼の黒竜ATK2400

フィールド魔法無し

伏せモンスター0枚 サイバー・エンド・ドラゴンATK4000+4000 サイ

バー・ドラゴン（フィールドに3体存在）ATK2100+4000 サイバー・ネク

ロマンサーATK2100×3+4000+4000×4

伏せカード0枚

誠ライフ4000 手札5枚

「諦める？ 冗談キツイよ？ 良いこと教えてあげようか？ いつだってピンチの後に

はハッピーエンドが待ってるんだよ！ ドロー！ ほら来た。黒炎弾!! やれ！」

俺の言葉にルビーは獅倉に炎を吐きライフを焼いた。（誠ライフ1600―2400

||800)

○○○○

「お、俺が負けた？ こ、こうなりや実力行使だ！」

獅倉はそう叫んで殴りかかろうとした時、

ズドンッ!! という音と共に脇腹を押しえて倒れる。

「し、死んだの?」

「いや、ゴムスタン弾だ。そうでしょ?」

「まあな。」

視線を横に向けると銃を構えた丸藤亮がそこにいた。

「士。協力感謝する。君、サイズが合わないかもしれないが、これでも着ていてくれ。」

丸藤亮はそう言いながら。獅倉に手錠を嵌めた後百合に自身の上着を脱いで百合に差し出した。

「一応、お礼を言っておきます。」

獅倉を本部に連行する後ろ姿に百合は声をかけていた。そして、俺に振り向くと、

「あ、あの、士さん。わ、わたくしの御姉様になってください。」

耳まで真っ赤で恐ろしい事を言い出した。

「……………はい?」

思わずそう問いかけた時、

「ありがとうございます!」

満面の笑顔で抱きつかれた。……………どうしてこうなった

## デュエル39 友好デュエル1回戦目

## SIDE 誠

クソ!! 俺の胸の内には俺をこの状況に追いやったクソ生意気な女、沖田士に対する激怒と憎悪で腸が煮えくりかえりそうだった。サイバー流の門下生という表の仮面の裏で、他人の弱味を握り、それを依頼主に高額で売りつける裏の情報屋の素顔を誰にも悟られずにデュエルアカデミアで暗躍していた。俺がサイバー・エンド・ドラゴンやサイバー・ネクロマンサーを所持していたのも、遠藤の弱味を握りその事を話してみたら、涙を流して喜んで渡してくれたからだ。ケチがついたのは2週間前の月一テストの1週間前だ。その日はネタ集めでデュエルアカデミアの校内を適当にぶらついてみたら、挙動不審な女子がいた。何故か周囲を異常なまでに気にして職員室に入ろうとしていた。すぐにピンときて、バレないように職員室に入った。案の定その女は職員室の金庫にしまわれていた月一テストの問題の答えを携帯に写していたところだった。予め用意していたデジカメで録画する。

撮影がすんだら、今度はその女の身元確認だ。たまには人に売るだけじゃなく、俺自

身が脅すのも悪くはない。それが間違いだった。

友好デュエルで人が来ないだろうとたかをくくって周囲をろくに確認しなかったのがミスだった。沖田士に気づかれ、丸藤亮に拘束され、こうして本土まで護送中になっ  
てしまった。後は裁判でもかけられるのだろう。絶対にこのままじゃあすまさない!!  
胸の内に怒りを溜め込んでいたら、厚みのない鏡のようなものが現れた。

「何だろう?」

疑問に思いながらその鏡を調べてみたらワープ装置のようなものらしいことがわ  
かった。

「このままじゃ、身の破滅だ。それなら、可能性にかけてやる!!」

そういきこんで鏡に飛び込んだ。こうして俺は別の世界でセブンスターの一員とな  
り、天上院明日香を俺の奴隷とすべく動くのだった。

○ ○ ○

SIDE 士

「よ。十代。ノース校はまだか?」

港で待機して対戦相手のノース校がくるのを待っていた十代達に声をかけた。

「士。まだみたいだ。それと、その子は?」

「ちよつとした事があって助けたらなつかれちゃって。」



「御姉様のお友達のかたですか？ 花園百合と申しますわ以後お見知りおきを。」  
はなぞのゆり

よくわからんが、睨み付ける明日香と翔の視線を受けながら百合は頭を下げる。

「ぶふうっ!! お、御姉様！」

百合の自己紹介に雪乃は吹いてからこちらに背中を向ける。よく見ると、その肩が震えている。

「俺、遊城……豚野郎は名乗らなくて結構です。記憶容量の無駄使いですから。」

セリフを遮られての罵倒に何も言えなくなる十代。というかこの子、ガチでレズだわ。

ちょうど、その時、海の中から潜水艦が浮上した。

「お久しぶりですな。鮫島校長。前回は見事にやられました、今回は勝って見せますぞ。」

潜水艦から降りてきた人物がにこやかに握手を求めてきた。

「なんの。今年も勝つてあれは私が頂きますぞ。」

バチバチと実際にデュエルすれ十代達を無視して熱い火花を散らす2人に呆れた溜め息しか出なかった。

「なあなあ。俺達の対戦相手って誰なんだ？」

「ああ。そうでした。紹介する前に保護した子を連れてきました。」

ノース校の校長の言葉に見慣れた青い制服を着た少年が降りてきた。

「一ノ瀬校長。これまでの間御世話になりました。」

「いや。君が流れ着いてくれたお蔭で良い風が吹いてくれました。出来れば、こちらの生徒になって欲しいぐらいです。」

万丈目は一ノ瀬校長に頭を下げてから、取巻と慕谷の元に歩み寄る。

「久しぶり元気だった？ 太陽。雷蔵。」

「はい。お久しぶりです。万丈目さん。」

よほど再会出来たのが嬉しいのかそれだけしか言えない取巻と慕谷だった。

「さて、君達の対戦相手を紹介しましょう。」

その言葉に2人が降りてきた。

「お前らが今年の対戦者か？」

「ああ。俺は遊城十代。こっちが丸藤翔。」

「よろしく願います。」

自己紹介する2人に対して鼻で笑う。

「カイザーを差し置いて代表になったと聞いたからどんなやつかと思ったら、とんだ番狂わせだ。」

「こりゃ楽勝そうだ。」

「こら。初対面の相手に失礼だろうが。」

たしなめる万丈目にビシツと背筋を直し、45度と美しいとさえ思えるお辞儀をする2人だった。

「初対面なのに失礼な口を叩いてすみません！ 俺は江戸川道雄です！」

「本当にすみません！ 俺は湖南森道です！」

さつきとはうって変わった態度にポカンとする2人。

「き、気にしてないから、楽しいデュエルをしようぜ。」

「さて、このままではデュエル出来ませんしデュエルフィールドに行きましょう。」

○○○○

デュエルフィールドに十代と江戸川が向かい合う。

「レディース、エエーンド、ジェントルメエーン!! お待たせしましたターノ!! これより、友好デュエルを開催しますノーネ！」

クロノス教諭の言葉に皆が拍手をする。

「先ずはルールの説明なノーネ！ デュエルそのものは通常のデュエルと変わらないノーネ！ しかし、例年は代表が1人の為ルールは特に決める必要がなかったのですが、今年は2人になり、急遽ルールを話し合い決める必要が出来ましたノーネ！ 一ノ瀬校長。申し上げないノーネ！」

いきなり土下座するクロノス教諭にニコリと笑って許す一ノ瀬校長。

「さて、ルールを説明します。ガ、シングルデュエル2回とタッグデュエル1回で先に2勝した方が勝利なノーネ！」

「今年はあれを頂きますぞ。」

一ノ瀬校長の言葉にバチバチと火花を散らす。

「1回戦目オシリス・レッド期待の1年シニョール・遊城十代！」

その言葉に十代がデュエルフィールドに立つ。

「対するノース校はキング江戸川！」

クロノス教諭の言葉にノース校の王様がデュエルフィールドに立つ。

○○○○

『決闘!!』  
デュエル

2人は宣言しながらカードを引く。

「俺のターン!! ドロー!! ダブル・コストンを攻撃表示で召喚!!」

「ダブル・コストンって事は闇属性モンスターを出す気か。」

十代の言葉に江戸川はニヤリと笑みを浮かべる。

「詳しいじゃねえか。カードを2枚伏せてターンエンド!!」

道雄ライフ4000 手札3枚伏せカード2枚

伏せモンスター0枚 ダブル・コストン ATK1700

「俺のターン！ ドロー！ エレメンタル E・HERO ヒーロー クレイマンを準備表示で召喚！ さらに

カードを1枚伏せてターンエンド！」

道雄ライフ4000 手札3枚伏せカード2枚

伏せモンスター0枚 ダブル・コストン ATK1700

フィールド魔法無し

伏せモンスター0枚 クレイマン DEF2000

伏せカード1枚

十代ライフ4000 手札4枚

「はっ！ 亀のように縮こまっけていても勝てないぞ！ ドロー！ ダブル・コストンを生け贄に捧げる！ ダブル・コストンは閥属性モンスターの生け贄召喚する場合、このカードで2体分の生け贄になる！ デビルゾアを生け贄召喚！ リバースカードオープン！ メタル化・魔法反射装甲！ このカードをデビルゾアに装備!!」

江戸川のフィールドに現れたデビルゾアが機械化する。

「メタル化・魔法反射装甲を装備したデビルゾアを生け贄に捧げ、デッキからメタルデビルゾアを特殊召喚!!」

出た！ 出さない方が絶対に強いモンスター！

「さらに、死者蘇生によりデビルゾアを特殊召喚!!

バトルだ!

デビルゾアでその雑魚を攻撃!!」

「させないぜ! リバースカードオープン! ヒーローバリア! その攻撃を無効にする!」

十代のフィールドに展開されたバリアがデビルゾアの攻撃を弾いた。

「なら、メタルデビルゾアの攻撃!!」

今度は防ぐ事が出来ずクレイマンは破壊される。

「ターンエンド!」

道雄ライフ4000 手札2枚伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 メタルデビルゾアATK3000 デビルゾアATK260

0

フィールド魔法無し

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

十代ライフ4000 手札4枚

エレメンタル

「俺のターン! ドロー!」  
E・HERO エアーマンを攻撃表示で召喚!!」

出た！ 空気の読めないエアーマン!!<sup>三沢大地</sup> って、三沢大地って誰？

「へぶしっ!!」

俺の思考を遮るかのように盛大なくしゃみが響いた。

「三沢君いたの？」

「最初からいたぞ！」

俺はくしゃみをした人物をじっと見てから頭を下げる。

「明日香の知り合い？ はじめまして。沖田士です。」

俺の自己紹介に何故カラー・イエローの男子生徒は影を背負って黒くなっているように見えた。

「っ、士。貴女と三沢君は初対面じゃないわよ？」

「マジ？」

「マジよ。しかも出会う度自己紹介してるわ。」

つまり、会うたびに相手のことを忘れてるってこと？

「ごめんなさい。」

その人に対する申し訳なさで思わず頭を下げると、百合が割り込んでくる。

「御姉様！ 謝る必要はないですよ！」

「そういうわけにもいかないだろ？ 相手の顔と名前を覚えるのは人として当然の礼儀だ

ろ？ さつき百合は十代に向かって豚野郎の名前を覚えてたけなから名乗るなど言っていたけどさ、それを自分置き換えてみる比喻回な気分になるだろ？」

その言葉に何も言えなくなる百合。その横で自己紹介している間もデュエルは進行している。

「エアーマンの効果で エレメンタル E・HERO ヒーロー エッジマンを手札に加える！」

さらに手札から魔法カード、Rーライトジャステイスを発動！ エレメンタル E・HERO ヒーロー と名のつくモンスター一枚数分相手の魔法、トラップを破壊する！」

雷に射たれ江戸川の伏せカードが破壊される。ミラーフォースか。仕事しないな。

「手札から融合発動！ フィールドのエアーマンとエッジマンを融合して エレメンタル E・

HERO ヒーロー ガイアを融合召喚!! ガイアの効果発動！ メタルデビルゾアの攻撃力を半分にして、その数値分ガイアに加算する！」

十代の言葉にメタルデビルゾアは弱体化して逆にガイアは強化される。

(メタルデビルゾア ATK3000 ÷ 2 || 1500)

E・HERO ガイア ATK2200 + 3000 ÷ 2 || 3700)

「ガイアでデビルゾアを攻撃!! コンチネンタルハンマー！」

十代の宣言にガイアがデビルゾアを打ち倒す。(道雄ライフ4000 | 3700 + 2600 || 2900)



って、まさかな。

「さらに融合解除を発動！　ガイアを融合デツキに戻し、エアーマンとエツジマンを特殊召喚!!」

ホントにキタァー!!

「バトル中の特殊召喚の為エアーマンもエツジマンも攻撃可能！　エアーマンでメタルデビルゾアに攻撃!!」

エアーマンの突風がメタル化したデビルゾアを倒す。(道雄ライフ29000—1800+15000=26000)

「これで終わりだ！　エツジマンでダイレクトアタック!!」

十代の宣言にエツジマンが江戸川のライフを0にした。(道雄ライフ26000—2600=0)

## デュエル40 友好デュエル2回戦目

「う、嘘だろ？ お、俺が負けた？」

自分の敗北が信じられないのか、江戸川がポツリと呟いていた。

「ガツチャー！ 楽しいデュエルだったぜ!!」

十代の言葉に江戸川はフツと笑みを浮かべる。

「次は負けねえぞ。」

そう言うってから江戸川は握手を求めた。

その様子を眺めていると丸藤亮が俺の横の席に百合を押し退けて強引に座る。

「？ 丸藤亮。何か用か？」

「実は先ほど連絡があつて、獅倉が姿を消したそうさ。」

「獅倉って、獅倉誠君？」

「ああ。脅迫の現行犯で捕まったんだがな。船の中で行方をくらませたそうさ。捜索されたそうだが、結局見つからなかったそうさ。」



「最初からいたぞ！ しかも、このやり取り江戸川の時もやったし！」

明日香の問いに、み……………なんたら君が怒る。なんだろう。この空気っぷり。不憫な。

「バトルだ！ アームド・ドラゴンLV5でジャイロイドを攻撃！」

「させないっす！ リバースカードオープン！ 拷問車輪！」

翔が発動した罠がアームド・ドラゴンLV5をその場に縫いつけた。

「なるほど。拷問車輪は攻撃や表示形式を封じ、スタンバイフェイズ毎にダメージを与える効果か。だが、甘い！ 手札からレベルアップ！を発動！ アームド・ドラゴンLV5を墓地に送り、アームド・ドラゴンLV7を特殊召喚!!」

拷問車輪に縫い止められていたアームド・ドラゴンLV5はLV7に進化を果たし、拷問車輪を踏み潰して咆哮した。

「もう用済みなこのジャイロイドには退場してもらおうぜ！」

手札からアームド・ドラゴンLV3を捨てて効果発動！ 捨てたモンスターより攻撃力が劣るモンスターを全て破壊する！ ジェノサイドカッター！」

アームド・ドラゴンLV7の攻撃に耐えきれず、ジャイロイドが破壊された。

「カードを1枚伏せてターンエンド！」

翔ライフ4000 手札4枚伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

フィールド魔法無し

アームド・ドラゴンLV7 ATK2800

伏せカード2枚

森道ライフ4000 手札1枚

「僕のターン！ ドロー！ カードを1枚セットしてターンエンド！」

翔ライフ4000 手札4枚伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

フィールド魔法無し

アームド・ドラゴンLV7 ATK2800

伏せカード2枚

森道ライフ4000 手札1枚

「俺のターン！ ドロー！ アームド・ドラゴンLV7でダイレクトアタック！」

アームド・パニッシャー!!」

「させないっす！ リバースカードオープン！ 進入禁止!! NO ENTREE!! 攻

撃表示のモンスターは守備表示になる！」

攻撃しようとするアームド・ドラゴンLV7は警備員の警告に守備表示になる。

「チイツ。ターンエンド!」

翔ライフ4000 手札4枚伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

フィールド魔法無し

アームド・ドラゴンLV7DEF1000

伏せカード2枚

森道ライフ4000 手札2枚

「僕のターン! ドロー! 手札からパワーボンド発動! 手札のサブマリンロイド、スチームロイド、ドリルロイドを融合してスーパービークロイド ジャンボドリルを融合召喚!

これで終わりつすよ! スーパービークロイド ジャンボドリルでアームド・ドラゴンLV7に攻撃!」

「させるかよ! リバースカードオープン! 最終突撃命令! 全ての表表示のモンスターは攻撃表示になる!」

表示形式を変え突進するアームド・ドラゴンを貫き破壊するジャンボドリル。(森道ライフ4000-3000×2+2800=800)

あらま。あの一撃を受けきるとは見事。

「メインフェイズ2にサイバー・ジラフを召喚。生け贄に捧げることでパワーボンドのデメリットを回避する。ターンエンド！」

翔ライフ4000 手札0枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 スーパービークロイド ジャンボドリルATK3000+3000

フィールド魔法無し

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚 最終突撃命令

森道ライフ800 手札2枚

「俺のターン！ ドロー！ リバースカードオープン！ 無謀な欲張り！ 2枚ドロウして2ターンドローフェイズをスキップする！ そして、強欲な壺を発動！ デッキから2枚ドロウ！ 四次元の墓を発動！」

「あ「あれは、墓地にあるLVモンスターを2枚デッキに戻せるカードだ。」

「その効果によりアームド・ドラゴンLV7とアームド・ドラゴンLV3をデッキに戻し、レベル調整を発動！ 自分の墓地にあるLVモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚出来る！ 来い!! アームド・ドラゴンLV5!! そっちはデッキから2枚ドロウ

「していいぞ。」

「? ……:LVモンスターを召喚する手段があるなら、どうしてアームド・ドラゴンLV7を召喚しなかったのかしら?」

「それは、蘇生制限に引つ掛かるからだ。」

「さつきから、誰かが何かいいかけているみたいだな。それと、み某君が何故かいじける。」

「蘇生制限っていうのは融合や儀式、シンクロや一部の効果モンスターみたいに召喚手段が限定されているモンスターを墓地から召喚する場合は一度正規手段で召喚しなきゃならない。これは召喚条件を無視できるカードでさえも無視出来ない。」

「アームド・ドラゴンLV7はレベルアップ!の効果で呼ばれた不正手段だ。だから呼べないんだ。」

なるほど。と呟く横でみ某君が指でののじを書いていた。

「そして、レベルアップ!を発動! アームド・ドラゴンLV5を墓地に送りアームド・ドラゴンLV7を特殊召喚! さらに、アームド・ドラゴンLV7を生け贄にアームド・ドラゴンLV10を特殊召喚!」

「攻撃力3000のモンスター!」

「それだけじゃない! アームド・ドラゴンLV10は手札1枚を墓地に送る事で相手



フィールドの表示モンスターを全て破壊できる！ 竜の逆鱗を墓地に送る！

「ジェノサイドカッター！」

アームド・ドラゴンLV10が放つ攻撃が翔のスーパードロイド ジャンボドリルを破壊する。

「死者蘇生を発動！ アームド・ドラゴンLV5を特殊召喚！

これで終わりだ！ アームドツイン・パニッシャー！」

アームド・ドラゴン2体の攻撃が翔のライフを削りきった。(翔ライフ4000—3

000—2400—1400)

## デュエル4 1 友好デュエル タッグデュエル

SIDE ?

「……………以上がデュエルアカデミアで起こった事です。」

「まさか、サイバー流の中に脅迫屋がいて、それをサイバー流が見抜けなかったとはな。とんだ失態だ。」

「ですね。事態を理解した直後に鮫島は獅倉誠ししくらまことを破門してます。」「破門したからサイバー流は獅倉誠ししくらまこととは無関係などと言い張るなら間抜けとしか言えません。」

私の言葉に我がサイコ流の門下生はですね。と肩をすくめていた。

「とにかく、あやつにはもう少し探らせろ。」

サイバー流の失態をもう少し探って報告するように。」

私の言葉に彼ははいと頷いていた。

SIDE 士

十代が勝利して、翔が敗北してイーブンになった。

「フフフ。これでイーブンですか？」

一ノ瀬校長が勝ち誇った表情を浮かべるなか、鮫島が暮らしそうに歯噛みする。

「頑張れ！ 遊城君!! 丸藤君!! 勝ってください!! 負けたら承知しません!」

……………鮫島。あんた、それでも大人か？ 鮫島の声援に嫌そうな表情を浮かべた十代がデュエルフィールドに立ち、翔の隣に並ぶ。

○○○○

『決闘!!』  
デュエル

4人の決闘者はそう宣言してカードをドロウする。  
デュエリスト

「ここでタッグデュエルの説明するノーネ! 相方のモンスターを生け贄、融合素材にするのは可なノーネ! ライフポイントは2人共有で8000なノーネ!

攻撃は全てのプレイヤーが一巡するまで攻撃宣言できないノーネ!

先攻は先程負けたということでシニョール丸藤からなノーネ!」

クロノス教諭の言葉に翔がドロウする。

「僕のターン! ドロー! モンスターをセット!

さらにカードを2枚セットしてターンエンド!!」

共有ライフ8000

翔手札4枚 十代手札5枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

「俺のターン！ ドロー！」

アームド・ドラゴンLV3を攻撃表示で召喚!!」

江戸川の言葉にまだ可愛い雛竜が現れる。どうやら湖南に合わせてデッキを入れ替えたらしい。

「さらにカードを2枚セットしてターンエンド！」

共有ライフ8000

翔手札4枚 十代手札5枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 アームド・ドラゴンLV3 ATK1200

伏せカード2枚

湖南手札5枚

江戸川手札3枚

共有ライフ8000

「俺のターン！ ドロー！ エレメンタル E・ヒーHERO クレイマンを守備表示で召喚！！ カード

を2枚セットしてターンエンド！」

共有ライフ8000

翔手札4枚 十代手札3枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚 クレイマンDEF2000

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 アームド・ドラゴンLV3 ATK1200

伏せカード2枚

湖南手札5枚

江戸川手札3枚

共有ライフ8000

「俺のターン！ ドロー！ この瞬間、アームド・ドラゴンLV3はアームド・ドラゴンLV5に進化する！ さらにレベルアップを発動!! アームド・ドラゴンLV5を墓地に送ってアームド・ドラゴンLV7を特殊召喚!! そして、アームド・ドラゴンLV7を生け贄アームド・ドラゴンLV10を手札から特殊召喚!!」

相手のサポートもあるとはいえ1ターンでアームド・ドラゴンをLV10まで進化させるとはな。

「アームド・ドラゴンLV10で伏せモンスターを攻撃!! アームド・パニッシャー!!」  
アームド・ドラゴンが翔の伏せモンスターに攻撃しようとして、

「させないぜ！ リバースカードオープン！ ヒーローバリア！ 攻撃を1度だけ無効にする！」

十代が展開したバリアが攻撃を無効にする。

「アームド・ドラゴンLV10の効果発動!! 手札のアームド・ドラゴンLV3を捨ててクレイマンを破壊する!! ジエノサイドカッター！」

その言葉にクレイマンが切り裂かれた。

「俺はこれでターンエンド！」

共有ライフ8000

翔手札4枚 十代手札3枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚アームド・ドラゴンLV10 ATK3000

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード2枚

湖南手札3枚

江戸川手札3枚

共有ライフ8000

「僕のターン！ ドロー！ サブマリンロイドを攻撃表示で召喚！！

バトルつすよ！

サブマリンロイドでダイレクトアタック！」

翔の攻撃宣言にサブマリンロイドは地面に潜って攻撃する。(江戸川&湖南共有ライフ8000-8000=7200)

「ダメージステップ終了時にサブマリンロイドは守備表示になる！ カードを1枚セツトしてターンエンド！」

共有ライフ8000

翔手札4枚 十代手札3枚

伏せカード1枚

伏せモンスター1枚 サブマリンロイドDEF1800

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 アームド・ドラゴンLV10 ATK3000

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード2枚

湖南手札3枚

江戸川手札3枚

共有ライフ7200



「俺のターン！ ドロー！ アームド・ドラゴンLV10で伏せモンスターを攻撃！！  
アームド・パニツシャー！！」

今度は攻撃を防ぐ手段なく攻撃を受ける。

「伏せモンスターのジャイロイドは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されないですよ  
！」

ジャイロイドが小回りを生かしてアームド・ドラゴンLV10の攻撃を回避した。

「アームド・ドラゴンLV10の効果でその2体を破壊する！！ ジェノサイドカタ  
！」

アームド・ドラゴンが放った刃物が2体のロイドを破壊した。

「これでターンエンド！」

共有ライフ8000

翔手札4枚 十代手札3枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 アームド・ドラゴンLV10 ATK3000

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード2枚

湖南手札3枚

江戸川手札3枚

共有ライフ7200

「俺のターン！ ドロー！ 手札から融合発動！！ 手札の<sup>エレメンタル</sup>E・<sup>ヒー</sup>HERO ワイルドマンと<sup>エレメンタル</sup>E・<sup>ヒー</sup>HERO ネクロダークマンを融合して<sup>エレメンタル</sup>E・<sup>ヒー</sup>HERO ガイアを融合召喚！！」

2体のHEROが融合して敵を粉砕する大地のHEROが現れた。

「ガイアの効果でアームド・ドラゴンLV10の攻撃力を半減してその分ガイアに加算する！」

バトル！

ガイアでアームド・ドラゴンLV10に攻撃！！ コンチネンタルハンマー！！

十代の攻撃宣言にガイアがアームド・ドラゴンLV10を打ち倒した。（江戸川&湖

南共有ライフ7200—2200—1500+1500=5000）

「よっしゃー！ これでターンエンド！」

共有ライフ8000

翔手札4枚 十代手札3枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚    ガイアATK2200

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード2枚

湖南手札3枚

江戸川手札3枚

共有ライフ5000

「あまりいい気になるな！ ドロー！ ファントム・オブ・カオスを攻撃表示で召喚！！  
ファントム・オブ・カオスの効果でアームド・ドラゴンLV7に変身する！」

湖南のフィールドのモンスターはアームド・ドラゴンLV7の幻影を纏って巨大化する。

「何よ？ あれは？」

「……………黒いアームド・ドラゴン？」

フアントム・オブ・カオスがアームド・ドラゴンに変身した事に戸惑う明日香や三沼が戸惑うなか俺が解説を入れる。

「明日香。三沼。フアントム・オブ・カオスは墓地にいるモンスターに変身する効果を持つている。」

「じゃあ、アームド・ドラゴンLV10にも？」

「やろうと思えばね。しかし、フアントム・オブ・カオスの変身能力は1ターンのみ。しかも、変身能力は幻影だから戦闘によるダメージは与えられない。」

…ああ。なるほど。うまく考えたな。

「さらにアームド・ドラゴンLV7扱いのフアントム・オブ・カオスを生け贄にアームド・ドラゴンLV10を特殊召喚!!」

「さらに、死者蘇生を発動!! アームド・ドラゴンLV5を特殊召喚!!」

アームド・ドラゴンLV5でガイアを攻撃!!」

アームド・ドラゴンLV5は咆哮しながらガイアに襲いかかる。(十代&翔共有ライフ8000—2400+2200=7800)

「さらに、アームド・ドラゴンLV10でダイレクトアタック！ アームド・パニッシャー!!」

その攻撃宣言にアームド・ドラゴンは2人に襲いかかる。(十代&翔共有ライフ7800-3000=4800)

「ここでエンドフェイズだが、アームド・ドラゴンLV5の効果で自身を墓地に送りアームド・ドラゴンLV7を特殊召喚!!」

その宣言に進化を果たしたアームド・ドラゴンは咆哮する。

共有ライフ4800

翔手札4枚 十代手札5枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 アームド・ドラゴンLV10 ATK3000 アームド・ドラ

ゴンLV7 ATK2800

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード2枚

湖南手札2枚

江戸川手札3枚

共有ライフ5000

「僕のターン！ ドロー！ カードを2枚セットしてターンエンド！」

共有ライフ4800

翔手札3枚 十代手札5枚

伏せカード3枚

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 アームド・ドラゴンLV10 ATK3000 アームド・ドラ

ゴンLV7 ATK2800

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード2枚

湖南手札2枚

江戸川手札3枚

共有ライフ5000

「手も足も出ないようだな！ ドロー！ アームド・ドラゴンLV10でダイレクトアタック！ アームド・パニッシャー!!」

「させないっすよ！ 進入禁止！NO ENTRY!! 攻撃表示のモンスターは守備表示になるっすよ！」

翔が発動したトラップがアームド・ドラゴン達の進入を妨害した。(アームド・ドラゴンLV10 ATK3000 ↓DEF2000 アームド・ドラゴンLV7 ATK2800 ↓DEF1000)

「アームド・ドラゴンLV7の表示形式を変更してターンエンド！」

共有ライフ4800

翔手札3枚 十代手札5枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 アームド・ドラゴンLV10 DEF2000 アームド・ドラ

ゴンLV7 ATK2800

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード2枚

湖南手札2枚

江戸川手札3枚

共有ライフ5000

「俺のターン！ ドロー！ 手札から魔法カード、HEROの遺産を発動！ 俺の墓地にレベル4以上のHEROが2体いるから3枚ドロー！ うしつ！ オーオーバースウル発動！！ 墓地からクレイマンを特殊召喚！！ さらに融合識別フュージョンタグを発動！！ 融合デッキエレメンタルのE・HEROヒーロー・フレイルムウイングマンを見せてクレイマンをフレイルムウイングマンとして扱う！」

何あれ？ 聞いたことないんだけど？

「あ、あれ、アタシが上げたカードだ。」

ん？ あのカードは俺、見た覚えはないんだけど？

「さらに、融合発動！！ フレイルムウイングマン扱いのクレイマンと手札のEエレメンタル・HEROヒーロー・スパークマンを融合！！ Eエレメンタル・HEROヒーロー・シャイニング・フレアウイングマ



ンを融合召喚!!

さらに俺の墓地に エレメンタル E・HERO ヒーロー ネクロダークマンがいるとき1度だけ エレメンタル E・

ヒーロー HEROの召喚に生け贄が要らなくなる! エレメンタル E・HERO ヒーロー エッジマンを召喚!!

バトル! シャイニング・フレアウイングマンでアームド・ドラゴンLV7を攻撃!!

シャイニング・シュート!!

十代の攻撃宣言にシャイニング・フレアウイングマンが攻撃を仕掛ける。

「さらにシャイニング・フレアウイングマンの効果発動!! 戦闘によって破壊したモンスターの中のモンスターの攻撃力だけ相手に効果ダメージを与える!」

シャイニング・フレアウイングマンが輝き湖南にダメージを与える。(江戸川&湖南

共有ライフ5000—2500—300×5+2800+2800=5000—4000=1000)

「さらに、エッジマンでアームド・ドラゴンLV10を攻撃!! エッジマンは守備貫通効果を持っていて!」

守備態勢のアームド・ドラゴンLV10をエッジマンは切り裂いた。(江戸川&湖南

共有ライフ1000—2600+2000=400)

「これでターンエンド!」

共有ライフ4800

翔手札3枚 十代手札3枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚 シャイニング・フレアウイングマンATK2500+300×

5 エッジマンATK2600

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード2枚

湖南手札2枚

江戸川手札3枚

共有ライフ400

「俺のターン！ ドロー！ リバースカードオープン！ 死者転生！！ 手札のモンスターを墓地のアームド・ドラゴンLV10を手札に加える！ そして、レベル調整で発動！！ 墓地にいるアームド・ドラゴンLV7を特殊召喚！！ その代わり十代は任意で2枚ドローする事が出来る！ そして、アームド・ドラゴンLV7を生贄にアームド・ド

ラゴンLV10を特殊召喚！ リバースカードオープン！ 無謀な欲張り！！ デッキから2枚ドロロー！ さらに強欲な壺を発動！！ 2枚ドロロー！

アームド・ドラゴンLV10の効果で、手札1枚をコストにその2体を破壊！！

その宣言にアームド・ドラゴンは十代のフィールドのHEROを破壊した。

「アームド・ドラゴンLV10でダイレクトアタック！ アームド・パニツシャー！！」

アームド・ドラゴンの攻撃が再び十代達のライフを大きく削った。（十代&翔共有ライフ4800→3000⇒1800）

「ミストボディーをアームド・ドラゴンLV10に装備！！ カードを1枚セットしてターンエンド！」

共有ライフ1800

翔手札3枚 十代手札1枚

伏せカード2枚

伏せモンスター0枚

伏せカード1枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚 アームド・ドラゴンLV10 ATK3000

伏せカード0枚 ミストボディー（装備対象 アームド・ドラゴンLV10）

湖南手札0枚

江戸川手札3枚

共有ライフ400

「僕のターン！ ドロー！ 僕達の墓地にいるネクロダークマンとスパークマンを除外して、カオス・ソルジャー——開闢の使者を特殊召喚!!」

『な！ なに！』

翔がカオス・ソルジャーを召喚した事に驚きの声をあげる観客達。

「これで、終わりつすよ？ カオス・ソルジャー——開闢の使者は相手モンスターを戦闘破壊した時もう一度だけ連続攻撃できる。」

翔の言葉に緊張がフィールドを支配する。そして、

「はっ！ 小賢しいハツタリはよせよ！ 俺のフィールドのアームド・ドラゴンLV10の攻撃力は3000この壁を突破できねえぜ！ 除外効果を使えば話は別だが、それやるにはカオス・ソルジャーの攻撃権を放棄しなきゃならねえ！ なら、このまま様子見でいても同じことだ！」

翔の揺さぶりにも引つ掛からなかった以外にも冷静らしい。

「なら、カオス・ソルジャーのもう一つの効果でアームド・ドラゴンLV10を除外す  
！」

カオス・ソルジャーはアームド・ドラゴンLV10を異次元の彼方に葬りさった。

「さらにパワーボンドを発動!! ユーフオロイドとカオス・ソルジャー——開闢の使者を  
融合してユーフオロイドファイターを融合召喚!!」

翔の言葉にカオス・ソルジャーはジャンプしてユーフオロイドに飛び乗った。

「ユーフオロイドファイターでダイレクトアタック!」

翔の言葉にユーフオロイドファイターは攻撃をしかけようとして、

「トラップ発動!! 拷問車輪! このカードが有る限りユーフオロイドファイターは攻  
撃できない!」

湖南の伏せカードに阻まれた。

「リバースカードオープン! 融合解除!! ユーフオロイドファイターを融合デツキに  
戻して素材一組を特殊召喚!!」

ユーフオロイドファイターから飛び降り、フィールドにはユーフオロイドとカオス・  
ソルジャーがそこにはあった。

「ば、バカな! カオス・ソルジャーは墓地から召喚できないはずだ!」

「それは勘違いっすよ。確かにカオス・ソルジャーは召喚方法が特殊召喚に限定されて

いるっす。一度正規手段で召喚すれば墓地からでも召喚できるっす。

バトルフェイズ中の召喚のためカオス・ソルジャーにも攻撃権があるっす！

カオス・ソルジャー―開闢の使者でダイレクトアタック！ 時空双刃斬!!」

カオス・ソルジャーの攻撃が2人のライフを削りきった。(江戸川&湖南共有ライフ  
400―30000―2600)

○○○

「それまでなノーネ！ 勝者、シニョール十代&シニョール翔ペア！ よって、2勝1敗によりデュエルアカデミアの勝利なノーネ！」

その宣言にデュエルアカデミアの生徒は喜び逆にノース校は通夜のような雰囲気を出していた。

○○○

SIDE 十代

「…あれ？ 士は？」

辺りを見て士がいないことに気づいて翔に問いかけた。

「興味ないから帰るって言ってたっす。…そういえば、お兄さんも興味ないから帰ったみたいっす。」

士だけじゃなく亮まで？ 絶対サボらないタイプだと思ってたけど。…なんかイヤ

な予感がする。どうやら、そのイヤな予感が現実になったらしい。それは、表彰式の時突然に来た。

「では、デュエルアカデミア所属のミス・デュエルアカデミアからの特別プレゼントです。優勝校の校長の鮫島先生は前に来てください。」

ふん。うちにそんな人がいたんだ。って、あの人は、

『ギヤアアアッ!!』

その人を視界に納めたみんなから悲鳴が響き渡る。それは俺もだ。

『目があ！ 目が腐るっす!』

『映像の暴力なんだな!!』

「なんでトメさんがブラック・マジシャンガールの格好を？」

ブラック・マジシャンガールの格好をしたミス・デュエルアカデミアは表彰台に上がり、鮫島校長の頬にチュツとキスした。

「……………僕達、これのだしにされてたっすか？」

「俺達の苦労っていったい？」

その眩きがむなしく響き渡った。

## デュエル4 2 第2の刺客

「……………そろそろなんだけだな。」

「なにが、そろそろなのかしら？」

俺の呟きを聞いたのか、雪乃が首を傾げながら問いかける。

「たいしたことじゃないから気にするな。」

俺は雪乃に誤魔化してからその場を後にする。

少し前、ノース校との友好デュエルが行われた。そして数日前に大徳寺先生が課外授業、墓守のモンスター達が住む世界に迷い込む1件が行われた。ということは、そろそろ3幻魔の1件が起きるだろうに、まだに十代達が徴集される様子はない。その代わりなのか、教師が増員されたのだが、クラッキングして調べてみたらサイバー流の門下生だと言うことがわかったけど、まさかな…。

「あ。土。昨日兄さんが火山の麓で倒れているのを十代達が保護してくれて今は保健室にいるけど、一緒にいかない？」



そのまさかだった。セブンスターズの騒動はすでに始まっていて、鮫島は十代達ではなく、サイバー流の門下生に鍵を渡したのだ。ダークネスが十代に挑んだのは予想外だったが、恐らくはサラが渡したネックレスに反応したのだろう。

○ ○ ○ ○

十代達から話を聞いた俺は鮫島に抗議しに来た。

「どういふつもりだ！ 鮫島！」

「沖田君ではないですか？ どういふつもりとはどういう意味でしょうか？」

「オシリス・レッドの遊城十代ゆうぎじゅうだいがダークネスと名乗る闇の決闘者デュエリストとデュエルをさせられた結果、重傷を負わされた！ さらに闇のデュエルを強要するために同室の丸藤翔まるふじしやうと前田隼人まえだはやとが人質に取られた！ デュエルアカデミアの警備体制はそれが許されるほどざるなのか！

それに、ダークネスは十代に7精門の鍵を守るものかと問いかけていたそうだ。

あんたは何を考えている？ 7精門とはなんだ？」

俺の言葉に鮫島はしばらく黙考していたが徐に口を開いた。

「申し訳ありません。闇の決闘者デュエリストがそこまでの危険人物だとは思いませんでした。」

鮫島は頭を下げてから口を開いた。

「つまり、デュエルアカデミアに危険なカードが封印されていて封印を解こうとセブン

スターズなんて連中が7精門の鍵を狙っているわけか？」

「はい。その通りです。」

あなた方を信頼し全てを託します。」

鮫島はそう言つて何処かに電話する。狡い事を考える人だな。俺は内心そう評価していた。

信頼していたなんて真つ赤な嘘だ。恐らくはセブンスターズに俺達を潰させ、頃合いを見て鍵を取り上げセブンスターズに勝ち続ける事で学園内にサイバー流のアピールするつもりだろう。

しばらく待機して集まつてきた鍵を受け取りその場を後にした。

○ ○ ○ ○

「それじゃ、十代は巻き添えで怪我を負わされたつて事？」

どす黒いオーラを纏いながら問いかけるジュンコに俺は首を縦に振った。

「話を戻すぞ。幻魔の封印の鍵を受けとる気のある人は鍵を受け取ってくれ。」

俺は鍵を取りそういうと怪我人が手を上げた。

「却下。怪我人が出る幕じゃない。」

「でもよ、このメンバーで俺は強い方に入るはずだぜ？」

…確かに。十代に勝つたことのあるやつつて俺と丸藤亮ぐらいのはずだ。

「……………仕方ない。ジュンコ。怪我が治るまでお前が鍵を預かってくれ。」

俺の言葉にジュンコが鍵を手取る。

他に鍵を取ったのは明日香、万丈目、丸藤亮、クロノス先生、三沼……………じゃなくて三沢の5人だった。

○ ○ ○

俺達は学園内に蔓延する吸血鬼の噂を聞いて、とある湖に来た。

そこには古びた城が立っていた、そこから伸びる赤い絨毯から一人の美女が歩いてくるのが見えた。

「皆様。今宵はお集まりいただき感謝するわ。私はセブンスターズの一人カミューラよ。」

今宵の生け贄はどちらかしら？」

カミューラの言葉に俺が手をあげる前に名乗りをあげる人がいた。

「ワターシ、クロノス・デ・メデイチが相手をするノーネー！」

クロノス先生の言葉にカミューラが心底嫌そうな顔をする。

「……………チェンジしていいかしら？ 私はあなたはあなたより彼の方が好みでしてよ？」

その言葉にクロノス先生はいきり立つ。

その顔には怒りではない別の何かがあった。

「冗談じゃないノーネ！ ワタシが相手をするノーネ！」

クロノス先生の言葉にカミューラはため息を吐いていた。

「面倒くさいけど相手をしてあげるわ。そして、後悔することね。」

○○○○

『決闘!!』  
デュエル

2人はそう宣言してカードをドロースする。

「私のターン！ ドロー！」

宣言しながらカードをドロースするカミューラ。

「私は不死のワーウルフを攻撃表示で召喚！ ターンエンドよ！」

クロノスライフ4000 手札5枚

フィールド

不死のワーウルフ ATK1200

伏せカード0枚

カミューラライフ4000 手札5枚

「ワタシのターン！ ドロー！ ワタシは古代の機械城アンティーク・ギアキヤッスルを発動！」

クロノス先生の言葉にフィールドに古ぼけた城が現れる。

「この永続魔法はアンティーク・ギアと名のつくモンスターを強化するノーネ！」

さらに古代の機械兵士を攻撃表示で召喚！

アンティーク・ギアソルジャーで不死のワーウルフを攻撃！

クロノス先生の言葉に機械兵士は人狼を倒した。(カミュラライフ4000—1300—300+1200=3600)

「不死のワーウルフは倒しましたケード、不死のワーウルフは倒されても、同名モンスターの攻撃力5000アップして特殊召喚出来るノーネ！」

「よく知ってるわね！ 私は2枚目の不死のワーウルフを攻撃表示で特殊召喚！」

人狼の断末魔の声が2体目の人狼が駆けつけた。(不死のワーウルフATK1200+500=1700)

「ワターシはカードを1枚セットしてターンエンド！」

クロノスライフ4000 手札3枚

伏せカード1枚 古代の機械城 アンティーク・ギアと名のつくモンスターの攻撃力を3000アップする。(召喚された回数2)

アンティーク・ギアソルジャーATK1300+300

フィールド

不死のワーウルフ ATK1200+500

伏せカード0枚

カミュラライフ3600 手札5枚

「私のターン！ ドロー！ 私はヴァンパイア・バツツを召喚！」

カミュラがフィールドにカードを置くと、不気味な蝙蝠がギギイと一声鳴いた。

「バトルよ！」

不死のワーウルフでアンテイク・ギアソルジャーを攻撃！ バウンドスラッシュ

！

不死のワーウルフの方向が機械兵士を倒した。(クロノスライフ4000—1200

—500—200+1300+300=3700)

「さらに、ヴァンパイア・バツツでダイレクトアタック！」

カミュラの宣言に蝙蝠がクロノス先生に襲いかかる。(クロノスライフ3700—

800—200=2700)

「だけど、その瞬間、トラップカードオープン！ ダメージコンデンサー！ 手札1枚を

コストにデッキから受けたダメージ以下のモンスターを特殊召喚！ 古代の歯車を特

殊召喚！」

「私はターンエンドよ！」

クロノスライフ2700 手札2枚

伏せカード0枚 古代の機械城 アンテイク・ギアと名のつくモンスターの攻撃力を300アップする。(召喚された回数4)

アンテイク・ギアATK100+300

フィールド

不死のワウルフATK1200+500+200 ヴアンパイア・バッツATK800+200 自分フィールドのアンデッド族は攻撃力が200アップする。

伏せカード0枚

カミュラライフ3600 手札5枚

「ワターシのターン！ ドロー！ フィールドにアンテイク・ギアがいるので手札のアンテイク・ギアを特殊召喚するノーネ！」

その言葉に2体目の歯車が現れる。

「2体のアンテイク・ギアを生け贄に、アンテイク・ギアコイルム古代の機械巨人を召喚！」

アンテイク・ギアコイルムでヴァンパイア・バッツを攻撃！」

どちらも破壊出来ないからダメージ優先できたか。(カミュラライフ3600—3300+800+200=1300)

「ワターシはカードを1枚セットしてターンエンド！」

クロノスライフ2700 手札0枚

伏せカード1枚 古代の機械城 アンテイク・ギアと名のつくモンスターの攻撃力を300アップする。(召喚された回数6)

アンテイク・ギアゴーレムATK3000+300

フィールド

不死のワーウルフATK1200+500+200 ヴァンパイア・バッツATK800+200 自分フィールドのアンデッド族は攻撃力が200アップする。

伏せカード0枚

カミュラライフ1300 手札5枚

「私のターン！ ドロー！ 手札からフィールド魔法不死の王国―ヘルヴァニア発動！

このカードは手札のアンデッド族1枚を捨てる事でフィールドの全て破壊する！」

「そんなことしたら、自分のモンスターまで破壊してしまう上に、通常召喚できなくなるぞっ！」

「シニョール万丈目。勉強不足なノーネ。ヴァンパイア・バッツは破壊されるとき、同名モンスターを墓地に送る事で破壊から免れるノーネ。」

「ヴァンパイアロードを捨てて効果発動！ ヴァンパイア・バッツをデッキから墓地に送り破壊を防ぐわ！」



その言葉にフィールドのモンスター達はヴァンパイア・バツツを残して崩れ去った。

「手札から生者の書―禁断の呪術を発動！ 私の墓地にあるヴァンパイアロードを特殊召喚してあなたの墓地にあるアンティーク・ギアソルジャーを除外するわ！」

その言葉にヴァンパイアが現れた。

「ヴァンパイアロードを除外してヴァンパイアジェネシスを特殊召喚!!」

イケメンなヴァンパイアがどうしたらあんな姿になるんだろ？

あまりの変身に雪乃の体がふらつと力が抜ける。

「ヴァンパイアジェネシスで」その瞬間、リビングデッドの呼び声発動！ ワタシは墓地

から古代の機械巨竜を特殊召喚するノーネ!!」

な!! ば、バカナ！ 何故そのモンスターがいるのよ！ あなたの墓地に送る事がで

きないハズよ!!」

困惑するカミューラにクロノス先生は首を横に振る。

「1度だけあつたノーネ！」

「……………つ!! ダメージコンデンサーー！」

正解に思い至り息を呑むカミューラ。

「…く。アンティーク・ギアガゼルドラゴンはヴァンパイアジェネシスより攻撃力が高い。カードを1枚伏せてターンエンド。」

クロノスライフ2700 手札0枚

伏せカード0枚 古代の機械城 アンテイク・ギアと名のつくモンスターの攻撃力を300アップする。(召喚された回数9) リビングデッドの呼び声(対象 アンテイク・ギアガジェルドラゴン)

アンテイク・ギアガジェルドラゴン ATK3000+300

フィールド 不死の王国―ヘルヴァニア 手札のアンデッド族モンスターを1枚墓地に送ることでフィールドのモンスターを全て破壊する。

ヴァンパイアジェネシス ATK3000+200 ヴァンパイア・バツツ ATK800+200 自分フィールドのアンデッド族は攻撃力が200アップする。

伏せカード1枚

カミューラライフ1300 手札1枚

「ワタシのターン! ドロー!」

「スタンバイフェイズ中に和睦の死者を発動!」

クロノス先生の攻撃はしてもダメージを与えられないわ!

「グヌヌ。このターンで決めるつもりだったのに。ターンエンド。」

クロノスライフ2700 手札1枚

伏せカード0枚 古代の機械城 アンテイク・ギアと名のつくモンスターの攻撃力

を300アップする。(召喚された回数9) リビングデッドの呼び声(対象 アン  
テイク・ギアガジェルドラゴン)

アンテイク・ギアガジェルドラゴン ATK3000+300

フィールド 不死の王国―ヘルヴァニア 手札のアンデッド族モンスターを1枚墓  
地に送ることでフィールドのモンスターを全て破壊する。

ヴァンパイアジェネシス ATK3000+200 ヴァンパイア・バッツ ATK80  
0+200 自分フィールドのアンデッド族は攻撃力が200アップする。

伏せカード1枚

カミュラライフ1300 手札1枚

「私のターン！ ドロー！ このターンで終わりよ！ 手札から強制転移を発動！ 互  
いのモンスターを相手に移すわ！ 私はヴァンパイア・バッツを。」

「く、ワターシはアンテイク・ギアガジェルドラゴンをそちらに移すノーネ。」  
カミュラの言葉にモンスターが相手に移る。

「ヴァンパイアジェネシスでヴァンパイア・バッツを攻撃！」

その言葉にヴァンパイアジェネシスが蝙蝠を倒した。

「アンテイク・ギアガジェルドラゴンでダイレクトアタック！」

攻撃宣言に口にエネルギーを溜める機械の巨竜。

「シニョールシニョーラ。皆に闇のデュエルの痛み怖さを押しつけてしまつて申し訳ないノーネ。」

「ただ、それだけがデュエルじゃないノーネ。」

「それを決して忘れないノーネ。」

穏やかな笑みを浮かべるクロノス先生。そのライフを機械の巨竜が放つエネルギーが焼きつくした。

○ ○ ○

トサツ。軽い音をたて、ぬいぐるみと化したクロノス先生が地面に落ちた。そのぬいぐるみをカミューラが拾い上げた。

「このこはもらつていくわ。」

「ではごきげんよう。」

カミューラはそう言いながら城の中に引き上げていった。

## デュエル43 救出VSカミューラ

クロノス先生が不在の教室に思い空気が漂う。

クロノス先生が大丈夫かと皆心配しているのだ。

絶対に助けよう。俺はそう、決めて策を巡らせた。

○ ○ ○

「まさか、一人で乗り込むなんて思わなかったわよ。」

何故か俺をジロジロ見るカミューラに俺は肩を竦める。

「俺が一人でくれば幻魔の扉を使うにしても生け贄はカミューラ自身しかできないだろう？」

その言葉にカミューラは驚きながら頷いていた。

「何故、そのカードの事を知っていたのかはともかく、よく考えた策ね。顔も女の子みたいに可愛らしい顔だし、私のお人形にならない？」

「お断り……………」

今聞き逃せない台詞があったような？



深く観察してなかったら気づかなかったけど、本気で苦勞しているのね。」

カミューラの同情の視線が俺に向けられる。

「貴方。もう大丈夫よね？」

カミューラは問いかけながら、デュエルディスクを起動させる。それに対して、俺もデュエルディスクを起動させる。

○○○○

『決闘!!』  
デュエル

俺とカミューラはそう言いながらカードをドロウする。

「俺のターン！ ドロー！ おじやま・イエローを攻撃表示で召喚！ カードを2枚セツト！ さらに、恋文発動！ カミューラは俺のフィールドのカード1枚を選んでそちらに移す事が出来る！」

「……………なら、伏せカードをもらうわ。」

「OK。もう1枚恋文発動！」

「……………何を狙っているのかしら？ また伏せカードをもらうわ。」

その言葉にカミューラのフィールドに2枚のトラップが移る。

「命削りの宝札を発動！ 俺は3枚ドロウ！ そして、2枚伏せターンエンド！ そし

て、命削りの宝札の効果により手札を全て捨てる！」

士ライフ4000 手札0枚

伏せカード2枚

おじやま・イエローATK0

フィールド

伏せカード2枚

カミューラライフ4000 手札5枚

「私のターン！ ドロー！」

カミューラが勢いよくドローした時、

『土ー!!』

俺を呼ぶ声が聞こえた。視線をそっちに向けると、明日香達にかけて来るところだった。た。

「何で勝手に行くのよ？」

非難がましい視線に俺は思わず溜め息を吐いていた。

「何で勝手に来るのかな？」

その言葉の意味がわからず明日香達が？を乱舞させているところをカミューラがク



スクスと笑っていた。

「せっかく策を練ってきたのに残念ね？」

「まったくだ。何で来たのか？」

俺とカミューラのやり取りに何か失敗を悟ったのか、恐る恐る問いかけて来る。

「あの、士？ 私達何かやっちゃったのかしら？」

「人質とられてサレンダー強要されたらどうするのさ？」

「そういう事よ。策を巡らせたのに残念ね。」

その言葉に城門が閉ざされた。

「そこで彼がお人形になるのを指加えて眺めてなさい。」

カミューラの言葉に明日香が首を傾げた。その時、

「リバースカードオープン、おじやまトリオ！ 宇宙の収縮！」

俺のフィールドの伏せカードから3体のトークンが現れた。

「たいした事ないわね。手札から幻魔の扉を発動！」

「な、なんだ？ あのカード？」

「聞いたことがない。」

カミューラが発動させたカードを見て首を傾げる中、カミューラが恐るべき効果を語る。

「このカードは相手フィールドの全てのモンスターを破壊して一度でも召喚したことがあるモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚するわ。」

でも、このカードを発動して負けた場合は私の魂は未来永劫幻魔の物になるわ。でもね、私は憤み深いその役目を誰かに肩代わりしてあげるわ。」

カミューラの言葉に狙いが気づいたのか、みんな憤っていた。

「カミューラ。一言言うけど、勝ったと思った時、そいつは敗北している。」

デュエルディスクを見てみな？」

カミューラのデュエルディスクに警告音が流れていた。

「そんな。どうして?」

「宇宙の収縮の効果さ。互いのフィールドの制限枚数は5枚になる。カミューラのフィールドには、既におじやまトリオトークンが3体に2枚の伏せカードがある。」

例え発動後墓地に置かれるとしても、発動時は6枚になるから5枚という制約にひっかかる。」

「やるわね。ターンエンド。」

士ライフ4000 手札0枚

伏せカード0枚 宇宙の収縮

おじやま・イエローATK0

フィールド

おじやまトリオトークンDEF1000×3

伏せカード2枚

カムユラライフ4000 手札6枚

士ライフ4000 手札0枚

伏せカード0枚 宇宙の収縮

おじやま・イエローATK0

フィールド

おじやまトリオトークンDEF1000×3

伏せカード2枚

カムユラライフ4000 手札5枚

「俺のターン！ ドロー！」

ドローしたカードはこれか。悪いけど勝てた。

「千眼の邪教神を攻撃表示で召喚！ ターンエンド！」

士ライフ4000 手札0枚

伏せカード0枚 宇宙の収縮

おじやま・イエローATK0 千眼の邪教神ATK0

フィールド

おじやまトリオトークンDEF1000×3

伏せカード2枚

カミューラライフ4000 手札6枚

「私のターン！ ドロー！ このロックは本当に厄介ね。でもね、破壊して数を減らすだけよ！ おじやまトリオトークンで、おじやま・イエローを攻撃!!」

その攻撃宣言にトークンはおじやま・イエローに殴りかかって互いに弾かれた。

「互いに攻撃力が0だから攻撃しても破壊されないぞ。」

「手札調整で1枚捨ててターンエンド。」

士ライフ4000 手札0枚

伏せカード0枚 宇宙の収縮

おじやま・イエローATK0 千眼の邪教神ATK0

フィールド

おじやまトリオトークンDEF1000×3

伏せカード2枚

カミューラライフ4000 手札6枚

「俺のターン！ ドローフェイズをスキップして、墓地のマジックブラストを回収！」

「……………命削りの宝札の時ね?」

「ご名答。マジックブラストを発動! 俺のフィールドの魔法使いは1体の為相手に200ダメージ!」

その言葉にカミューラのライフにダメージを与える。(カミューラライフ4000—2000=3800)

「ターンエンド!」

士ライフ4000 手札0枚

伏せカード0枚 宇宙の収縮

おじやま・イエローATK0 千眼の邪教神ATK0

フィールド

おじやまトリオトークンDEF1000×3

伏せカード2枚

カミューラライフ3800 手札6枚

「私のターン。ドロー。」

カミューラは自分の手札を見てじっくり考える。5分くらいたった頃だろうか?

ドローしたカードをデッキに戻し、デッキに手を置いた。

「降参するわ。私の負けよ。」

○○○

カミューラのサレンダーに懐からこぼれ落ちたクロノス先生が元の姿に戻った。

「……………ここはどこなノーネ？」

「カミューラの居城です。先生はカミューラに負けて人形にされてたんですよ。」

「ひよつとしてシニョーラ士が助けてくれたノーネ？」

クロノス先生の言葉に万丈目が頷いた。

「シニョーラ士。ありがとうなノーネ。」

「……………さて、話はもういいかしら？」

カミューラは俺のそばに近寄ると芝居かかった仕草でお願いしてきた。

「私をこの学校の責任者の元まで案内してくれるかしら紳士？」  
ジェントルマン

## デュエル44 女性の部族 三沢VSタニヤ

「土さん！ 大変っすー！」

「大変なんだなー！」

生徒や先生が少ないのは教室で首を傾げるなか、翔と隼人が駆け込んできた。

「翔。隼人。どうした？ まるで、凡骨がアルティメットバーストを食らったみたいだぞ？」

「強靱！ 無敵！ 最強！」

粉碎！ 玉砕！ 大喝采！

……………つて違うっすよー！」

のりがいいな。ボケかまして突っ込みをいれる翔にそう思った。

「皆が強制労働させられてるっすよー！」

翔の言葉に俺達は走り出す。翔の案内のもとコロシウムにたどり着くと、大勢の生徒が働かされていた。

「は〜い♪ 皆ありがとね♪」

ニコニコ笑顔でアカデミアとは無関係な女性がアルバイト料を手渡していた。そして、俺達に視線を向けて声を上げた。

「ようこそ！ 鍵の守護者達よ！ 私はセブンススターズの1人タニヤ！ 私の対戦相手は誰だ！」

「それはこの俺、三沢大地だ！」

三沢の名乗りにはタニヤは満足そうに頷いた。

『デュエル  
決闘!!』

三沢とタニヤはそう宣言してカードを引いた。

「俺のターン！ ドロー！ 俺はハイドロゲドンを攻撃表示で召喚！ カードを1枚伏せてターンエンド！」

三沢ライフ4000 手札4枚

伏せカード1枚

ハイドロゲドンATK1600

「私のターン！ ドロー！ 私はカードを1枚セット！ さらにアマゾネスの剣士を攻撃表示で召喚！」

タニヤのフィールドに戦闘ダメージを相手に移す剣士が現れる。



「さらにアマゾネスの呪詛師を発動！ エンドフェイズまで相手のモンスターの攻撃力を入れ換える！」

つまり、攻撃力1600のハイドロゲドンは攻撃力1500に、攻撃力1500のアマゾネスの剣士は攻撃力1600になるわけだ。

「アマゾネスの剣士で攻撃！」

タニヤの攻撃宣言にアマゾネスの剣士はハイドロゲドンを切り裂いた。（三沢ライフ4000+1500—1600=3900）

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

三沢ライフ3900 手札4枚

伏せカード1枚

アマゾネスの剣士ATK1500

伏せカード1枚

タニヤライフ4000手札3枚

「俺のターン！ ドロー！ ハイドロゲドンを攻撃表示で召喚！」

その言葉に先ほど倒されたのと同じ種類の恐竜が現れる。

「ハイドロゲドンでアマゾネスの剣士に攻撃！ ハイドロパニツシャー!!」

ハイドロゲドンの攻撃がアマゾネスの剣士を打ち倒した。

「しかし、アマゾネスの剣士は戦闘ダメージを相手に移し変える。つまり1000のダメージを受けるのは三沢だ！」（三沢ライフ3900+1500-1600=3800）  
「構わない！ ハイドロゲドンは戦闘によって相手モンスターを破壊した時同名モンスターを特殊召喚する！ 3体目のハイドロゲドンを召喚！ ハイドロゲドンでダイレクトアタック！ ハイドロパニツシャー!!」  
「ムダだ！ リバースカードオープン！ カードブロック！ ダメージを無効にして1枚ドロー！」

タニヤはそう言いながらカードをドローする。

「カードを1枚セットしてターンエンド！」

三沢ライフ3800 手札3枚

伏せカード2枚

ハイドロゲドンATK1600×2

伏せカード0枚

タニヤライフ4000手札4枚

「私のターン！ ドロー！ アマゾネスの吹き矢兵を召喚！ 効果によりハイドロゲドンの攻撃力を500下げる！」

その言葉と共に放たれた吹き矢がハイドロゲドンにあたり攻撃力を弱らせた。

「さらにアマゾネスの里と一族の結束を発動！」

「んげー！」

なんてカードを使うんだ！ いや、アマゾネスは攻撃性の高いデッキだけど若干打点が足りてない。その分をあれでサポートしているのか。

「一族の結束の効果に、より私の基地のモンスターが戦士族1種類のため同じ戦士族のアマゾネスの吹き矢兵の攻撃力が800アップして、さらにアマゾネスの里の効果によりさらに200アップする！」

アマゾネスの吹き矢兵でハイドロゲドンを攻撃！」

タニヤの攻撃宣言に吹き矢兵が放った吹き矢がハイドロゲドンを貫いた。(三沢ライフ3800-800-800-200-500+1600=3100)

「私はこれでターンエンド！」

三沢ライフ3100 手札3枚

伏せカード2枚

ハイドロゲドン ATK1600

アマゾネスの里

アマゾネスの吹き矢兵 ATK800+800+200

伏せカード0枚 一族の結束

タニヤライフ4000手札1枚

「俺のターン！ ドロー！ ハイドロゲドンを生け贄にエメラルドドラゴンを召喚！

バトルフェイズだ！ エメラルドドラゴンでアマゾネスの吹き矢兵を攻撃！」

エメラルドドラゴンの輝きを放つブレスが吹き矢兵を倒した。(タニヤライフ400

0-2400+800+800+200=3400)

「だが、ここでアマゾネスの里のもう一つの効果発動！ アマゾネスと名のつくモンス

ターが破壊された事により、アマゾネスの吹き矢兵以下のレベルのモンスターを特殊召

喚する！ アマゾネスの吹き矢兵を特殊召喚！」

「1枚伏せてターンエンド！」

三沢ライフ3100 手札3枚

伏せカード2枚

エメラルドドラゴン ATK 2400

アマゾネスの里

アマゾネスの吹き矢兵 ATK 800 + 800 + 200

伏せカード0枚 一族の結束

タニヤライフ3400手札1枚

「私のターン！ ドロー！ 手札から魔法カード、壺の中の魔術書発動！ 互いに3枚ドロー！ そして、アマゾネスの吹き矢兵を生け贄に、アマゾネスの女王を召喚！

バトルだアマゾネスの女王でエメラルドドラゴンに攻撃！ その瞬間手札から収縮発動！ エメラルドドラゴンの攻撃力を半分にする！」

アマゾネス達を束ねる女王の攻撃宣言にエメラルドドラゴンは斬り裂かれた。（三沢ライフ3100→2400→800→200+2400÷2=900）

「だが、この瞬間伏せカードオープン！ ダメージコンデンサー！ 手札1枚をコストに、受けたダメージ2200以下の攻撃力のモンスター、オキシゲドンを特殊召喚する！」

「私は1枚伏せてターンエンド！」

三沢ライフ900 手札5枚

伏せカード1枚

オキシゲドン ATK1800

アマゾネスの里

アマゾネスの女王 ATK2400+800+200

伏せカード1枚 一族の結束

タニヤライフ3400手札0枚

「俺のターン！ ドロー！ 3枚伏せてマンジュゴッド召喚！ 効果により、リトマスの死儀式を手札に加え、さらに一時休戦発動！ 互いに1枚ドローして次の俺のターンまでプレイヤーへの戦闘ダメージは無効になる！ ターンエンド！」

三沢ライフ900 手札3枚

伏せカード4枚オキシゲドン ATK1800 マンジュゴッド ATK1400 アマ

ゾネスの里アマゾネスの女王 ATK2400+800+200

伏せカード1枚 一族の結束

タニヤライフ3400手札2枚

「私のターン！ ドロー！ リバースカードオープン！ アマゾネスの意地！ 墓地のアマゾネスと名のつくモンスターを特殊召喚する！ アマゾネスの剣士を特殊召喚す

る！ バトルだ！ アマゾネス達でオキシゲドンとマンジユゴッドを攻撃！」

アマゾネス達の攻撃にマンジユゴッドもオキシゲドンもなす術なく倒される。

「私は1枚伏せてターンエンド！」

三沢ライフ900 手札3枚

伏せカード4枚

アマゾネスの里

アマゾネスの女王 ATK 2400 + 800 + 200 アマゾネスの剣士 ATK 1500 + 800 + 200 伏せカード1枚 一族の結束 アマゾネスの意地（対象 アマゾネスの剣士）タニヤライフ3400 手札2枚

「俺のターン！ ドロー！ 強欲な壺を発動！ 2枚をドロー！ さらに無謀な欲張り発動！ もう1度ドロー！」

……タニヤ。面白いデュエルだ。だけど、最後の最後で運は俺に味方したらしい。マンジユゴッドを召喚！ 効果により儀式モンスター、リトマス死の剣士を手札に加える！ 手札から死者蘇生発動！ 墓地からハイドロゲドン等特殊召喚！ さらにリビングデッドの呼び声！ もう一枚のハイドロゲドン等特殊召喚！ そして、装備魔法リビングフォッシル発動！ 攻撃力を1000ダウンし、効果を無効にする代償に墓地からオキシゲドン等特殊召喚！」 ハイドロゲドン2体とオキシゲドンだと？ まさか！

「ボンディングH20発動！ ハイドロゲドン2体とオキシゲドンを生け贄にウォータードラゴンを召喚！ さらにリトマスの死儀式を発動！ 手札の溶岩魔神ラヴァゴーレムを生け贄にリトマス死の剣士を儀式召喚！」

「3体のモンスターを召喚して見せたのは驚いたが、それでも攻撃力が足りないぞ！」  
「それはどうかな？ バトルフェイズだ！ ウォータードラゴンでアマゾネスの女王を攻撃！」

「残念だったな！ 伏せカードオープン！ 立ちはだかる強敵！ 三沢の攻撃は全てアマゾネスの剣士が引き受ける！ そして、アマゾネスの剣士は戦闘ダメージを相手に押し付ける！ 勝負あったな！」

自身が発動したカードに勝利を確信する。しかし、ウォータードラゴンはアマゾネスの女王に攻撃する。そのアマゾネスの女王のは………0！

「ど、どうして、アマゾネス達の攻撃力が0なのだ！ どうして、ウォータードラゴンがアマゾネスの女王に攻撃した！」

「タニヤ！ その答えは俺のフィールドにある！ 立ちはだかる強敵にチェインでDNA移植手術に暴君の威圧を発動していた！ DNA移植手術はフィールドのモンスター属性が俺の指定した属性、炎属のみになる！ そして、暴君の威圧はマンジュゴッドを生け贄にウォータードラゴンにそのトラップ以外の効果を受けないという効



果を付与する！」

そして、ウオータードラゴンは炎属、炎族のモンスターは炎属、炎族のモンスターの攻撃力を0にする。そして立ちほだかる強敵はモンスターに効果作用する効果故に暴君の威圧により効果を受けないため影響を受けなかったわけだ。(タニヤライフ3400-2800+0=60)

「リトマス死の剣士はフィールドに永続トラップがあるととき攻撃力を3000になり、またトラップの効果を受けない！」

リトマス死の剣士でアマゾネスの女王を攻撃！

三沢の攻撃宣言にタニヤのライフは0になった。(タニヤライフ800-3000+0=2200)

「ヌワツハツハツハ！ 俺、最強!!」

タニヤのライフを0にした瞬間、三沢はVサインを決めていた。「私の敗けだ。楽しいデュエルだったぞ。三沢よ。」

そう言ったタニヤの体は透けていき完全に姿を消した。

## デュエル45 買収騒動

「……………すまない。沖田君。カードをくれないか？」

部屋で寛いでいたら、万丈目が通話してきた。

「あるにはあるが、何でた？」

「実は俺の兄達が、デュエルアカデミアを買収しようとしていてな、デュエルアカデミアのオーナーの意見は、学生とデュエルして兄さんが勝ったら買収にのると約束したんだ。

ただ、兄さんは相手を俺に指名してハンデにモンスター攻撃力を500未満という条件をつけてきたんだ。で、俺が持っているカードは、このおじやま3兄弟だけだ。」

と、万丈目の言葉に俺は納得した。

「カードならあるし、うちに来なよ。」

その言葉に万丈目は、助かると礼を述べて通話を切った。

「……………。よし。完成！」

机に広がるカード達を見て万丈目は納得の表情を見せた。

「で、勝てそう?」

「正直いつてわからない。兄さん達は決闘者デュエリストじゃない。だから、デツキ構築やプレイングはたいしたことはないと思うが、プロに依頼して作らせたのかもしれない。」

「つまり、不確定要素が大きいというわけか。」

「ああ。おまけに素人だ。俺達とは違った使い方をしてくるかもしれない。油断はできない。」

万丈目はそこまで言っ言葉を切る。

「それにしても、いまだに信じられない。」

沖田君が男だなんて。

カミューラのあの言葉が無かったらいまだに間違えてた。

………翔も可哀想に。」

??? 何で、翔が可哀想なんだ?

「一言で言おうと沖田が魔性の男という事だ。」

「? 大丈夫か? 万丈目?」

「一応正常だ。」

といった意味不明なやり取りをしながらよるも更けて行く。

デュエルフィールドを挟んで3人が対峙している。1人は万丈目で2人は万丈目の兄達だ。

「臆せずよく来たな！ 準！ 条件の攻撃力500未満をキチンと守っているだろうな！」

万丈目の兄の言葉に万丈目は首を縦にふって答えた。

「ならば、決闘<sup>デュエル</sup>でお前を倒し、このデュエルアカデミアを俺達、万丈目グループの物にするだけだ！」

『決闘！』<sup>デュエル</sup>

万丈目とお兄さんはそう宣言してカードを引いた。

「俺のターン！ ドロー！」

万丈目はそう宣言してカードをドローした。

「俺はおじやま・ブルーを守備表示で召喚！カードを3枚セットしてターンエンド！」

万丈目ライフ4000手札2枚

伏せカード3枚

伏せモンスター0枚 おじやま・ブルーDEF1000

万丈目兄ライフ4000手札5枚

「私のターン！ ドロー！」

手札から融合発動！

ロード・オブ・ドラゴン—ドラゴンの支配者—と神竜 ラグナロクを融合して竜魔人—キングドラゴンを融合召喚！ さらに、ダイヤモンドドラゴンを特殊召喚！」

フィールドに現れる2体の高レベルモンスターに観客達はどよめく。

「まだ終わりじゃないぞ！ サファイアドラゴンを召喚！」

これで終わりだ！ サファイアドラゴンでそのモンスターを攻撃！」

サファイアドラゴンの攻撃でおじやま・ブルーが破壊される。

「だが、おじやま・ブルーの効果発動！ 破壊された時、デッキからおじやまを2枚手札に加える！」

俺は、おじやま・レッドとおじやま・デルタハリケーン!!を手札に加える！」

「そして、ダイヤモンド・ドラゴンでダイレクトアタック！ ダイヤモンドスパーク！」

ダイヤモンド・ドラゴンの眩い閃光が万丈目のライフを大きく削った。（万丈目ライフ4000—2100=1900）

「これで終わりだ！ キングドラゴンでダイレクトアタック！」

万丈目兄の攻撃宣言キングドラグーンは万丈目に攻撃を仕掛ける。

「アハハハ！ たわいのない！」

勝ちを革新して高笑いをあげる中、万丈目はしっかりと立っていた。（万丈目ライフ

19000-24000+2×10000=5000+20000=15000）

「ば、バカな！ 何故、ライフが残っている！」

「答えは非常食だ。このカードはフィールドのマジックトラップゾーンのカードを墓地に送る事で1枚につきライフを1000回復する。」

「ふん！ 1ターン生き延びたにすぎん！ 見苦しいぞ！」

「もちろんただの悪足掻きじゃない！」

非常食のコストとして墓地に送ったのはおじやマジック！ その効果で、おじやま・イエロー、グリーン、ブラックの3体を手札に加える！」

「そんな雑魚が手札に来たところで何が出来る！」

ターンエンドだ！」

万丈目ライフ15000手札10枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 キングドラグーン ATK2400 ダイヤモンド・ドラゴンA

TK2100 サファイアドラゴン ATK1900

伏せカード0枚

万丈目兄ライフ4000 手札1枚

「俺のターン！ ドロー！」

おじやま・レッドを召喚！ 効果で、おじやま・イエロー2枚とおじやま・グリーン、おじやま・ブラックを攻撃表示で特殊召喚！」

『いえい〜い〜♪』

万丈目の言葉におじやま達がフィールドに現れる。

「その雑魚達に何が出来る！」

「残念だが、その雑魚に兄さんは負ける！ 手札から魔法カード、おじやま・デルタハリケーン!! 発動!!」

万丈目の言葉におじやま3兄弟は互いのお尻をくつつけてグルグル回り始めた。そして、次の瞬間爆発と共にドラゴン達は破壊された。

「ば、バカな！ 全滅だと！」

「これが兄さん達が雑魚だと嘲笑った最底辺達の方だ！ テラフォーミング発動!! フィールド魔法、おじやまカントリーを手札に加え発動!! フィールドにおじやまがいの限り攻撃力と守備力が入れ替わる！」

おじやま達の総攻撃!!」

おじやま達の攻撃が相手のライフを削りきった。

「ば、バカな! 負けるなんて!」

「俺の勝ちだ。」

万丈目の言葉に兄(どつちが長男かはわからないが。)は鋭く万丈目を睨み付けた。

「ふざけるな! こんな決闘は無効だ!」

「……………悪足掻きが過ぎるのはそつちじゃないの?」

万丈目の兄の言葉に呆れを含んだ声を発してしまった。

「何だと!」

「結果はどうあれ! 決着のついたデュエルに口出しする物じゃないと思うよ?

まあ、それでもいちゃもんつきたいなら俺が代わりに受けるが?」

その言葉にいちゃもんつけていた人は、俺を睨み付けていた。

「いいだろう! ただし、攻撃力500未満のカードで決闘してもらおうぞ!」

『決闘!!』<sup>デュエル</sup>

その言葉に俺達はカードをドロウした。



「俺のターン！ ドロー！ 手札から永続魔法スライム増殖炉発動！！ 俺のスタンバイフェイズ毎にスライムトークンを特殊召喚する！ さらに悪夢の鉄檻発動！！」

カードを1枚伏せてターンエンド！」

士ライフ4000手札3枚

伏せカード1枚 悪夢の鉄檻（0ターン目） スライム増殖炉

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚

伏せカード0枚

万丈目次男ライフ4000手札5枚

「私のターン！ ドロー！」

手札から融合発動！

ロード・オブ・ドラゴンドラゴンの支配者―と神竜 ラグナロクを融合してキング

ドラグーンを融合召喚！

そして、エメラルド・ドラゴンを召喚！

ばと………「攻撃宣言なら、悪夢の鉄檻でとめられてるぞ。」

くうっ。ターンエンド！」

士ライフ4000手札3枚

伏せカード1枚 悪夢の鉄檻（1ターン目） スライム増殖炉

伏せモンスタ―0枚

伏せモンスタ―0枚 キングドラグーンATK2400 エメラルド・ドラゴンAT

K2400

伏せカード0枚

万丈目次男ライフ4000手札2枚

「俺のターン！ ドロー！」

スタンバイフェイズ事にトークン召喚！」

俺の宣言にスライム増殖炉からトークンが射出される。

「そして、カードを2枚セットしてターンエンド！」

士ライフ4000手札2枚

伏せカード3枚 悪夢の鉄檻（1ターン目） スライム増殖炉

伏せモンスタ―0枚

伏せモンスタ―0枚 キングドラグーンATK2400 エメラルド・ドラゴンAT

K2400

伏せカード0枚

万丈目次男ライフ4000手札2枚

「私のターン！ ドロー！ サファイアドラゴンを召喚！ ターンエンド！」

「エンドフェイズ事に3枚のリバースカードオープン！ ゴブリンのやりくり上手2枚に非常食！」

チエーン処理に入るぞ。まずは非常食の効果で、ゴブリンのやりくり上手2枚と悪夢の鉄檻を墓地に送り、ライフを3000回復する。」(士ライフ4000+3×1000=7000)

「そして、ゴブリンのやりくり上手の効果で、墓地にあるゴブリンのやりくり上手の枚数+1ドローして手札から1枚選んでデッキの一番下に置く。」

「つまり、2枚ドローして、2枚戻すわけだな？」

万丈目の兄の言葉に首を横に振り否定する。

「いや、この場合、効果処理時に数える。つまり、3枚ドローして1枚戻すという効果処理をゴブリンのやりくり上手2枚分行うんだ。」

その言葉と共にドローしてカードを戻した。

「邪魔が入ったが、これでターンエンドだ！」

士ライフ7000手札6枚

伏せカード0枚 スライム増殖炉

伏せモンスター0枚 スライムトークン ATK500

伏せモンスター0枚 キングドラグリーン ATK2400 エメラルド・ドラゴンAT

K2400 サファイアドラゴン ATK1900

伏せカード0枚

万丈目次男ライフ4000手札2枚

「俺のターン！ ドロー！」

スタンバイフェイズ事にトークン召喚！」

俺の宣言にスライム増殖炉からトークンが射出される。まだ、攻め手に欠けるな。

「そして、カードを2枚セットしてターンエンド！」

士ライフ7000手札5枚

伏せカード2枚 スライム増殖炉

伏せモンスター0枚 スライムトークン ATK500×2

伏せモンスター0枚 キングドラグリーン ATK2400 エメラルド・ドラゴンAT

K2400 サファイアドラゴン ATK1900

伏せカード0枚

万丈目次男ライフ4000手札2枚

「私のターン！ ドロー！」

「

カードをドロ―した万丈目の兄はニヤリと笑みを浮かべていた。

「ダイヤモンドドラゴンを特殊召喚！ さらにサファイアドラゴンを召喚！ ば……………」  
 「リバーズカードオープン！ 和睦の使者！」

このターン俺と俺のモンスターに戦闘ダメージを与える事は出来ない！」  
 くうっ！

ターンエンド！」

士ライフ7000手札5枚

伏せカード1枚 スライム増殖炉

伏せモンスター0枚 スライムトークンATK500×2

伏せモンスター0枚 キングドラグリーンATK2400 エメラルド・ドラゴンAT

K2400 サファイアドラゴンATK1900×2 ダイヤモンド・ドラゴンATK

2100

伏せカード0枚

万丈目次男ライフ4000手札2枚

「俺のターン！ ドロ―！」

スタンバイフェイズ事にトークン召喚！」

俺の宣言にスライム増殖炉からトークンが射出される。これで、3体目！ 手札も

揃ってきたし、少し動くか。

「下克上の首飾りをスライムトークンに装備！

さらにフィールド魔法湿地草原を発動！

バトルフェイズ！ 下克上の首飾りを装備しているスライムトークンでキングドラグーンを攻撃！」

「バカめ！ その雑魚トークンの攻撃力はたったの500！ 返り討ちにしろ！」

キングドラグーンはブレスでスライムトークンに攻撃を仕掛けるが、スライムトークンはそれを回転で弾き返し、スライムトークンの体当たりで倒された。

(万丈目次男ライフ4000—500—1200—6×500+2400—4000—4700+2400—1700)

「ば、バカな！」

「下克上の首飾りは装備したモンスターレベル差だけ、攻撃力がアップする。レベル7のキングドラグーンとレベル1のスライムトークンの差は6。さらに湿地草原はレベル2以下の水属性水族のモンスターの攻撃力を1200アップする！」

これでターンエンド！」

士ライフ7000手札5枚

伏せカード1枚 スライム増殖炉 下克上の首飾り

伏せモンスター0枚 スライムトークン (ATK500+1200) ×3  
 フィールド湿地草原

伏せモンスター0枚 エメラルド・ドラゴン ATK2400 サファイアドラゴン A  
 TK1900×2 ダイヤモンド・ドラゴン ATK2100

伏せカード0枚

万丈目次男ライフ1700手札2枚

「私のターン！ ドロー！」

ー

カードをドローした万丈目の兄はニヤリと笑みを浮かべていた。何をドローした？

「巨竜の羽ばたきを発動！ ダイヤモンド・ドラゴンを手札に戻し、フィールドの魔法、罫を破壊する！」

「それにチェーンで収縮発動！ エメラルドドラゴンの攻撃力を半分にする！」  
 宣言しながらもデュエルディスクを操作する。

次の瞬間、俺のフィールドのマジックトラップゾーンのカードが破壊された。

「下克上の首飾りの効果発動！ このカードが墓地に送られた時、デッキの一番上に戻す事が出来る！」

「だが、次のターンさえ回さなければ問題ない！ サファイアドラゴンを召喚！」

バトルだ！

「サファイアドラゴンでその雑魚3体を攻撃！」

万丈目兄の攻撃宣言にサファイアドラゴン達が攻撃する。(士ライフ7000—19

00×3+5000×3=2800)

「さらに、エメラルドドラゴンでダイレクトアタック！」

エメラルドドラゴンは緑色の光を放ち俺のライフを削る。(士ライフ2800—24

00÷2=1600)

「これでターンエンド！」

士ライフ1600手札5枚

伏せカード0枚

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 エメラルド・ドラゴン ATK2400 サファイアドラゴン A

TK1900×3

伏せカード0枚

万丈目次男ライフ1700手札2枚

「俺のターン！ ドロー！」

手札からスライム増殖炉を発動！ そして、一時休戦発動！ 互いに1枚ドローして



次のそっちのターンが終わるまで、ダメージを与えることが出来ない！

ターンエンド！」

士ライフ1600手札5枚

伏せカード0枚 スライム増殖炉

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 エメラルド・ドラゴンATK2400 サファイアドラゴンA

TK1900×3

伏せカード0枚

万丈目次男ライフ1700手札2枚

「私のターン！ ドロー！」

「

万丈目の兄はカードをドローしてから手札をじつと見てから口を開いた。

「モンスターを守備表示に変更してカードをセットしてターンエンド！」

士ライフ1600手札5枚

伏せカード0枚 スライム増殖炉

伏せモンスター0枚

伏せモンスター0枚 エメラルド・ドラゴンDEF1400 サファイアドラゴンD

EF1600×3

伏せカード1枚

万丈目次男ライフ1700手札2枚

「俺のターン！ ドロー！」

スライム増殖炉の効果で、スライムトークンを特殊召喚！」

その言葉にフィールドにトークンが射出する。

「そのスライムトークンに下克上の首飾りを装備！」

バトルフェイズ！

スライムトークンでサファイアドラゴンを攻撃！」

俺の宣言にスライムトークンはサファイアドラゴンを倒した。

「さらにカードを1枚セットしてターンエンド！」

士ライフ1600手札5枚

伏せカード0枚 スライム増殖炉

伏せモンスター0枚 スライムトークンATK500

伏せモンスター0枚 エメラルド・ドラゴンDEF1400 サファイアドラゴンD

EF1600×2

伏せカード1枚

万丈目次男ライフ1700手札2枚

「私のターン！ ドロー！」

「

万丈目の兄はカードをドローする。打開策を探しているのか、手札をじつと見ていたが、しばらくして口を開いた。

「モンスターをセットしてターンエンド！」

士ライフ1600手札5枚

伏せカード0枚 スライム増殖炉

伏せモンスター0枚 スライムトークン ATK500

伏せモンスター1枚 エメラルド・ドラゴン DEF1400 サファイアドラゴンD

EF1600×2

伏せカード1枚

万丈目次男ライフ1700手札2枚

「俺のターン！ ドロー！」

スライム増殖炉の効果で、スライムトークンを特殊召喚！」

その言葉にフィールドにトークンが射出する。

「スライムトークンでサファイアドラゴンを攻撃！」

スライムトークンの体当たりがサファイアドラゴンを倒した。

「カードを1枚セットしてターンエンド!」

士ライフ1600手札5枚

伏せカード1枚 スライム増殖炉

伏せモンスター0枚 スライムトークン ATK500×2

伏せモンスター1枚 エメラルド・ドラゴン DEF1400 サファイアドラゴンD

EF1600

伏せカード1枚

万丈目次男ライフ1700手札2枚

「俺のターン! ドロー!」

スライム増殖炉の効果で、スライムトークンを特殊召喚!」

その言葉にフィールドにトークンが射出する。

「手札から湿地草原発動!」

バトルフェイズ!

スライムトークン2体で守備モンスターを攻撃!」

下克上の首飾りを装備しているスライムトークンが裏守備モンスターのレッツサード

ラゴンを倒す。

「これで終わり！」

スライムトークンのダイレクトアタック！」

スライムトークンが万丈目の兄にダイレクトアタックを仕掛ける。

「……………ま……………負けたのか」

ライフが0になった瞬間、万丈目の兄が自分の敗北をしんじられないのか小さく呟いていた。

「俺の勝ちだ。」

「ふ、ふざけるな！ もういち「よせ。」」

激昂する万丈目の兄をもう一人の兄が諫めた。

「我々が有利になるようにハンデをもらってそれでも負けたのだ、またデュエルしても勝てないだろう。」

その言葉に万丈目兄弟はその場を去った。

## デュエル46 接待VS翔

「お帰りなさいませ♪ 御主人様♪」

俺は業務用の笑顔と共に御主人様を出迎えた。

その御主人様は何故かじつと俺を見ていた。男の俺がメイドの格好なんて似合わないと思っっているのだろうか？

「はあ。あの頼みを引き受けたのは失敗だったのかな？」

そう言っつて少し前の事を思い返していた。

「お願い!! うちの助けだと思っつて!! 実際に猫の手でも借りたい程に困っているわけだし!!」

今にも土下座せんばかりにお願いをしてくる先輩に困り果てていた。

この人は、3年の御影咲先輩。デュエルアカデミアにある部のメイド部の部長さんだ。

「お願い!! ちゃんとバイト代出すから、1週間メイド喫茶を助けて!」

メイド部は活動の1つとしてメイド喫茶を運営しているんだけど、女子寮内で風邪が流行っているらしく、メイド部の部員達が休みの報告をしてきた。こうなるとともに運営出来ない。焦った御影先輩は俺に助っ人を求めたわけだ。

「素直に休むと言うわけには……………」

「何言ってるのよ? 多くの『ご主人様』がうちに來てるのよ? メイドの私達が人数が足りないので休みます。って訳にはいかないでしょうが!」

「それにしても、俺じゃなくても明日香や雪乃とかに頼んだ方が良いと思いますよ?」  
「そっちはもう頼んでOKもらってあるわよ。」

それでも、人手が足りないのよ!

だからお願い!!」

その勢いに溜め息を吐いていた。というか、この人はイエスと言うまでテコでも動かないだろう。

「わかりましたよ。1週間ヘルプになります。」

と、行ってしまったのが間違いだった。俺がメイドになって、ホールで働いているわけだ。まったく。男の俺にメイド服なんて似合わないだろうに。オマケに、

「ねえ、可愛いメイドさん。」

はあ。世の中変わった男がいるもんだな。男の俺を口説くなんて。そう思いながら気持ち悪いの我慢してをホールで働くと、予想外な人物がやって来た。

「お帰りなさいませ♪ 御主人様♪」

「士さん？ どうして？」

「御影先輩に頼まれてヘルプですよ。」

私がこんな格好しても似合わないでしょうに。」

そう言つて、溜め息を吐くと、翔はじつと俺を見ていた。

「そんなことないツス！ 士さん、すごい可愛いツスよ！」

「え？ あ、ありがとうございます。」

予想外な言葉に俯きながら例をのべるが、この格好が可愛いと言われてもあまり嬉しくない。

「ごゆっくりおくつろぎください。」

翔を適当な空き席に座らせ、別の『御主人様』の接客に向かう。

「可愛いね？ 君。電話番号教えてよ？」

「困ります。」

男をナンパする変な男を宥めていた。



「止めるツスよ！」

その子嫌がつているじゃないツスカ！」

翔が注意するけど、男は取り合おうとしない。

「オシリス・レッドのドロップアウトは黙つてろ！　今はこの子と話をしてるんだろ  
うが！」

「そんなの関係ないツス！　人が嫌がつている事を強制するなんて人としてどうツな  
すか!!」

翔を不愉快そうに見ながら、男は口を開いた。

「俺とデュエルしろ！　俺に勝つたら、俺に口だしするんじゃない！」

「でも、僕が勝つたら、二度とその子に関わらないこと！」

『決闘!!』  
デュエル

2人のデュエリストは宣言してカードをドロウした。

「僕のターン！　ドロウ！」

パワーボンド発動！

手札のスチームロイド、ドリルロイド、サブマリ

ロイドを融合して、スーパービークロイドージャンボドリルを召喚！」

「攻撃力が6000だと！」

しかし、1ターン目では、何もできまい！」

俺のター」

「待つツスよ？ 今は僕のバトルフェイズツスよ？」

勝手にターンを進行させようとする男に注意する翔。つて、アレ？ 今おかしな言葉が混ざっていたような？

「何言ってる!! 1ターン目はバトルフェイズに入れねえはずだ！」

「速攻魔法、時の女神の悪戯発動！」

次の僕のバトルフェイズへとスキップするツス！」

それか！ しかも1ターン目に。

「ざけんな！ 1killいやねえか！」

叫ぶその言葉に男に対抗手段がないのは明らかだった。

「スーパービークロイドージャンボドリルでダイレクトアタック！ さらにリミッター

解除を発動！」

鬼か？ 鬼過ぎるわ！1ターンkillに12000ものオーバーkillなんて。

「僕の勝ちツスよね？」

威嚇するように笑みを浮かべる翔に男はみつともなく悲鳴あげながら逃げ出すの

だった。

「翔君助かるわ♪ あの人、人の話をまったく聞こうとしないからほとほと困り果てていたのよね♪」

逃げ去った男の背中を見て御影先輩が微笑んだ。お盆に珈琲とサンドイッチをのせている。その食事を翔の席においたら翔が不思議そうに首をかしげていた。

「アレ？ もう注文来てるツスよ？」

「あら？ うっかりしてたわ？ 残すのもなんだし、士。代わりに食べてよ？」

パチリと可愛らしくウインクする御影先輩に翔は何でか知らないが握りこぶししてから口を開いた。

「御影先輩がそう言ってるんだし、士さんも一緒にどうツスか？」

「んくまあ、残すのもなんだしな。」

俺はそう答えて席に座るのだった。